

---

# 市原市文化財センター 研究紀要Ⅳ

---

2003. 3

財団法人市原市文化財センター

Ichihara City Archaeological Research Center

## 序 文

市原市は房総半島の中央部に位置し、地勢的にも気候的にも恵まれ、永い歴史の足跡として文化財が数多く残されております。しかし高度経済成長期以降、京葉工業地帯の一角として、また首都圏の一市として開発が急速化し、文化財保護との調和の必要性が指摘されてまいりました。開発に伴う緊急調査件数は膨大な数にのぼり、その成果の公表・活用が切望されております。

このような状況のなか、当センター設立20周年を迎えるにあたり、研究紀要第Ⅳ号を出版する運びとなりました。このシリーズは、職員による日頃の研究成果の発表の場として企画したものです。掲載論考のいずれもが、現場調査と整理作業に追われるなか、昼夜を問わず作り上げた職員各自の努力の結晶であります。

埋蔵文化財の調査は、その緊急性が高まるほど、密度の濃い調査技量が問われます。職員の不断の努力による研究深化がない限り、昨今の厳しい調査環境のなかで一定の成果を得ることは困難といえるでしょう。そして、その研究成果を公表することによって、全国の研究者の方々が本市の貴重な歴史資料を活用することが可能となります。また、埋蔵文化財行政を推進するにあたっては、市民の方々の理解と協力が不可欠ですので、本市の歴史を知っていただくことにより、文化財保護思想の普及にも役立つものと考えております。本書がこれらの趣旨に少しでも貢献できれば幸いです。

最後に、職員一同、これからもさらに切磋琢磨し、当センターとしてもよりよい調査研究に邁進していく所存ですので、今後ともより一層のご指導、ご協力を賜りますよう、関係各位にお願いする次第であります。

平成15年 3月20日

財団法人市原市文化財センター  
理事長 鵜澤 綱夫

## 目 次

姉崎台出土の石器について			
- 資料紹介 -	近藤 敏	1	
菊間手永遺跡出土遺物補遺	近藤 敏 高橋 康男	5	
関東地方におけるスッポンの利用			
- その開始時期と普及の要因をめぐって -	鶴岡 英一	11	
五所四反田遺跡出土の「スリット入り」鍬について	小川 浩一	27	
刀子小考Ⅰ	北見 一弘	33	
謎の千草山廃寺跡Ⅱ			
- 千草山寺の建っていた頃 -	田中 清美	45	
県内における中世村落の発展について			
- 百姓居宅の区画から -	櫻井 敦史	63	
小湊鉄道研究小史	近藤 敏	81	
遷移と再生産	小橋 健司	107	

# 姉崎台出土の石器について

## －資料紹介－

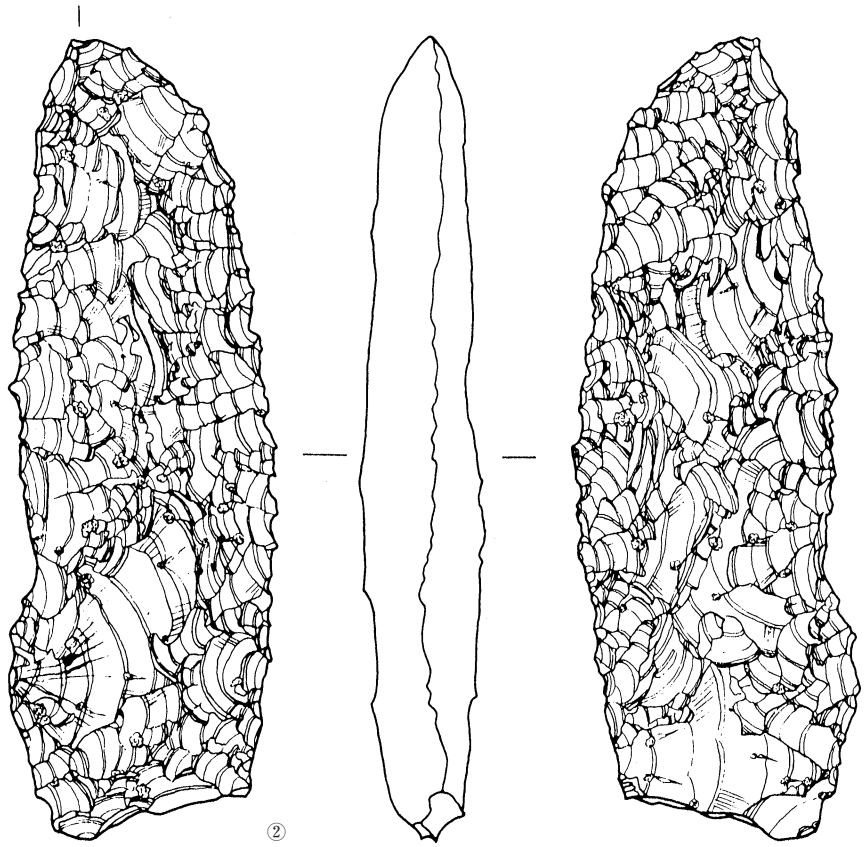
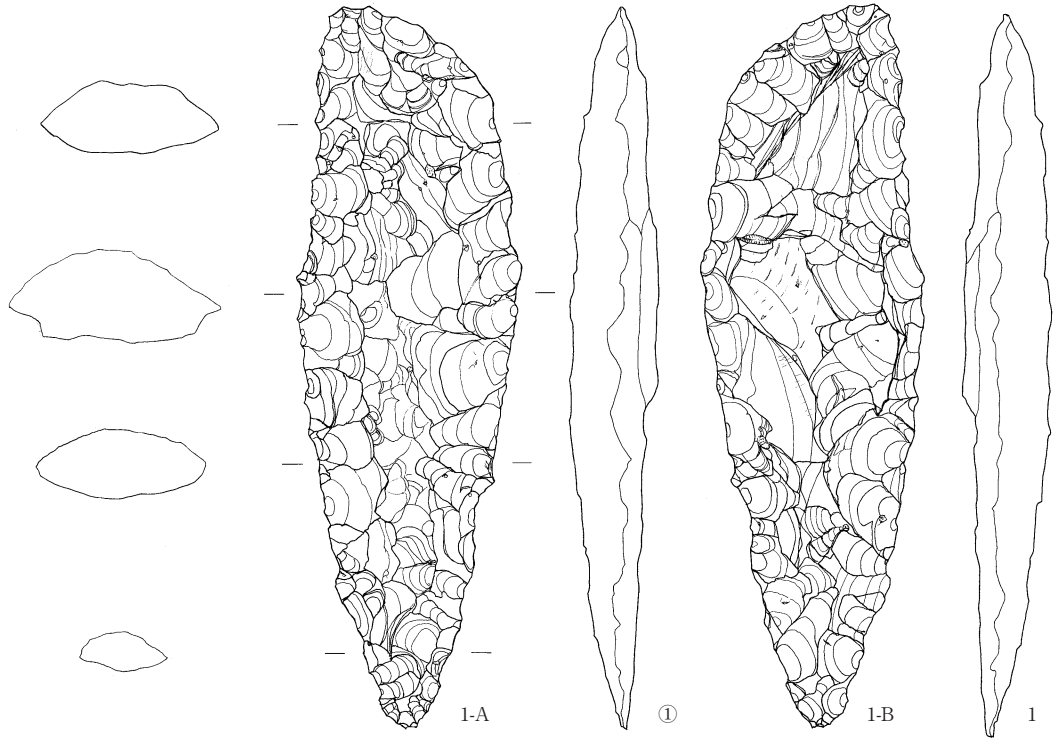
近 藤 敏

平成5年当時、市原市教育委員会ふるさと文化課内カウンター机の箱の中に、黒曜石製の大型打製石器があった。それは奇妙な包丁形の大略半月形石器と呼ばれる石器の完形品であった。筆者は着任したばかりで、前任者であり同僚の小出伸夫氏にその石器の出所を尋ねたところ、「市原市姉崎の台地区で耕作中に出土したものである」、という説明であった。その後その石器は、市原市埋蔵文化財調査センター内のエントランスホール陳列ケースに並べられていたが、千葉県立中央博物館（当時）の橋本勝雄氏の目に止まり、千葉県文化財センター調査報告書に、同様な出土遺物があることをご教授頂いた（西川他1984）。その石器は出土位置地点までは不明確であるが、出土例が少なく貴重な石器であることから、今回資料紹介することとなった。

遺物の出土した姉崎の台地区は、養老川左岸海岸平野を見下ろす、標高33m～25mの台地上にあり、海食崖起源の段丘崖によって囲まれ、東西約1km、南北300mの細長い地形の、中央部に姉崎台地と連続する接点を有するT字形をしている（市原市教育委員会1988）。台地上は、千葉県指定文化財の姉崎天神山古墳、縄文時代後期と見られる姉崎台貝塚等の遺跡が集中している。姉崎東原遺跡B地点調査の際、関東第四紀研究会の上本進二氏に、火山灰層の断面観察をお願いし、その報告がある（上本1993）。報告によると、「完新世テフラについては黒褐色の腐植物に富む土壌層で、最下部がローム漸移層に相当し、その上部のオレンジ色のスコリアを含む黒色土が富士黒色土層（FB）に相当するものと思われる…中略…IV層（ソフトローム）土壌化が進んだ風化火山灰層で、…略…間隙が多く固結度が低い層である。テフラ起源のスコリア等はほとんど見られない。V層（ハードローム）IV層の境界部は…略…波状になっており、中部から下部には、径5～7mmのオレンジ色スコリアと、径2mm以下の黒色スコリアが多く見られる。これらのスコリアは富士山東麓でY-137と呼ばれる火山灰（上杉ほか1980）であろう」（上杉1990）。上本氏の観察では、ソフトロームは千葉県内の基本層序層位と同じと考えられる。

紹介する石器は、初見の際はまだ土が付着しており、観察では黄褐色ロームが剥離面等に付着していた。黒色土ではなく、黄褐色ロームの付着は容易に剥落しないので、出土石器はローム中に長時間埋没していた可能性がある。そのため石器の出土層位はソフトローム中若しくは、ソフトローム漸移層と推測される。石器の材質は、黒曜石であり、若干くすんだ黒色透明を呈し、白色の気泡状の不純物が混入する。色のくすみは、黒曜石表面が風化した水和層が原因であると思われる、縄文時代の石器剥離面より古さを感じる。風化剥離面の観察では、一様に全面に風化が進んでおり、埋没以後のガジリ等の傷は見当たらないので、形態から完成品の欠損部が無いものと判断した（写真参照）。

①の石器の大きさは長軸線95.6mm、短軸線30.1mm、最大厚11.2mm、重量30.6gである。素材は両面加工の打製石器であり、全面に加工が施されているので判然としないが、片面に綿密に加工が及ばない台状の剥離面があり、大型の剥片から形状を整えながら、側縁加工を行なったと考えられる。こ



新東京国際空港No.7遺跡A地点出土の石器

0 (1:2) 5cm



市原市姉崎台出土の石器

0 (1:1) 5cm

それは②のNo.7 遺跡出土の石器にも、腹縁に大きな剥離痕を残すことから、同じような大型剥片素材からの加工が推測される。全体形状は左右非対称であるが、①図下半部は対称形状となっており、下半部のみならば、槍先形尖頭器とされるだろう。①図上半部は身を分厚く残し、押圧剥離を施しながら刀の切先（きっさき）と似た形状になっている。それらの形状と加工形態は②と酷似している。

②の図下半部は僅かに末端を欠損していることが、報告者によって観察されている。また末端の欠損部分については、「調整剥離の状態から尖頭状を呈していたとは考えがたい」としている。しかし片面末端に大きな剥離面を残していること、図下半部が非対称であることなどから、下半部は調整途上の未完成品とも考えられる。①上半部がこの石器作用部分であり、①下半部が柄につける為の装着細身基部ならば、②図の下半部の形状は柄装着には都合の悪い、分厚く幅広な形態ということになる。①と②の石器は若干の相違があるが、気泡の入り方など素材の材質からも酷似している。②の資料は、単独出土ながら出土層位や形態から、報告者は「縄文時代草創期初頭の半月形石器または、半月形ナイフに属する」と考えられている（佐藤1960、山内・佐藤1962）。紹介している姉崎台出土資料①も、②と同時代時期の遺物であると考えたい。

半月形石器は出土例が少なく、形態も一様ではなく、渡来石器として一層厳密な型式学的研究が必要と考えられている（小野田1983）。そのため資料②も分厚さから、報告者も半月形石器に該当するか躊躇している。旧石器時代から縄文時代への過渡期、縄文時代草創期に多様な石器が出土することは事実である。資料①と②は、そうした時期の産物であることは認められる。縄文文化起源論の論争の中において、縄文時代草創期の多様な石器群は、渡来石器としてその出自・系譜を求められてきた（橋本1988）。そのある一面過剰な期待が、縄文時代石器研究における草創期の特殊性と思われる。日本列島と日本海を挟んで大陸の沿海州地方や、中国東北地方の考古学的成果は、世界経済のグローバル化に伴って、以前より広く公開される機会が増えた。その海外の古文化様相は国内より複雑であり、時期的指標になりうる石器が標識になって、渡来石器として関連認識されることは、今後の課題であると感じられる（大貫1999）。

資料を採集された小出紳夫氏は、平成13年10月に急逝され、ここにその資料を報告することとなった。同僚として心からご冥福をお祈りしたい。

## 引用・参考文献

- 市原市教育委員会1988「330姉崎台遺跡」『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－北部編－』市原市教育委員会  
上杉 陽1990「富士火山東方地域のテフラ標準柱状図－その1：S-25～Y-141」『関東の四紀』16号 関東第四紀研究会  
上本進二1993「東原遺跡の火山灰層と地割れ」『市原市東原遺跡B地点』（財）市原市文化財センター  
大貫静夫1999「東北アジア先史社会の変容と極東の成立」『海峡と北の考古学－文化の接点を探る－シンポジウム資料集I・テーマ1：旧石器から縄文へ』日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会  
小野田正樹1983「半月形石器」『縄文文化の研究 第7巻道具と技術』（株）雄山閣出版  
佐藤達夫1960「ホルン・バイルの細石器」『考古学雑誌』第46巻第3号 日本考古学会  
西川博孝他1984「第3章A地点の調査」『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書IV－No.7遺跡』（財）千葉県文化財センター（山武郡芝山町香山新田地先の新空港No.7遺跡）  
橋本勝雄1988「縄文文化起源論」『論争・学説 日本の考古学』第2巻（株）雄山閣出版  
山内清男・佐藤達夫1962「縄文土器の古さ」『科学読売』12-13（佐藤達夫編1974『日本考古学選集21 山内清男集』築地書館）

# 菊間手永遺跡出土遺物補遺

近藤 敏・高橋 康男

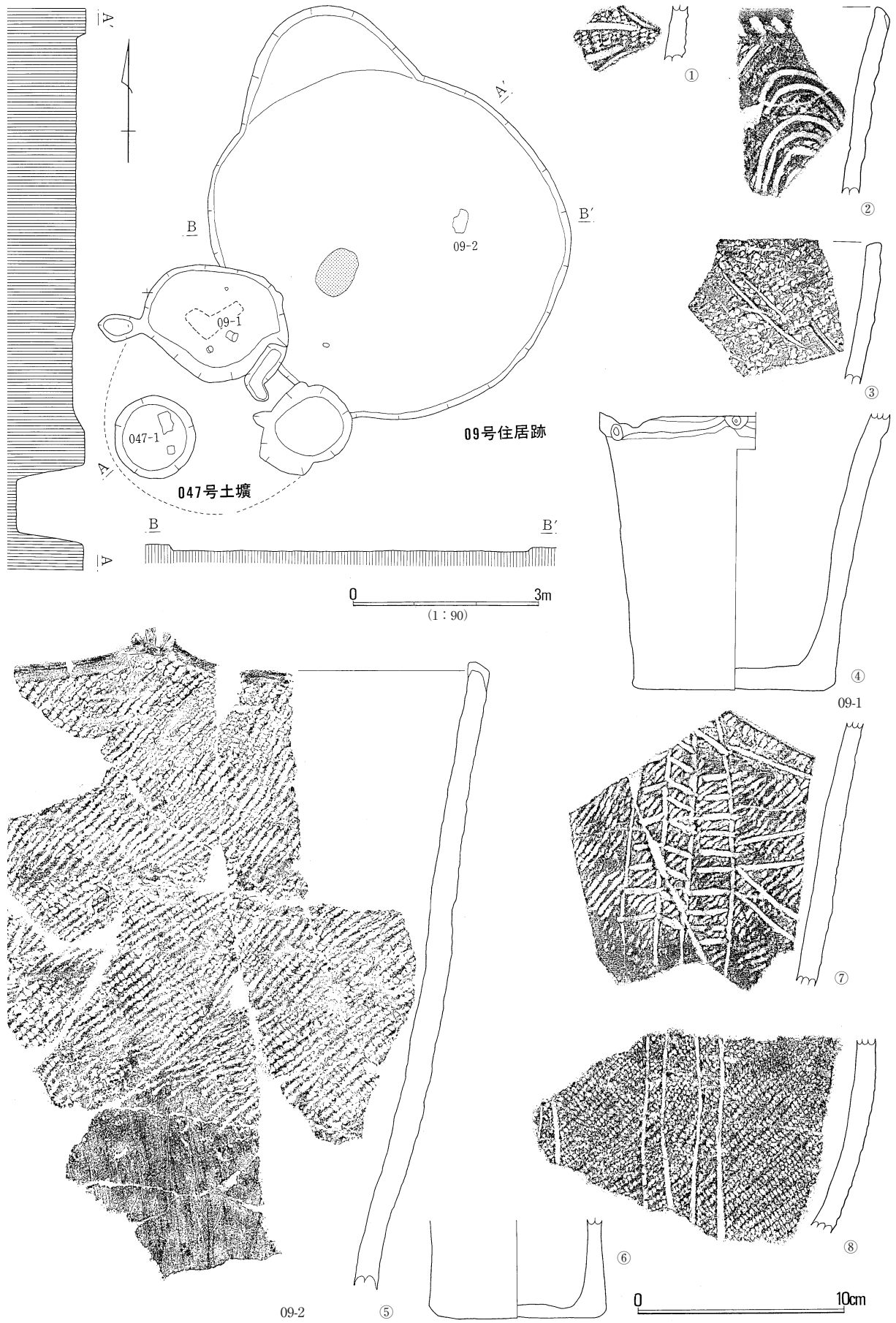
菊間手永遺跡の調査は、先に1972年7月に菊間手永貝塚から着手し、上層弥生遺構を1973年3月までと、平行して進められた。また1983年12月から1984年3月まで残存部調査が行なわれ、その後整理分析が行なわれ、菊間手永遺跡として3調査ともあわせて報告された（近藤他1987）。昭和47（1972）年東向原遺跡、昭和48年以降向原台遺跡の調査が実施された。それらの遺跡は菊間手永遺跡と同一組織が実施し、調査期間が前後することになったが、本格的整理作業が行なわれないまま、同組織において収納保管されていた。2000年以降、向原台遺跡・東向原遺跡は分析整理がなされ、2002年3月に報告書が刊行された（高橋2002）。

筆者は向原台遺跡の分析整理中に、菊間手永遺跡の調査資料が混入されていたことに気づき、不明確な資料を除き、調査報告分から除外することになった。除外された土器については、菊間手永遺跡09号住居跡出土と後日判明したので、今回補遺として資料報告をすることとした。向原台遺跡第89図150の縄文土器も、菊間手永遺跡第76グリッド出土として再掲載することとして、出土埋甕資料の参考として、非在地系土器出土の新たな他遺跡出土資料と共に掲載した（近藤1993、秋田1994）。

第1図の平面図は、菊間手永遺跡09号住居跡である。菊間手永貝塚の昭和47年度調査時の出土資料は、出土地点を表わすラベルが腐蝕して判読不明となり、写真から出土地点が解読された資料に限り、出土地点名を記し、残りは可能な限り包含層出土の土器として掲載している。09号出土状態の図版には、第1図④・⑦の写真があり、向原台遺跡9号住居跡への誤混入が明らかとなった。また向原台9号住居跡は古墳時代の住居跡であり、縄文時代遺物出土は付近の遺構からも無いため、向原台9号出土縄文土器は、すべて菊間手永遺跡09号出土遺物として扱うことにした。

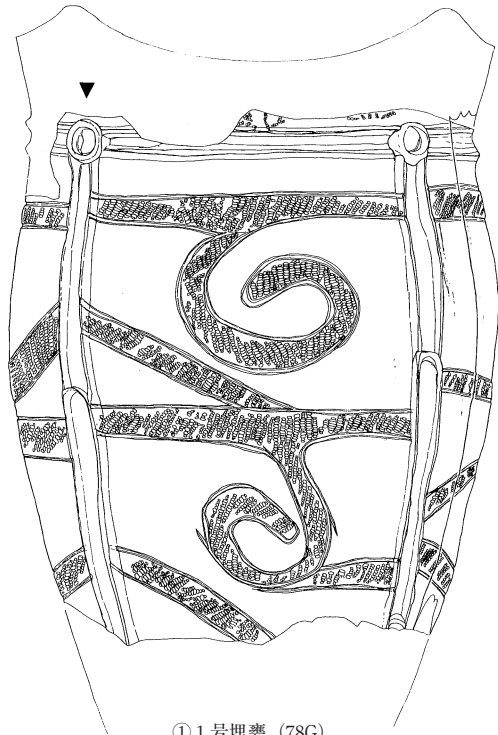
第2図は①は1号埋甕として報告したのであるが、複数写真の照合の末、出土区域が78グリッドと判明した（第2図グリッド配置図参照）。1号埋甕については東北地方に出自がある土器として、既に紹介している（近藤1993）。①の資料については、比較する出土例が無かったが、神奈川県伊勢原市八幡台遺跡1号敷石住居址出土の土器が、共伴土器と共に詳しく紹介され、第2図③の土器が東北北半地域に系譜を有するとして、その研究が著わされた（秋田1994）。その研究によれば③は関東地方の堀之内1式新段階に並行した東北地方北地域型式となる為、①は恐らく関東地方堀之内1式古段階に並行する型式と、なるだろう。市原市祇園原貝塚遺跡には④と、同じく東北地方北部地域出自の土器が出土しており、堀之内2式並行期の型式が与えられそうである（忍澤他1999）。②掲載土器は上述したように、向原台遺跡整理報告において、菊間手永遺跡の混入が明らかになった。②については口縁部及び底部が欠損しているが、ほかの遺存状態が良いので埋甕の可能性がある（第2図参照）。埋甕については近隣の千葉県茂原市下太田貝塚遺跡に、複数の重層する墓域が検出され、縄文時代後期前葉に増加する屋外の埋甕埋設が、乳幼児埋葬に伴う土器棺の可能性が高いことを指摘している（総南文化財センター-1998、菅谷2000）。

第3図の84号人骨の左手首に装着されていた貝輪については、本報告には未記載の為、今回実測図

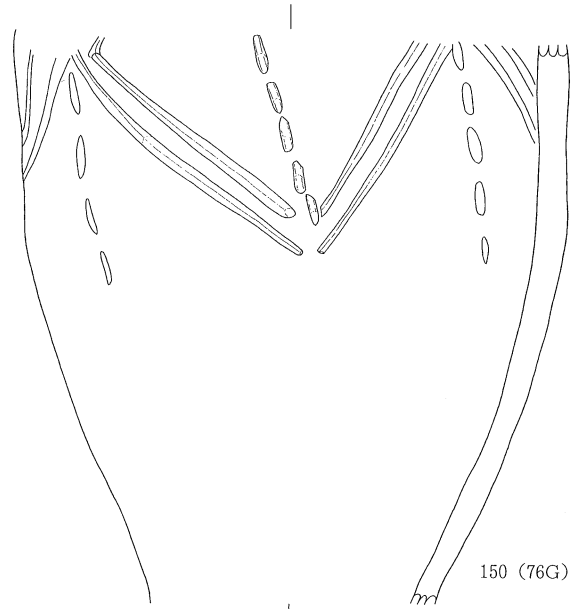


第1图 菊間手永遺跡09号住居跡出土遺物

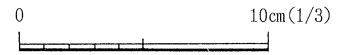




① 1号埋甕 (78G)



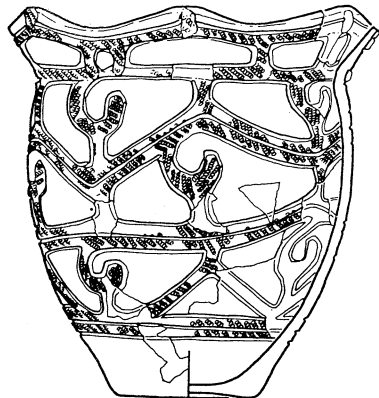
150 (76G)



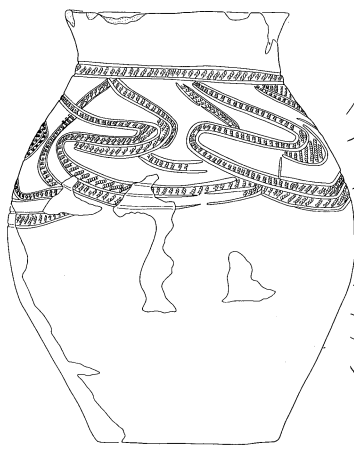
(1:4)

(以下3点同縮尺)

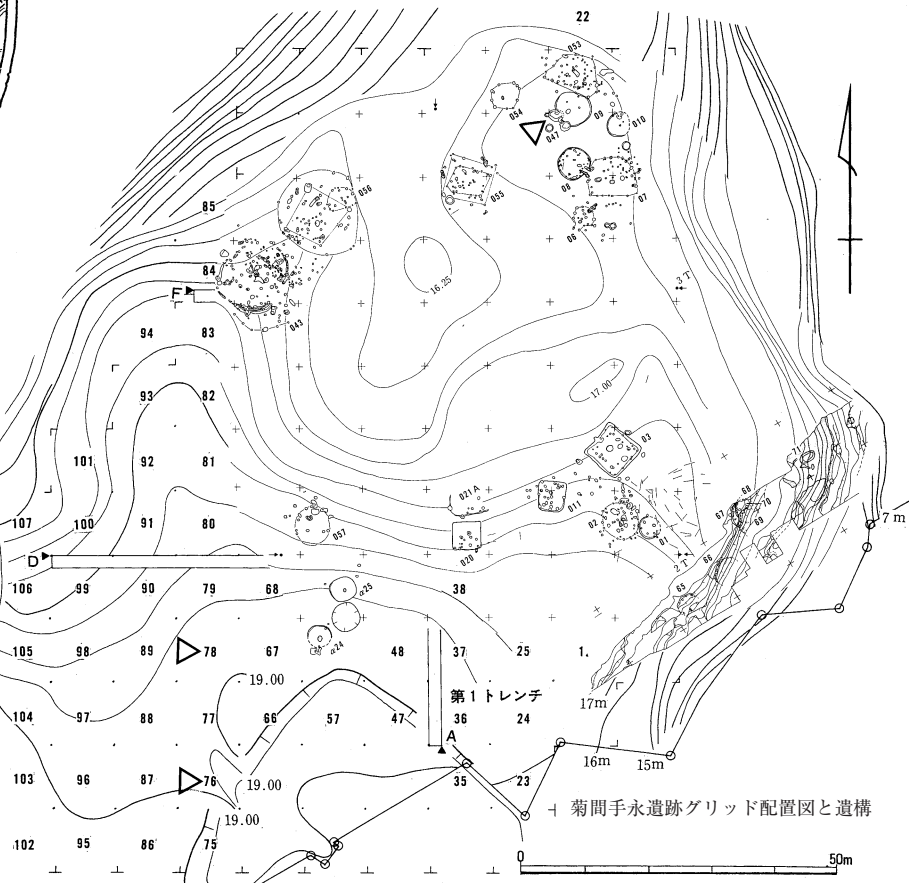
② 向原台遺跡に報告された菊間手永遺跡の  
76グリッド出土土器



③ 神奈川県伊勢原市八幡台遺跡  
出土の異系統土器

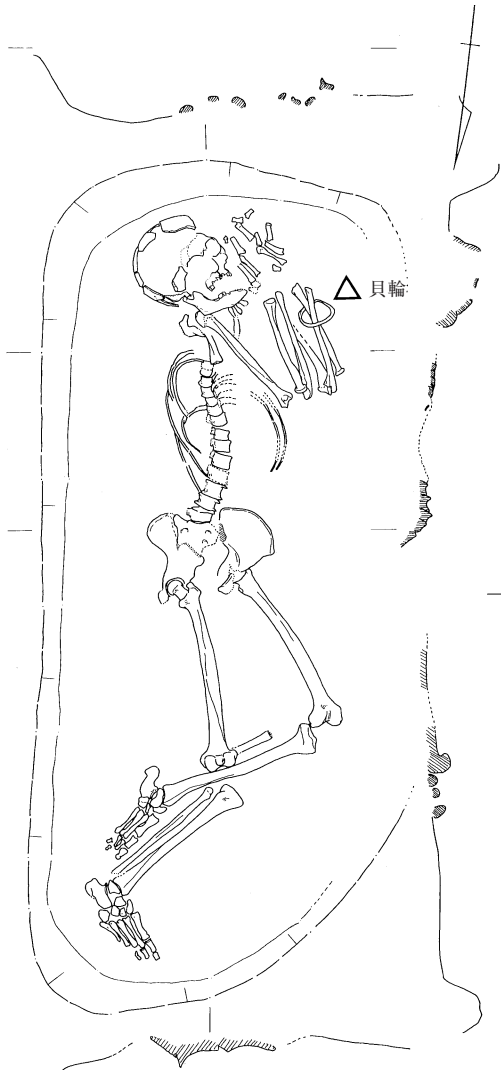


④ 市原市祇園原貝塚遺跡出土の  
異系統土器

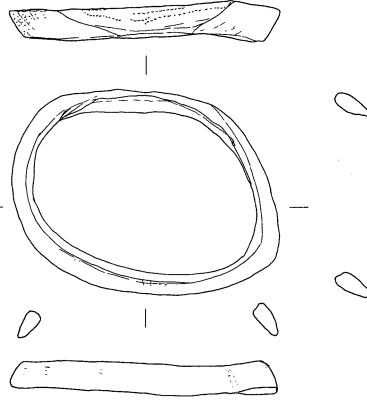


菊間手永遺跡グリッド配置図と遺構

第2図 菊間手永貝塚出土埋甕・位置補遺

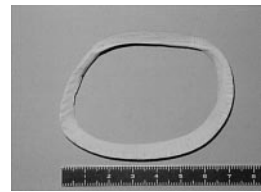


84号人骨左手首の貝輪出土状態



0 5cm

84号人骨左手首装着貝輪 (1:2)



(上) 貝輪表 (下) 貝輪裏

84号人骨出土状態

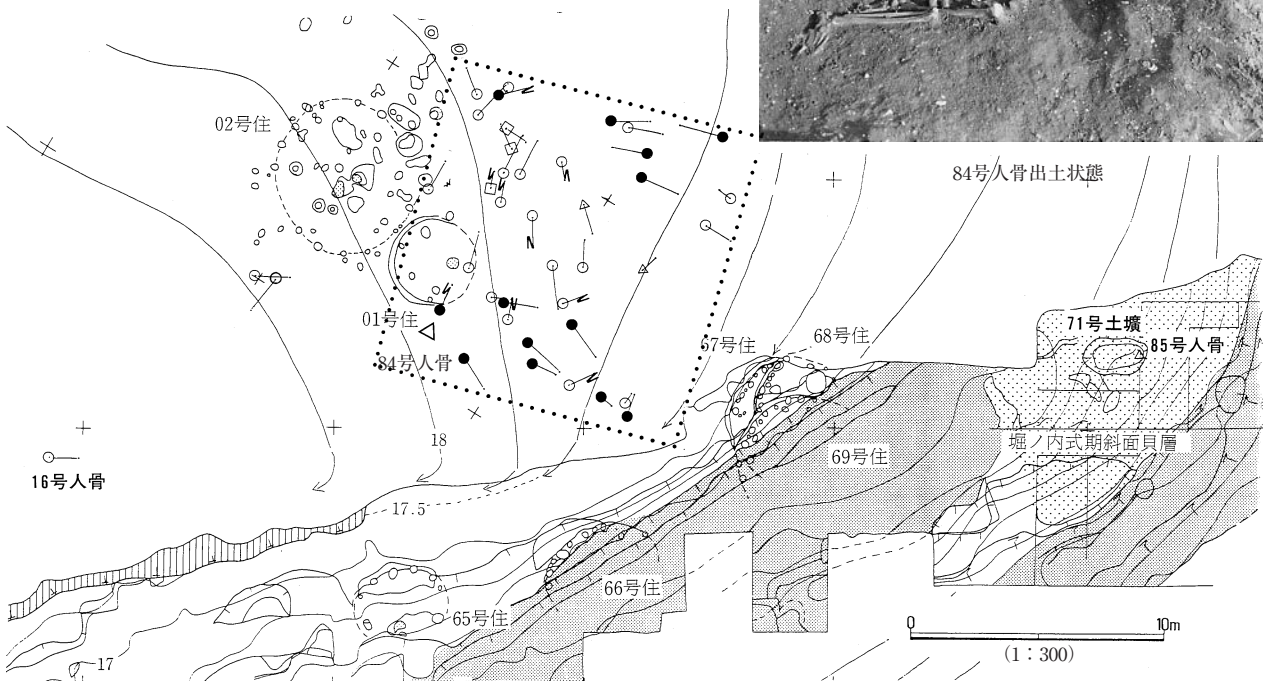
頭部方向 S-7°-E

0 50cm

(1:15)



84号人骨出土状態



第3図 菊間手永貝塚84号人骨副葬貝輪

と共に掲載する。貝輪は84号人骨と共に調査時に薬剤固定され、出土状態標本としてガラスケースに展示されていたが、標本の移動に伴って人骨から分離し、公表することとなった。

84号人骨は、一辺14mの正方形におさまる53体の一次埋葬人骨群の南西端（第3図下半）に位置している。これらの配置は、下太田貝塚遺跡において初めて明確に認識された、重層した墓域の事例によると、後期中葉期に相当すると考えられる（菅谷2000）。本例は、そのうち菅谷氏が方形を呈するものとした「a. b. c.」と同様のものが全域調査された事例になるわけである。ただ、西本・菅谷両氏が注目する人骨集積土坑は確認されていない（西本他2001）。今後、本例などの再解釈される資料を伴いながら、下太田貝塚の整理・分析は、縄文時代の墓制研究を飛躍的に発展させることと思われる（高橋1999）。

84号人骨のように出土人骨が、貝輪を腕に装着したままで検出されることは非常に少ない。類例としては、千葉県松戸市貝の花貝塚遺跡の第3号人骨（壮年女性）の左手首に、ベンケイガイ製腕輪を1個着用している（前田他1973）。84号人骨装着貝輪の素材はサトウガイ製？Lを使用し、かなり摩耗しているか、または精緻に加工されている。手を通す内径は、長径61mm×短径42mmの内周174mmとなっており、現在の成人男性ではとても小さくて、掌を通しての装着はできない（第3図参照）。貝製品については現生貝の調査とともに、実験考古学的手法による研究が進んでいる（忍澤2002）。製作方法ともに、流通搬入関連にも興味がつきない。

菊間手永貝塚遺跡は、最初の調査後ほぼ10年後に隣接部の調査を担当して、その後1連の調査の整理報告を行なった。調査分析整理後、調査担当者が当時不明確であった事項が解決されることもある（西野2001）。また当時担当者の考えが及ばず、掲載出来なかった事物も、調査研究の深化と共に発見・認識されるであろう（西野2002）。それらは記載されず、当時の担当者のみ知りうる事実であれば、確実に迷宮入りとなるであろう。そのためには、調査整理分析の落ち穂を拾う作業を続ける必要がある。それらが調査整理分析担当者の責務であり、調査研究員としての行政を担う職務者の一貫とした、継続性のある立場であると考えたい。

貝輪の素材及び貝種同定、デジカメ写真の撮影には、忍澤成視・鶴岡英一両氏の協力を得た。記して感謝申し上げます。なお、84号人骨は市原市埋蔵文化財調査センターにおいて保管している。

## 引用・参考文献

- 秋田かな子1994「八幡台遺跡出土の縄文時代後期土器について」『東海史学』第29号 東海大学史学会  
忍澤成視他1999「調査区隣接地出土の土器」『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ 祇園原貝塚』市原市教育委員会  
忍澤成視2002「貝製品」『季刊考古学』第81号（株）雄山閣出版  
近藤 敏他1987『菊間手永遺跡』（財）市原市文化財センター  
近藤 敏1993「市原市内出土の非在地系土器」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅱ（財）市原市文化財センター  
菅谷通保2000「下太田貝塚（第1地点）」『年報』No.11（財）総南文化財センター  
総南文化財センター1998「谷底に眠る縄文人」『郷土の文化財』19（財）総南文化財センター  
高橋龍三郎1999「関東地方における縄文後期前半の墓制」『季刊考古学』第69号（株）雄山閣出版  
高橋康男2002『上総国分寺台遺跡報告書Ⅶ 市原市向原台遺跡・東向原遺跡』市原市教育委員会  
西野雅人2001「市原市草刈六之台遺跡の早期貝層－補遺－」『研究連絡誌』第61号（財）千葉県文化財センター  
西野雅人2002「縄文時代中・後期のヘラ状貝製品について」『研究連絡誌』第62号（財）千葉県文化財センター  
西本豊弘他2001「DNA分析による縄文後期人の血縁関係」『動物考古学』第16号 動物考古学研究会  
前田 潮他1973「第6章埋葬」『貝の花貝塚』松戸市教育委員会

# 関東地方におけるスッポンの利用

－その開始時期と普及の要因をめぐって－

鶴岡 英一

## 1. はじめに

近年、大阪市内の近世遺跡からスッポン遺体が多数出土し、調査地周辺に所在した料理茶屋からの廃棄物である可能性が指摘され（久保1999a・1999b）、発掘出土資料が文献の記述と結び付けられた事例として注目された。

一方、東日本ではスッポンが検出されること自体稀なこともあり、金子浩昌氏によるいくつかの論述（金子1985・1992・1994・2001ほか）を除けば、報告書中において同定記載が行われるのみで、その出土の意義についてはほとんど触れられることの無かった種と言える。

現在、筆者らは西広貝塚第2次～7次調査区について整理作業を進めているが、西広貝塚第1次調査区では、縄文時代後期中葉の所産とされるスッポンの出土が報告されていることから、全国の出土事例の集成を行うことにより、関東地方におけるスッポン利用の開始時期とその普及要因について検討を加え、西広貝塚から出土したスッポンについても考えてみることにする。

## 2. 国内に生息するスッポンについて

現在、スッポンは国内各地で養殖が盛んに行われているが、その生態については一般に馴染みが薄いと思われるので、ここで簡単に触れておきたい。

### (1) 分類

スッポンは爬虫綱REPTILIA－カメ目Testudines－スッポン科Trionychidaeに属する。これまで日本内地に分布するスッポンについては、固有亜種であるニホンスッポン *Trionyx sinensis japonicus* Temminck et Schlegelとされていた（内田ほか1979）が、全国で盛んに行われるようになった養殖や、中国からの輸入の増加などの影響によって、在来・外来種の交雑がすでに進んでいると考えられることから、近年の研究では中国大陸および朝鮮半島から北ベトナムに分布し、従来シナスッポンと呼ばれてきたものと同一種と見なすことが妥当との見解に達しており、*Pelodiscus sinensis*の学名に統一されている（内田2001a）。

ただし、酵素蛋白を指標として行われた解析の結果からは、日本本土の集団と台湾や香港の集団との間には、比較的明瞭な遺伝的差異が認められるとの報告<sup>1)</sup>もあり、将来的に再度分類が必要になる可能性も残されている。

### (2) 生態

四肢は水掻きが発達しており、手足には外観上3本の指と爪を持つ。口吻は細長く尖り、首は長く延びる。ほぼ円形で平たい亀甲には、他のカメ類に見られる硬い甲板が無く、皮革状の皮膚に覆われている。背甲では縁骨板が退化し、肋骨が肋骨板から突き出するため、甲の周囲は柔らかい。大半の種は腹甲の縁が退化し、背甲とは固着せず靱帯組織によって結合している。甲長は20～40cm、大型種は

80cmにもおよぶ。

食性はほぼ肉食で、魚・蛙・甲殻類・水生昆虫・軟体動物などを捕食する。比較的大きな池沼や流れの緩い河川中流域の砂泥底に生息する。水温が約15℃以下になる11月～4月頃にかけての約半年間は、砂泥底に潜って冬眠し、冬眠からさめたのち交尾を行い、直径2 cm程の球形の卵を1回に15～50個、年に3～5回産卵するという（日高監修1996ほか参照）。

### (3) 生息状況

世界のスッポン類の最も大きな分布域はアジア南部と北米大陸南東部と考えられており、生息の要件として湿地などの水域の存在が挙げられる。

国内においては、北海道から東北地方には自然分布はしないようであるが、食料として人為的に移植されることの多い種のため、日本各地で盛んに行われている養殖個体の逃亡や定着・交雑が進み、生息状況を捉えにくいものとしている。

環境省による「レッドデータブック－爬虫類・両生類」では、現在「情報不足（評価するだけの情報が不足している種）」のカテゴリーにランクされているが<sup>26)</sup>、近年の池沼・河川のコンクリート護岸や水質汚染を考えれば、自生する個体数は確実に減少しているものと思われる。

## 3. 考古・文字資料に見るスッポン

### (1) 考古資料

考古資料に見られるスッポンは、「スッポン」を限定的に表したもののなのか、あるいは広く「カメ類」全般を表したもののなのか、解釈の違いから様々な意見が示されている。現状では、それら個々の資料について言及する術を持たないので、ここでは「スッポン」を表した可能性があるものについて取り上げることにする。

これまでのところ、国内でスッポンと考えられる考古資料がはじめて現れるのは、弥生時代中期の銅鐸においてである。同一工人の連作とされる兵庫県桜ヶ丘4号・5号銅鐸、伝香川県出土銅鐸、谷文晁旧蔵銅鐸には、円形の背甲と長く伸びた首、嘴状に尖った口など、スッポンの形態的特徴を良く示すカメ類が題材のひとつとして描かれている（佐原1996）。このうち、伝香川県出土銅鐸のA面には魚をくわえた個体が認められる（図1）ことから、食性の点からも、銅鐸の製作に携わった工人が実際に目にしたスッポンをモデルとしていたことは間違いない。スッポンには単独で描かれるものと他の動物とともに描かれるものがあるが、同一区画内で題材となっている生き物に共通しているのは、水田やこれにともなう水路にも生息するという点であり、稲作との強い関連性が指摘されている。

この4連作のほか、福井県井向1号銅鐸や兵庫県気比3号銅鐸にもカメ類が描かれ、これについてもスッポンと考えられている（佐原1996・森井1996）。

一方、近年出土した島根県加茂岩倉遺跡10号銅鐸のB面鈕内縁にもカメ類の絵が鋳出されている。背甲には二重丸の内側に綾杉文が施され、桜ヶ丘4・5号銅鐸などに描かれたスッポンとの共通点が見られる（難波1997）が、脚の形からウミガメ類とする考えもある（宇野2001）。確かに形態的特徴はウミガメに類似するが、その種が描かれた意味などを検討する必要があるだろう。

弥生時代以降の考古資料としては、奈良県酒船石遺跡の亀形石造物と正倉院宝物の青斑石龜合子がある。酒船石遺跡出土の亀形石造物（図2）は、7世紀中頃に築造され9世紀後半まで使用されたと

されるが、円形の背甲や手足などの動物学的特徴からスッポンとする説（内田2001b）や、導水施設を農業祭祀に係わるものと理解し、川の神（河伯）の家来とされるスッポンを表しているという説<sup>6)</sup>がある。これに対し、中宮寺の国宝「天寿国繡帳」に見えるカメ類との類似から、道教の神仙思想の影響を受けた「カメ」としなければ意味が通じないとする考えもある（千田2001）。

正倉院宝物の青斑石龜合子（図3）は蛇紋岩から作られており、7世紀末から8世紀初頭に大陸からもたらされたと考えられている。この合子は、これまで国内で生産された銅鐸や石造物に見られるデフォルメされたカメ類とは全く異なり、スッポンの特徴を写實的に表現している。背甲部分には反転された北斗七星が描かれていることから、内部に仙薬を納めたもので、道教的な思想背景が強いのではないかと指摘がある（三宅2001a・2001b）。

## (2) 歴史・法律書

国内の文字資料でスッポンについての記述が初めて確認されるのは、『養老律』の職式律疏文と思われる。ここには、中国の『食経』に書かれた禁忌の具体例の中からスッポンと苜蓿の食い合わせが引用され、この食禁を誤った典膳は徒3年と記されている。

『続日本紀』には文武元（697）年に近江国から白いスッポン、丹波国から白いシカが瑞祥のひとつとして献上されたとの記述がある。このスッポンは突然変異で色素が抜けた個体と考えられるが、これまでの遺跡からの出土事例から見て、琵琶湖周辺で捕獲されたものであろう。『続日本紀』には白いスッポン以外に白いカメが献上されたことが多数記されており、同様の事例が『続日本後記』・

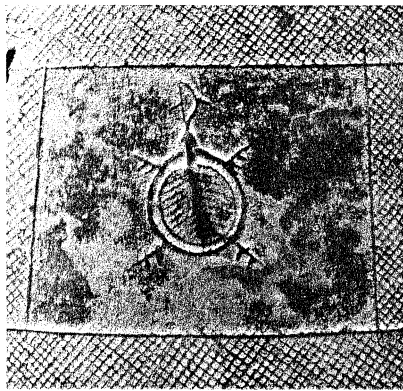


図1 伝香川県出土銅鐸（佐原1996）

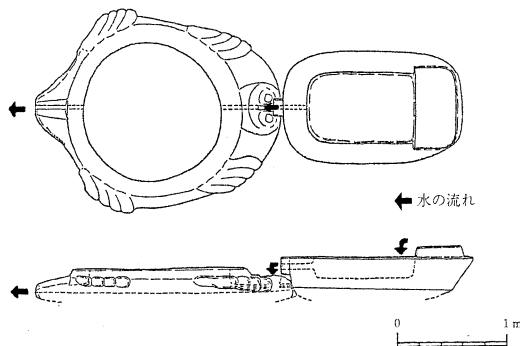


図2 酒船石遺跡亀形石造物（西光2001）

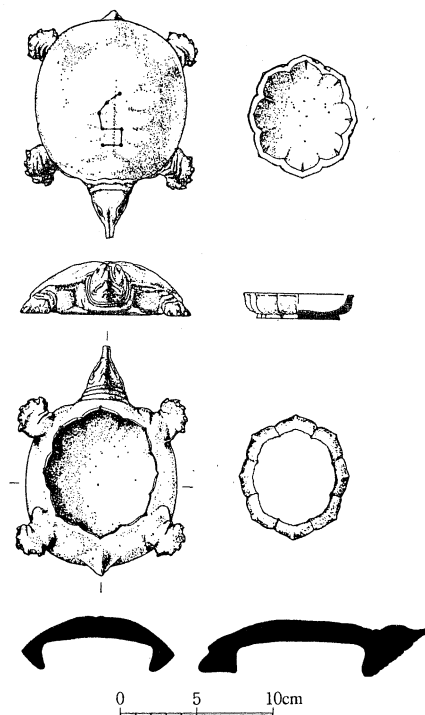


図3 青斑石龜合子 正倉院宝物（三宅2001b）

『日本文徳天皇実録』・『日本三代実録』などにおいても認められる。これは白という色やその稀少性という意識のほかに、カメやシカが靈妙で長寿な動物という中国の神仙思想の影響を受けていることが考えられる。おそらく白いスッポンについても、同じカメ類の中のひとつという認識のもとに献上されたのであろう。

食用・瑞祥以外のスッポンの用途を知る資料として『延喜式』があり、山城国と摂津国から、スッポンの甲羅が薬として納められたことが記されている。このことから、本草学の知識がすでに取り入れられていたことがわかる。

### (3) 本草学書

スッポンについての記述は、本草学書にも多く見られる。本草学は中国の薬物学で、薬用植物だけでなく動物や鉱物なども載せられている。古くは8世紀初頭に唐から伝わり採用された『新修本草』があり、日本最古の本草学書とされる『本草和名』は、これを引用したものである。ただし、国内における初期の本草学書については、必ずしも日本国内の事情が反映されたものではなく、その知識も特定の階層の人々に留まったと考えられている。

中世の本草学書で著名なものとして『喫茶養生記』があるが、この時期には目立った研究は見られない。また、安土桃山時代には食経の流れを汲み食餌療法が記された『宜禁本草』が出されるが、スッポンについての記述の有無は確認していない。一般に国内の本草学研究が盛んに行われるようになるのは近世江戸時代以降と考えられている。

近世の本草学は、本来の薬物学から派生した食物本草や博物学の分野として盛んになり、数多くの本草学書が刊行された。17世紀は食物本草学が研究の中心となり、著名なものとしては『本朝食鑑』がある。現在に通じるスッポン料理が普及し始めたのは17世紀末頃の大坂からとされており、元来この地に生息数が多かったことや江戸と並ぶ文化の一大中心地であったことが主な要因として挙げられるが、17世紀から18世紀初頭までは多くの本草学者が大坂に隣接する京都を中心に活動しており（上野1989）、このことも少なからず影響していた可能性が考えられる。

18世紀には博物学としての研究に重点が置かれるようになり、『大和本草』、『和漢三才図会』、『本草綱目啓蒙』などの多くの本草学書が出版され、スッポンについての記述がなされている。

### (4) 文学書

近世の江戸と大坂におけるスッポン食の様子は、文学の世界からも窺うことができる。

『諸艶大鑑（好色二代男）』には、ヤスで突いてスッポンを獲る「丸魚突（スッポン突き）」を生業とする人が天満にいたことが記されており、17世紀末頃の大坂ではすでにスッポンが商品としての価値を有していたことがわかる。

19世紀に入るとスッポンについての記述も増え始め、『浮世風呂』には、大坂人と江戸人との会話の中で、江戸の人がスッポンを気味悪がる様子や、甲の形態から上方では「丸」、江戸では「蓋」と別称していたこと、江戸ではスッポンを濃いたれで煮付け、上方では薄仕立ての吸物にされていたことが記されている。また、『嬉遊笑覧』によれば、江戸では寛永年間（17世紀前半）にはスッポンが食べられるようになり、寛延・宝暦年間（18世紀中頃）にはスッポンの煮売として葎簀張りの小屋が軒を並べていたらしいが、『江戸繁盛記』に見られる「山鯨」と称して売られていたイノシシやシカよりも下品なものとしている。

## 4. 遺跡出土のスッポン

### (1) 集成の方法

本稿では、(財)市原市文化財センター所蔵の発掘調査報告書を中心に、一部(財)千葉県文化財センター蔵書についても検索を行った。しかし、西日本の資料については不備が予想されたため、全国規模の動物遺存体に関する情報検索が可能な「貝塚データベース」<sup>(4)</sup>をはじめとして、「遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究」(山崎1998)・「大阪湾岸出土水産食料一覧表」(久保1999c)・「九州の貝塚」(九州縄文研究会2001)を参考にしてスッポン出土遺跡の集成を行った。なお、現段階では典拠となる文献のすべてを入手することができていないため、出土状況や帰属時期の評価を必ずしも直接行っていない遺跡が多く含まれていることをお詫びしておきたい。

集成の結果、全国で66ヶ所の遺跡からスッポンが出土していることが判明した(表1)。遺跡の立地を見ると沖積地に位置するものが多く、湖沼や河川をはじめとする低湿地がスッポンの生息場所であることからすれば、解体痕や被熱が認められる場合を除き、食料残渣か自然死かを判別することは困難であるため、今回の集成ではそれらを区別することなく取り上げている。

### (2) 遺跡の分布

図4はスッポン出土遺跡の分布を都道府県別に示したものである。この図からは、スッポンの分布や食習慣が西日本を中心としたものであることが明らかである。一方、出土遺跡数から見た場合、東京都・大阪府・滋賀県だけで35件にのぼり、全体の53%に相当する(図5)。

スッポンの利用は縄文時代早期にまで遡り、石山貝塚(滋賀県大津市)・蛍谷貝塚(滋賀県大津市)などから出土している。この時期には、滋賀県では6ヶ所の遺跡から出土しているが、このうち5遺跡が琵琶湖南南端部の大津市に位置し、琵琶湖唯一の流出河川である瀬田川流域を中心とする。

縄文時代晩期～弥生時代中期になると、分布は大阪府に偏りを示すようになり、滋賀県からの出土が見られなくなる。この時期は河内湾が海から潟に移行する頃にあたり(久保1999c)、沖積地の拡大と水稻耕作の開始による開発が進んだことからスッポンの生息域が拡大し、大阪での出土例の増加として表れたものと考えられる。また、琵琶湖から流出する瀬田川が宇治川・淀川と名前を変えて大阪湾へ注いでいることから説明が付き、生息域の拡大は自然発生的に起こった現象であろう。

古墳時代から平安時代には、全国的にスッポンの出土数が減少する。しかし、瑞祥や薬としてのスッポンが捕獲・献上されていたことが文献中に見られることから、環境の変化などから生息数が減少したとも考えにくい。単純に仏教の殺生禁や陰陽道などの影響と捉えるのは軽率だが、利用数自体が減少したことが原因のひとつとなっているのであろうか。

中世・戦国時代に入ると再び出土数が増加し始める。これまで同様に近畿圏以西を中心に分布するが、葛西城(東京都葛飾区)と馬屋敷遺跡(千葉県松戸市)から出土したものについても、戦国末期～近世初頭<sup>(5)</sup>まで遡る可能性がある。

近世は縄文期に次ぐ出土数となるが、これまでのところ出土地は東京都・大阪府・鳥取県に限られる。このうち東京都からの出土が7割を占め、江戸でのスッポンの利用ないしは生息数の急激な増加を指摘することができる。大阪府や鳥取県からの出土は17世紀が主体となるが、東京都で出土数が増加するのは18世紀以降のようである。



表1. スッポン出土遺跡集成

No	遺跡名	都道府県	市区町村	時代							時期 (年代) ほか
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代	
1	中妻貝塚	茨城県	取手市	?							攪乱層
2	大洗吹上遺跡	茨城県	大洗町	?							中～後期前葉・同定不確定
3	西広貝塚	千葉県	市原市								後期中葉
4	馬屋敷遺跡	千葉県	松戸市								16世紀末?～17世紀前半
5	飯田町遺跡	東京都	千代田区								17世紀後～末葉
6	江戸遺跡 (都立一橋高校地点)	東京都	千代田区								中～後期
7	溜池遺跡	東京都	千代田区						?		出土層位不明・時期記載無し
8	丸の内三丁目遺跡	東京都	千代田区						?		
9	汐留遺跡	東京都	港区								17世紀
10	西久保城山地区の武家屋敷跡遺跡	東京都	港区							?	近代以降?
11	芝公園一丁目遺跡	東京都	港区								18世紀?
12	郵政省飯倉分館構内遺跡	東京都	港区								18世紀前半・18世紀後半～19世紀前半
13	真砂遺跡	東京都	文京区								18世紀後半
14	日影町遺跡	東京都	文京区								
15	三栄町遺跡	東京都	新宿区								18世紀～19世紀第3四半期
16	尾張藩上屋敷跡遺跡	東京都	新宿区								18世紀末～19世紀初頭
17	千駄ヶ谷五丁目遺跡	東京都	渋谷区								19世紀
18	葛西城	東京都	葛飾区								16世紀末?～17世紀前半
19	上千葉遺跡	東京都	葛飾区								
20	頭川城ヶ平横穴墓群遺跡	富山県	高岡市			?					埋葬施設を巢穴としたタヌキによる持ち込み?
21	登呂遺跡	静岡県	静岡市								
22	粟津湖底遺跡第1・2貝塚	滋賀県	大津市								縄文早期～中期前半
23	粟津湖底遺跡第3貝塚	滋賀県	大津市								縄文中期初頭
24	石山貝塚	滋賀県	大津市								縄文早期後半
25	滋賀里遺跡	滋賀県	大津市								縄文晩期
26	螢谷貝塚	滋賀県	大津市	?							縄文早期末?
27	磯山城遺跡	滋賀県	米原町	?							縄文早期?
28	東奈良遺跡	大阪府	茨木市								弥生中期
29	堂島蔵屋敷跡	大阪府	大阪市								18世紀初頭
30	森の宮遺跡	大阪府	大阪市								縄文後・晩期～弥生中期・7世紀・13～17世紀
31	住友銅吹所跡	大阪府	大阪市								7世紀・17世紀
32	日下遺跡	大阪府	大阪市								縄文晩期初頭
33	森小路遺跡	大阪府	大阪市								弥生中期
34	五反鳥遺跡	大阪府	吹田市								弥生～鎌倉
35	諸福遺跡	大阪府	大東市								弥生中期
36	恩智遺跡	大阪府	八尾市		?						弥生中期?・時期記載無し
37	亀井遺跡	大阪府	八尾市								弥生中期
38	瓜生堂遺跡	大阪府	東大阪市		?						弥生中～後期?・時期記載無し
39	鬼虎川遺跡	大阪府	東大阪市								弥生中期・13世紀後半
40	宮ノ下遺跡	大阪府	東大阪市								縄文晩期末～弥生中期
41	西ノ辻遺跡	大阪府	東大阪市								弥生中期・鎌倉
42	金楽寺貝塚	兵庫県	尼崎市								平安後期～鎌倉
43	巨勢山323号墳	奈良県	御所市								
44	唐古・鍵遺跡	奈良県	田原本町								
45	檀原遺跡	奈良県	檀原市								縄文晩期
46	米子城跡6遺跡	鳥取県	米子市						?		16世紀後半・17世紀?
47	米子城跡8遺跡	鳥取県	米子市						?		17世紀後半以降?
48	大井谷II遺跡	鳥根県	出雲市								13～15世紀
49	百間川米田遺跡	岡山県	岡山市								室町後半
50	百間川兼基遺跡	岡山県	岡山市								
51	矢部奥田貝塚	岡山県	倉敷市								縄文中～後期
52	権現谷岩陰遺跡	岡山県	川上町								
53	草戸千軒町遺跡	広島県	福山市								14世紀前半
54	帝釈観音堂洞窟遺跡	広島県	神石町								縄文時代早期～前期主体?
55	宮前川遺跡	愛媛県	松山市								古墳前期
56	中村貝塚	高知県	中村市								縄文晩期中～後葉
57	楠橋貝塚	福岡県	北九州市								縄文前期中葉
58	新延貝塚	福岡県	鞍手町								縄文前～後期
59	高志神社貝塚	佐賀県	千代田町								
60	本分貝塚	佐賀県	三根町								弥生中期
61	高橋南貝塚	熊本県	熊本市								12世紀末～13世紀
62	若園貝塚	熊本県	菊水町								縄文中期末～後期
63	阿高貝塚	熊本県	城南町								縄文中～後期
64	黒橋貝塚	熊本県	城南町								縄文中～後期
65	下郡桑苗遺跡	大分県	大分市								弥生前期後半
66	萩堂貝塚	沖縄県	北中城村								縄文後期併行

取手市教育委員会 1995 『取手市中妻貝塚発掘調査報告』
大洗吹上遺跡調査団 1972 『大洗吹上遺跡』
上総国分寺台遺跡調査団編 1977 『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ西広貝塚』
松戸市遺跡調査会 2002 『馬屋敷』
飯田町遺跡調査会 1995 『飯田町遺跡』
都立一橋高校内遺跡調査団 1985 『江戸 都立一橋高校地点発掘調査報告』
都内遺跡調査会 1996 『溜池遺跡』
東京都埋蔵文化財センター編 1994 『丸の内三丁目遺跡』
東京都埋蔵文化財センター 1997 『汐留遺跡Ⅰ』
(仮称)城山計画用地内遺跡調査団 1994 『西久保城山地区の武家屋敷跡遺跡』
港区芝公園1丁目遺跡調査団 1988 『芝公園1丁目 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』
港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986 『郵政省飯倉分館構内遺跡』
真砂遺跡調査会 1987 『真砂遺跡』
都立学校遺跡調査会 2000 『日影町』
新宿区教育委員会 1991 『三栄町遺跡 骨角貝製品・動物遺存体編』
東京都埋蔵文化財センター 2001 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ』
千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997 『千駄ヶ谷五丁目遺跡』
葛飾区遺跡調査会 1994 『葛西城Ⅷ』
葛飾区遺跡調査会 1996 『上千葉遺跡 葛飾区西亀有1丁目12番地地点発掘調査報告書』
高岡市教育委員会 1984 『富山県高岡市頭川城ヶ横穴墓群第2次発掘調査』
日本考古学協会 1954 『登呂1948-1950』*
滋賀県教育委員会 1984 『栗津貝塚湖底遺跡』*
(財)滋賀県文化財保護協会 1997 『栗津湖底遺跡第3貝塚(栗津湖底遺跡Ⅰ)』
平安学園 1956 『滋賀県石山貝塚研究報告書』*
(財)滋賀県文化財保護協会 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』*
滋賀県教育委員会 1992 『蛭谷遺跡・石山遺跡』
米原町教育委員会 1986 『磯山城遺跡』*
『東奈良遺跡現地説明会資料』*
(財)大阪市文化財協会 1999 『堂島蔵屋敷跡』
難波宮址顕彰会 1978 『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』*・(財)大阪市文化財協会 1996 『森の宮遺跡Ⅱ』
(財)大阪市文化財協会 1998 『住友銅吹所跡発掘調査報告』
東大阪市教育委員会 1986 『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要1985年度』
(財)大阪市文化財協会 2001 『森小路遺跡発掘調査報告Ⅰ』
吹田市教育委員会 1996 『吹田市五反鳥遺跡発掘調査報告書』
『大東市史』*
瓜生堂遺跡調査会 1980 『恩智遺跡1』
(財)大阪文化財センター 1982 『亀井遺跡』
瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂遺跡3』
(財)東大阪市文化財センター 1998 『鬼虎川遺跡第35-2・3次発掘調査報告』ほか
『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』*
(財)東大阪市文化財協会 1999 『西ノ辻遺跡第17次発掘調査報告書』ほか
『尼崎市金楽寺貝塚』*
御所市教育委員会 1987 『奈良県御所市 巨勢山古墳群2』*
田原本町教育委員会 1983 『唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』*
貝塚データベースによる(未永雅雄ほか 1961 『樫原』は未見 奈良県立樫原考古学研究所付属博物館 2002 『樫原遺跡』には記載無し)
(財)鳥取県教育文化財団 1996 『米子城跡6遺跡』
(財)鳥取県教育文化財団 1996 『米子城跡8遺跡』
出雲市教育委員会 2001 『大井谷Ⅰ遺跡 大井谷Ⅱ遺跡』
岡山県教育委員会 1989 『百間川米田遺跡3(旧当麻遺跡)』*
岡山県教育委員会 1997 『百間川兼基遺跡3 百間川今谷遺跡3 百間川沢田遺跡4』
岡山県教育委員会 1985 『岡山県埋蔵文化財報告15』*
岡山県川上町教育委員会 1983 『権現谷岩陰遺跡』*
広島県草戸千軒遺跡調査研究所編 1995 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』
松崎寿和編 1976 『帝釈峽遺跡群』 亜紀書房*
貝塚データベースによる(報告書中には記載無し)
木村朗朗 1987 『中村貝塚』『四万十川流域の縄文文化研究』 幡多埋文研*
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1988 『楠橋貝塚』
鞍手町埋蔵文化財調査会 1980 『新延貝塚』
『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告3号』*
佐賀県立博物館 1981 『本分貝塚』*
熊本県教育委員会 1978 『高橋南貝塚』
熊本県教育委員会 1968 『菊池川流域文化財調査報告(若園貝塚)』*
九州縄文研究会 2001 『第11回 九州縄文研究会 熊本大会 九州の貝塚 発表要旨・資料集』
九州縄文研究会 2001 『第11回 九州縄文研究会 熊本大会 九州の貝塚 発表要旨・資料集』
大分県教育委員会 1989 『下郡桑苗遺跡』
松村 瞭 1920 『琉球荻堂貝塚』 第一書房*



図4 スッポン出土遺跡の分布

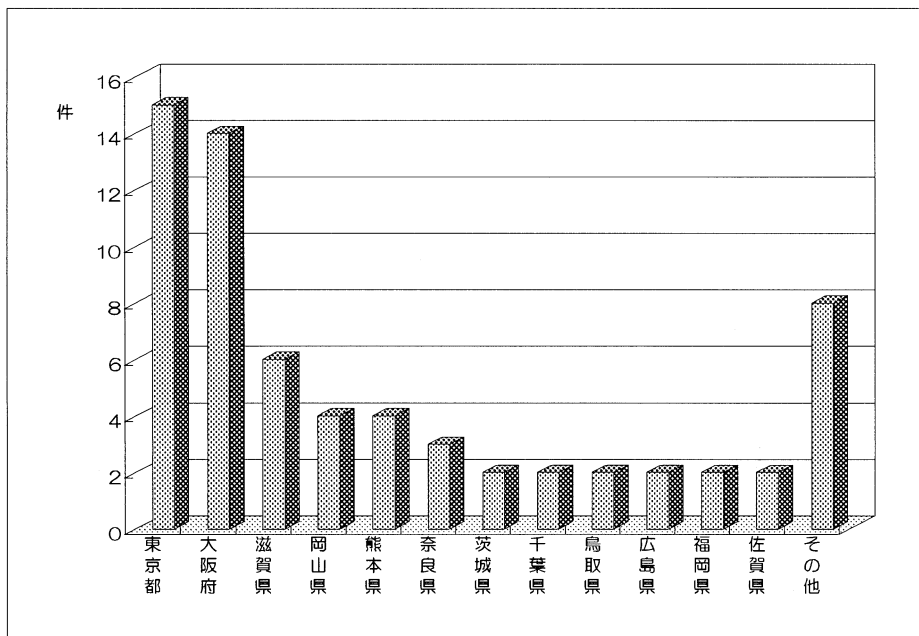


図5 都道府県別スッポン出土遺跡数

## 5. 関東地方におけるスッポン出土の検討

### (1) 出土の特徴

関東地方ではこれまでに16遺跡からスッポンが出土しており、これは全国のスッポン出土遺跡全体の約4分の1に相当する。また、16遺跡のうち13遺跡までが近世以降の所産であり、関東地方で検出されるスッポンについては、近世初頭を画期として、急激に出土遺跡数が増加することが明らかとなった(図6)。次に、帰属時期が近世初頭までの5遺跡を取り上げ、スッポンの出土状況について報告書の記載をもとに見ていくことにする。

### (2) 近世初頭以前の出土状況

今回行った集成の結果、関東地方に所在する近世初頭以前の遺跡からスッポンが出土しているのは、縄文時代の中妻貝塚(茨城県取手市)・大洗吹上遺跡(茨城県大洗町)・西広貝塚(千葉縣市原市)の3ヶ所に限られることがわかった。

中妻貝塚は汽水域に生息するヤマトシジミを主体とする環状貝塚で、時期は縄文時代後期から晩期にわたる。スッポンは背甲片1点のみが出土しているが、これは攪乱層から採取されたもので、現代のものである可能性もある。

大洗吹上遺跡は岩礁域に生息するクボガイなどの巻貝類を主体とする貝塚で、二枚貝ではヤマトシジミ・ハマグリ・イガイ類が多く見られる。調査は1969年に行われたもので組成等は不明であるが、同一貝層中に岩礁・内湾・汽水域のそれぞれに生息する貝類が混在するようである。遺跡の時期は縄文時代中期から後期にわたる。スッポンはハマグリ貝層中から出土しているが、種名表および記載は「スッポン?」となっており、同定結果が不確定のようである。

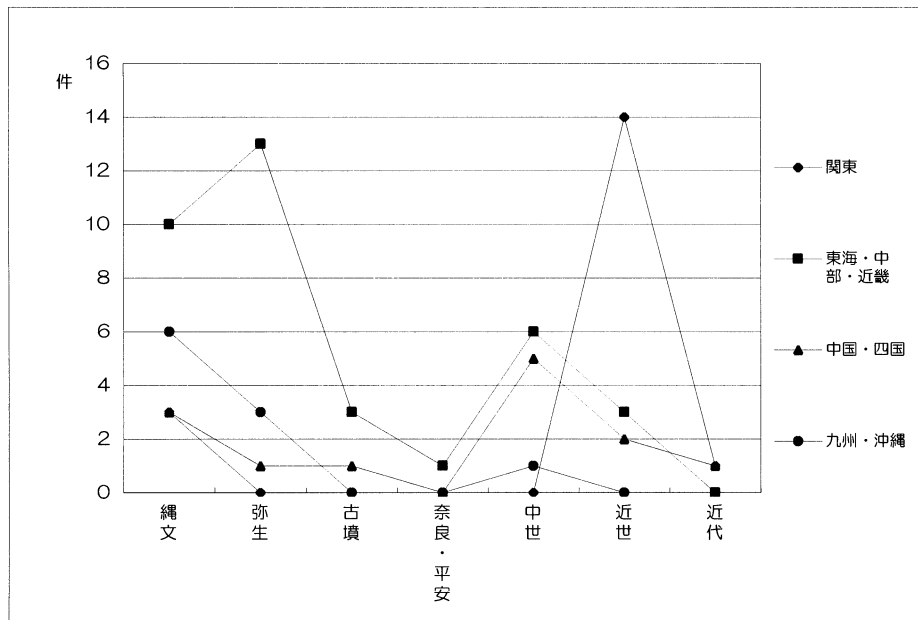


図6 地域別スッポン出土遺跡数の推移

西広貝塚は東京湾内湾の東岸地域の貝塚に特徴的なハマグリ・シオフキ・イボキサゴを主体とする馬蹄形貝塚で、時期は縄文時代後期から晩期にわたる。スッポンは腹甲片1点のみが出土しており、加曽利B式期の貝層中から採取されている。

以上のように、中妻貝塚は帰属時期が不明確、大洗吹上遺跡は同定結果が不確定であり、関東地方における近世初頭以前のスッポン出土遺跡において種と帰属時期が明記されているのは西広貝塚の1ヶ所のみであることが明らかとなった。

これまでの貝塚の調査成果などから見て、縄文時代には基本的にあらゆるものを食料として利用したことが考えられるにもかかわらず、関東地方においてスッポンが検出されることは極めて稀な事例と言える。また縄文時代以降についても、仮に食料として利用されることがなかったとしても、低湿地遺跡の調査事例の増加から、大阪府などにおいて見られるような自然死と考えられる個体出土する可能性があるにもかかわらず、見つかっていないのが現状である。

### (3) 近世初頭の出土状況

縄文時代後期中葉の西広貝塚での事例以降、次にスッポンの出土が確認されるのは近世初頭とされる葛西城（東京都葛飾区）と馬屋敷遺跡（千葉県松戸市）においてである。

葛西城は15世紀中頃には城館としての体をなし、16世紀には後北条氏の勢力のもとに規模の拡張・整備が行われたとされる。そして天正18（1590）年の小田原合戦により廃城となり、17世紀以降は徳川将軍家による鷹狩りの際の陣屋（青戸御殿）として利用されている。

葛西城におけるスッポンの出土位置は濠跡の上層で、時期的には比較的新しいものと捉えられている。この濠は青戸御殿時代にも存続し、延宝6（1678）年には御殿が廃絶している（谷口1994）ことから、主体となるのは17世紀前半頃のようなものである。スッポンの出土がどの段階まで遡るのことは明確でないが、戦国末期頃にはスッポンが生息するようになっていた可能性もあるのだろうか。

葛西城（青戸御殿）の濠跡からは、スッポン以外にも多数の動物遺体が出土しており、解体痕を持つイヌ・ネコ・カラスについては、鷹の調教用の餌にされた可能性が指摘されている（金子1994）。これと直接結び付けることには問題があるかもしれないが、スッポンと鷹を関連づける記述を『大内家壁書』<sup>6)</sup>に見ることができる。この中には

（鷹餌鼈亀禁制事） 為鷹餌不可用鼈亀并蛇也 （中略） 長享元年九月（四）日

とあり、鷹の餌としてスッポン・カメ・ヘビを用いることが禁止されている。この分国法は周防国を拠点とする大内家の妙見信仰から出されたものとされるが、明文化して禁止するということは、これらの種が鷹の餌として利用されていたことを証明するものといえる。この禁制が出されたのは長享元（1487）年のことであり、年代と地域に隔たりがあるが、葛西城（青戸御殿）から出土したスッポンの中には、あるいは鷹の餌として利用されたものもあったのかもしれない。

馬屋敷遺跡は中世城郭である小金城の一部でもある。小金城の城主は戦国武将の原氏で、後に高城氏がこれに変わっている。葛西城と同様に、小田原合戦によって後北条氏が滅亡すると、高城氏も小金城を追われ、天正18（1590）年から文禄元（1592）年までの間は、徳川家康の実子で甲斐武田氏のあとを継いだ信吉が小金の地に配置されたと伝えられている。

馬屋敷遺跡におけるスッポンの出土位置は地下式墳の天井崩落後の窪地で、ハマグリを主体とする貝層中から見ついている。解体痕は確認されていないが、骨の一部が被熱していたこと<sup>7)</sup>、貝や魚

骨と同時に投棄されていたことから見ても、食料残渣と考えるのが妥当であろう。廃棄時期は戦国末期から武田信吉の小金入封以降の近世初頭頃とされている。

天正18年以降の小金城の状況を直接伝える史料が無く、これまで小金城としての施設が実際に使用されたのか不明であったが、馬屋敷遺跡では17世紀初頭段階に中国陶磁器や国内陶磁器の充実がみられることから、文禄元年に武田信吉が佐倉へ移封された後も、17世紀前半頃までは陣屋のようなかたちで存続していた可能性が指摘されている（桃崎2002）。馬屋敷遺跡から出土したスッポンについても、葛西城と同時期の17世紀前半まで下る可能性が考えられる。

このように、葛西城（青戸御殿）と馬屋敷遺跡から出土したスッポンについては、徳川家康の江戸入府後間もない近世初頭の所産と考えられることから、西広貝塚の事例を除けば、この2遺跡で出土しているスッポンが、関東では最も古い時期のものということになる。

## 6. 西広貝塚出土スッポンについての検討

これまで見てきたように、関東地方におけるスッポンの出土は、縄文時代後期中葉の西広貝塚以降全く見られなくなり、近世初頭の葛西城（青戸御殿）と馬屋敷遺跡まで長い空白期間が認められた。

関東地方の近世初頭以前の遺跡からスッポンが出土しない理由については、①生息に適さない環境条件にあった、②人間の生活圏と隔絶した場所に生息していた、③食料として利用されることがなかった、などが挙げられるが、現状からは①と考えるのが最も妥当と思われる。関東地方ではスッポンの生息数自体が極端に少なかったか、あるいはもともと自然分布していなかった可能性も考えられるのではないだろうか<sup>8)</sup>。

出土しないことから存在しなかったと安易に結論づけることは非常に危険であるが、近年の発掘調査件数の増加にもかかわらず、西広貝塚での事例以降、近世初頭を遡る事例が未だに1件も報告されていないことからすれば、西広貝塚から出土したスッポンについては帰属時期の認識を誤っている可能性も考えられる。

西広貝塚第1次調査区の報告書が刊行された1977年段階においては発掘調査件数も少なく、それまでに関東地方でスッポンが出土した事例が大洗吹上遺跡以外になかったことを考えれば、現在のスッポン出土資料の増加とその実情に則して、帰属時期を慎重に検討し直す必要性が出てくることも当然のことと言えるだろう。

## 7. スッポン利用拡大の要因について

現在、スッポンは日本各地において確認されるが、これは全国で盛んに行われている養殖個体の逃亡・定着など、人為的な要因が大きいと考えられる。スッポン科の分布域をみる限り、本来的には熱帯から亜熱帯に多く生息する種と考えられ、日本国内においても、遺跡からの出土状況から見て、琵琶湖周辺を中心とする西日本地域に生息していたことは明らかである。

平安時代末期以降、関東地方では荘園開発などによって水上交通も盛んになっていたと考えられており、西日本をはじめとする各地との交流の痕跡は陶磁器類の出土にも見ることができる。しかし、これまでに鎌倉の遺跡からスッポンが出土したとの報告例はなく、仮にスッポンが人為的に関東地方に持ち込まれたとすると、葛西城（青戸御殿）や馬屋敷遺跡で確認されるようになる近世初頭以降で

あった可能性が考えられる。

ここで葛西城と馬屋敷遺跡の近世初頭の状況を再確認してみると、葛西城は徳川将軍家による鷹狩りの際の陣屋（青戸御殿）として利用されており、馬屋敷遺跡の位置する小金には家康の実子武田信吉が配され、信吉移封後も陣屋の存在が予測されている。この2遺跡に共通するのは徳川家が深く関わりを持っているという点で、近世初頭にこの地でスッポンが突如として出現することにも大きく関係している可能性があるのではないだろうか<sup>(9)</sup>。

室町時代頃になると鎌倉から江戸が東国における流通の拠点になったとされる（曾根1997）が、特に葛西周辺は旧利根川水系最下流域のデルタ地帯にあたり、北関東との窓口として重要な役割を担っていたことは容易に想像される。戦国期にこの地域において数々の攻防が繰り返されたこともそれを証明するものであろう。そして、太日川（ほぼ現在の江戸川）左岸に位置し、葛西城にも近接する馬屋敷遺跡も同様の存在にあったといえる。関東地方の他地域に先駆けてこの地域でスッポンが出現するようになるのも決して偶然のことでなく、おそらくこの地域の重要性和定着可能な環境によったものであろう。

徳川家康は中国の本草書である『本草綱目』をいち早く入手して大きな関心を寄せた（塚田1988）と考えられており、スッポンの効用についてすでに知識を持っていた可能性もある。しかし、出土数増加の主な原因となったのは、江戸に幕府が開かれて以降、流通経済の発達や大名屋敷の設置など、物資と同時に人や他地域の文化の江戸への流入が急速に進んだことによると考えられる。そして、17世紀後半期にはじまる本草学の普及とともに、大坂においていち早く普及していたスッポン食文化が江戸へ伝わり、近世後半以降に普及していったことが考えられる。

江戸の遺跡でスッポンの出土が多く見られるのは18世紀に入ってからのことになるが、18世紀には江戸の本草・博物学者が増加し、本草書の出版数が最も多くなっている（上野1989）ことも、少なからず影響していたと考えられる。しかし、19世紀初頭の『浮世風呂』には大坂の人がスッポンを食べたがるのに対し、江戸の人は気味悪がっている様子が描かれていることから、江戸でのスッポン食は一般的なものではなく、主に西日本から江戸へやってきた人々を中心に支えられた食文化だったのではないだろうか。また、近世にはスッポンはあまり上品な食べ物とされていなかったこと、一般には食肉が忌み嫌われていたこと、遺跡からの出土事例が少ないことからすると、病人の滋養・保温のためと称し、獣肉と同様に「薬食い」として稀に食べられていたことが考えられる。

一方、江戸遺跡におけるスッポンの典型的な出土の仕方として、背甲だけが折り重なり一括して出土する事例が認められるという<sup>(10)</sup>。スッポンの背甲は、『延喜式』の記述をはじめとして、多くの本草書に記されているように、薬として利用されていたことが知られている。また、明和2（1765）年の『俳風柳多留 初編』に収められた川柳の中には、

さむい事のきにすつぽん甲を干し

との記述があり<sup>(11)</sup>、冬の時期に居酒屋の軒にスッポンの甲羅がつるされていた様子を表している（瀧川1986）。これは調理済みとなったスッポンの背甲を、薬として利用するために乾かしている様子を川柳にしたもの<sup>(12)</sup>であるが、江戸でのスッポンの消費量を考えれば、江戸の街でこのような光景を見ることはあまりなかったのだろう。おそらく大坂においてスッポンの肉の部分が消費され、江戸には甲羅のみが運ばれてきた場合も多かったのではないだろうか。

## 8. おわりに

本稿では、スッポンの出土事例の集成を行うことにより、関東地方における普及時期とその要因について考え、西広貝塚出土のスッポンの持つ問題についても若干の検討を加えてみた。

この結果、近世初頭以前の関東地方では西広貝塚以外に明確な出土事例が認められないことから、西広貝塚出土のスッポンについては帰属時期を見直す必要性が確認された。また、西広貝塚の事例を除けば、近世初頭とされる葛西城（青戸御殿）と馬屋敷遺跡から出土したスッポンが最も古い時期のものということになり、この2遺跡に共通する徳川家の江戸入府が関東地方におけるスッポンの出現に大きく関わっていた可能性が考えられた。

一方、近世以降急激に出土数が増加する点については、食料用として人為的に持ち込まれたものが定着したことと、薬としての鼈甲（スッポンの背甲）が持ち込まれたことの2つの可能性が高いという考えに至った。

人為的に移植された生物の事例としてはナマズがあり、関東地方には江戸時代の中頃に持ち込まれたと考えられている（宮本ほか2001）。スッポンとナマズはいずれも琵琶湖水系に多く生息する種であることから考えれば、江戸と並ぶ一大中心地であった大坂を通じて、その食文化とともに関東にもたらされたことが予想される。そして、スッポン出土の増加と人為的な持ち込みの要因については、江戸の都市機能が発達したことによる人や物資の流入、さらに本草・博物学の知識の普及などが考えられる。

そもそも出土数が少ないこともあり、東日本でのスッポンの普及については不明な点が多く、これまであまり触れられることがなかった。本稿においても、戦国時代末期から近世初頭以降にスッポンが出現しはじめる明確な要因を明らかにすることができず、これまでに金子浩昌氏によって指摘されてきた内容の再確認をするに留まった感は否めない。

スッポンの利用がどこまで遡り、どのような経緯で出現するようになるのかを明らかにするためには、文献等の調査を含め、出土遺跡の性格（居住者）や廃棄時期について個々に詳しく検討していく必要があったが、これについては今後の課題ということにしておきたい。

## 謝 辞

筑波大学人類学系助手桃崎祐介氏、松戸市立博物館大森隆志氏、高岡市教育委員会太田浩司氏、下関市立長府博物館古城春樹氏、（財）千葉県文化財センター蜂屋孝之氏、國學院大學大学院特別研究員加納哲哉氏には資料収集においてご援助いただいた。また、東京国立博物館客員研究員金子浩昌先生には江戸の遺跡におけるスッポンの出土事例について数多くのご教示をいただいた。記して感謝いたします。



## 註

- (1) RDB種情報(動物)種の詳細情報参照 [http://www.biodic.go.jp/rdb/rdb\\_top.html](http://www.biodic.go.jp/rdb/rdb_top.html)  
琉球大学熱帯生物圏研究センター太田英利氏により、レッドデータブック記載種スッポンについての解説がなされている。
- (2) 環境省ホームページ参照 <http://www.env.go.jp/nature/redrists/index.html>
- (3) 奈良新聞2000年2月28日 奈良県立橿原考古学研究所河上邦彦氏のコメントによる。
- (4) 総合研究大学院大学ホームページ『貝塚データベース』参照 <http://aci.soken.ac.jp/kaizuka/top.html>
- (5) 安土・桃山時代以降は近世とするのが通説であるが、関東地方では依然として戦国時代が続いていることから、ここでは徳川家康の江戸入府以降に「近世」の用語を用いている。また、表・挿図中の時代区分もこれに準じる。
- (6) 下関市立長府博物館所蔵『大内家壁書』による。
- (7) 日本国内では「亀卜」はウミガメを用いていることから、関連性はないと考えている。
- (8) 東海地方以東では、カメ類の生息密度は一般的に低い(矢部2002)とされている。また、市原市内で実施された動物相分布調査では、スッポンは確認されていない(長谷川ほか1994)。
- (9) 加納哲哉氏は「明末清初の混乱期に多数の中国人が移住・亡命し、戦国末期には関東地方の戦国大名たちも、中国商人をプレーンとしていた」(桃崎2002)との記述を引用し、スッポン食の起源との関連性を指摘している(加納・大森2002)。しかし、当時の中国におけるスッポン食について明らかにされておらず、他の中世城郭からのスッポン出土が認められない現状においては、この説を積極的に肯定することは難しい。
- (10) 金子浩昌氏のご教示による。未報告であるが東京都新宿区の坂上遺跡において確認されているという。
- (11) 瀧川政次郎氏の論文による(瀧川1967)。ただし、山澤英雄校注1995『川柳集成一 誹風柳多留一』岩波文庫では、この句は確認できない。
- (12) 三栄町遺跡(東京都新宿区)からは円形の小孔が空けられたスッポンの背甲が2例出土しており、「孔に紐を通して垂下させる」という使用法が想定されていた(金子1991)ことから、薬用としてつるして乾燥させることを目的として空けられた穴ではないかと考えていたが、報告者である金子浩昌氏からは、自然に空いた可能性もあるとのご教示を得た。

## 引用・参考文献

- 上野益三1989『日本博物学史』講談社学術文庫 pp.87-90
- 内田 亨ほか1979『新編日本動物圖鑑』北隆館 p.680
- 内田 至2001a「青斑石籠合子の鼈(スッポン)について」『正倉院紀要』第23号 宮内庁正倉院事務所 pp.39-41
- 2001b「自然科学からみたカメ・スッポン」『亀の古代学』東方出版 pp.194-208
- 宇野隆夫2001「弥生の亀」『亀の古代学』東方出版 pp.110-122
- 金子浩昌1985「4 一橋高校地点出土の脊椎動物遺存体」『江戸都立一橋高校地点発掘調査報告』都立一橋高校内遺跡調査団 pp.575-614
- 1991「第2章 動物遺存体 第3節 両生類・爬虫類」『三栄町遺跡－骨角貝製品・動物遺存体編』東京都新宿区教育委員会 pp.65-67
- 1992「江戸の動物質資料－江戸の街から出土した動物遺体からみた－」『江戸の食生活』吉川弘文館 pp.220-242
- 1994「葛西城跡出土の動物遺体の研究」『葛西城跡 XⅧ』(第2分冊)葛飾区遺跡調査会 pp.38-216
- 2001「食料残滓とその他の動物遺体」『図説 江戸考古学事典』江戸遺跡研究会 pp.393-402
- 金子浩昌・牛沢百合子1977「第11章 動物遺体 第1節 軟体・脊椎動物」『西広貝塚－上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ－』市原市教育委員会・市原市国分寺台土地区画整理組合 pp.443-485
- 加納哲哉・大森隆志2002「第20章 馬屋敷遺跡における古墳時代及び小金城時代研究の総括 第4節 中世貝層と動物遺存体の研究成果」『馬屋敷－馬屋敷遺跡の調査研究－』松江市遺跡調査会 pp.310-311
- 九州縄文研究会2001『第11回 九州縄文研究会 熊本大会 九州の貝塚 発表要旨・資料集』
- 久保和土1999a「スッポン遺体について」『堂島蔵屋敷跡』(財)大阪市文化財協会 pp.68-70
- 1999b「スッポン料理と堂島」『大阪市文化財情報 葦火』80号(Vol.14, No.2)(財)大阪市文化財協会
- 1999c「考古資料からみた水産食料と漁業－先史から中世」『動物と人間の考古学』真陽社 pp.3-27
- 西光慎治2001「飛鳥亀形石の発見と意義」『亀の古代学』東方出版 pp.13-27
- 佐原 真1996『歴史発掘8 祭りのカネ銅鐸』講談社 pp.54-67
- 千田 稔2001「カメの図像学」『亀の古代学』東方出版 pp.149-159
- 曾根勇二1997「神奈川港とその周辺－中世から近世へ－」『海からの江戸時代－神奈川港と海の道－』横浜市歴史博物館 pp.5-7

- 瀧川政次郎1967「律と鼈－食膳制及び医制の研究－」『法制史論叢 第4冊 律令諸制及び令外官の研究』角川書店 pp.87-203
- 谷口 榮1994「IV 総論」『葛西城 XⅧ』（第2分冊）葛飾区遺跡調査会 pp.217-226
- 塚田 学1988「江戸時代人の衛生と安全」『信濃』第40巻第8号 信濃史学会 pp.1-31
- 鶴岡英一2002「第15章 馬屋敷遺跡出土の脊椎動物遺存体について」『馬屋敷－馬屋敷遺跡の調査研究－』松戸市遺跡調査会 pp.243-260
- 直良信夫1972「V 大洗吹上貝塚発見の自然遺物」『大洗吹上遺跡』 pp.34-46
- 難波洋三1997「第4章 出土銅鐸の概要」『加茂岩倉遺跡発掘調査概報Ⅰ』加茂町教育委員会 pp.14-23
- 西本豊弘1995「第3章 出土遺物 第2節 動物遺体 4 鳥類・哺乳類」『中妻貝塚』取手市教育委員会 pp.113-118
- 長谷川雅美ほか1994「千葉県市原市の両棲類及び爬虫類相」『市原市自然環境実態調査報告書（1990～1993）』市原市環境部環境保全課 pp.59-75
- 日高敏隆監修1996『日本動物大百科 第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類』平凡社
- 三宅久雄2001a「青斑石鼈合子と仙葉七星散」『正倉院紀要』第23号 宮内庁正倉院事務所 pp.45-60
- 2001b「青斑石の鼈合子と北斗七星」『亀の古代学』東方出版 pp.35-45
- 宮本真二ほか2001「日本列島の動物遺存体記録にみる縄文時代以降のナマズの分布変遷」『動物考古学』第16号 動物考古学研究会 pp.61-73
- 桃崎祐介2002「第12章 松戸市小金城出土土器 陶磁器の変遷とその意義」『馬屋敷－馬屋敷遺跡の調査研究－』松戸市遺跡調査会 pp.151-171
- 森井貞雄1996「銅鐸に描かれた動物」『平成8年春季特別展 卑弥呼の動物ランド－よみがえった弥生犬－』大阪府弥生文化博物館 pp.28-33
- 矢部 隆2002「第4章 後生動物亜界 第12節 脊索動物門 4 爬虫類 1) カメ目」『千葉県の自然誌』本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物 県史シリーズ45 千葉県 p.723
- 山崎京美1998『遺跡出土の動物遺体に関する基礎的研究』平成7年度～平成9年度 科学研究費補助金（基礎研究（C）(2)）研究成果報告書

# 五所四反田遺跡出土の「スリット入り」鍬について

小川 浩一

## 1. はじめに

市原市五所にある五所四反田遺跡（遺跡の概要は、小川1995を参照のこと）は、標高3 m前後の低地にあり、クランク状に屈曲する2号溝状遺構（図1）から大量の木製品が出土した。

今回は、その木製品から鍬身中心部にいわゆる「スリット」（裂け目）の入っている鍬（図2）を取り上げ、若干の紙幅を使い資料紹介をさせていただきたいと思う。

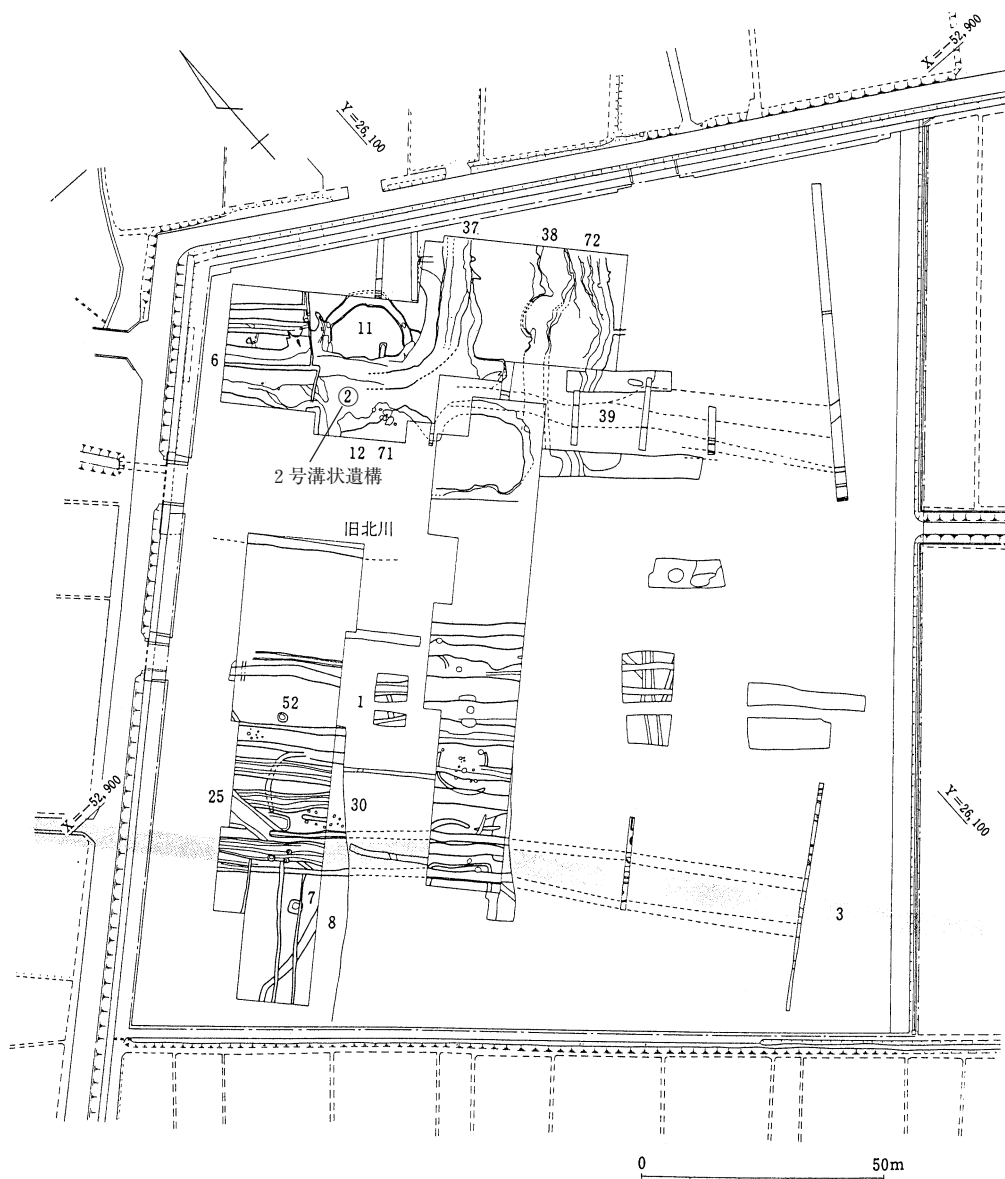


図1 五所四反田遺跡

## 2. 「木製農耕具」研究小史

ここで、「木製農耕具」についての研究史を管見の範囲で記すと、渡辺誠氏は、遺跡から出土した木製農耕具について、考古学研究で立ち遅れている機能・用途面からの研究を、民具学の成果を援用して試みている。具体的には、1985年の『考古学雑誌』（第70巻3号）に「ヨコヅチの考古・民具学的研究」として掲載され、各地の遺跡から出土したヨコヅチを94遺跡157例にわたって検討し、形態別に8タイプに類型化を行い、ヨコヅチの時期的変遷を辿るとともに、現存民具の調査例をもとに形態と用途との関係を考察されている。また、同氏による1981年の「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』（第66巻4号）では、出土木製編台の経糸用の溝（刻み目）の間隔及び数量によって、1～4群の4群に分けてそれぞれの群においてできる製品の分類まで試みている。考古遺物の研究は形態の時期的変遷（編年）を確立することが基本であり、機能を研究することは、類推の域を出ないものとされてきた中で、渡辺氏の研究は新しい領域を開くものとして注目された。

一方、民具学からの出土木製品へのアプローチもなされており、神野善治氏は伊場遺跡で出土した「有樋十字形木製品」について、民俗資料である漁具の「四つ手網」の天井部分にある軸木と比較・対照し、考察を加えている。また、中山正典氏は、静岡県瀬名遺跡から大量に出土した「田下駄」に着目し、民具資料との詳細な比較・検討を行い、新たな「田下駄研究」の展開を開いた。

そして、各地で低地遺跡の調査例が増え、出土木製農耕具の蓄積がある程度されてきた1993年に上原真人氏編著による『木器集成図録（近畿原始篇）』が刊行された。これは、とくに木製農耕具において、それまで漠然としか把握されていなかった変遷の特徴を、畿内を中心とした膨大な資料によって綿密に整理が行われており、現在の出土木製農耕具研究におけるテキスト的な位置づけとなっている。

そして、この成果を踏まえて、1994年に「古代における農具の変遷」シンポジウムが、静岡県において開催されるに至り、出土農耕具の研究は一つの結節点を迎えた。樋上昇氏は、弥生時代末期～古墳時代後期までの着柄鋏が盛行する期間において、各地の出土資料をひとつひとつ渉猟を重ねて、「ナスビ」型鋏の初現から変遷、衰退の過程を詳らかにした。その中で、方形柄孔を持つ北部九州系の柄孔鋏と、「ナスビ」型鋏の融合による北陸系「ナスビ」型鋏の出現や、着柄軸の長い山陰系「ナスビ」型鋏の三角スリットが入ったものと北陸系「スリット入り」鋏との融合、さらに、北関東への「スリット入り」鋏の南下、及び南関東における東海系膝柄鋏と「スリット入り」鋏との融合を指摘するなど、その豊富な資料調査による検討は、明快で鮮やかである。

また、山口讓治氏は方形柄孔の柄孔鋏を北部九州系鋏として、その構成を研究した。山田昌久氏は、列島各地の出土農耕具を始めとする木製品資料を概観してその展開を総括し、使用樹種の変遷を研究し、時間軸の移り変わりとともに、人間が植生に影響を及ぼしてきた過程を明らかにした。氏のアプローチは、これまでの出土木製品研究とは一線を画す斬新かつ明快なものであり、我々に新たな研究の可能性を示唆した。このように、各氏の研究成果を上げれば枚挙にいとまがない。

現在、東日本においては木製農耕具の出土がやや影を潜めているものの、西日本においては、依然として農耕具の出土例が相次いでいるようである。中には、従来の「ナスビ」型鋏にクロスに添え木を当てたような資料も見られ、出土木製農耕具研究は、これまでの形態の時期的変遷（編年）を確立することから、いやがおうにも一歩進めて、機能・用途面からの研究に踏み込んで行かなくては、上記の事例を理解することはできないのではないか、と思うのである。

### 3. 「スリット入り」鋏研究の現状

「スリット入り」鋏についての研究は、樋上昇氏によるところが大きい。

樋上氏は、1994年「耕作のための道具」『季刊 考古学』（第47号）において、「スリット入り」鋏の各地の特徴を検討し、弥生Ⅳ期に出現する山陰地方における「スリット入り」ナスビ型鋏のスリットが三角形であるのに対し、その後に発生する、北陸地方におけるスリットは、長楕円形を呈していることに着目した。

氏は、各地の出土資料を詳覧していく中で、北関東及び南関東地方において、長楕円形スリットを持つ「スリット入り」鋏があることを見だし、その時代変遷を丹念に検証していく中で、山陰地方で弥生Ⅳ期に出現する鋏身部に三角形のスリットを持つナスビ型鋏が、北陸地方に伝播していく過程で、鋏身部に長楕円形の裂け目が入る「スリット入り」鋏に変わり長野県北部に南下し、その後北関東へ伝播し、南関東へは東海系曲柄鋏の影響を強く持つ鋏身に、北陸→長野県北部→北関東から伝わった長楕円形スリットが融合され、五所四反田遺跡出土の「スリット入り」鋏が成立したと、指摘している。

具体的には、山陰地方の鳥取県目久美遺跡から出土した、弥生時代後期に三角形のスリットが鋏身に入る「ナスビ」型鋏に注目し、また、長楕円形のスリットが入る「ナスビ」型鋏が石川県二口六丁遺跡といった北陸の遺跡にあることに着目し、北陸にスリットが伝播することを考えた。そして、群馬県新保遺跡において古墳時代前期の溝（流路）から、東海系膝柄鋏の鋏身に北陸系の長楕円形のスリットが入った鋏が出土していることを指摘し、山陰→北陸→北関東のスリットの伝播と、東海系膝柄鋏における東海→北関東の鋏身の伝播との融合を想定されている。

しかしながら、その後長野県北部における「スリット入り」鋏の出土資料増加から、その出土年代は長野の方が北陸より遡り、その後も時期的に継続して出土し続けることがわかり、「スリット入り」鋏は、長野県北部を中心にして発生し、北陸や北関東に伝播し、北関東に伝播したものが、南関東へも伝わったとする新たな解釈を提示しているようである。

### 4. 五所四反田遺跡出土の「スリット入り」鋏

五所四反田遺跡において出土した「スリット入り」鋏を、図2に示す。

遺存状態は、きわめて悪く着柄軸部先端は、遺存していない。

鋏身部分も遺存状態が悪く、先端の形状は定かではないが、鉄製鋏先は装着されなかったと考えられる。鋏身全体としては、縦長の形態を有し、狭鋏の範疇に属すると考えられる。また、鋏身の右側中央部分は欠失している。そして、鋏身中央部分に長楕円形のスリット（裂け目）が入っている。裏面が曲柄（膝柄）との接着面であったと考えられ、着柄軸部は平滑に仕上げられており、鋏身部分も平坦で極めて薄い板状を呈している。

遺物は、すでにPEG（ポリエチレングリコール）含浸法で保存処理が行われている。材は、アカガシ亜属の柾目板とされている。

出土時における具体的な寸法を記載すると、全長44.2cm、軸部長10.2cm、鋏身長34.0cmである。遺物取り上げ時より、9つの破片に割れて出土している。

繰り返しとなるが、着柄軸部先端は遺存状態が悪く、紐結合のための造りだし形状等は判然としな

い。ただし、軸部中央では厚み1.2cmを測り、裏面が平滑で表面に膨らみを持つ、いわゆる断面“カマボコ”状を呈した軸部であったと考えられる。

鍬肩部は、遺存状態が悪いが、現状では直線状に鍬身部へ移行するナデ肩を呈していたと、思われる。鍬身部の厚さは、中央部では0.8~0.9cm、先端部では0.5cm程度であり、古墳時代後期へと移行する鍬の特徴である、きわめて薄い板で製作されている。ちなみに、鍬身部についても表面がやや膨らみを持っているのに対し、裏面は平板な造りとなっている印象を受ける。

これらの特徴を総合すると、遺存状態は悪いものの、種々の形態の特徴から、東海系曲柄鍬であることは間違いないと思われる。そして、スリットの形状は山陰地方特有の三角形スリットではなく、北陸や長野県北部及び北関東で出土している長楕円形スリットである。

具体的には、石川県金沢市二口六丁遺跡や長野県川田条里遺跡及び榎田遺跡において出土している「スリット入り」ナスビ型鍬、及び群馬県新保遺跡出土の身の発達した東海系曲柄「スリット入り」鍬に入っているスリットと同じ形状を示す。

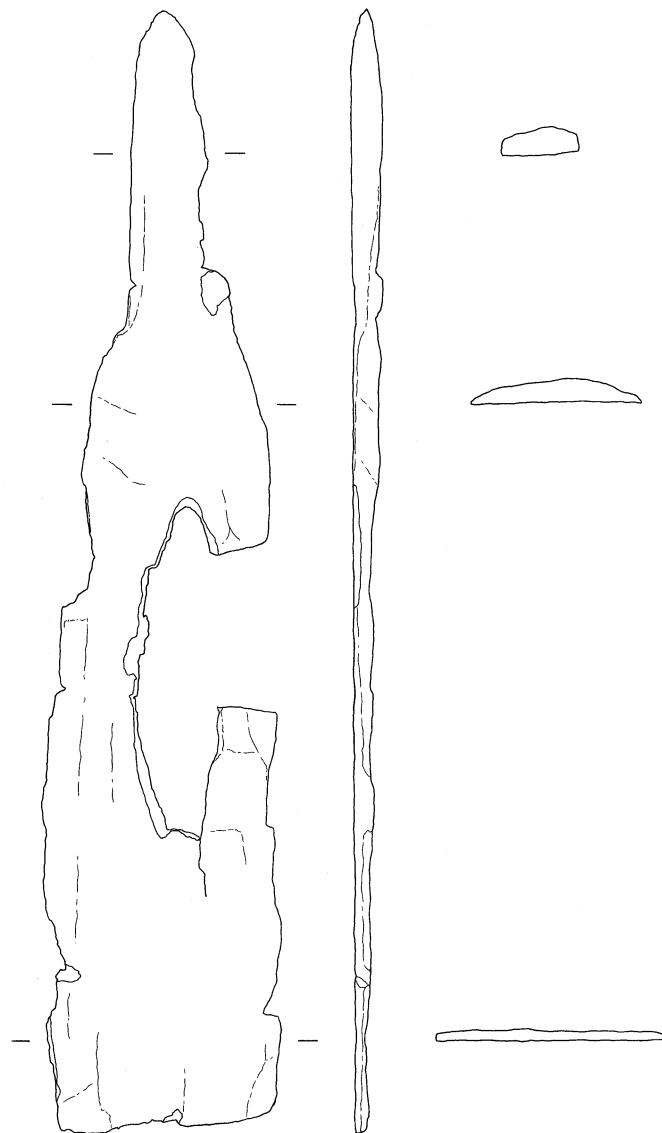


図2 「スリット入り」鍬 (S=1/3)

## 5. おわりに

今回、五所四反田遺跡出土の「スリット入り」鋏を取り上げ、若干の紙幅をいただいて資料紹介をさせていただいたが、現段階で把握できる状況としては、おおまかに以下のようなことが上げられると思う。

「スリット入り」鋏が五所四反田遺跡で出土した歴史的背景として、時代的には、本遺跡の木製品の帰属時期と考えられる古墳時代中期末～後期初頭は、U字型鉄製刃先の導入に伴う新たな畿内系「ナスビ」型鋏が、東海系曲柄鋏の独占状態だった東海地方から関東地方に、一気に流れ込んでくる端境期に当たると考えられ、樋上氏の近年の見解を追認すると、本遺跡の「スリット入り」鋏の系譜は、長野県北部を中心に派生した長楕円形「スリット入り」鋏が北関東へ伝わり、南関東へ伝播するに至って、末期段階の東海系曲柄鋏とスリットが融合されたものである。と見るができるということなのだろう。

最後に、樋上氏の農具伝播「ルート論」について若干の所見を述べさせていただくと、確かに各地で低地遺跡の調査が行われ、それに伴い木製農耕具の出土が増加し、その検討はある程度行われてきた。したがって、各地に特色ある農耕具が地域性を持って存在し、それぞれ交流を経ながら伝播域を持っていることは明らかである。

特に弥生時代中期に「吉備地方」で現れ、後末期に畿内で一般化する「ナスビ」型鋏については、東海以東では東海系膝柄鋏によって、U字型鉄製刃先が出現する5世紀中葉までその伝播が阻まれる状況は、鮮やかである。しかし、「スリット入り」鋏のように資料出土遺跡が極端に少ないものであっても、伝播の「ルート論」を展開することができるのであろうか？

樋上氏の「スリット入り」鋏に対する見解は、近年になって、北陸から北関東を通して南関東へ伝わるというルートから、長野県北部を中心として派生し、北陸や、北関東、南関東へ伝播していったとする解釈に変わってきているようであり、南関東における「スリット入り」鋏の出土がまだほとんどないことを考えると、「スリット入り」鋏のルート論自体の成立の可否も含めて、今後再検討が必要になることも考えられるのではないだろうか。

## 引用・参考文献

- 上原真人1993『木器集成図録（近畿原始篇）』奈良国立文化財研究所  
小川浩一1995「五所四反田遺跡検出の木製農耕具について」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅲ（財）市原市文化財センター  
神野善治1983「四ツ手網考－伊場遺跡出土の十字形木製品をめぐって－」『物質文化』第41号 物質文化研究会  
中山正典1994「第Ⅵ章 第4節 田下駄の形態変遷と機能」『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）本文編』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所  
樋上 昇1994「耕作のための道具」『季刊考古学』第47号 雄山閣  
樋上 昇2000「3～5世紀の地域間交流－東海系曲柄鋏の波及と展開－」『日本考古学』第10号 日本考古学協会  
樋上 昇2002「曲柄鋏の伝播と流通」『考古学ジャーナル』No.486 ニュー・サイエンス社  
山田昌久1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第一号 植生史研究会  
渡辺 誠1981「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻4号 日本考古学会  
渡辺 誠1985「ヨコヅチの考古・民具学的研究」『考古学雑誌』第70巻3号 日本考古学会

# 刀子小考 I

北見一弘

## 1. はじめに

全国の遺跡から、古墳・集落問わず、普遍的に出土している鉄製刀子（以下刀子）に対して、万能の利器であるという評価は、誰もが認めているところではなかろうか。これは機能論の手段として現れる、我々が現在手にすることの可能なナイフの使用実体験からくるイメージに起因することが大きい。しかし、今日、刀子の機能についての評価は、日常生活利器であり、工具であり、武器でありと、研究者間でもその認識は微妙に異なるのが現状である。このことは、刀子の持つ機能もしくは用途をより漠然としたものとし、鉄製農工具研究の流れの中、古墳の埋納される副葬品の性格として、あるいは集落出土の鉄製農工具の組成比率の変化として、微妙にその影響を与えている。

ここでの目的は、これまでの研究史の中で現れる、刀子に対する評価を踏まえ、現段階における刀子と呼ばれる鉄製品の認識を確認する。次に、刀子の形式・型式を把握する前段階の作業として、刀子各部位の形態差をモデル（試案）として示すこととし、そこから推量される機能分化を検証する糸口を探ろうとするものである。

## 2. 刀子を取り巻く現状

弥生時代に出現する鉄製農工具は、生産力の増大を想起させ、このことに起因するであろう共同体の生産活動や階級関係の生成、弥生時代から古墳時代への変遷、国家形成を論ずる上で、その普及過程が問題とされ、これを証明する強力なアイテムとして研究が進められてきた。そして、古墳から出土する多量の鉄製農工具は、生産力を支える農工具の発達や、被葬者の生産支配の研究に多大な情報を提供してきたことは周知の通りである。

また、一方では、住居跡出土の鉄製品に着目した研究（原島1968）に始まった集落論の視点は、鉄製農具の所有形態とその変遷、さらには生産力の背景となる労働形態の復原を目的としている。このため扱われる資料は、開墾・耕作具である鋤・鍬先、収穫具である鎌が中心であり、これらの研究は今日まで連綿と深められている分野であるが（土井1971）、それまでは、住居址から出土する農具以外の鉄製品は常に一括して考えられ、具体的な研究に乏しいといった状況が見られた。こうした中、農具の鉄器化を論ずるために、個別の研究がなされ始めたのは都出による論考（都出1989）によるところが大きい。

近年では下総国村神郷における複数集落の出土鉄器を、その器種構成と組成に着目して論じた研究（松村1991）があり、このような組成比率の変化から、鉄器の所有形態を傾向として積極的に捉えようとする動きが認められる（大村1996・1997a・1997b）。

こうした中で、刀子は鉄製農工具の中の一器種として触れられる機会は少なくはないものの、出土鉄製農工具の組成中、その占める割合の高さを考えれば、個別器種としての研究対象としては、その機会が極端に少なかったと言える。これは前述する機能的側面における認識の曖昧さと、遺存する刀



身自体には装飾が少なく、形態変化が単調であると解釈されたことが、型式学的なアプローチを困難にしている主な原因ではないかと推察される。

このことを傍証するように、鉄刀の研究について、後藤守一が「完全なる外形を保っているものさえ極めて稀であるので、形式の研究さえ極めて困難である」という見解を持っていたことが挙げられ、このことから窺えるように、出土する刀子においても同様の理由から敬遠されてきた嫌いがあるのではないかとと思われる。

また、刀子（とうす）という分類自体にも不明瞭な部分が存在する。

『和名類聚抄』によると、該当する記載が刻鏝具、征戦具の項にあるが、前者では、錐などと並んで工具として取り扱われ、後者では大刀・小刀として載っている。大刀は太知（たち）、小刀は小加太奈（こかたな）という訓読みがふられている。前者の工具とした、刀子の訓読みも賀太奈（かたな）であり、ここにおいては両者の間に明確な区別は見出せない（桐原1984）。

では刀子とは何であろうか？ 辞書的、または一般的な説明は、「現在でいうところのナイフ」または、「日常生活用利器」、「小刀の一種」などであり、具体性は見られない。

記号としての「刀子」と、「刀子」と呼ばれるものの内容について考えてみる。

現在使われる刀子という呼称については、名詞の造語法の一つという説明がある。つまり、「子」を名詞の下につけることによって助辞として機能させ、「刀子」という言葉を造っているというわけである。やはりこのことから（かたな）との関連が窺える。このような言葉は、他に「合子」・「厨子」・「碁子」などが挙げられ、いずれも奈良時代のものである。

明治以降、考古学界における鉄刀の分類は、日本刀の刀種分類を援用したものである。ここで刀子（とうす）は、刀身長一寸（30.3cm）以下のものであったり、また、出土資料の法量の分析からは、刃渡り20cm以下という基準であったりと、基準値には相異が認められるものの、大刀に対する小刀という認識での線引きであるということでは共通する。つまり、このような棲み分けは、「完全に武器である大刀・刀とは一線を画すべき」（臼杵1984）という見方と同じく、刀子（とうす）は日常生活用利器であり、武器類である鉄刀類とは切り離して捉えたいという意識があるのではないかと見られ、これは前述した『和名類聚抄』刻鏝具にある、刀子（かたな）を根拠としてその解釈は成立する。

これに対し、「記・紀」を中心に文献での現れ方は「刀子は番匠のみが所有する工具ではなく、一般の男女が日常所持して様々な折に使用でき、凶器にもなる。衛士、防人の所有する兵器であり、身分を象徴する文房具、装身具であり、レガリアの一つにまでなっている」という指摘（桐原 前掲）がみられ、また、実際に古墳の副葬事例を見ると、大阪府黄金塚古墳では東槨から大小2本ずつの刀子が絹布で包まれ鏡・鍬形石・玉類など、宝器類と共に出土している。また、大阪府豊中市大塚古墳からは、第2主体部西槨より、鎌・摘鎌・鍬・斧・鉋・鑿・錐などの農工具類と共に刀子が出土し、一方で、同古墳の東槨からは短甲・剣・鎗などの武器類に供伴して出土している。奈良県メスリ山古墳副室からは斧・鋸・摘鎌・錐などの農工具類と共に出土しているという事実がある。

道具の形が製作レベルの中で、使用する目的、その対象となる素材によって規定される一面を持つと同時に、そこには道具製作者の意識（イメージ）が反映しているという仮定が可能であるとして、こうした前提に従えば、前述したような法量による線引きは、道具製作者側に同様の認識（線引き）が存在することを条件とすればこそ成り立つ解釈であり、名称としては分類されるが、刀子に内在す

るであろう機能的差異、または機能分化を問題とした場合、決してその把握に対し、有効性のある手段とは言い切れない。このことから、これまでの分類基準下の刀子の中に、機能的差異は当然のように内包されているものと考えられるのである。

しかしながら、「刀子は万能の利器としての評価がある。このことが圧倒的な組成比率を占める要因である…。しかし、この曖昧さが他の工具との関係を不明確なものとして…。組成比の消長では、古墳時代後半期以降、ヤリガンナ、鑿などを圧倒していくが、刀子の型式分類をとおして、機能的な代替関係を特定することはむずかしい。」(大村1996)という見解からは、刀子の内包する機能的差異を、その型式差から推し量るには難しさを伴うことが窺い知れる。これは、現時点での分析の限界を示すものとして認められ、刀子という単語は依然として存在する。

日常生活利器、もしくは農工具、宝器としての刀子(かたな)と、武器として刀子(かたな)という機能の差異は型式差として現れるのか。この点は古墳時代に限れば、埋葬農工具の持つ意義を「セット関係」・「出土状況」・「形態」という3つの要素から考証するという視点(寺沢1979)に糸口があるのではないかと思われる。

### 3. 研究史を中心として

刀子を一器種として取り扱った論文は決して多くはない。先ず、神林淳雄が記紀など文献に現われる記載を集成し、短刀子と長刀子の別があったことを指摘している。また、出土遺物の観察、出土遺構から、刀子の性格を捉えようとしたものが最初である(神林1939)。こうした機能面を主題とした研究として、やはり、文献に見られる刀子(小刀)の使用場面の解釈に加え、古墳時代前期から後期、奈良、平安時代の資料を対象に副葬された刀子の分類から、武器、工具としてのこれまで理解されてきた機能に加え、鎮魂・辟邪的な性格といった、道具本来の機能から発展した、二義的な機能の存在を指摘した(桐原前掲)。

工具としての刀子に関しては、記紀の記載から刀子のその所有形態を問題にして、住居毎の出土量から、集落内における消費単位を抽出する試みの中で、刀子の出土数をその単位として扱っている論考(古庄1994)や、大工道具という、極めて限定された機能の復原が可能な工具の中で、主に切削機能を持つ工具を刀子系道具として、その近・現代、近世の資料を中心に、その種類と、機能・形式変化をより具体的に追った研究がある(渡辺1997)。

この中で刀子は、その装着形態から3種に分類され、それぞれの名称・形状・寸法・構造・材質・用途・使用方法について、実資料・文献・絵図を綿密に分析することで論じている。刀子の機能分化と特定の用途に使用される工具への形状変化を考える上で、重要な視点となると考える。

ほかに、形状に特徴のある刀子についてはその特殊性が注目され、研究がなされている。特殊な形状を持つとされる刀子としては、蕨手刀子(北野1960)、曲刀子(尾上1998)、刀身と茎とが屈曲する形状の刀子などについての論考がある。北野は蕨手刀子という鉄柄の端部が特徴的な形状を成す刀子を、古墳出土資料を中心に集成し、全長の計測から2型式を導き出し、その差異を出土古墳の時期に照らして、全長の大型化を、時期差として捉えている。資料中には今日、曲刀子と呼ばれる別型式の個体も含まれているように、資料的制約もあり、形状の検討には至っていない。

このことについて尾上は曲刀子を中心に、それまで、類似性が指摘されてきた鹿角柄刀子・鉄柄刀

子・蕨手刀子との関係を型式学的に見た前後関係と捉え、同系列の下に整理している。また、刀身部と茎部の関係が背側に屈曲する形状の刀子については、全国にその類例が認められ、竹製品を作る際に使用されるフゴベラ、弓作りに使用する弓削刀子、刀子形のヤスなど、これまでの解釈を踏まえ、特定の作業の使用を想定して、それまでの成果を整理している（宮1998）。しかし、分布も広く、時期も古墳時代、中・近世と断続的であり、また、これら“特殊な刀子”としている一群も「茎部の装着方法や大きさ、切先の形状等が異なる」と指摘しているとおおり、刀身と茎の形状・法量比のみを見ても差異は大きく、今後の類例を待つとともに、整理を必要とすると考える。

刀子を型式学的に整理したものとして、アイヌ文化におけるマキリとの関係を、中・近世を中心に論じたもの（小野2000）、集落における鉄製農工具の出土組成の変化からその所有形態を検証する中で各器種の型式変化を概観したもの（大村1996）がある。

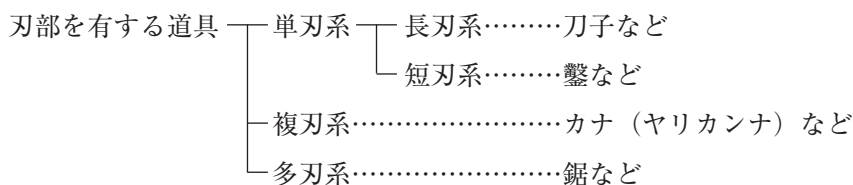
小野は、本来時間的にも空間的にも連続性のあるであろう刀子とマキリを、考古資料と民具資料という分断から、同じ物質文化資料として評価することを目的として、考古学的手法をとって両者を分析している。対象は東日本、主に東北、北海道の中・近世である。ここでは、刀身部と茎部との屈曲する角度を主要属性として、3類に分類し、それぞれの形式変化を時間軸に添って分析している。小野の分類基準は明解であり、屈曲角を主要属性と位置付けたことは注目される。

大村の刀子に対する分析は、弥生時代から奈良・平安時代の旧上総地域を対象としており、あくまで鉄製農工具の組成比という枠組みの中で行われているため、概観的ではあるが、現時点では各部位の形式変化を見る上で最も整理されたものである。各部位の法量比から、形式分化を内包している可能性を指摘し、編年詳細については今後の課題としている。

#### 4. 刀子について

「刀子はその定義を明確にした上で使用されている例が少ない。多くの場合、「日常生活用利器」・「小型の刀型鉄器」といったイメージの下での分類である」（小野2000）との的確な指摘にあるような、刀子という単語の曖昧な現状は、その都度指摘はされるものの、解消されることなく今日まで続いている。とはいうものの、前述したとおおり、現時点においては、この問題を克服する手段は見あたらない。

ここに刃部を有する道具の分類を引用する。



（渡辺1997：p.2 図1 刃部形状による建築用木工具（大工道具）分類より）

これは大工道具の分類で、用語としては馴染みにくく、長刃系・短刃系の定義については、より具体的な内容を示す必要があるものの、現在のところ刀子については明解な分類であると思われる。

以上のことを踏まえ、ここでは刀子が示す範囲を、刃部を有する金属器のうち、単刃系・長刃系の

ものとし、また、小刀・短刀など、刀剣類との境界は、明かに武器類であると同定出来ないもの（共伴出土遺物の様相や類例などから）全てを対象として含むものと考えたい。よって小刀・短刀と呼称されるものの一部も含むものとし、その形態的特徴を抽出していきたい。

## 5. 刀子の各部位について

刀子の完存資料は正倉院に見られる。ここには刀子67口（中倉62口、北倉5口、計87本）が保管されている。これらの資料を基に刀子を構成する部位を見てゆくと、大きく柄・把（つか）・鞘・刀身に分けられる。柄は基本的な部分は一材で作られており、把頭には飾り金具の付くものと付かないものがある。鞘は2材を刳合わせたものと、1材を刳り抜いたものがあり、鞘尻に金具のつくものとつかないものがある。どちらも象牙・犀角・沈香を材とし、ここに、螺鈿や撥鏤などといった装飾が施される。このように装飾性の高い部分は把と鞘に集中し、刀身には、鑢座に象嵌が施される以外に装飾性は認められない。

これに対し、遺跡から出土する刀子は鉄製の刀身・茎・口金、遺存状態が良ければまれに把が遺存するが、そのほとんどが刀身部のみで、しかも欠損部位のあるものが多数を占める。

しかし、鞘や把に装飾性が強いことは、刀身部はより機能との関連性が強い形状を示す傍証と捉え、その変化は機能・用途の変化を反映し易いのではないかと考える。

現在、報告に見られる刀子各部位の名称は、主に鉄刀類の名称がそのまま適用されていると見られるが、表記において若干の相異が認められる。ここでは煩雑になることを避けるため、私案として各部の名称を示した（図1）。

また、把・柄（つか）・鞘については今回の分類の対象とはせず、刃部を有する金属部分を刀身として、刀身は、刀身部と茎部から構成されるものとする。

刀子は刀身と茎に分けられる。

刀身部：関から切先までの部分。

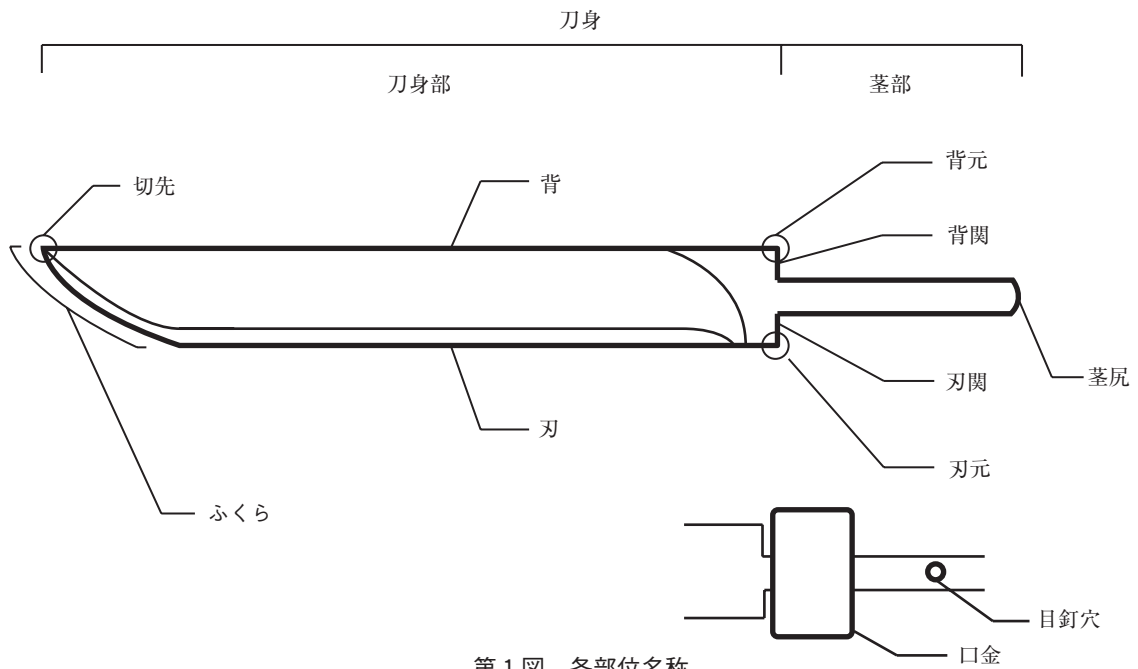
- a) 切先（切っ先、鋒）：刀身の先端部。
- b) 刃：主要な機能部位。切る、削るという行為に使用。
- c) 背（棟）：刃部の反対側の部分。
- d) 関（区）：刀身と茎の境。刃側を刃関、背側を背関とする。
- e) 元：刃と関の間の部分。刃側を刃元、棟側を棟元とする。
- f) 鑢座：刃と関の間の部分。身元と同義か。

茎（中子）部：主に柄に収まる部分。

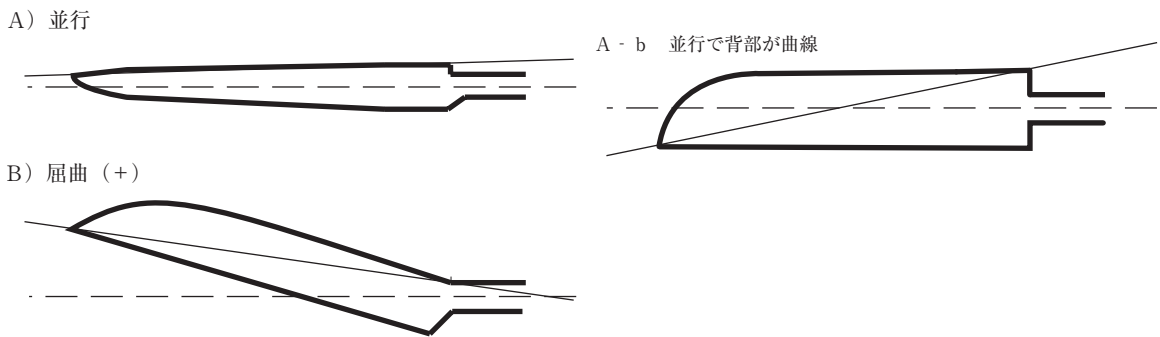
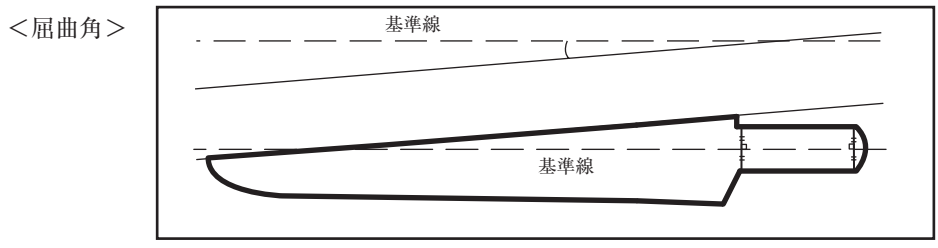
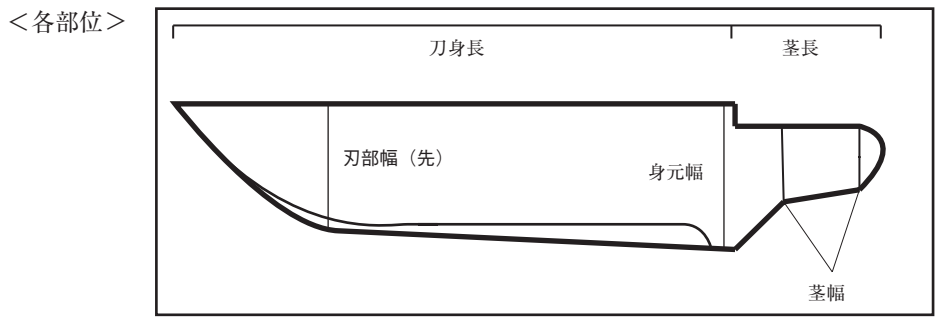
- g) 茎尻：茎の端部。
- h) 目釘穴：茎と柄を固定する目釘を通す穴。

## 6. 分類属性について

<切先> 切先の形状は、「切る」・「削る」機能に大きく影響する部位であると思われ、刀剣類などを見てもその形状は3～5類に分類される。刀子についてもこのような形状の分類は可能であろう



第1図 各部位名称



第2図 計測部位

が、研ぎ減りの可能性を考えた場合、切先分類の有効性を見出すには問題が残る。しかしながら、出土資料中には明かな形態差が認められる。

集計では切先についての分類は、膨（ふくら）の有無にとどめる。言い換えれば、刃から背にいたる先端部が直線か曲線かということとした。これによるとふくらを有する個体と、いわゆるカマス切先を分けるに止まる。こうした分類であると、奈良・平安時代に見られる先細の個体はふくらを有する個体として捉えられるが、このような個体は他の属性（身元幅と刃先幅、刀身長との関係）から分けることが可能と見るが、形態的特徴が抽出可能であると考ええる。しかし、今後検討を有する。

<刃幅> 切先同様、研ぎ減りによる影響を受ける。このため、分類上の主要属性とはし難い要因を含んではいるものの、そのものの使用度を示す要素としてみた場合、有効な数値となりうる可能性を排除しきれない。よって、集計時には参考数値として計測する。計測は刀身長の中心部位を対象とする。

<関> 関については、その具体的な機能は明瞭ではない。おそらくその変化は刀身以外の部材、鞘や口金の構造と関連するものではないか。既に、関の型式変化は、地域的ではあるが、その傾向が指摘されている（大村1996、岡村1985、小野2000）。大村の対象とする旧上総地方では「古墳時代中期中頃に両関化を基本的な型式変化の画期」とし、岡村は主に西日本の資料から、a類茎刀子とした、茎が扁平で短い型式について、弥生時代の片関・両関混在から、古墳時代入ると「ほぼ片関に斉一化し、古墳に大量に埋葬されることになる」と指摘し、小野は、北海道の中・近世の資料を中心に、Ⅱ類とした背が背側に湾曲、もしくは背側に棟元から屈曲する個体について、擦文時代終焉後の近世火山灰降下前後において「プロポーションの変化と共に…片区から両区へという」型式変化を導き出している。これらを見る限り、刀子の型式変化の画期として、関の有無、延いては形状については、考古資料において、比較的その変化が捉え易く、しかも研ぎ減りの影響を受けにくいこと、また、出土例を見ても他部位に比べ遺存率が高いことなど、集計するにあたり、有効な要素を備えていると考えられる。

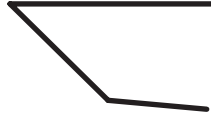
分類としては、刃側を刃関、背側を背関とし、大分類として無関・片関・両関とし、片関・両関の下位分類として、その形状から直角関・斜角関・撫関を設定する。

<刃> 刀子に限らず、刃物類について、埋葬品の一部以外の遺物は、当然使用済みの形で遺っていると考えられ、研ぎ減りの可能性を含め、どこまで元来の形状を保っているか想像の域を出ない。現在、この問題については克服する術を持たない。しかし、刃部の形状については、木製品の表面に遺存する加工痕との密接な関係が指摘されているように（宮原1988）、器種の機能を明瞭に表している部位であるという一面も持つはずである。実際、出土資料中、刃部の形態には直線的なもの、背側に反りが認められるものがあり、機能差を表すものと考えられる。よって、刃部の形状を直線的なもの、曲線的なものに分類する。しかし、直線的、曲線的の定義が曖昧にならざるを得ず、今回の集計では参考に留める。

<切先>



a 膨（ふくら）あり



b カマス切先



c 先細の切先

<関>

A) 無関



B) 片関



a 直角関



b 斜角関



c 撫関

C) 両関



a 直角関



b 斜角関



c 撫関

<背>

A) 並行する



a 直線的



b 曲線的

B) 屈曲する (+)



a 曲線的

<茎>



a スゲ



b 中細

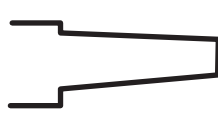


c 細

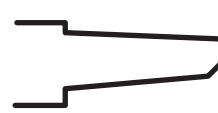
<茎尻>



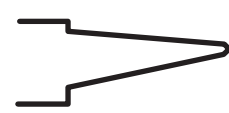
A 蕨手（装飾有り）



B - a 一文字尻



B - b 隅切り尻



B - c 剣形



B - d 栗尻

第3図 刀子各部位模式図

<背> 背の形状は、研ぎ減りがなく、製作時の形状を留めている可能性が高い。また、その形状は、刃部のそれを反映している。このため、この部位の分類は資料の機能に対し有益な情報を提供するものと考ええる。

大分類として背と茎部との角度を問題とする。これは使用時の刃部が「切る」「削る」という行為の対象に機能する際、握り手を規定するものであって、このことは資料本来の機能、もしくは用途推定に有効な点となると考えるからである。ここでは先ず直線的と屈曲の基準値を得ることを目的とする。直線的と屈曲の判断は小野の分類を参考とする（小野2000：p.5）。刀子の形態として、茎部に対し刀身部のラインが並行するもの（A）、背側に屈曲するもの（B）、反対に刃側に屈曲するもの（C）が考えられる。先ず、角度の計測は、茎の両端部の幅の中心点を結んだものを基準線とし、これに対し刀身部背側の両端（切先と背闊もしくは刀身と茎の境界点）を結んだ線が成す内角を採用する（図2）。この際、刃部側に開く角度をマイナス（-）で、背側に開くものをプラス（+）で表す。しかし、これはあくまでも二次元的には、茎の軸線と切先の位置関係を表しているに過ぎず、背が直線的なものに対してはある程度有効だが、曲線的なもの、特に刃側に湾曲するものは、必ずしも、ここで目的とする屈曲は見出し難い。よって、ある程度視覚的な手段をもって、操作しなければならない。

そして、屈曲する角度の下位分類として背の形状が直線か曲線かを小分類とする。

<茎> 茎の形状、長さは柄との関係で大きく変化する。大分類として直線的、曲線的なもの（曲刀子など）に分け、直線的なもの的小分類として、(a) 直（スグ）、(b) 中細、(c) 細を分ける。茎両端幅の比を百分率によって分類の基準とする。

<茎尻> 茎の形状と同様に柄との関係に影響される。この部位に特徴的な型式には、「蕨手刀子」と呼ばれる鹿角柄刀子の系列に捉えられているような個体や、環頭大刀の系列下におかれる可能性が指摘されているような個体も認められる。このように茎尻に極端な形状変化を持たせることは、柄の装着が想定しにくい。金属部分を柄として使用したとすれば、この茎尻の形状はグリップの機能に関わる可能性も否定できない。しかし、「曲刀子」については、朝鮮半島に古い類例が認められることや、日本での分布の偏在、出土遺構が首長墓クラスの古墳であることから指摘されるように、「渡来の品物としての意識が多少なりとも存在した」（尾上1998）ことを評価するならば、これまでの認識に従い茎部に起こるこのような形状変化を、刀子本来の切る・削るという機能から離れた機能、つまり装飾と見なすことが妥当である。よって、ここではこの有無をもって大分類とする。茎尻に装飾のない個体については、直線的か曲線的で分け、直線的なものは、いわゆる一文字尻・隅切尻・剣形に小分類する。曲線的なものはいわゆる栗尻として一括する。

<目釘穴> 刀子における目釘穴の機能については、管見の限り触れている論考は見られない。日本刀の説明では、柄から刀が抜けないようにするために柄と茎を固定する目釘を通す穴となっているが、古墳時代の鉄刀類にも目釘を有しない個体が少なからず認められることから、柄の構造と緊密な関係にあると想定される。刀子において目釘穴を有する個体について、機能差を見出し、類型化可能な属性を持っているかは現段階では確証を得ないが、出土例が認められること（福岡県立石1号土壙



墓、長崎県原ノ辻遺跡、(弥生) 北海道フトレイ貝塚 (中世)) から、分類項目として設定する。目釘穴を有する個体は全体比で見ると限られた割合であることが予想される。これは先にも触れた、刀子という分類上の枠組みの曖昧さに起因すること、また、製作技術上の問題が少なからず影響しているとみられる。これらをここで検証する術は持たないが、武器である刀剣類には目釘穴を有する個体が多いことは一定の傾向を示唆するものではないか。

<口金> 鉤 (はばき) ・責金具 (せめかなぐ) と同義に使う。機能としては目釘と同様な機能をもつ。口金の有無は関部との関連が推定されており (大村1996)、また、目釘穴との関係も伺われることから項目としてあげた。しかし、口金が遺存する個体は柄の木質も遺ることが多く、X線撮影の行われている個体以外は、関部や茎の形状を見ることは資料操作上難しい。

<その他> 計測部位として、刃部、茎部、それぞれの幅を設定し、この数値から、形態的特徴を示したい。茎部：刀身部からは全体のプロポーシオンを、身元幅：刀身長、茎幅：茎長、から各部の形状を見ることとする。

断面形については、刀身部において、その機能と密接な関係が存在し、重要であると思われるが、現段階では、断面形状を分類に有効なデータとするには問題が残る。厚さを計測対象とし、形状については参考程度に留め今後の課題としたい。また、正倉院に見られる資料中、元 (鑢座) 部から関にかけて金・銀象嵌による装飾が施されている個体が認められる。しかし、管見では出土遺物の中にこのような例を挙げることは出来ない。今後現われる可能性があるものの、このような個体は形式として一つの系列にまとめられるものと考え、ここでは分類の項目には入れていない。

## 7. おわりに

本稿は、一本の体裁を成すべきものを、資料収集の不手際により、軸となるべきデータの提示と分析にまで至らず、実証的な部分が欠落している。よって、思考錯誤の段階を掲載することとなった。しかしながら、今後の作業を進める上で土台となる部分であり、続く分析は別稿において果たしたい。

なお、本文中、引用文献中の敬称は省略させて頂いた。

## 引用文献

- 白杵 勲1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究 PHALANX』古墳文化研究会  
大塚初重1996『最新日本考古学用語辞典』柏書房  
大村 直1996「鉄製農工具の組成比」『史館』28号  
1997a「鉄器の組成比と所有形態」『考古学研究』44巻2号  
1997b「南関東地方における鉄器の普及過程」『東日本における鉄器文化の受容と展開』発表要旨集  
鉄器文化研究会  
岡村秀典1985「鉄製工具」『弥生文化の研究』5 雄山閣出版  
小野哲也2000「刀子からマキリへ - 考古学的アプローチによる -」『北大史学』北大史学会  
尾上元規1998「曲刀子の系譜と性格 - 岡山県内出土資料を中心に -」『古代吉備』20集  
神林敦雄1939「刀子について」『人類学雑誌』第54巻7号  
北野耕平1960「蕨手刀子の年代」『古代学研究』23号

桐原 健1984「刀子の持つ鎮魂・辟邪的な性格」『古代文化』第36巻第10号  
古庄浩明1994「古代における鉄製農工具の所有形態」『考古学雑誌』第79巻第3号  
小林行雄1988「刀子」『世界大百科事典』平凡社  
齊藤 忠1992『日本考古学用語辞典』学生社  
田中 啄・佐原 真2002『日本考古学事典』三省堂  
都出比呂志1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13巻3号  
都出比呂志1989「農具鉄器化の諸段階」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店  
寺澤知子1979「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』第4号  
土井義夫1971「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」『物質文化』18  
中村浩一郎・島田和宏2001「中原遺跡鉄製品集成 (1) -刀子・短刀を中心に-」『研究ノート』財団法人茨城県教育財団  
毎日新聞社1996『正倉院宝物』5・7～9 毎日新聞社  
松井和幸1989「鉄製工具」『季刊 考古学』第28号  
松井和幸2001『日本古代の鉄文化』雄山閣出版  
宮原晋一1988「石斧、鉄斧のどちらで加工したか」『弥生文化の研究』10 雄山閣出版  
原島礼二1968『日本古代社会の基礎構造』未来社  
松村恵二1991「古代村落と鉄器所有」『日本村落史講座4 政治I』雄山閣出版  
宮 宏明1998「中・近世と古墳時代の特殊な刀子」『人類史研究』10  
古瀬清秀2001「鉄製品」『季刊 考古学』81号  
平凡社1986『和漢三才図会』5 平凡社  
渡辺 晶1997「近世の建築用刀子系道具について」『竹中大工道具館研究紀要』9

# 謎の千草山廃寺跡Ⅱ

－千草山寺の建っていた頃－

田中清美

## 1. はじめに

千草山廃寺跡は、昭和38年に平野元三郎、滝口宏氏等によって「市原市上総国府関係遺跡」として確認調査が実施され、礎石を含む基壇の存在が認められている<sup>(1)</sup>。さらに、昭和50・51年と60・61・63年にその北側台地一帯を広く本調査が行われ<sup>(2)</sup>、小鍛冶跡、二重に区画する溝や掘立柱建物跡などが検出されている。また、関連すると思われる遺物としては、軒瓦・平瓦・鉄釘・「寺名」墨書土器・神功開寶などが注目される。

しかし、廃寺跡主要部分の本格的な調査が行われていない現状では、廃寺跡の確実な遺構の内容及び性格までは不明のままである。

以前、拙稿で千草山廃寺跡を中心とする研究史と現在までに判明している点を簡単にふれてみた<sup>(3)</sup>。また、千葉市小食土廃寺跡が当廃寺跡を考える上で重要な遺跡として取り上げてみた。

本稿は、未だ謎の多い当廃寺跡推測の手がかりとして、須田氏<sup>(4)</sup>や安藤氏<sup>(5)</sup>による8世紀後半に建立されたとする説に基づき、周辺の遺跡を含めて8世紀から10世紀に到る遺構の変遷を考え、当時の歴史的な環境を少しでも復元しようとする、大胆かつ小さな試みである。

## 2. 千草山廃寺跡とは

当廃寺跡については、安藤鴻基氏は出土した軒瓦の瓦当文より、上総国分寺の造営以前に遡り得る資料が見られないので、造営以後の創建と想定し、瓦当文様の種類も少なく、存続期間も短かったとしている<sup>(6)</sup>。また、須田勉氏は、上総国分寺造営の協力の見返りとして<sup>(7)</sup>、当時の地方豪族が（郡司層か在地土豪層＝市原郷人クラス）造寺事業を行ったとした。そして、千草山廃寺の建立時期は、天平19年（747年）12月乙卯の条（続日本紀）の寺院に対する優遇策により実施されたと考え、それ以降としている<sup>(8)</sup>。

また、笹生衛氏は、村落内寺院の検討のなかで当廃寺跡を、仏堂分類AⅡ類？「基壇礎石立ちの基礎構造をもち、AⅠ類とほぼ同規模の四面庇建物」に分類し、信仰内容では山林寺院や国分寺定額寺の別院に考えられている<sup>(9)</sup>。

ここでもう一度、平野氏が調査した主要部分とみられる確認調査の概要報告<sup>(10)</sup>にふれてみたい。原文の記載は省略するが、表面から確認できたとみられる土壇は、南北約7m、東西約10mで高さ約90cm、南北線主軸が約25°東偏している。そこで設定したトレンチは、幅約4m、長さ約8mで南北線に約25°東によせて深さ約40cm掘っている。出土遺物の中で瓦は麻袋約16袋（文様瓦や文字瓦は1個もない）、須恵器と土師器は奈良末か平安時代とみられ、土師器は糸切りの坏が多く、高坏も3点発見している。実測図やこれらの遺物が不明なため詳細はわからないが、これらの点からは出土した瓦の量は、全掘した場合かなりの量が推測でき、全面瓦葺建物の存在が想定される。また、瓦の分布範

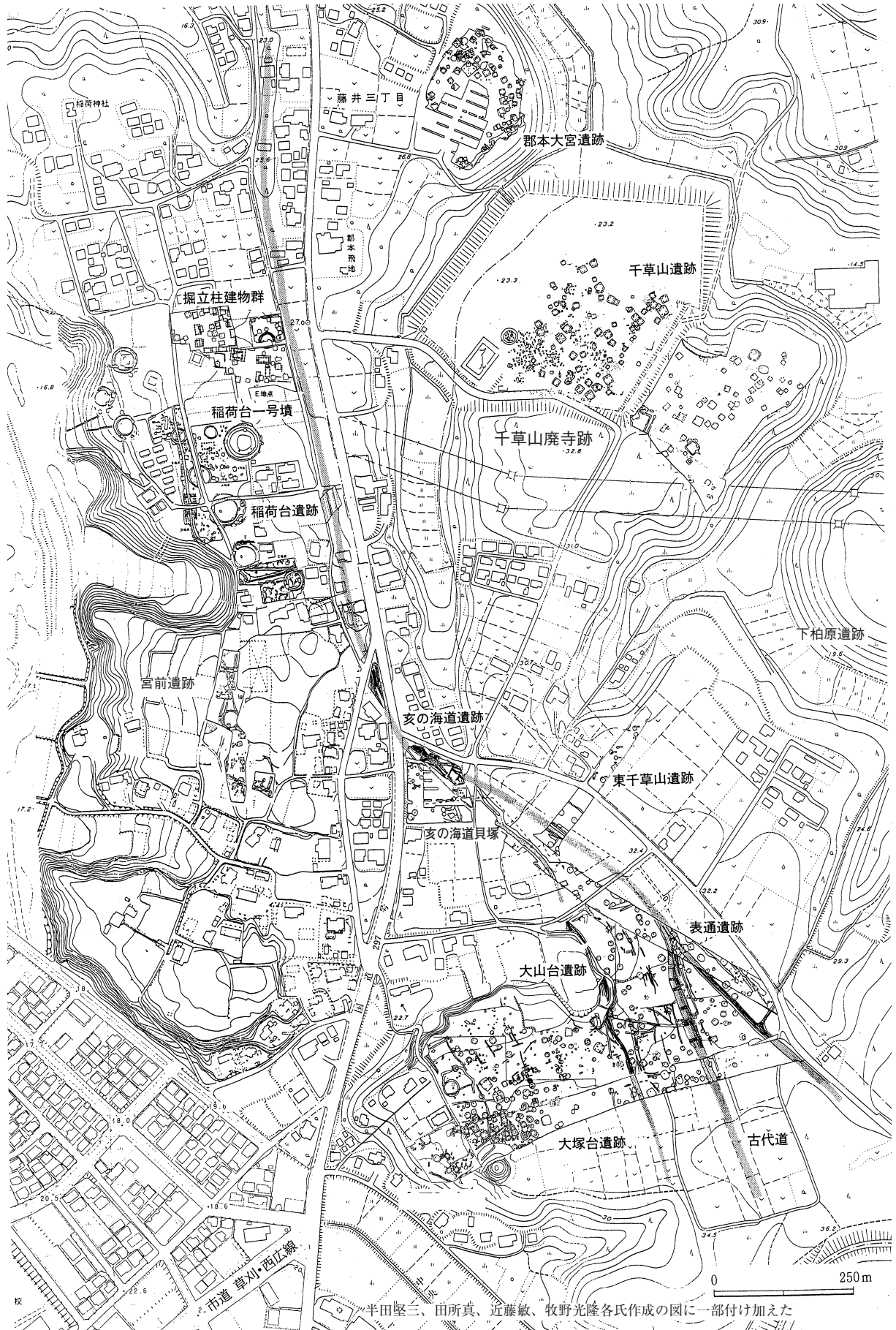


図1 千草山廃寺跡周辺の主要遺跡

囲が狭い点から一字のみの可能性を須田氏は指摘されている<sup>(11)</sup>。土器は奈良末～平安頃に含まれると一応考えておきたい。

### 3. 建立前後の状況

ここでは、北側地区の調査と周辺遺跡の調査例で奈良時代から平安時代の状況を見てみたい。対象とする遺構は大きく4期に分けてみた。Ⅰ期は8世紀初めから第2四半世紀頃、Ⅱ期は8世紀半ばから第3四半世紀頃、Ⅲ期は8世紀第4四半世紀頃から9世紀初め頃、Ⅳ期が9世紀第2四半世紀頃から10世紀初め頃である。

まず、北側地区では、Ⅰ期として、103方形区画墓<sup>(12)</sup>（いわゆる方形周溝状遺構であるがここでは方形区画墓名を扱う）で、周溝内より出土した須恵器広口壺<sup>(13)</sup>などから比定した。また、やや古くなる例として、101方形区画墓が陸橋をもつ例で周溝内から出土したミガキのある坏より、112住居跡が飛鳥Ⅴ・平城Ⅱに相当する畿内系の暗文坏など、さらに遺物は出土していないが、地下式横穴墓とみられる108土抗<sup>(14)</sup>、地下式改葬墓とみられる107土抗<sup>(15)</sup>も含めた（105・106土抗は残存状況が悪いものの、同様である可能性を持つが、ここでは除いた）。

Ⅱ期では、遺構が少なく、42住居跡のいわゆる盤状の坏タイプ（Ⅰ期まで上がる可能性もある）、146住居跡の高台付須恵器坏は坊作編年のⅠ-b期に相当すると思われる<sup>(16)</sup>。また、103住居跡の須恵器杯も出土状況や他の遺物から遺構に伴うか疑問はあるものの一応含めておきたい。

Ⅲ期では、50住居跡出土の須恵器長頸壺があり、また、102・104方形区画墓が出土遺物は無いが小規模化した例として含めておく<sup>(17)</sup>。

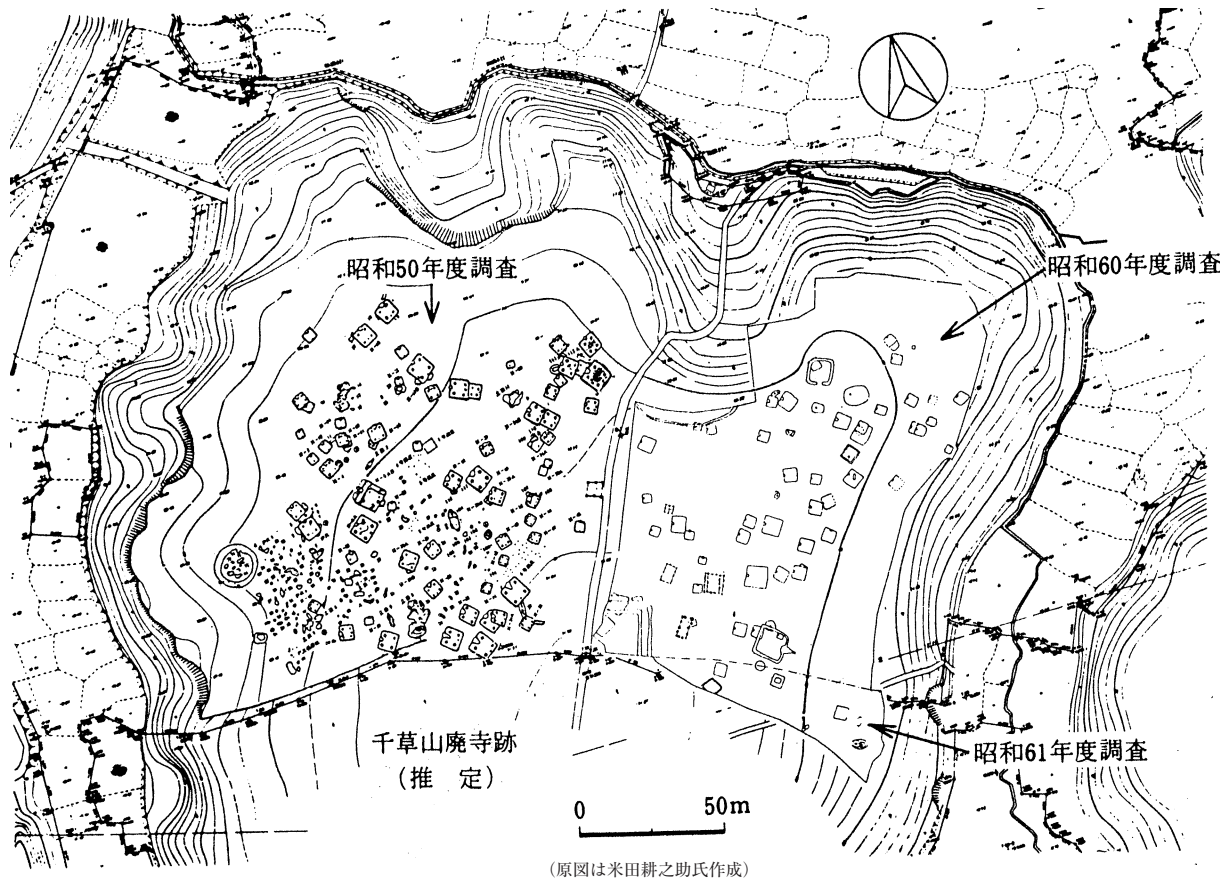
Ⅳ期は、遺構数が増大し、更に細かくa・bの2期に分けた。Ⅳ-a期は9世紀の半ば頃（第2四半世紀頃から第3四半世紀頃）として、15・17B・22・23・24・38・48・105・106・107・108・140住居跡と103a土抗及び104遺構（火葬墓）である。土師器坏は箱形から開きぎみの体部（いわゆる逆台形）のある段階で、23は神功開寶、24は黒笹90号型式の灰釉碗、48は「寺」名墨書土器が各々出土している。Ⅳ-b期（9世紀第4四半世紀～10世紀初め頃）は6B・39B・53A・B住居跡、二重に周り区画する溝（101～103溝と109土抗）及び竪穴住居跡の切り合いなどより、1・3・101・102・103・104掘立柱建物跡が考えられる。高台付の内黒碗が出現する時期以降である。

以上、大きく4期（Ⅳ期は更に2期）に分けたが、各遺構の方向性はそれぞれの時期で近似しているという特徴がある。また、掘立柱はその方向性が2種類有り、更に2時期に分けられる可能性がある。特に101と102は二重の溝と主軸方向が異なるため溝との時期差が考えられる。

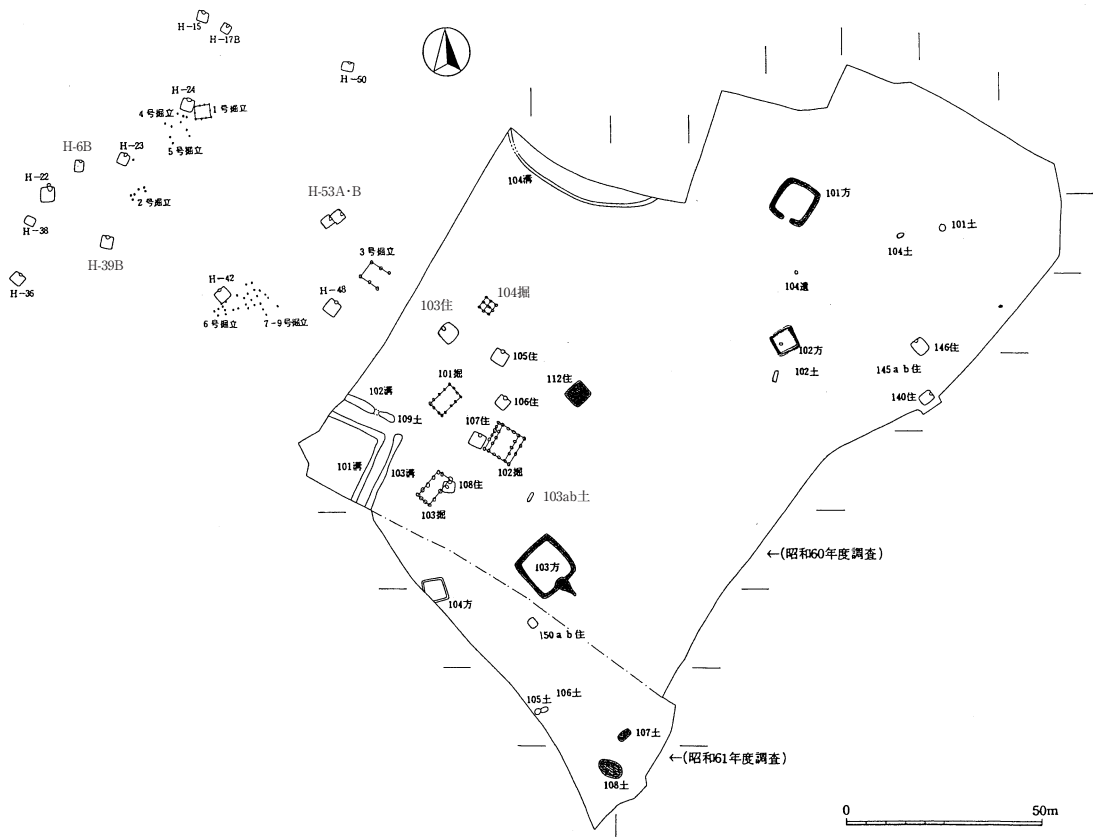
また、遺構には伴わないが101方形区画墓と104溝の間で緑釉陶器碗が出土している。黒笹90号型式9世紀第3四半世紀の所産であろうか。

以上のように、千草山廃寺跡の北側地区では、8世紀代は墓域とわずかな竪穴住居跡の存在がみられ、9世紀頃になって再び竪穴住居跡などが増加している。

次に周辺の遺跡について見てみたい。図1は千草山廃寺跡などを含めた周辺の調査済遺跡の主な遺構の全体図を地形図におとしている。南から大塚台・大山台・表通・東千草山・亥の海道貝塚・亥の海道・宮前・稲荷台・大宮の遺跡が存在する。この図では各時代のすべての遺構を含めているため、この中から奈良時代頃から平安時代の遺跡をとりあげたのが表1である。なお、これらの遺跡の中に



〈全体図〉



〈I期〉

図2 千草山遺跡全体図及びI期（北側地区）



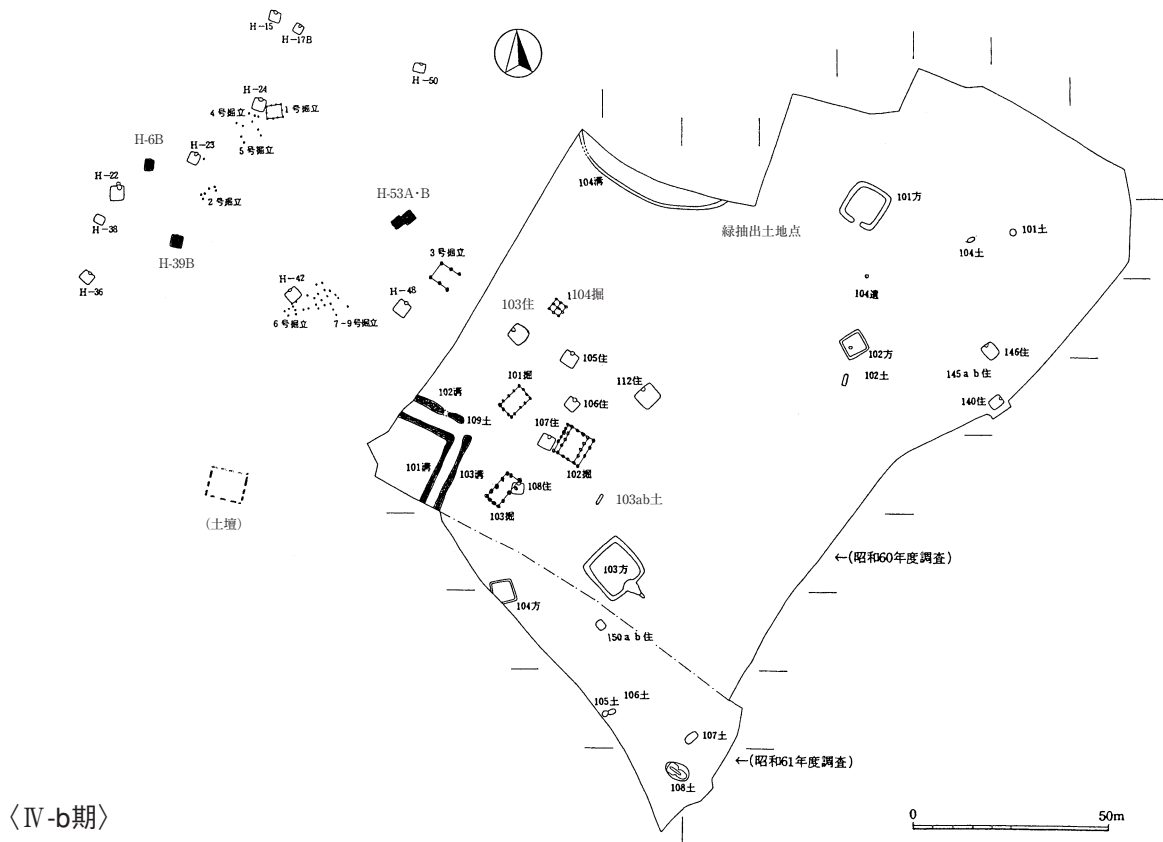
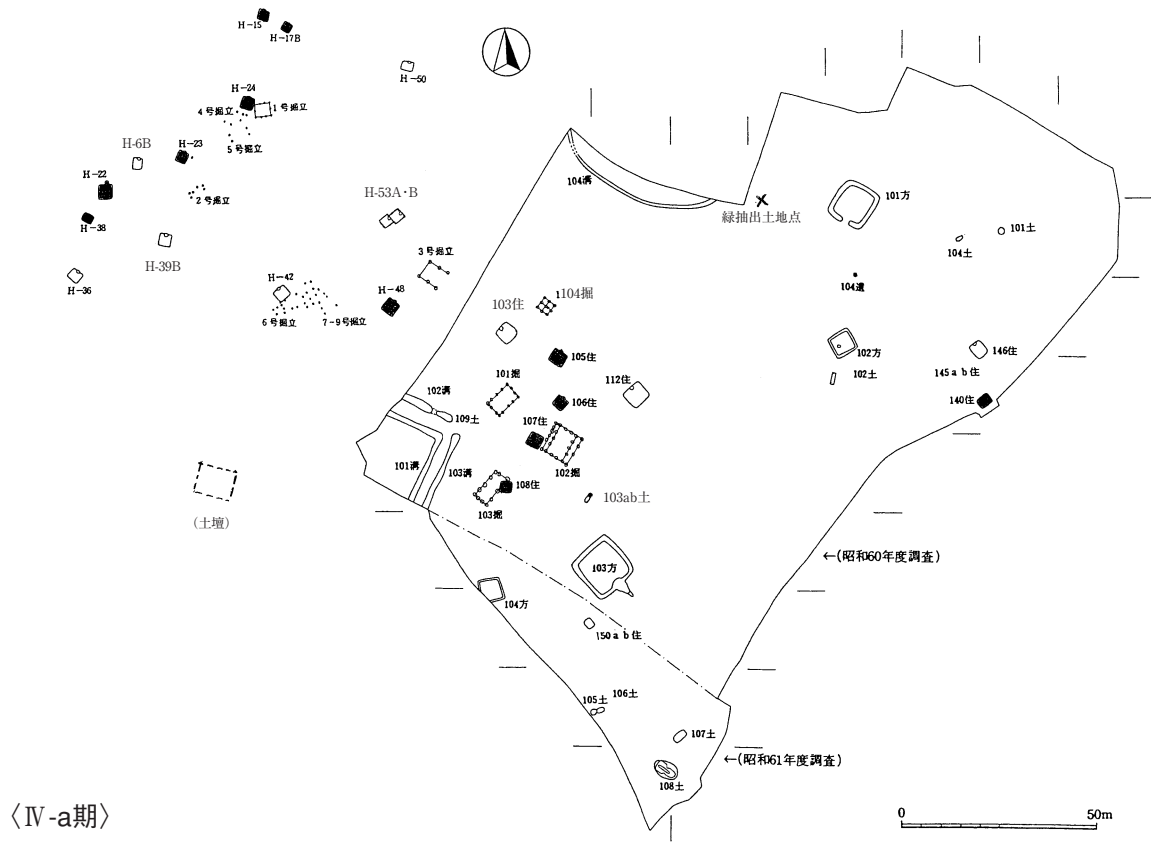


図4 IV期（北側地区）



は未整理や整理中が含まれているため概略の表として理解していただきたい。この表によるとややわかりにくいですが、奈良時代前半はほとんど遺構がみられず奈良時代後半の8世紀中頃より竪穴住居跡などが出現する。特に稲荷台遺跡は8世紀頃第3四半世紀、大宮遺跡では第4四半世紀より竪穴住居跡を中心に遺構が増加する。それらは10世紀代まで続く。これらの遺構群は以前から言われているように道路遺構（官道）を中心として両脇に存在し、「古代上総国の中心部をつらぬくメインストリート」といわれている<sup>(18)</sup>。また、千草山遺跡の谷を挟んで東側台地上の能満下柏原遺跡では、航空写真にソイルマークが見受けられ、方形区画墓状の形体が認められる<sup>(19)</sup>。

表 1

遺跡名	奈良時代	平安時代
山田橋大塚台遺跡	後葉の竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 2 棟  (カマドに瓦使用) 道路跡 3 条、  平城Ⅲの坏	
山田橋大山台遺跡	道路遺構  平城Ⅲの坏	
山田橋表通遺跡	溝状遺構（道路状遺構）  須恵器坏など出土  「岡館」の墨書、  8 世紀半ば	竪穴住居跡 1 軒  土坑（多量の炭化材と土師器坏 5 点出土）
能満東千草山遺跡	溝状遺構、表通遺跡と連結する可能性が大きい	
山田橋亥の海道貝塚		竪穴住居跡 1 軒  9 世紀中頃「延勢不□」の線刻土器（坏）
山田橋亥の海道遺跡		道路状遺構  大山台から稲荷台方面に続く遺構とみられる。
山田橋宮前遺跡	竪穴住居跡 1 軒、  (方形周溝遺構 1 基)	竪穴住居跡 1 軒
山田橋稲荷台遺跡	8 世紀第 3 四半世紀より  竪穴住居跡出現  G地点では側溝を伴う道路跡	9 世紀第 2 四半世紀から10世紀第 4 四半世紀頃までの  掘立柱建物群  緑釉陶器多数、貞観17年紀年銘墨書土器出土
郡本大宮遺跡	竪穴住居跡 9 軒  8 世紀第 4 四半世紀から 9 世紀第 1 四半世紀	9 世紀第 1 四半世紀後半から第 4 四半世紀の  竪穴住居跡15軒  10世紀第 2 四半世紀の  竪穴住居跡 9 棟  土師器窯跡 2 基など

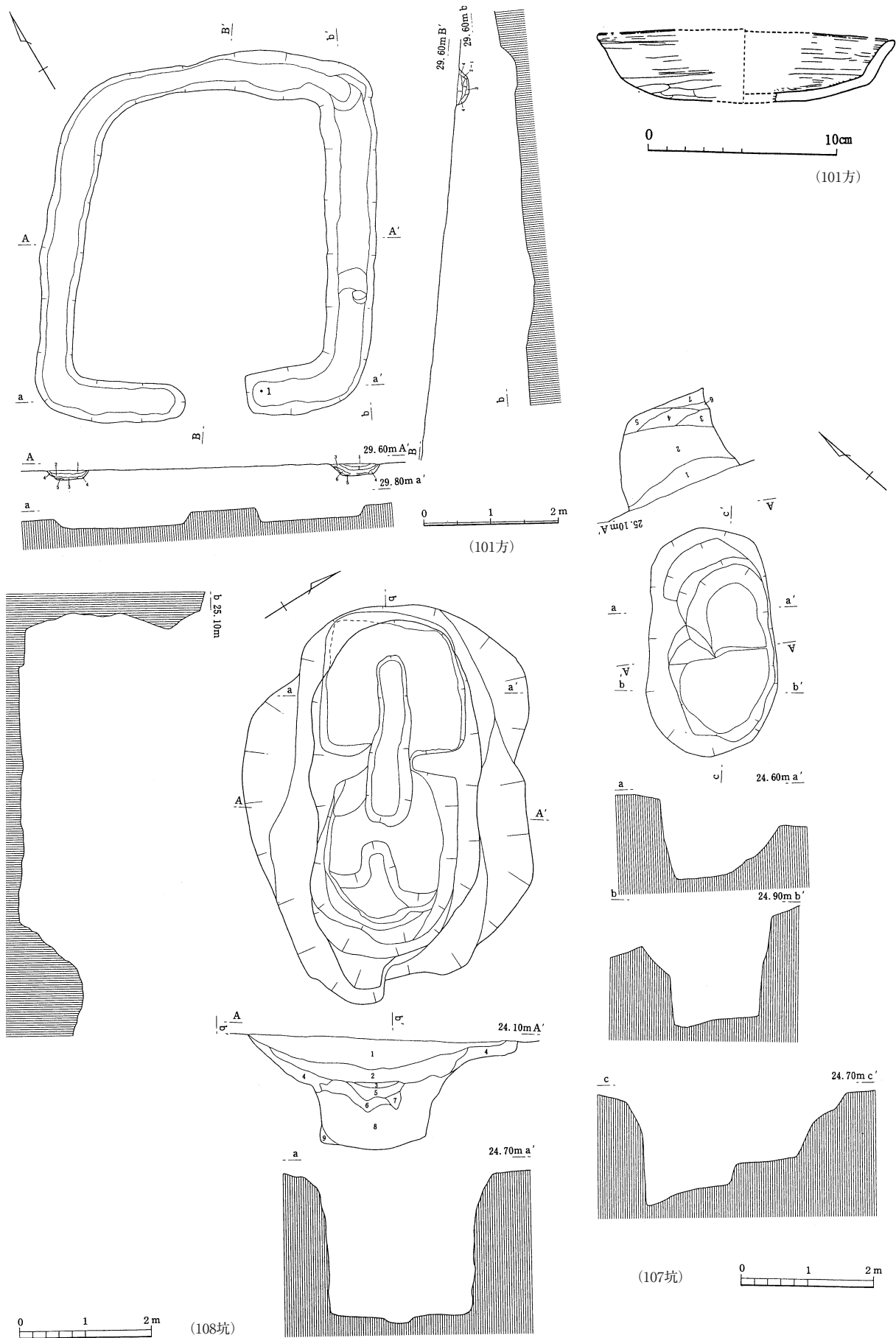


図5 101方形区画墓及び出土遺物、107・108土坑（報告書より）

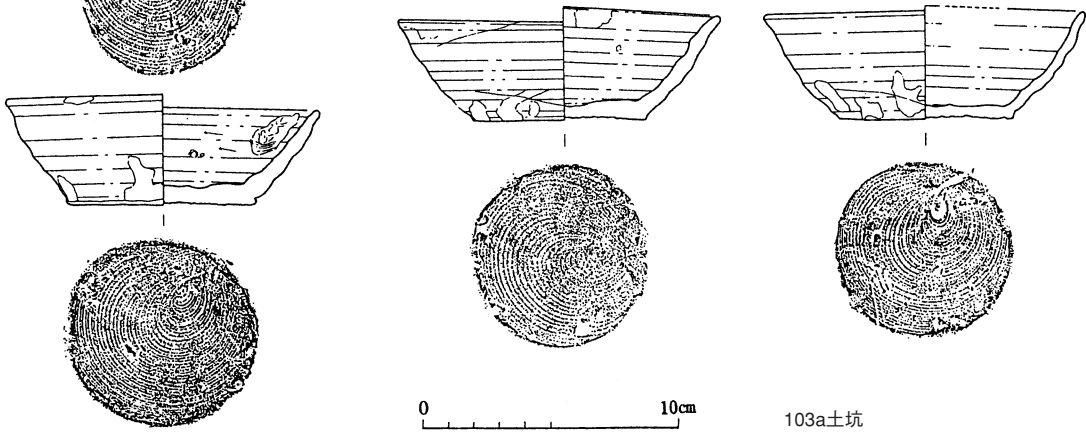
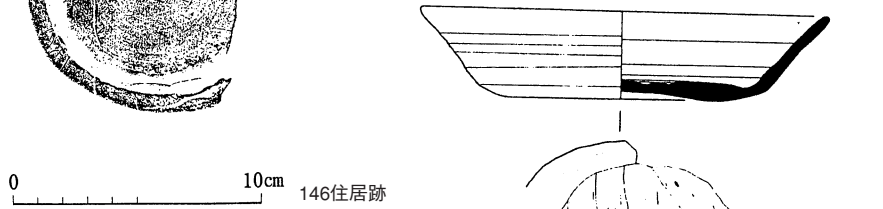
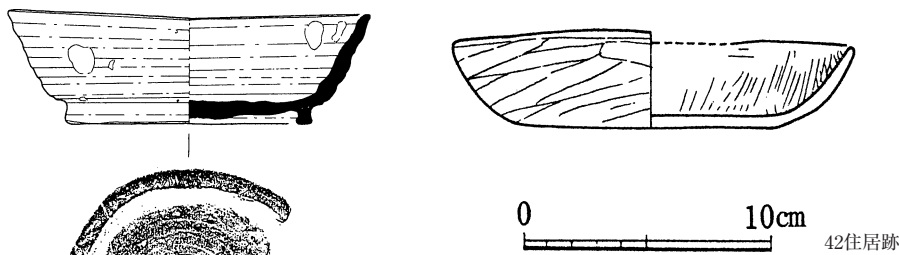
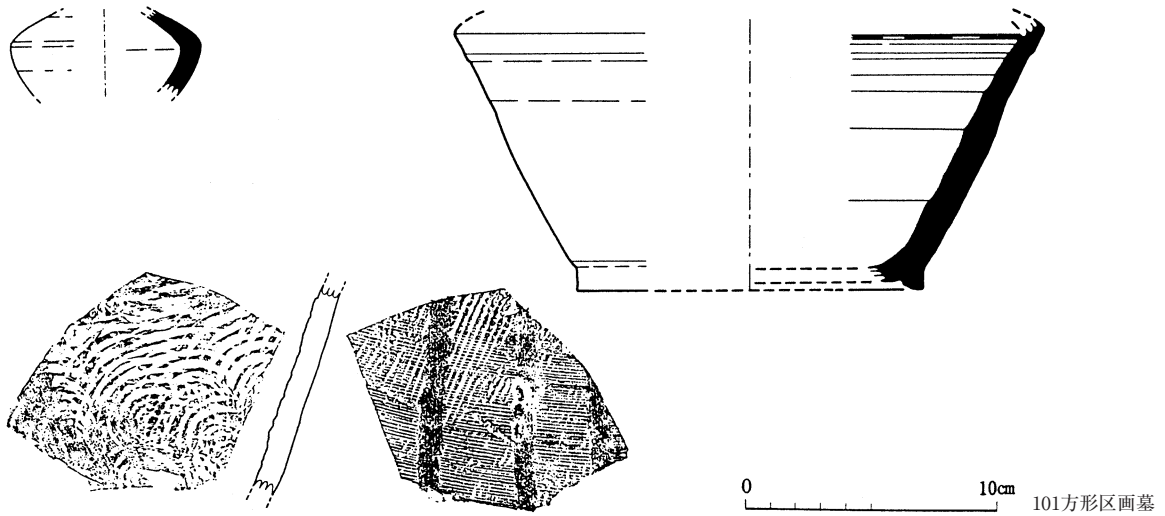
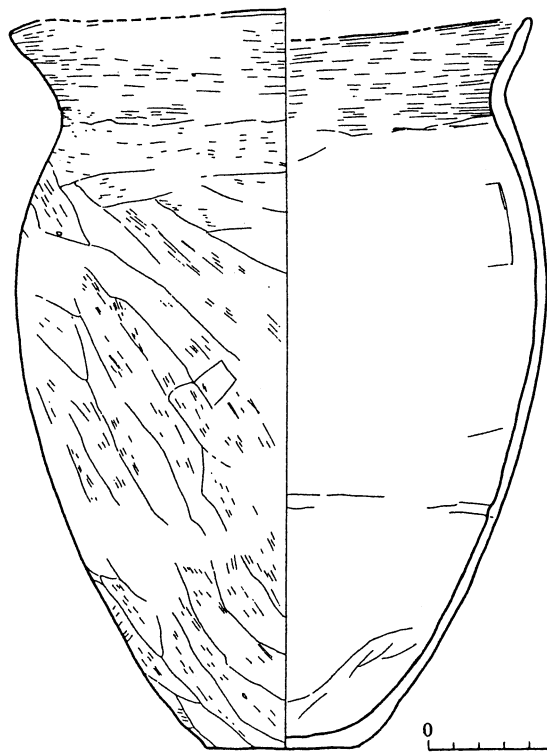
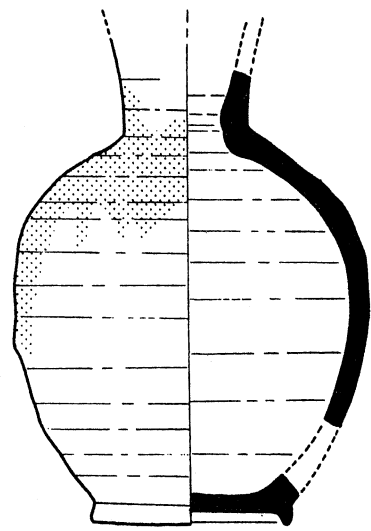


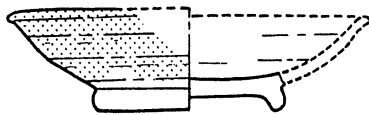
図6 千草山遺跡 101方形区画墓 42・103・146住居跡、103a土坑出土遺物（報告書等より）



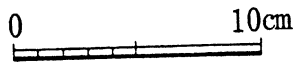
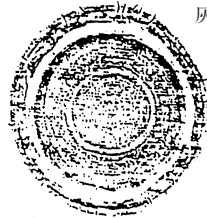
104遺構 (蔵骨器)



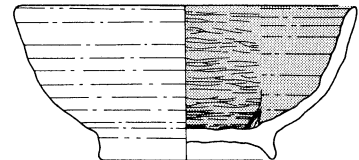
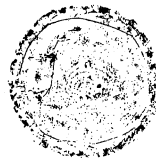
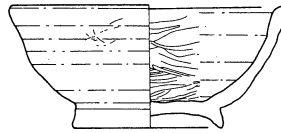
50住居跡



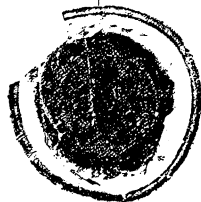
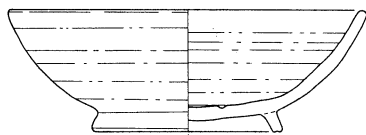
灰釉陶器



24住居跡



103溝



緑釉陶器

図7 千草山遺跡104遺構、24・50住居跡、103溝出土遺物及び緑釉陶器 (報告書等より)

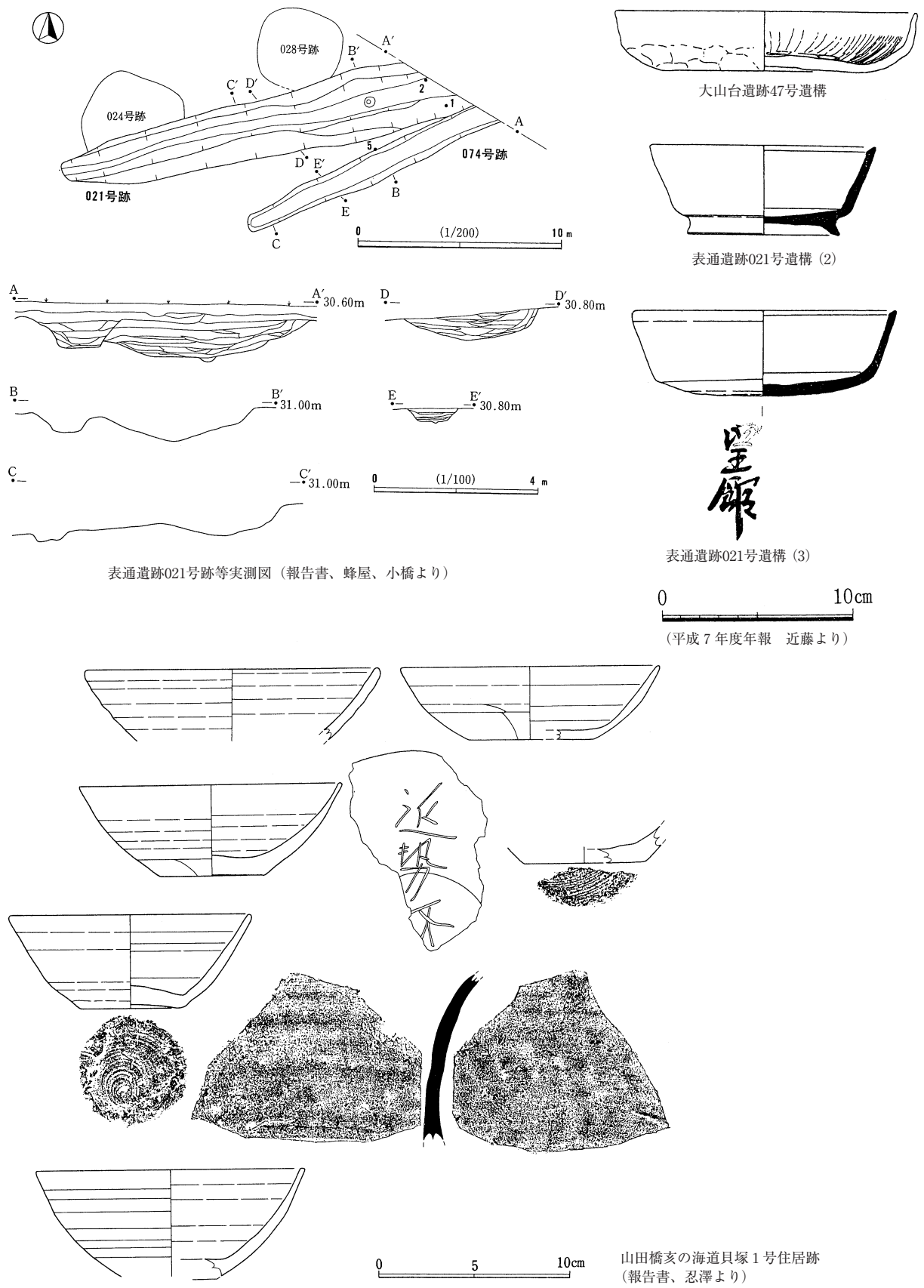


図8 山田橋大山台遺跡47号遺構出土土器、山田橋表通遺跡021号遺構及び出土土器  
山田橋亥の海道貝塚1号住居跡出土土器

#### 〈表1の参考文献等〉

- 半田堅三1997「5. 山田橋大塚台遺跡」『市原市文化財センター年報平成5年度』（財）市原市文化財センター P30、31
- 1995「12. 千葉県市原市山田橋大塚台遺跡」『日本考古学年報46（1993年版）』日本考古学協会 P446～469
- 牧野光隆1999「山田橋大塚台遺跡」『第14回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 平成10年度』（財）市原市文化財センター P10、11
- 近藤 敏1998「7. 山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報平成7年度』（財）市原市文化財センター P22～24
- 2000「8. 山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報平成9年度』（財）市原市文化財センター P30～32
- 1998「山田橋大山台遺跡」『平成9年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会 P18、19
- なお、期待される大山台遺跡の本報告書は平成15年度に大村氏により出版の予定である。
- 蜂屋孝之・小橋健司1999『山田橋表通遺跡』（財）市原市文化財センター P8～11、99、108
- 忍澤成視1992『市原市山田橋亥の海道貝塚』（財）市原市文化財センター P6、7
- 田所 真1996「7. 山田橋亥の海道遺跡」『市原市文化財センター年報平成8年度』（財）市原市文化財センター P21～24
- 田中清美1989「4. 溝状遺構」『千葉県市原市千草山遺跡・東千草山遺跡』（財）市原市文化財センター P330～335
- 谷島一馬・對馬郁夫他1977『千葉県市原市宮前遺跡第1次・第2次調査報告書』千葉県市原市教育委員会 P50～55 63～65
- 浅利幸一氏ご教示。浅利幸一1999「五. 市原市山田橋稲荷台遺跡」『歴史散歩資料 市原市郡本周辺の遺跡と文化財』市原市地方史連絡協議会 P21～26。なお、本報告書は、平成14年度に刊行予定である。
- また、氏は当地の古代道路遺構は8世紀代までさかのぼらない見解を示されている。
- 鶴岡英一2000「第2章稲荷台遺跡」『平成11年度市原市内遺跡発掘調査報告』千葉県市原市教育委員会 P2～17
- 浅利幸一1991「第3章まとめ」『市原市郡本大宮遺跡』（財）市原市文化財センター P96～99

#### 4. 建立の背景と変遷予想

建立の背景については、3でもふれたように須田勉氏による、上総国分寺の造寺造瓦が地元郡司階層及び在地土豪層による協力関係で成立し、その後の天平19年の豪族に対する優遇策により、国分寺造営協力の見返りとして成立した見解がある。また、上総国分寺の瓦造りは、山田郷・湿津郷・市原郷の3郷で当たり、「それぞれ別の瓦工集団で、その招致は3度にわたると想定される。——改作期の造瓦は、僧・尼寺を含め市原郡司主導のもとに郡内各郷が参画するかたちで行われた。平安時代に入ると、——経営や修造に関し、僧寺に対しては市原郡、尼寺は海上郡が関与した形跡がある」としている<sup>(20)</sup>。

このように千草山廃寺跡は市原郡市原郷に属し、その造営者が市原郷人クラスの者とされている<sup>(21)</sup>。また、本体部分の昭和38年の確認調査について、その概報から読みとれるのは、全面瓦葺の一字建物である点と、出土土器類から奈良末～平安時代の時期である点が推測されるということである。

ここで北側部分の変遷をみると8世紀から9世紀初めにかけては、わずかな堅穴住居と墓域のみで、9世紀の中頃より10世紀にかけて堅穴住居や掘立柱建物が増大している。また二重の区画する溝は底部から出土した土師器坏から9世紀末～10世紀初めの時期が考えられ、主軸方位がN-35°-Eで、基壇の主軸方位とは10度程違うが東に偏っている点は注目される。また溝と同様の主軸方向を示す掘立柱が3・103・104と有り、出土遺物は明確ではないが溝との関連性が窺える。さらにこの時期は堅穴住居跡がVI-aとVI-bに大きく2時期に分けられ、VI-a期の堅穴からは、「寺」名墨書土器や神功開竇などが出土し、小鍛冶遺構も認められる。

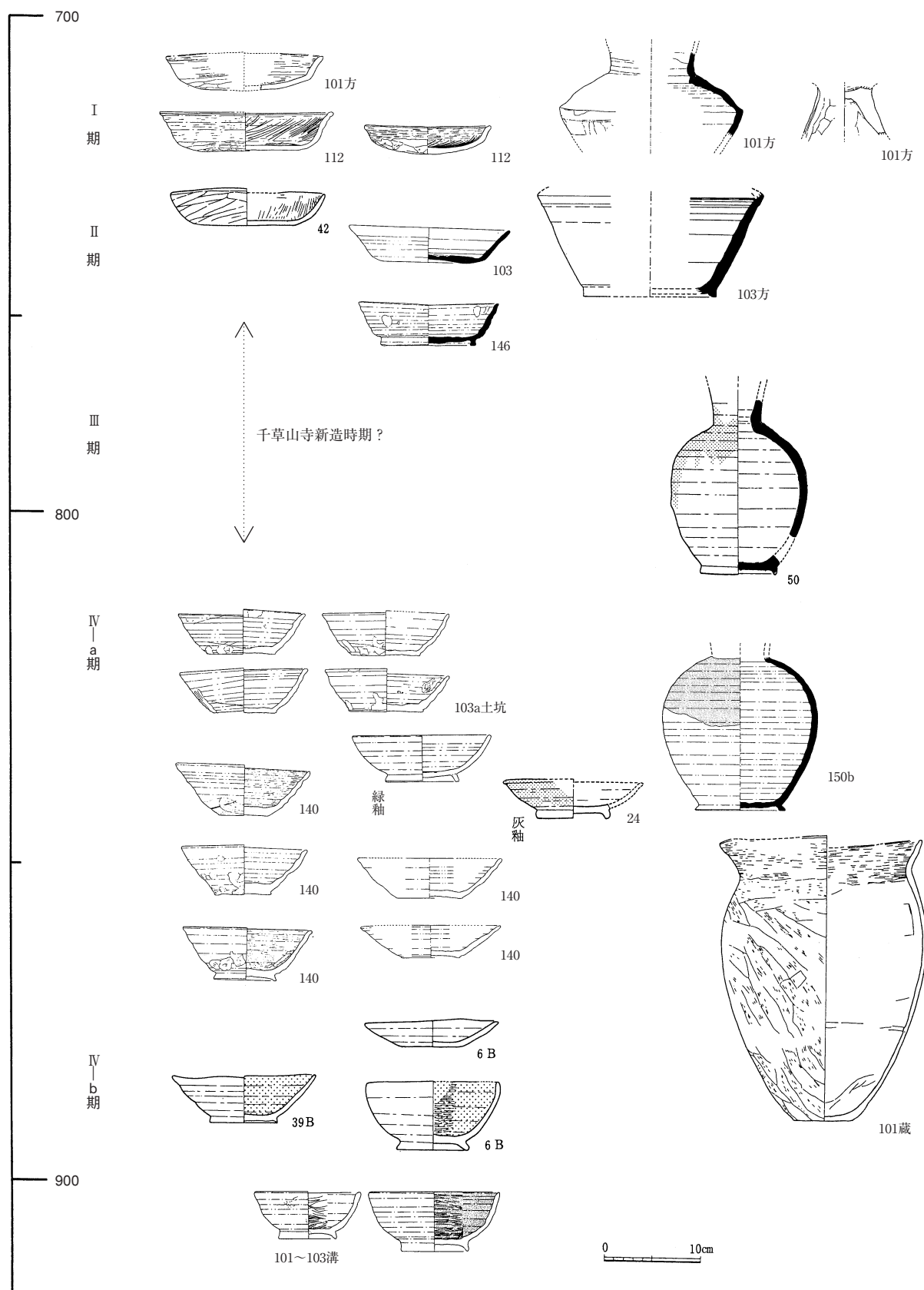
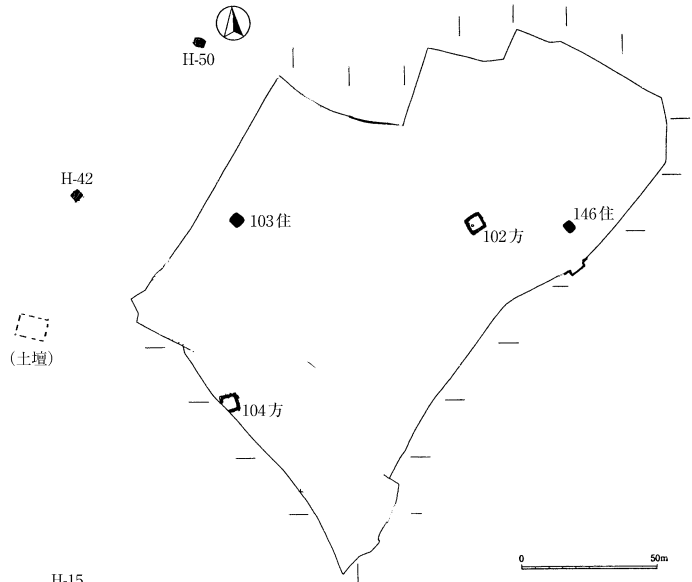
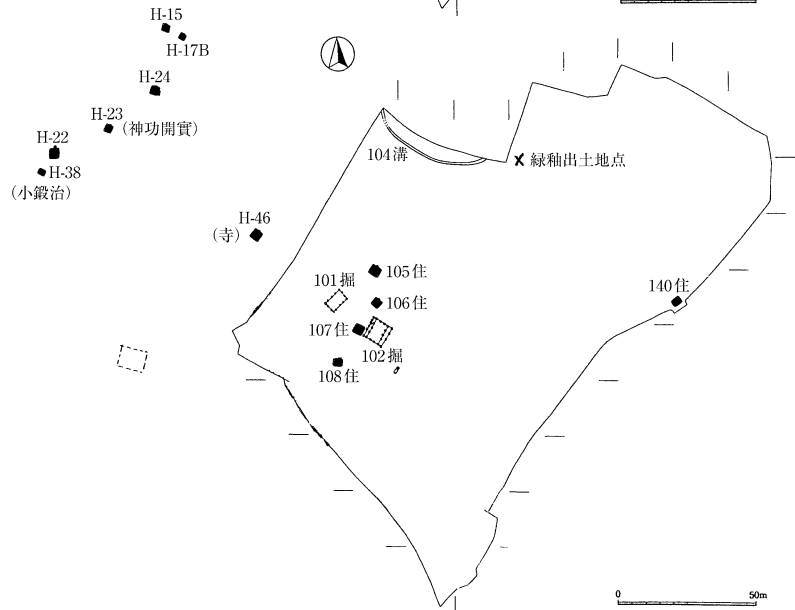


図9 関連遺構出土の主要遺物の流れ

I 期（8世紀後半～9世紀初め）



II 期（9世紀前半～半ば）



III 期（9世紀後半～10世紀初め）

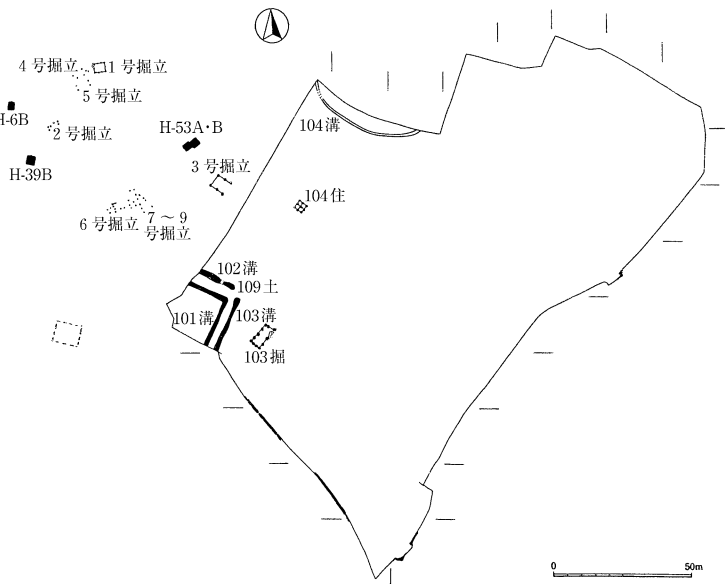


図10 千草山廃寺跡変遷予想図



以上の点などから千草山廃寺跡の変遷を大胆に推測すると次のようになる。

千草山廃寺跡Ⅰ期 早ければ8世紀後半から遅くても9世紀初めに、一字で総瓦葺の建物が建立される。

Ⅱ期 中心部は不明であるが9世紀半ば頃より掘立柱建物跡を伴う竪穴住居群が存在する。(関連施設か)

Ⅲ期 9世紀末から10世紀にかけて二重の溝に区画された中心部とそれに伴う掘立柱建物及び竪穴住居群が存在する。

これは、北側の竪穴住居跡などの遺構群が寺院関連施設と考える点と、二重の溝が千草山廃寺跡を区画している点と考える点が前提となり、千草山廃寺跡の存続期間が小食土廃寺跡と同じく100年間または、それ以上を推定することになる。

一方、千草山廃寺跡を上総国府の一施設とする見解があり<sup>(22)</sup>、廃寺跡の谷を隔てた西側に存在する官道及び隣接する祭祀遺跡とも官衙とも言われる稲荷台遺跡など上総国の重要な地域という点から「この一帯を1時期の国府」として考える説も有力になってきている。もし一時期の国府関連施設として千草山廃寺跡を捉えたと、現状では上記Ⅰ～Ⅲ期に瓦葺建物や溝に区画された空間など数種の施設が想定されることとなり、捉え方も大きく違ってくる。

また、周辺の遺跡でも竪穴住居などが同様の変遷を概略的だが窺える。8世紀中頃には「岡館」の墨書土器や畿内系の土器の存在があるが遺構数は少ない。しかし、稲荷台遺跡と大宮遺跡では千草山遺跡より早く8世紀第3や第4四半世紀頃より遺構の増加がみられ、谷を挟んだ隣接地でもあり、その関連性が注目される。

## 5. さいごに

本稿では、建立前とその後の歴史的環境復元に重点を置いた。その結果、寺跡とした場合、大胆にも北側の遺構を付属施設として考え、その時期も100年間またはそれ以上の存続期間を推定した。また、官衙の一施設とした場合は、二重区画する溝の存在<sup>(23)</sup>など長期間多種多様な施設の存在することになる。寺か官衙か、その性格を断定するには未だ資料不足であり、更には近接する稲荷台遺跡や大宮遺跡、表通遺跡との関連などの問題も含めて追求しなくてはならないだろう。

市原郡には一郷一寺が千草山廃寺を含めて存在すると言われ、郷としての寺の新造なのか、それとも国家的な仕組みの中で設立したのか。疑問は増えるばかりである。

麻袋16袋あると書かれている確認調査の瓦や北側地区出土の瓦の再検討、確認調査の出土土器や実測図などの記録類、さらには北側地区出土の土器の再検討も、明確な姿の見えない千草山廃寺跡の究明のためには今後是非とも必要な作業となろう。

## 註

(1) 平野元三郎1964「市原市上総国府関係遺跡」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会 P47,48

(2) 安藤鴻基他1979『千葉県市原市千草山遺跡発掘調査報告書』市原市 千草山遺跡発掘調査団

田中清美他1989『千葉県市原市 - 千草山遺跡・東千草山遺跡』(財)市原市文化財センター

(3) 田中清美1995「謎の千草山廃寺跡(予察)」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅲ (財)市原市文化財センター

- (4) 須田 勉1978「上総国分寺の造瓦組織と同範瓦の展開（試論）『史館』第10号 史館同人 P64～67  
1980「古代地方豪族と造寺活動－上総国を中心として－」『古代探叢』I 早稲田大学出版部 P450、451、455、463～467、469
- (5) 安藤鴻基1979「第5節上総国に於ける平城宮系古瓦の伝播と展開を巡って」『千葉県市原市千草山遺跡発掘調査報告書』市原市他 P403
- (6) (5)と同じ
- (7) 須田 勉1974「国分寺造営期にみる中央と在地－上総国分寺改作期の造瓦から－」『古代』第97号 早稲田大学考古学会 P70～97(88)  
1980「古代地方豪族と造寺活動－上総国を中心として－」『古代探叢』I 早稲田大学出版部 P466～469
- (8) (7)と同じ
- (9) 笹生 衛1993『「村落内寺院」の再検討』関東古瓦研究会資料  
1994「房総の古代仏教と集落遺跡」『記念講演会資料 東上総の古代仏教』（財）山武郡市文化財センター  
1994「古代仏教信仰の一側面－房総における8、9世紀の事例を中心に－」『古代文化』第46巻第12号
- (10) (1)と同じ
- (11) (4)と同じ、史館第10号のP64、古代探叢IのP436、437、457、464、466
- (12) 方形周溝状遺構については、多くの研究があるが、特に木對和紀氏の一連の論文は注目される。  
木對和紀1987「房総における改葬系区画墓の出現期－方形（円形）区画改葬墓の提唱－」『市原市文化財センター研究紀要』I P47～71  
1997「房総における改葬系区画墓の出現期II」『生産の考古学』同成社 P99～108  
一方、田中新史氏による研究では「全てを終末期の小規模古墳と理解」されており、古墳の系譜か新しい墓制かが重要な課題となっている。  
田中新史1980「古墳時代終末期の地域色－東国の地下式土壙墓を中心として－」古代探叢I 早稲田大学出版部 P437～475（472）  
千草山廃寺跡建立前段階での方形区画墓などの墳墓群の被葬者と千草山廃寺建立者との関連も千草山廃寺を考える上で重要な課題となる。方形区画墓は設置場所が原野を開墾し広範囲にみられるが、これは「非常に占拠した山野を寺領として施入することによって、合法的に私有する口実を考え－」と須田氏の言われるように土豪層などの土地私有化として捉えることも出来る。（註4．須田氏論文）また、奉免上原台遺跡のように、方形区画墓と「菩提寺」を備えた新興在地勢力の存在（註13．白井氏論文）や方形区画墓が群を形成する場合と千草山の様に単発的に出現し、後にも続かない場合があり、歴史的背景が異なるのではという指摘もあり（高橋康男2002『向原台・東向原台遺跡』）、方形区画墓を巡る問題は様々な究明が必要である。  
なお当項では遺構名の番号に付す「第」と「号」は省略した。
- (13) 白井久美子1992「上総西北部における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 P367～385（378～379）
- (14) 田中新史1980「古墳時代終末期の地域色－東国の地下式土壙墓を中心として－」『古代探叢』I 早稲田大学出版部 P459～462
- (15) (14)と同じ、P462、463。同様の地下式改葬墓は、福増山ノ神遺跡でも検出されている（浅利幸一1989『福増山ノ神遺跡発掘調査報告書』（財）市原市文化財センター P33、34など）。
- (16) 小出紳夫他2002『坊作遺跡』（財）市原市文化財センター P236、245など
- (17) (12)の木對氏の研究
- (18) 今泉 潔1997「上総国の古代道」『平成9年度企画展 図録「古代の道と旅」』千葉県立房総風土記の丘 P14
- (19) (財)日本地図センター発行の昭和36年撮影の1/5,000縮尺の航空写真による。  
しかし、現在は不法な？産業廃棄物の捨場や焼却場として消滅した可能性が大きい。
- (20) 須田 勉1994「国分寺創建の諸問題」『シンポジウム「関東の国分寺」資料編』関東古瓦研究会・シンポジウム「関東の国分寺」実行委員会 P7、12～13
- (21) 須田 勉1978「上総国分寺の造瓦組織と同範瓦の展開（試論）」『史館』第10号 史館同人 P65
- (22) 高橋康男1994「第5章市原台地の状況」『市原市上総国府推定地確認調査報告書(1)』市原市教育委員会 P19～21(21)  
田所 真1996「7．山田橋亥の海道遺跡」『市原市文化財センター年報平成8年度』（財）市原市文化財センター P21～24  
木下 良1999「上総国府の調査」『上総国府推定地「歴史地理学的調査報告書」』市原市教育委員会 P25
- (23) 田中新史氏は終末期方墳の可能性も指摘している。  
田中新史2000『上総市原台の光芒』市原古墳群刊行会 P51

## 註以外の参考文献

- 荒井建治2000「国府の中の「寺」」『東京考古』18 東京考古談話会
- 今泉 潔1990「第2編 瓦と建物の剋相試論—大塚前遺跡出土瓦の分析—」『千葉県文化財センター研究紀要12 生産遺跡の研究1—瓦—』(財)千葉県文化財センター
- 1995「瓦と建物、そのイメージと原風景に関する覚書」『千葉県史研究』第3号 千葉県
- 大坪宣雄2000「民間における仏教の受容—神奈川県内の村落内寺院と火葬墓—」『神奈川県考古学会1999年度考古学講座かながわの古代寺院』
- 大野康男・笹生 衛他1993『房総考古学ライブラリー 歴史時代(1)』(財)千葉県文化財センター
- 大村 直1993「ムラの廃絶・断続・継続」『市原市文化財センター研究紀要』II (財)市原市文化財センター
- 小田富士雄他1993『開館10周年記念展『終末期古墳の世界』—高松塚とその時代—』北九州市立考古博物館
- 垣内和孝1995「研究ノート 古墳時代及び古代集落研究のための予察—福島県郡山市域における集落—」『考古学研究』第4巻第2号
- 木對和紀1987『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』(財)市原市文化財センター
- 笹生 衛1998「古代集落と仏教信仰」『第3回特別展 仏のすまう空間—古代霞ヶ浦の仏教信仰—』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 1999「君津地方の古代の寺—初期寺院・山寺・供養堂・村の堂—」『平成11年度ふるさと発掘—君津地方の古代の寺—』第6回君津郡市文化財センター遺跡発表会資料 (財)君津郡市文化財センター
- 笹生 衛1999「2. ムラの信仰」『平成11年度出土遺物展(25周年記念展) 今、古代史がおもしろい—出土文字から探る房総の古代—』(財)千葉県文化財センター
- 須田 勉、石井則孝他1978『企画展 房総の古瓦』千葉県立房総風土記の丘
- 須田 勉1990「創建期国分寺の造営過程」『考古学ジャーナル』318 (株)ニュー・サイエンス社
- 1999「東国における古代民間仏教の展開」『第13回企画展 仏堂のある風景—古代のムラと仏教信仰—』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 関口 満1998「IV集落の寺を建立した人々」『第3回特別展 仏のすまう空間—古代霞ヶ浦の仏教信仰—』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 富真嗣史1995「上総・安房国の奈良・平安時代の墓制について」『第5回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—』東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会
- 高橋康男2000「千草山遺跡」『歴史散歩資料 市原市能満周辺の遺跡と文化財』市原市地方史研究連絡協議会 P15~18
- 2002『市原向原台遺跡・東向原台遺跡』(財)市原市文化財センター
- 立和名明美1998「第5章まとめ」『主要地方道生実・本納線埋蔵文化財調査報告書2』(財)千葉県文化財センター
- 田所 真・松本太郎1997「千葉県」『古代生産史研究会'97シンポジウム東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- 田所 真1998『千葉・市原再発見』その3—古代の人々と幻の上総国府—』南総公民館平成10年度「郷土学習」資料
- 仲山英樹1992「古代東国における墳墓の展開とその背景」『研究紀要』第1号 (財)栃木県文化振興事業団
- 西村克巳1985「東国出土の暗文を有する土器(下)—東国出土の暗文土器」『史館』第18号 史館同人
- 林部 均1992「律令国家と畿内産土師器—飛鳥・奈良時代の東日本と西日本—」『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会
- 平川 南1990「二. 東国の村落」『日本村落史講座』第2巻 雄山閣出版(株)
- 広瀬和雄1994「考古学から見た古墳の村落」『岩波講座日本通史』第3巻古代2 (株)岩波書店
- 前沢和之1992「11. 関東の古代寺院」『新版古代の日本』第8巻関東 (株)角川書店
- 宮本敬一1986『市原の遺跡(1) 史跡上総国分寺跡—国分僧寺とその時代—』(財)市原市文化財センター
- 森本 剛2000「千葉県」『古代仏教系遺物集成・関東』考古学から古代を考える会
- 安村俊史1997「幾内における火葬墓の出現—終末期群集墳から火葬墓へ—」『第41回埋蔵文化財研究集会 古墳時代から古代における地域社会発表要旨資料』埋蔵文化財研究会
- 吉村武彦1993「いわゆる「公地公民制」は存在したか」『新視点日本の歴史』第3巻古代編II (株)新人物往来社

※拙稿執筆後、須田勉氏が極めて内容豊富で示唆に富んだ論文を発表された。千草山遺跡を国分寺に付随したと想定される山林寺院の候補にあげられ、その内容については、(1) 立地では平地部との比高が50m以内の丘陵端部や狭い平坦地—まさに、静寂な阿蘭若処にふさわしい地。(2) 国分尼寺から1km以内にあり、尼僧については「朝に山寺に行き、夕に本寺に帰る」といった禅行形態がとられていた可能性がある。(3) 中心となる仏堂建物については、総瓦葺に想定される基壇建物—地形的制約や瓦の出土量から複数存在する可能性は少ない。仏堂以外の付属施設については、倉・僧坊・屋などがある。(4) 出土遺物から判断される山林寺院の終焉の時期はほぼ9世紀中頃に国分寺が衰退に向かう時期と重なる。など具体的に様々な指摘が加えられており、千草山廃寺研究に多くの新しい知見を提示してくれている。

須田 勉2002「国分寺・山林寺院・村落寺院」『季刊考古学』第80号 (株)雄山閣 P106~110

# 県内における中世村落の発展について

－百姓居宅の区画から－

櫻井敦史

## 1. はじめに

昨今、中世遺跡の発掘事例は膨大な数にのぼり、各分野の研究もめざましく進展している。房総も例外ではなく、過去10年の間に、城郭以外の発掘調査事例が急増した。今回とりあげる中世村落についても、ようやく考古学的視点から研究を進めることが可能になってきたと思う。しかしこの分野の研究は、畿内および周辺地域が抜きんでてリードしている状況で、房総を含め関東地方においては、いまだ途についたばかりと言ってよい。

本稿はこのような状況をふまえ、市原市内の中世村落遺跡を簡単に紹介しつつ、関東中世村落の考古学的研究に向かい、留意すべき問題を提起するに止まるものである。今後強力に推進されるであろう中世村落研究に、些かでも寄与すれば幸いである。

## 2. 中世村落研究の流れ

### ①文献史学

中世村落については、文献史学および民俗学の分野において戦前から研究の蓄積があったが、急速な進展をみせたのは1960年代以降である。具体的には惣村の研究と表裏一体をなすもので、行政組織としての「村」の発生を、惣村の自治組織に求めようとするものであった。結果、鎌倉期以降、着実に認められる民衆の成長が高く評価されたが、反面、村落研究のフィールドは惣村が発展した地域に占められることになり、それを先進地域とする、誤った認識を定着させる要因となったことも否めない。

この時期、特筆すべきは石田善人の研究であろう<sup>(1)</sup>。石田は惣村を、村人の生活・生業に関する必要があれば規制を加えるといった、自治の単位として捉え、いわゆる行政単位としての村の発生をそこに求めた。また、惣村の定義として、以下の4点を挙げている。

- ①村落の農民が独立した小経営を営んでいること。
- ②村落が再生産の手段として不動産をもち、灌漑用水を自主管理していること。
- ③年貢の地下請が成立していること。
- ④村掟をもち、違反者を処罰する自検断が成立していること。

この定義は骨子において、惣村＝自治村落のメルクマールとして定説化している。さらに石田は、惣村による自治を、戦国大名の領国支配によって消滅してゆくものと捉えた。戦国期を、惣村自治が大名権力により敗退していく過程と見る歴史観は、当時広く受け入れられた。また、戦国期を在地領主制の発展と捉える大名領国制論にも影響を与えたが、後にコミュンとしての国一揆、あるいは村落自治を生み出した農民闘争を過大評価し、“それをねじ伏せながら完成した”近世封建社会を暗黒の時代とする歴史観を助長させることにもなった。

この時期から70年代にかけては、村落内における民衆の階層が明示されるに及び、その階級的問題

について研究が進んだ。総じて、村落の発展の中に民衆の対権力闘争過程を追求・評価する傾向があり、その達成度は時代区分論にも影響を与えるものであった。村落構成員に認められる階層から、領主制論・ウクラード論にからめた研究が盛んに進められている。

視点としては、いわゆる「下人・所従」などを奴隷（家父長的名主層に隷属）と見るか、農奴（個別経営の自立化を認める）と見るかが問題となり、自治村落の成立期ならびに中世前期のムラに対する評価も、それぞれ微妙に異なるものとして把握された。

前者の場合、奴隷を所有しない一般百姓の経営基盤を脆弱と見て、農奴による小経営（封建的生産関係）は成立せず、この時期（中世前期）において村の成立はあり得ないという見解をとった。

この立場では、まず安良城盛昭の研究が挙げられよう。安良城は中世全般を通じ、名主が家父長の奴隷主としての性質を全うしたと論じた。戦国大名の支配を荘園領主のそれと本質的に変わらぬものと捉え、荘園制の消滅と農奴的小経営の展開画期を太閤検地に求めている<sup>90</sup>。

永原慶二は、12世紀末から14世紀中葉までを中世前期と捉え、この段階に小経営の発展を認めず、下人・所従を奴隷的なものとした。中世前期の荘園公領制を支える職の体系に着目し、この時期を「職制国家」と規定している。それ以降の（古代的とする荘園公領制の）衰退過程を中世後期と捉え、封建社会が本格的に展開されるものとした<sup>91</sup>。ただし永原は中世前期における封建制の萌芽を必ずしも否定するものではなく、農奴制と対をなすべく理解されてきた在地領主制<sup>92</sup>を封建領主として評価し、荘園領主はこれと異質のものとした。永原の論旨は、荘園制社会を封建国家の成長期と捉える荘園公領制論<sup>93</sup>や領主制を評価しない権門体制論<sup>94</sup>とは見解を異にするものである。

これらに対し後者の立場では、農奴による農民的な小経営を認め、かつ高く評価し、地縁的な村落共同体＝「村」の成立をこの段階で認めるものである。

黒田俊雄は、中世前期における東寺領太良荘を例に、村落が①名主、②小百姓、③下人・所従、の階層で構成されていたことを指摘、①は勸農・年貢納入などの責任をもつ村役人的存在、②は年貢納入義務のある独立百姓、③は①などに人格的に従属するものとした<sup>95</sup>。そして①を核に構成員を特定、特権化した村落を「座的構成」と述べている。これについては、中世前期村落に広く見られる特徴として把握されるようになる。

戸田芳実・河音能平・大山喬平らは、安良城らによって奴隷ないしはコロヌスとして把握された下人身分を農奴として捉えた。また、荘園制社会を封建社会とみなし、領主制論については荘園領主・在地領主ともに封建領主階級を支えるものとした<sup>96</sup>。在地領主層と人民の階級格差を示すうえで有効な視点となった。

いずれにしても、中世前期村落の運営主体は、特定身分化された富豪百姓によるものと一般に理解されている。これに対し中世後期村落については、石田以来惣村の農民経営のありかたに研究の比重が置かれてきたが、封建制論の行き詰まりから脱却するかのようになり、視点は次第に多彩となった。

80年代半ばを過ぎると、中世後期村落の政治的・法的側面に迫り、その国家性を究明する動きが顕在化した。藤木久志は、石田がかつて提示した不動産などの村有について実証的に掘り下げている。村に法人格を認め、村有財産を侵されざる「公界」そのものとし、その確立をもって惣村の成立（ほぼ14世紀）と唱えた。さらに自検断にも注目し、紛争の自力救済措置のみならず、村の権力機構を支えた側面を評価し、法人格としての村が村掟に従い厳然と行ったものとしている<sup>97</sup>。

また、勝俣鎮夫は、中世後期の村落自治をさらに評価し、自立した惣村の社会的地位を明確化した。戦国期に年貢の村請が認められることを指摘し、それが戦国大名の領域支配に否定されたのではなく、近世村落に受け継がれたことを強調した<sup>(10)</sup>。この点については、太閤検地を「封建革命」と評価する安良城盛昭の意見とは対照的であるが、戦国期に後の日本社会の骨格となる「村」の形成を認めた見解は、近年の戦国期村落研究の起点となるものであった。

この段階において、村落自治に関わる研究は国家論にまで昇華し、佳境を迎えたものといえる。また、かつては、研究のベースとなった惣村が畿内近国に密集したため、房総を含む東国に対し、「村落自治」という歴史的画期が曖昧にされる傾向があった。たしかに惣村の成立は、荘園領主と守護権力間の対立という背景の下に達成されてきた。このため実質的な荘園領主の収益権がいち早く失われた（荘園領主が関与しえない）東国のムラでは、農民闘争が脆弱で、自治村落も生まれづらいという見解が成り立つのである。この場合は畿内近国が特殊な地域ということになるが、村落自治と表裏一体をなす土民の成長を、限定地域にのみ評価するのには問題がある。

これに対し、太閤検地による村切り政策を独立法人格としての「村」の認定と捉え、近世村落とそれ以前の村落に連続性を求める見解は、中世東国における村の成立を是認すべき素地を急速に醸成したものである。実際近年は、後北条氏に関わる膨大な史料考証により、戦国期の東国においても村請が認められることが確認されている<sup>(11)</sup>。

## ②考古学

一方、考古学的立場からの村落研究は、発掘資料の蓄積に裏打ちされ、70年代から80年代にかけて急展開した。おもに荘園や村落の景観復元を目指した研究が主流といえる。金田章裕はこの観点から、古代以来の村落について以下のように類型化している。

- ①集 村：10戸以上が密集
- ②疎 塊 村：10戸以上がゆるやかにまとまる
- ③小 村：9戸以下がゆるやかにまとまる
- ④孤立荘宅：一カ所の屋敷が独立

そして、古代は②と④が一般的で、地域差もあるが、平安末から集村化がはじまり、畿内では14世紀以降に一般化したと述べている。この背景として、土地利用の集約化や郷の細分、荘園の一円化などを挙げている<sup>(12)</sup>。

宇野隆夫は、近年増加した荘園遺跡を全国規模で集計し、生産や流通など多角的な視野から、荘園村落の実態を研究している<sup>(13)</sup>。村落の移行については、概略下記の流れで把握している。

- ①拠点の荘所遺跡：律令期に発展、王朝国家期には諸階層の営みが独自色を強め、11世紀段階で廃絶する。
- ②散居・短期型集落：古代末期に見られる。
- ③集住集落：12世紀以降に発生し、16世紀に完成。成長過程は地域差があり、畿内（大和）では13世紀末に短期間で進行。東日本では独自に密集して集住する傾向は少なく、居館を中心に、その中や周辺にゆるやかに集住する傾向がある。在地領主の指導力が相対的に強かったと推察。
- ①の廃絶には、背景として寄進地系荘園の増加と荘園整理を挙げ、西日本では下位の人々の成長、東日本では在地有力層の領主的成長を、直接的な原因と推察している。

②については、小経営の自立・発展を示すものと評価している。

③については、民衆主導による集村（西日本）と、方形館中心の集村（東日本）に大別できる傾向があり、それぞれは対極のかたちを持ちながら、荘園領主の支配を間接化させたとする。ただし、中世の集落は再編をくりかえしながら集住が強まっていく傾向にあり、集住と散居をくりかえすことから、散居を遅れたありかたと見なすことはできないとしている。

なお、関東の村落研究については、資料上の制約から、もっぱら景観史的な視点にのみ終始する傾向があった。先に文献史学の立場で述べたように、かつて東国を封建的先進地域と見る意識から、自治村落の研究には消極的になり、城館＝領主階級を中心に据えた歴史叙述が横行したことも一因であろう。さらに考古学における中世史研究は、城館の研究から始まったと言ってよく、発掘調査事例もほとんど城館に限られていた。したがって、民衆史・村落史も、城館研究の中で（城館のあり方から）探求せざるを得ない状況が80年代にはあった。それでも地道な調査により、村落史の片鱗に触れる優れた研究が進められている。

井上哲朗は、領主側を中心とする城館研究のありかたに疑問を呈し、村落側の視点から城郭研究を行なっている<sup>(14)</sup>。井上は小規模の城郭に着目し、名主層を核とする村落が築城主体と推定した。井上の提示した「村の城」という概念は、研究者に大きな影響を与えることになった。

90年代は、80年代に引き続き、調査成果の豊富な城郭や墓域の資料から戦国期村落の発展を捉えようとする動きが主であった。柴田龍司は発掘調査の成果から、中世を通じた村落発展の画期を15世紀中葉に認め、これ以降の村落は城郭を核に集村化する傾向を見出した<sup>(15)</sup>。中世前期から続く支配体制が崩壊し、新たに台頭した領主層が領民の安全保障の責務を遂行した結果、小領主層の屋敷が城郭化し、村落型城郭が広く出現したとする。しかし戦国大名の広域権力が成長すると、個々村落の軍事力を統合することによりそれらが空洞化し、領主層の責務であった領民安全保障も戦国大名の統一権力下に吸収されたとする（都市型城郭の成立）。柴田の論考は、いわゆる「地下請」の存在、つまり村落自治の発展過程を戦国期段階でどう評価するのか不透明であるが、小領主を核とする村落の安全保障問題に主眼を置いた点で、文献史学に認められる戦国期の国家論と相通じるものがあり、特筆に値するものと思う。

一方、城郭に次いで調査事例の多い墓域については、笹生衛が房総の事例を類型化している<sup>(16)</sup>。笹生は、西日本の進んだ研究成果と比較しながら、惣墓へ発展しない房総中世集団墓の傾向を浮き彫りにしている。葬送儀礼および墓域景観の研究は、村落研究に直接関連する事項であるだけに、今後の動向が期待されよう。

なお、文献および考古学的史料が豊富な地域では、総合的・学際的な観点から村落研究に着手している例もある。県内では袖ヶ浦市横田地区における荘園調査が挙げられよう<sup>(17)</sup>。このような研究の進展は、担当者の緻密な現地踏査による努力が大であり、のちに活性化した村落研究への起爆剤としても作用したと思われる。

近年になると、村落そのものの調査事例が増えたことから、考古学的な研究がにわかに活発化した。また、景観復元のみならず、その歴史的意義についても顧みられる傾向が強まり、より厚重的な研究成果が期待できるようになったものと思う。笹生は先述の荘園研究成果を基に、県内の村落遺跡と比較検討しながら、近世村落景観との連続性を重視する研究を進めている<sup>(18)</sup>。笹生は実証的かつ多角的な

視点から資料を吟味し、景観研究としては現状で望み得る高みに到達したものと思われる。

現在2000年代を迎えるにあたり、今明らかにされつつある村落景観下において、民衆の動向をどのように把握し、いかに評価するのか、新たな段階が期待されよう。

### 3. 発掘調査の成果に見る市原の村落

#### 池ノ谷遺跡（13世紀中葉・散村・宅地）<sup>(19)</sup>

養老川中流域の河岸段丘上に位置する。1983から84年にかけて、財団法人市原市文化財センターが発掘調査を実施した。中世の遺構としては、ピット群・方形土坑・溝などが該当する。溝でしっかり囲われた敷地内に、貧粗な掘立柱建物があったものと思われるが、建替えは認めがたい。散村形態をとる一般農民宅であろうか。遺物は少量で、6a

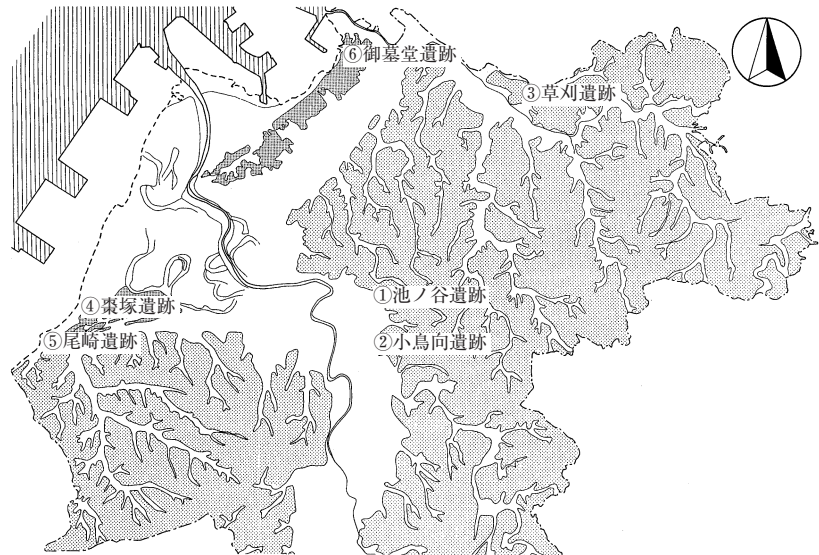


図1 市原の中世村落遺跡（1:100,000）

型式期の常滑産甕が認められることから、13世紀中葉の遺構と思われる。

なお、鎌倉末期の文献史料によると、当域は市西郡海郷に属し、地頭領主有木氏の配下にあったものと思われるが<sup>(20)</sup>、村落の動向については明らかでない。

#### 小鳥向遺跡（15世紀の墓域、ないしは13～14世紀の鋳物師作業場）<sup>(21)</sup>

養老川中流域の沖積平野に面した微高地上に位置する。1999年・2003年に財団法人市原市文化財センターが実施した発掘調査により、南北朝期の鋳物師の活動が確認された遺跡である。方形竪穴遺構やピット群、方形土坑、土壙墓群、井戸群などが検出された。方形竪穴遺構は支柱跡を有し、一部の遺構の壁に根太状棒材の差込跡と思われる窪みが確認できたことから、簡素な上屋に加え、床を張っていた可能性が濃厚である。しかし平均面積2.59㎡と小規模で、すべてが埋め戻されていることなどから、15世紀中葉までの殯屋的葬送施設ではないかと指摘されている<sup>(21)</sup>。ただし遺構の使用時期と性質は必ずしも明らかでない。遺物量は15世紀が中心だが、13世紀中葉から14世紀初頭にかけてもピークがあり、古瀬戸中期様式Ⅰ期の水滴を伴う方形竪穴遺構もあることから、全体が鎌倉末から南北朝期に遡る可能性もある。ただし、居住性が劣悪なことと、区画がなく敷地概念が認められないことから、この場合は鋳物師の作業場として捉えることが妥当と思われる。いずれにせよ通常の集落とは異なるが、一応参考に挙げるものである。中世陶磁器類は145点で、1㎡当たり0.2点となる。

なお、本地域は中世において上総国新堀郷に属していた。新堀郷の村落構造については、建武5（1338）年6月「上総国新堀郷給主得分注文」（『金沢文庫古文書』所収）<sup>(22)</sup>により、以下の点を確認することができる。





图2 池ノ谷遺跡平面图<sup>(19)</sup>

- ①年貢に対し、金沢称名寺・国衙・地頭がそれぞれ得分を持つ。
- ②課税対象の屋敷地を構える名百姓の台頭（排他的所有権の世襲、家の運営）。
- ③給免田を与えられる鋳物師・猿楽などの職能民が村落内に存在。

これらの事項から、14世紀前半において、農民の階層化が進み村落構造も複雑化したことが知られる。背景としては上級領主・国衙・地頭などの領知権の錯綜があり、その間隙を巧みに縫って村落が成長したのであろう。有力百姓を核とする確固たる村落の存在がこの時点で垣間見ることができる点で特筆に値しよう。

#### 草刈遺跡（戦国期か・集村・宅地）<sup>(23)</sup>

村田川沿いの開析谷に面した台地斜面に位置する。財団法人市原市文化財センターにより1983年に発掘調査が実施された。斜面部に切土整地による平坦面を造成し、溝で方形の敷地囲いを整然と施す。母屋はきわめて貧粗な掘立柱建物と想定され、下層人民の宅地群であったと思われる。遺物も乏しく時期不明であるが、周辺の状況から、戦国期、15世紀くらいの遺構群と考えている。

なお、小谷向かいの台地上には戦国期の墓域で著名な草刈六之台遺跡があり<sup>(24)</sup>、本集落の共同墓地であった可能性がある。

#### 棗塚遺跡（戦国前期の街村集落・宅地）<sup>(25)</sup>

海岸平野に面した標高5～6mほどの砂堆列上に位置し、財団法人市原市文化財センターにより1997年に2回にわたる発掘調査が実施された。幅約5.3mの道路遺構の両側に展開する街村集落で、掘立柱建物を主とする。生活遺構は道路遺構から平行に30m離れた溝を境とし、区割りの計画性が認められる。家単位においては、道路遺構から垂直方向に小溝を敷設し、短冊状に敷地を囲ったものと思われる。ピット群の配列は不明瞭で、母屋は簡素な掘立柱建物と想定されるが、建替えを認めてよいものと思われる。調査範囲内において井戸跡は検出されず、共同井戸に頼る階層の宅地と言えそうである。敷地内には土壙墓からなる墓域があり、宅地に付属する個人墓の可能性が高い。数世代にわたるものと思われ、この階層においても排他的な宅地所有権を有していたことが窺える。これら土壙墓群は、宅地正面の道路遺構に接するものと、宅地背面に占地するものがあり、興味深い。遺物的には15世紀後半にピークがあり、この時期に比較的計画性をもって成立した街村集落と言えそうだが、戦国後期は移動したようで、近世村落に発展しない。

#### 尾崎遺跡（戦国前期の集村・宅地）<sup>(26)</sup>

海岸平野に面する台地に樹枝状に入り組んだ谷頭部に位置する。財団法人市原市文化財センターにより1994年に発掘調査が実施された。調査区が限定され詳細は不明であるが、ピット群・地下式壙2基・方形竪穴状遺構（方形土坑含む）7基・土坑24基・溝4条などが検出された。掘立柱建物からな

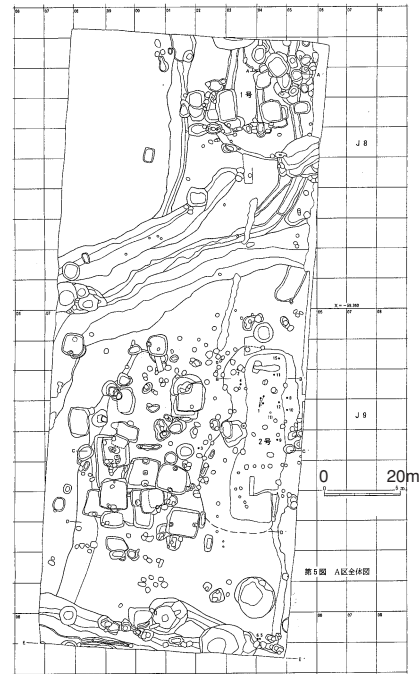


図3 小鳥向遺跡平面図<sup>(21)</sup>

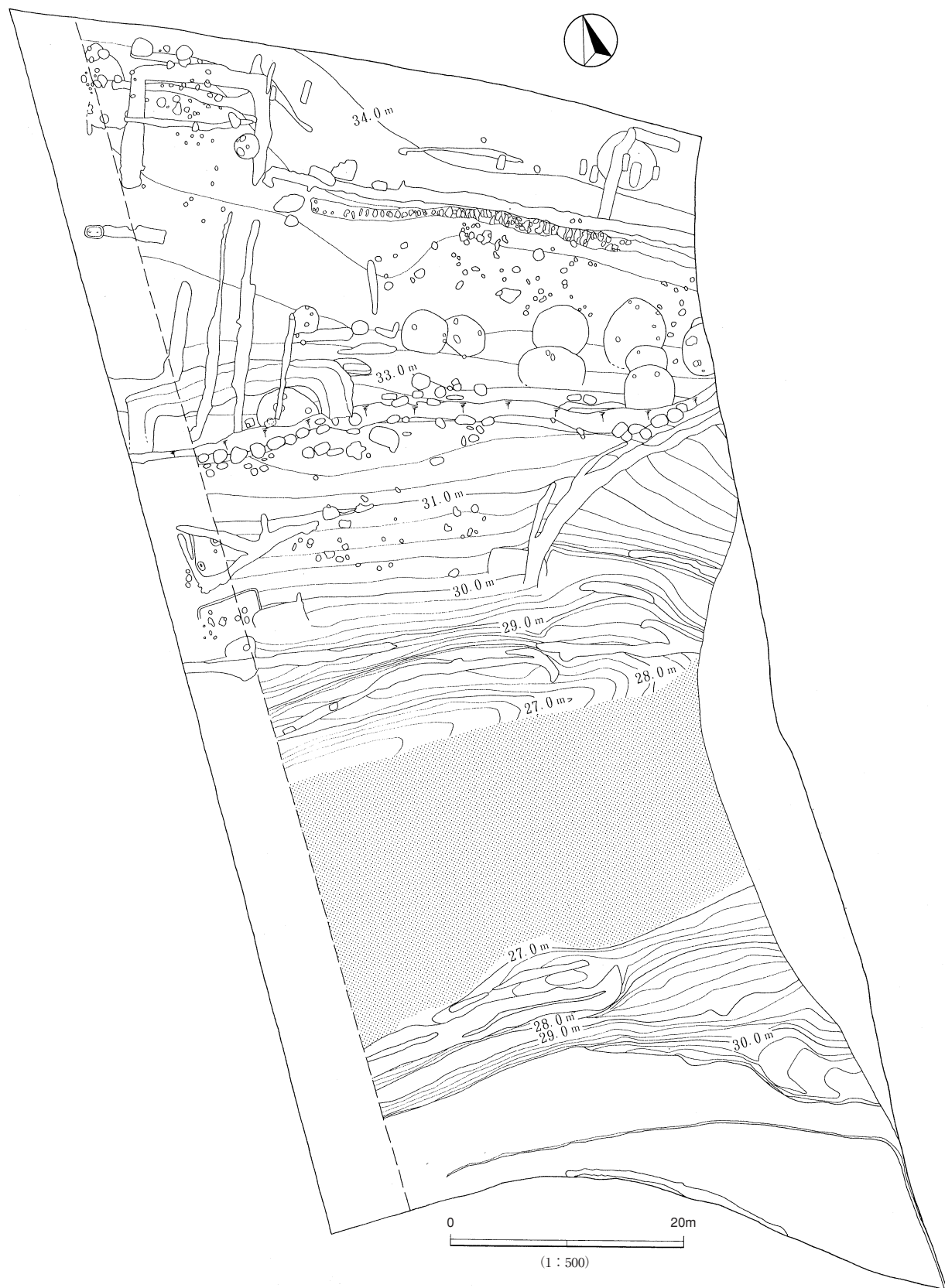


图4 草刈遺跡平面図<sup>(23)</sup>

る最低2個の宅地があったものと思われ、切土による台地整形と溝による敷地囲いを施す。ピット群の配列は概ね不明瞭だが、母屋の建替えを認めて良いと思われる。出土遺物は51点のみで、遺物密度も1㎡当たり0.09点と少ない。古瀬戸後期様式期、特に15世紀中葉から末にピークがあるので、この時期の宅地（ないしは屋敷）跡と考えられる。

なお、方形竪穴遺構群はこれ（ピット群）に先行するが、敷地概念は認められない。遺構規模や密集状況など、小鳥向遺跡の事例と酷似する。常滑産捏鉢など、13世紀の遺物も若干含まれるため、方形竪穴遺構を居住施設と捉えた場合において、これらが中世前期のムラの一形態を示す可能性がある。

遺跡は戦国大名後北条氏と里見氏の境目城として知られる椎津城の台地付け根に位置するが、城との有機的な関係については明らかでない。椎津城拡張期の16世紀には廃絶しているようだ。

#### 御墓堂遺跡（戦国前期以降の街村集落・宅地）<sup>(27)</sup>

東京湾に沿って海岸平野を縦断する砂堆列に接し、財団法人市原市文化財センターにより1996年から毎年発掘調査が実施されている。遺跡自体は集落そのものではないが、多量の中世遺物が出土していることから、近接地の集落から流入したものと考えられている。平成8年度の調査地点における遺物密度は1㎡当たり0.54点で、先に述べた小鳥向遺跡（0.2点）や尾崎遺跡（0.09点）より多い。より豊かで活発な物流を彷彿とさせる。陶磁器類は古瀬戸後期様式Ⅲ・Ⅳ期に並行するものが多く、15世紀中葉から後葉にかけてが集落成立の画期と捉えられる。

近接する砂堆列上には房総往還が通り、近世宿場町として発展してきた。しかし飯香岡八幡宮は戦国期の建築様式を残し<sup>(28)</sup>、周囲に15世紀の石造物群も点在している<sup>(29)</sup>。発掘調査の成果を加味すると、近世八幡宿の前身たる街村集落は、戦国前期に砂堆上に成立したと言えそうである。もっとも近世宿場への連続を積極的に認めるに当たり、考古学的に問題がないわけではない。瀬戸・美濃大窯並行期の遺物が減少傾向にあるからである。しかし全く認められなくなるわけではないので、大窯製品の大量一括購入がなされなかった（画期的な都市改造がなされなかった）程度の問題として捉えておく。

なお、天正9（1581）年には、この地域を支配していた原氏が八幡郷内に楽市設置を認めている<sup>(30)</sup>。これは活発な村落自治活動を裏付けるものと言えよう。

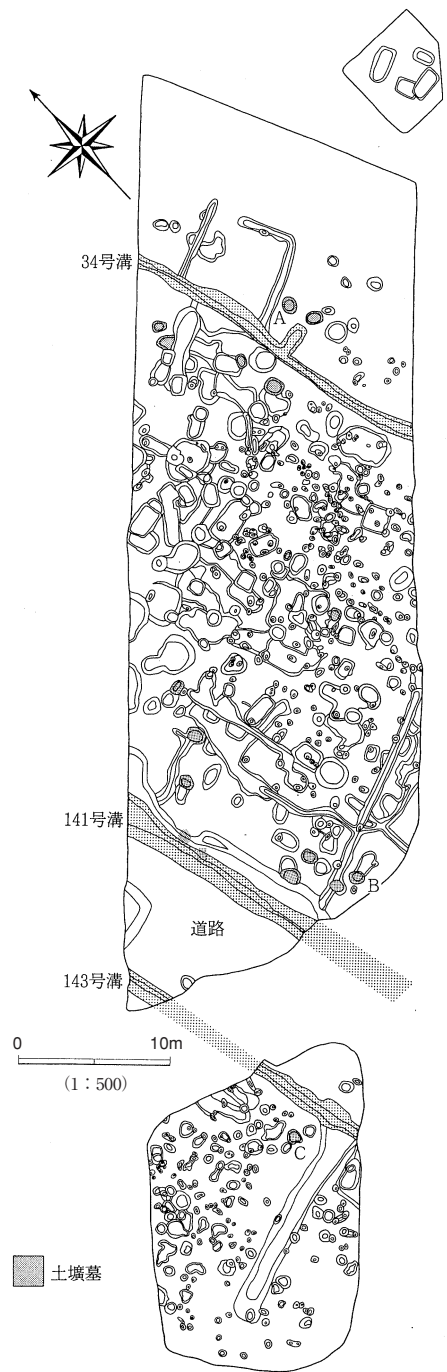


図5 棗塚遺跡平面図<sup>(25)</sup>

#### 4. 県内中世村落形態の推移

きわめて簡単ではあるが、これらの成果を基に、県内中世村落形態の推移をまとめると次のようになる。

##### 1 中世初期（12世紀）

：定住性の低いムラ。

県内全般に良好な集落遺跡は存在しない。民衆の住居と思われる君津市泉遺跡Ⅱの例<sup>(31)</sup>によると、貧粗な掘立柱建物が少数隣接する。住居の囲い（敷地明示）は認められず、共同井戸を使用する。

##### 2 鎌倉前期～後期（13世紀）

：散村。自然堤防や河岸段丘などの微高地に立地。

上層農民クラスの屋敷は掘立柱建物を中心に構成されるが、簡素である。屋敷地を溝囲いなどで明

示する（市原市池ノ谷遺跡・袖ヶ浦市文脇遺跡<sup>(32)</sup>・君津市外箕輪遺跡<sup>(33)</sup>など）。敷地の推定規模は700㎡から1800㎡と、ある程度の格差が窺える。一般農民の住居は君津市泉遺跡Ⅰの例が該当すると思われる<sup>(34)</sup>。母屋の建て替えにより数世代にわたる相続が想定でき、個人井戸も有することから、排他的所有権の存在が窺える。このため、遺構では検出されていないが、宅地境を明示する何らかの囲いを有したものと想定される。植栽列や小柴垣など、簡単なものであったろう。下層人民の住居は竪穴建物の例がある。宅地に簡単な溝囲いを施すが、全周せず不完全である（袖ヶ浦市文脇遺跡の396号住居址<sup>(32)</sup>）。

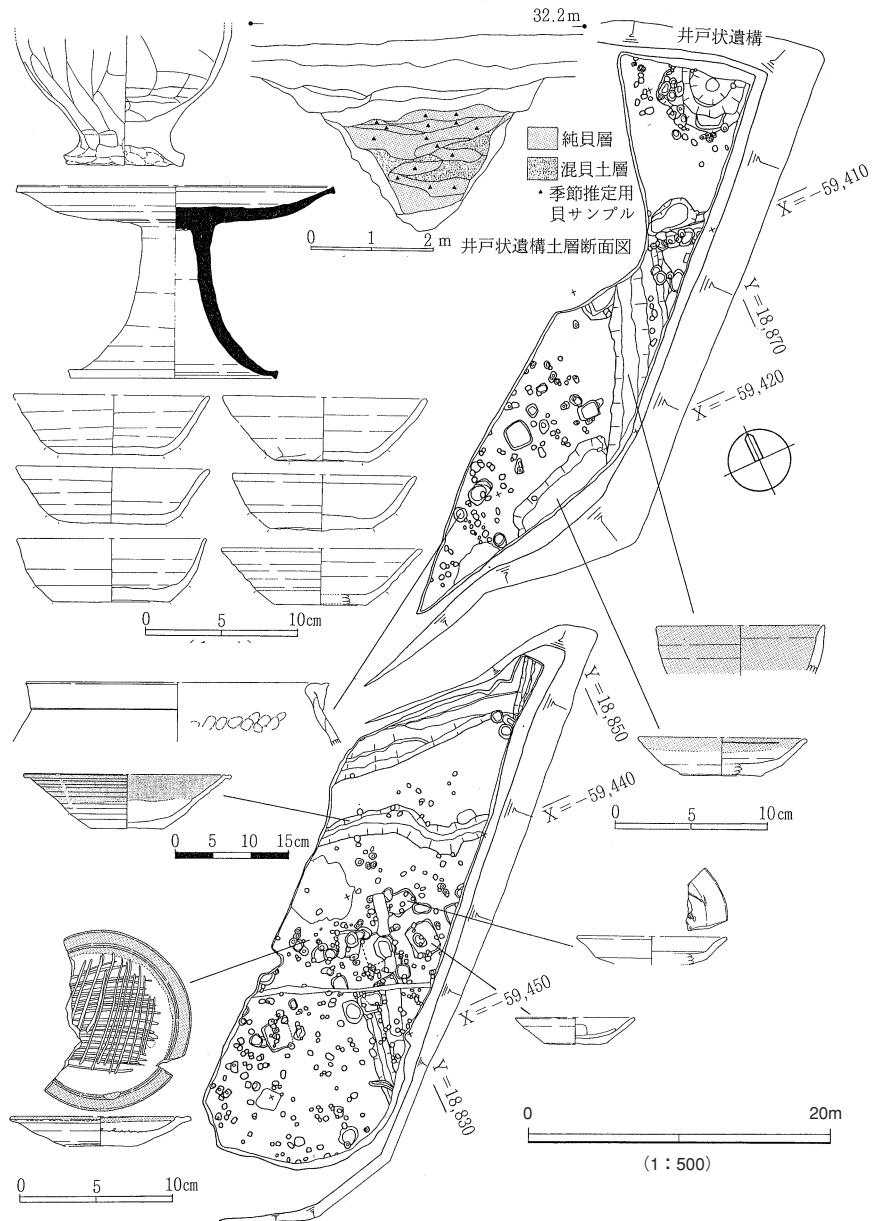


図6 尾崎遺跡平面図<sup>(26)</sup>

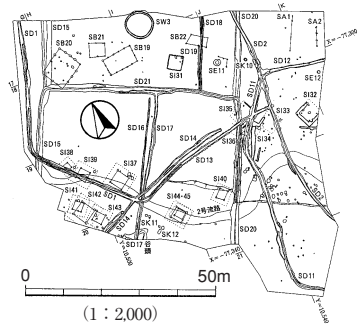


図7 君津市泉遺跡Ⅱ<sup>(33)</sup>

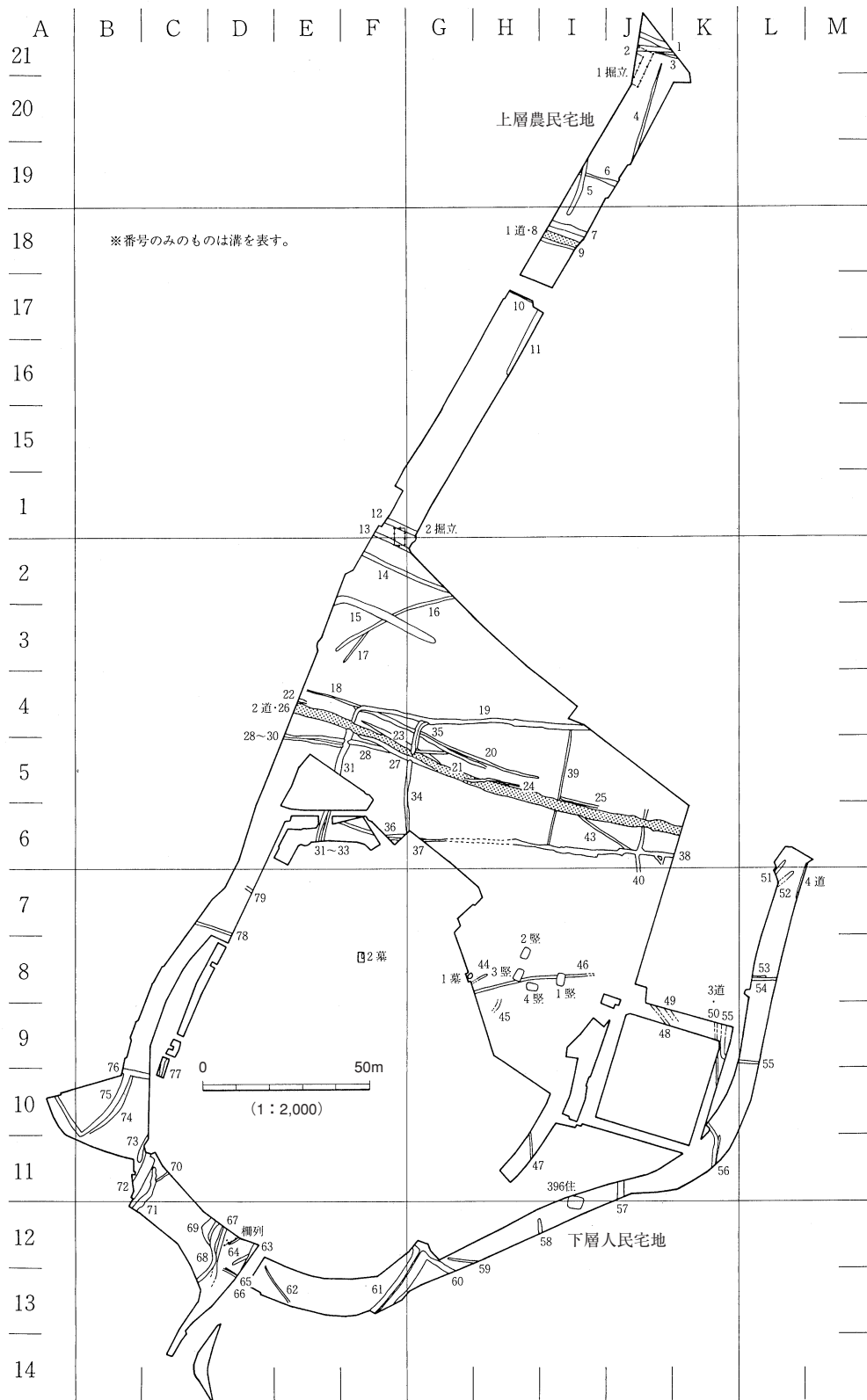


図8 袖ヶ浦市文協遺跡<sup>(30)</sup>

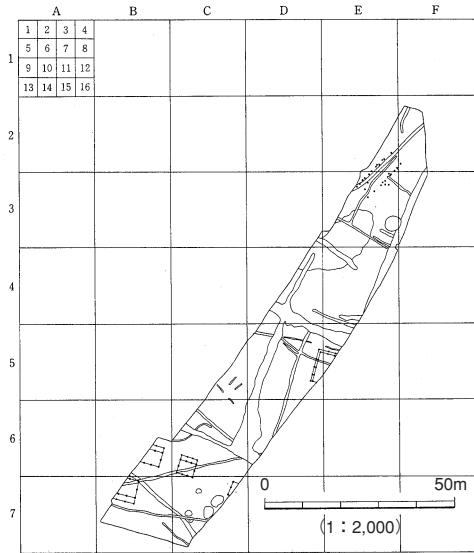


図9 君津市外箕輪遺跡<sup>(31)</sup>

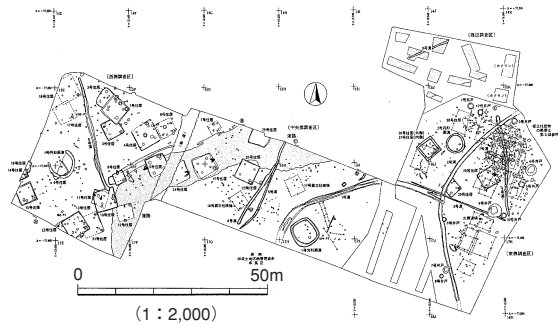


図10 君津市泉遺跡 I<sup>(32)</sup>

3 鎌倉後期～室町期（14世紀）：集村化が進行（居宅が集合する傾向）。

木更津市芝野遺跡<sup>(35)</sup>の宅地群は、泉遺跡における前段階の例より若干下層の農民宅と思われるが、敷地囲いはより整然としている。下層人民宅の明確な例は認められない。

ただし市原市小鳥向遺跡に見るような小規模の方形竪穴遺構群が、これに該当する可能性がある。地点的に密集し、敷地囲いは認められない。

4 室町～戦国前期（14世紀後葉～15世紀後葉）：集村。

台地上に新展開する例が多い。通常の農村集落と、街道沿いに展開する街村集落とに大別できる。遺物量から見ると、このスタイルは14世紀に発生し、15世紀にピークを迎えたものと思われる。

農村集落としては、千葉市西屋敷遺跡<sup>(36)</sup>・佐倉市高岡遺跡群<sup>(37)</sup>などがある。宅地は密集傾向にあるが、溝と台地整形を併用した厳然たる敷地区画を有する。集落に隣接し共同墓地がある。

街村集落は市原市棗塚遺跡や袖ヶ浦市山谷遺跡<sup>(38)</sup>がある。貧粗な掘立柱建物からなる。集落域に隣接して共同墓地がある。

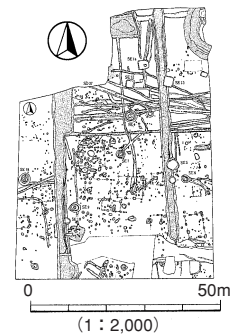


図11 木更津市芝野遺跡<sup>(34)</sup>

5 戦国後期（15世紀末～16世紀）：集村。

市原市棗塚遺跡・同市御墓堂遺跡・佐倉市高岡遺跡群などにおいて、少量ではあるが瀬戸・美濃大窯期に並行する遺物が認められるので、村落形態も一般に前段階（戦国前期）を踏襲していたものと思われる。また、茂原市新小轡遺跡<sup>(39)</sup>に見られる宅地群は、小百姓レベルにおいてもしっかりした宅地区画を有する。H地点中央の個人井戸を持つ中層農民宅に比べ規模的には落ちるが、区画の程度は同等である。

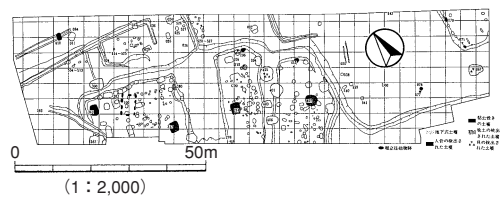


図12 千葉市西屋敷遺跡<sup>(36)</sup>

#### 4. まとめ

中世初期、特に12世紀前葉については、調査事例が極めて乏しいことが特徴であろう。百姓の請作

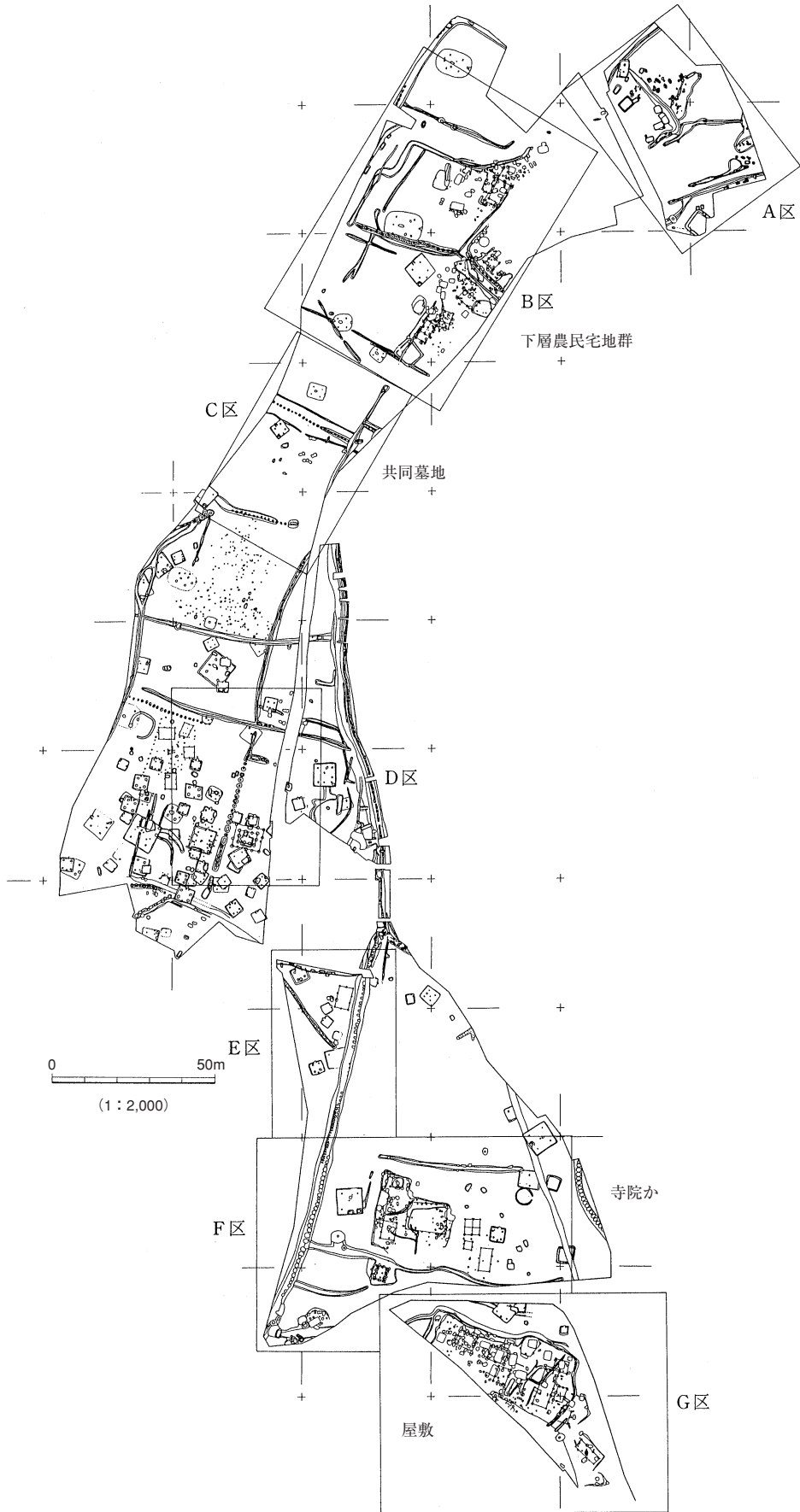


図13 佐倉市高岡遺跡群<sup>(37)</sup>



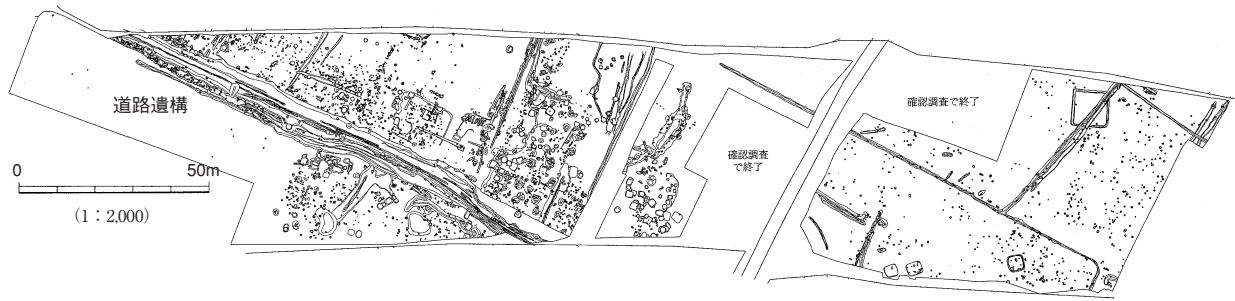


図14 袖ヶ浦市山谷遺跡<sup>(35)</sup>

と流動性が想定される時期だけに、土地に縛られない居住のありかた（発掘調査で捕捉しにくい）が一般的であったのだろう。これは民衆レベルにおいて中世的な所有権、ひいては農民的な小経営が未発達な段階の特徴と思われ、人民の「家」がいまだ存在しない段階と捉えられる。当然、村落も未成立と考えたい。なお、12世紀の遺物（主に龍泉・同安窯系青磁）が検出された遺跡は多く存在するが、全体量的に決して豊富ではなく、13世紀中葉以降に盛期を持つものがほとんどである（君津市泉遺跡・郡遺跡・外箕輪遺跡など）。これらの事例をもって中世初期の村落形態を想定することは困難であろう。たしかに在地領主制の発展と村落の発生を表裏一体と捉えるならば、12世紀後半を鎌倉期村落の萌芽期として評価しうる。しかしこの段階における明瞭かつ具体的な民衆の生活遺構が検出されにくいという現状を鑑みても、その成長を考古学的に評価することはできず、農民（特に中・小規模）の独立経営の発生、「家」の成立、不動産の排他的所有権の確保、などの諸要点を認めることもできない。とにかく12世紀を通じ村落は未成立段階と捉え、人民は在地領主の指導力に依存した経営を余儀なくされていた状況であるが、12世紀後葉段階において、後の村落に継承される景観的営みが発生したものと推測する。

鎌倉期になると、県内の調査事例が急増する。遺物としては6型式期の常滑製品が多いようである。村落内において、上層農民・一般農民・下層人民など、村落構成員のある程度の階層化が認められる。屋敷地・宅地のほとんどが小溝で簡単に境界を区画しており、不明瞭ながらも民衆が宅地所有権を主張しはじめていた状況を想定できる。ただし敷地境が極めて曖昧な竪穴建物の例などから、村落内において「家」を構成せず不動産の排他的所有権（ないしは占有権）を持たない階層の人民が引き続き存在していたことを窺わせる。

鎌倉後期から室町期は集村化の傾向がある。また、それぞれの宅地規模から、村落内の階層化がさらに進行していることを窺わせる。

一般農民宅は、貧粗な掘立柱建物の周囲を区画する前段階の形態を踏襲するが、区画自体は溝を主とし、やや明瞭・整然となる。

一方、下層人民住居は、県内に確実な事例がなく不明確であるが、小規模方形竪穴群を住居と捉えた場合は該当するであろう。遺構群として密集するが個別の区画は認められず、敷地概念が無い。個人財産の排他的所有権が広く定着し、生産余剰の蓄積が民衆レベルで進んでいく状況にあって、個人財産所有権が極めて限定される隷属的な下層民、ないしは流浪民などが思い浮かぶが、居住性の低さから葬送施設との指摘もある。今後の資料蓄積が待たれるところであろう。

室町から戦国前期は、集村を主にするが、その形態は多様化する。これは地方における生業の多様

化と民衆による生産余剰の蓄積を裏付ける事象である。遺構個別の帰属年代が明らかにされないため年代幅を置いたが、遺物的には古瀬戸後期様式後半期に並行するものが多く、戦国期初頭（15世紀中葉）に一つの画期を置いてよいものと思う。それまでの微高地にはあまり認められず、台地斜面、あるいは台地上に集落移動する傾向がある。これをもって農村集落全体の動向と捉えてよいか否かは微妙であるが、近世村落の原型たる形態が整いつつある時期に該当するものと判断したい。屋敷地や宅地は溝や台地整形などで厳然と区画し、これまでの概念的な敷地表示方法と一線を画する。また、集落に付随し、一定規模の共同墓地が営まれていることもこの時期以降の特徴であろう。

戦国後期は基本的に前段階の集落スタイルを踏襲するものと思われるが、瀬戸・美濃大窯並行期の遺物量が大幅に減少する傾向にある。しかしこの現象は房総各地の中世遺跡に広範に認められる現象であり、一概に集落の移動・消滅を論じることは危険である。後期様式期の遺物はよく使い込まれた個体がほとんどで、大窯創業期にわたる長期間の使用が想定でき、一つの鄙型の消費様式として捉えることも可能である。言い換えれば、東京湾岸の豊かな物流も、消費文化としての評価を積極的に下せないことになる。

なお、確実に近世村落に移行する事例が考古学的に認められないことから、戦国末期から近世初頭にかけて、何らかの村落構造の変化を想定することも可能である。敷地区画は前段階に比べ発達しており、小百姓が封建国家を支える経営単位として完成しつつあることが窺える。

以上、県内遺跡の事例から、中世房総における村落発展過程に触れてみた。今回については、住居敷地境を示す表示（溝や植栽列など）の有無と程度に注目し、それぞれの階層が持つ敷地意識の変化を基に村落の成長を追ってみた。敷地概念は、民衆が不動産に対する排他的な諸権利を取得した結果発生するものであり、それが強固な所有権として浸透する経過も追い得るものと思うからである。このことは、その階層における独立した農業生産の有無、ないしは発展程度を示すメルクマールとしても機能するので、重要な問題と捉えてみた。資料上の制約もあり、今ひとつ満足を得ない結果となったが、単なる景観復元とは異なる視点として、今後さらに踏み込んで考察したいと考えている。ただし、村落発展過程の研究は、生産面や経済面をも加味し、多角的に究明することが重要である。ゆえに「村落」を謳う以上、本稿は極めて片手落ちなものと言わざるを得ないが、とりあえずご容赦頂きたい。

凡 例  
 種別：屋敷・宅地・家  
 屋敷：区画・母屋他付属建物・空間・個人井戸  
 宅地：区画・母屋他付属建物  
 家：区画・母屋

散 村：人民住宅が散在  
 小塊村：人民住宅が小規模に集合  
 集 村：人民住宅が一定規模で集中  
 街村集落：道路沿いに貼り付き展開する集村  
 居住地：人民は居住するが、村落を構成しないものと想定

時 期	遺跡名	所在地	立 地	予想階層	形 態	種 別	敷地面積	主要建物	建替
13c前～中	池ノ谷遺跡	市原市	養老川中流域河岸段丘上	上層農民	散村	屋敷	700㎡程度	貧祖な掘立柱建物	×
13c中～14c前	小鳥向遺跡Ⅱ	市原市	養老川中流域河岸段丘上	一般人民	散村	宅地		貧祖な掘立柱建物	○数度
13c中～14c前	〃	〃		下層人民	居住地	居住地		方形竪穴遺構群	○数度
15c以降	草刈遺跡	草刈	村田川開析谷の台地斜面	下層農民	集村	宅地	500㎡程度	貧祖な掘立柱建物	○
13c～15c	芝野遺跡	木更津市	小櫃川中流域自然堤防上	一般農民	小塊村	宅地	300㎡程度	簡素な掘立柱建物群	○
12c後～14c中	泉遺跡	君津市	小糸川中流域中位段丘上	一般農民	散村	宅地	600㎡程度	簡素な掘立柱建物群	○
12c	泉遺跡Ⅱ	君津市	小糸川中流域中位段丘上	下層農民	居住地	家	200㎡程度	貧祖な掘立柱建物	×
12c後～13c	郡遺跡Ⅱ	君津市	丘陵裾部の狭い段丘面		小塊村				
〃	〃 第1・2地点	〃	〃	下層農民	〃	家2	200㎡程度	貧祖な掘立柱建物	○
13c中	外箕輪遺跡	君津市	小糸川下流域低位段丘上	上層農民	散村	屋敷か	1200㎡程度	掘立柱建物	×
12c後～13c	外箕輪遺跡Ⅰ	君津市	小糸川下流域低位段丘上	上層農民	散村か	屋敷2	1100㎡程度	母屋含む掘立柱建物群	○
13c中	外箕輪遺跡Ⅱ	君津市	小糸川下流域低位段丘上	下層農民	居住域	宅地3	400㎡程度	貧祖な掘立柱建物群	○
13c	常代遺跡	君津市	小糸川南岸の自然堤防上	下層農民	居住域	家群	不明	貧祖な掘立柱建物	○
15c中	荒久遺跡	袖ヶ浦市	小櫃川右岸の台地上		街村集落				
15c中	〃 北調査区1	〃	〃	下層人民	〃	宅地群2	600㎡程度	貧祖な掘立柱建物少数	○
15c中	〃 北調査区2	〃	〃	下層人民	〃	家	500㎡程度	貧祖な掘立柱建物	×
15c中	〃 2・3区	〃	〃	一般人民	〃	屋敷群3	800㎡程度	簡単な掘立柱建物群・方形竪穴遺構群など	○
14c前～15c後	山谷遺跡	袖ヶ浦市	小櫃川沿いの台地上	一般人民	街村集落	宅地群	600㎡程度	簡単な掘立柱建物・方形土坑・地下式墳など	○
12c後～13c中	文脇遺跡	袖ヶ浦市	小櫃川中流沿いの台地上		散村				
12c後～13c中	〃	〃	〃	上層農民	〃	屋敷	不明	大規模な掘立柱建物	×
12c後～13c中	〃	〃	〃	下層農民	〃	家	600㎡程度	竪穴建物	×
15c後	仁井宿東遺跡	佐原市	利根川自然堤防上	一般人民	街村集落	屋敷(群)	500㎡程度	簡単な掘立柱建物群	○
13c～15c	小林西之前遺跡	茂原市	砂丘列上	一般農民	集村か	宅地	不明	貧祖な掘立柱建物	○
15c後～16c	新小樽遺跡	茂原市	丘陵麓の砂堤上	下層農民	集村	宅地群			
15c～16c	〃 C地点	〃		下層農民		屋敷群2	400㎡程度	掘立柱建物群・方形土坑	○
15c～16c	〃 H地点a	〃		一般農民		屋敷	500㎡程度	掘立柱建物群・土坑・井戸	○
15c～16c	〃 H地点b	〃		下層農民		屋敷	200㎡程度	掘立柱建物群・土坑	○3
14c後～15c	西屋敷遺跡	千葉市	都川流域の台地上	一般農民	集村	屋敷	800㎡程度	掘立柱建物・土坑・地下式墳	○
15c	高岡遺跡	佐倉市	高崎川小支谷沿いの台地上		集村				
15c後	〃 A区	〃	狭長な舌状台地基部上	下層農民		宅地	600㎡程度	貧祖な掘立柱・方形竪穴	×
15c	〃 B区	〃	同上、谷頭部(水源)上	下層農民	集村	宅地群3	1200㎡程度	掘立柱・方形竪穴	○3
15c	〃 F区	〃	台地分岐点谷頭部	小領主か寺か		屋敷	2800㎡程度	掘立柱・方形竪穴・地下式墳	○
15c	〃 G区	〃	台地分岐点谷頭部	小領主か寺か		屋敷	1300㎡程度	掘立柱・室・粘土貼土坑	○
15c前～16c中	駒井野荒追遺跡	成田市	印旛沼水系小河川沿いの台地上	小領主か	散村か	屋敷	2000㎡程度	掘立柱建物群・方形土坑群・地下式墳	○
15c中～後	八石田遺跡	光町	谷部開口部の台地上	一般農民	集村	宅地2	700㎡程度	掘立柱建物・方形土坑・地下式墳	×

個人：●  
 共同：○ 少量>微量  
 (遺物は土器・陶磁器類)

敷地区画状況	井戸	墓	遺物量	遺物	調査面積	備考	掲載書籍
溝でしっかり区画			少量	常滑甕6a・カワラケ少数・北宋銭	1,700		『池ノ谷遺跡・福増遺跡』(財)市原市文化財センター第5集、1985
不明瞭 簡素な小柴垣か	○	○	145点	瀬戸美濃・常滑・カワラケ・鋳造炉壁	740	14c 後葉以降墓域化 井戸は共同使用 墓域に伴う可能性あり	『小鳥向遺跡Ⅱ』(財)市原市文化財センター第77集、2002
不明瞭	○	○				遺物は甕や鉢が中心で、備前系の揃鉢多い(4点)	〃
切土整地上の宅地を溝・柵で区画					3,859	六之台遺跡(墓域)の小谷向かい	『草刈遺跡』(財)市原市文化財センター、1985
小溝で簡単に区画	○		少量				『千葉県歴史』資料編中世1(財)千葉県史料研究財団、1998
外郭は不明瞭 敷地内区画あり	●		微量	龍泉・同安青磁・6a鉢・甕	4,800		『泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(財)君津郡市文化財センター第110集、1996
区画なし	○		微量	土師質柱状高台皿・カワラケ・渥美甕	4,200	井戸が2基あるので建物も建替えがあった可能性あり	『泉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(財)君津郡市文化財センター第111集、1996
					6,000		『郡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(財)君津郡市文化財センター第117集、1996
一部を溝・柵で区画、不完全	○		少量	青磁・古瀬戸中期・常滑6a・6b・8・渥美・石鍋		領主館付近(70m)に50m間隔で2軒	〃
しっかりした溝で区画	○		少量	渥美・5甕・6a鉢・カワラケ	2,400	建物は廂(縁?)付き	『津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター第180集、1989
屋敷地を溝で区画、柵で小区画	●		394点	青磁・白磁碗・梅瓶、カワラケ等	980	輸入磁器に高級品 土師質土器77.2% 遺構は13cが中心か	『外箕輪遺跡発掘調査報告書』(財)君津郡市文化財センター第98集、1994
区画不明瞭	○		297点	常滑6a、伊勢鍋、カワラケ等	5,283	常滑70.4%	『外箕輪遺跡Ⅱ』(財)君津郡市文化財センター第126集、1997
簡単な溝で部分的に区画	○		微量	渥美・6a甕・鉢	44,000	掘立柱建物の密集地点が散在 明瞭な区画なし。	『常代遺跡群』(財)君津郡市文化財センター第112集、1996
			1,002点		7,840	鎌倉街道推定路に接する屋敷群と背後の墓域 門前宿か	『袖ヶ浦市荒久(2)遺跡』(財)千葉県文化財センター第323集、1998
溝・植栽列で簡単な区画	○					低階層	〃
小溝・垣で一部軽区画						北区1より下層	〃
溝でしっかり区画		●				付属墓は同階層の共同墓地である可能性あり	〃
溝による計画的な区画、植栽列の補助的区画あり	○	○	1,171点	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ並行期中心、大窯期は減少。常滑捏鉢など生活遺物が多い	18,200	15c前半に街村落形成、共同墓地を伴うが、16世紀には衰退	『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告9』(財)千葉県文化財センター第411集、2001
					16,570	堅穴遺構群あり	『文脇遺跡』(財)君津郡市文化財センター第69集、1992
道跡に面する							〃
一部小溝で簡単に区画		○	少量	常滑鉢Ⅰ類他			〃
溝でしっかり区画	●	●	少量	10型式甕・鉢	56,300	街道片側に沿って展開 屋敷間の空間に共同井戸あり	『佐原市仁井宿東遺跡・牧野谷中遺跡』(財)千葉県文化財センター第182集、1990
溝で簡単に区画	●	●?	少量	白磁D群・後Ⅳ期・6型式・備前揃鉢など			『千葉県の歴史』資料編中世1、(財)千葉県史料研究財団、1998
				後Ⅲ・大窯2・10型式	13,590		『新小樽遺跡』茂原市教育委員会、1992
溝で区画	○		微量	常滑・カワラケ・明青磁		屋敷の狭間に共同井戸	〃
溝でしっかり区画	●		微量	おおむね常滑		母屋を中心に付属建物とりまくと思われる	〃
溝でしっかり区画	○		微量	おおむね常滑			〃
台地整形でしっかり区画		●		6b・9型式甕、後Ⅳ深皿など	3,900	墓域として県史で紹介	『千葉市西屋敷遺跡』(財)千葉県文化財センター、1979
		○		後期様式・9・10型式主体	41,050	13・14cの遺物混じりが集落は戦国期道の両側に展開するが、街村形態ではない集村と思う	『高岡遺跡Ⅰ』(財)印旛郡市文化財センター第71集、1993
溝によるしっかりした区画			微量	常滑甕6b・カワラケ15c後		溝は土坑群を区画するが、建物軸には沿わない B付属の生産空間?	〃
溝・柵列によるしっかりした区画	○	●	微量	常滑甕6b・大窯Ⅰ揃鉢・青磁碗13c前・カワラケ15c前など		墓域より居住域が新しい傾向	〃
しっかりした溝区画と切土整地区画	●	●	少量	南伊勢系銅釜15c後・カワラケ15c・瀬戸美濃緑釉皿・常滑鉢9型式・内耳土器・刀鏝・石塔類		高い規格性 寺の可能性強いと報告される	〃
しっかりした溝区画と切土整地区画	●	●	少量	後Ⅲ深皿・後、緑釉皿・在地土器など		高い規格性 東側に整地面を拡張 庫裏の可能性が報告される	〃
しっかりした溝区画と切土整地区画	●	●	微量	後期様式主体・大窯も	13,000	従者を保有した痕跡。菜園付き 主は牧経営に関連か 小谷向かいの台地上には領主館あり(西ノ下遺跡)	『駒井野荒追遺跡』(財)印旛郡市文化財センター第64集、1993
台地整形でしっかり区画		●	微量	瀬戸・美濃後Ⅳ(古)、常滑10型式など	3,025	篠本城の南方	『八石田遺跡発掘調査報告』八石田遺跡調査会、1989

## 註

- (1) 石田善人1963「郷村制の形成」『岩波講座日本歴史』8 岩波書店
- (2) 安良城盛昭1953「太閤検地の歴史的的前提」『歴史学研究』163・164
- (3) 永原慶二1961『日本封建制成立過程の研究』岩波書店
- (4) 石母田正1946『中世的世界の形成』東京大学出版会
- (5) 網野善彦1973「荘園公領制の形成と構造」『土地制度史Ⅰ』山川出版社
- (6) 黒田俊雄1963「中世の天皇と国家」『岩波講座 日本歴史』6 岩波書店
- (7) 黒田俊雄1974「鎌倉時代の荘園の勸農と農民層の構成」『日本中世封建制論』東京大学出版会
- (8) 戸田芳実1967『日本領主制成立史の研究』岩波書店・河音能平1971『中世封建制成立史論』東京大学出版会・大山喬平1978『日本中世農村史の研究』岩波書店
- (9) 藤木久志1988「村の惣堂・村の惣物」『月刊百科』308
- (10) 勝俣鎮夫1985「戦国時代の村落」『社会史研究』6
- (11) 例えば藤木久志1997『村と領主の戦国世界』東京大学出版会・池上裕子1999『戦国時代社会構造の研究』校倉書房・稲葉継陽2000「中世後期における平和の負担」『歴史学研究』742など。
- (12) 金田章裕1971「奈良・平安期の村落形態について」『史林』第54巻第3号 史学研究会
- (13) 宇野隆夫2001『荘園の考古学』シリーズ日本史のなかの考古学 青木書店
- (14) 井上哲朗1988「村の城について - 上野国三波川地域の城館址調査から -」『中世城郭研究』2
- (15) 柴田龍司1994「村落型城郭から都市型城郭へ」『千葉城郭研究』第3号 千葉城郭研究会編
- (16) 笹生 衛1995「東国における中世墓地の諸相」『千葉県文化財センター研究紀要』16 (財)千葉県文化財センター
- (17) 笹生 衛・柴田龍司・鈴木哲雄・湯浅治久1995「上総国畔蒜庄横田郷の荘園調査報告」『千葉県史研究』第3号 (財)千葉県史料研究財団編
- (18) 笹生 衛1999「東国中世村落の景観変化と画期 - 西上総、周東・周西郡内の事例を中心に -」『千葉県史研究』第7号 (財)千葉県史料研究財団編
- (19) 田所真他1985『池ノ谷遺跡・福増遺跡』第5集 (財)市原市文化財センター
- (20) 「足利氏所領注文」『倉持文書』(市原市史資料集中世編364、以下、『市史』と省略)
- (21) 北見一弘2000『市原市小鳥向遺跡』第69集 (財)市原市文化財センター  
櫻井敦史2002『市原市小鳥向遺跡Ⅱ』第77集 (財)市原市文化財センター
- (22) 註(21)文献巻頭図版に収録
- (23) 高橋康男1985『千葉県市原市草刈遺跡』(財)市原市文化財センター
- (24) 笹生 衛1998「草刈六之台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』(財)千葉県史料研究財団編
- (25) 小橋健司1998「姉崎棗塚遺跡」『第13回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター
- (26) 櫻井敦史1997「椎津尾崎遺跡」『市原市文化財センター年報』(平成6年度) (財)市原市文化財センター
- (27) 櫻井敦史2000「八幡御墓堂遺跡」『市原市文化財センター年報』(平成8年度) (財)市原市文化財センター
- (28) 本殿修理委員会編1968『重要文化財飯香岡八幡宮本殿修理工事報告書』
- (29) 櫻井敦史1995「八幡・五所地域の中世石造物」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅲ (財)市原市文化財センター
- (30) 天正9年(1581)7月5日「刑部少輔・谷澤丹波守連著奉書」『榊原ヨシ家文書』所収、『市史』695号 なお、この文書の発給主体が原氏であることは、滝川恒昭氏のご教示による。
- (31) 矢野淳一1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』第111集 (財)君津市文化財センター
- (32) 山本哲也他1992『文協遺跡』第69集 (財)君津市文化財センター
- (33) 笹生 衛1989『君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』第180集 (財)千葉県文化財センター  
中能 隆・笹生 衛1994『外箕輪遺跡発掘調査報告書』第98集 (財)君津市文化財センター  
伊藤伸久1997『外箕輪遺跡Ⅱ』第126集 (財)君津市文化財センター
- (34) 松本 勝1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ』第110集 (財)君津市文化財センター
- (35) 笹生 衛1998「芝野遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』(財)千葉県史料研究財団編
- (36) 谷戸三男1979『千葉市西屋敷遺跡』千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告4 (財)千葉県文化財センター
- (37) 宮内勝巳1993『高岡遺跡群Ⅰ』第71集 (財)印旛郡市文化財センター
- (38) 井上哲朗2001『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書9-袖ヶ浦市山谷遺跡-』第411集 (財)千葉県文化財センター
- (39) 風間俊人1992『新小轡遺跡』茂原市教育委員会

# 小湊鉄道研究小史

近藤 敏

## 1. はじめに

文化財と言ってもその対象は非常に広く、神事祭祀や技能技術と芸能民俗関連の無形文化財から、建造物・工芸・絵画といった全ての物質文化財の有形文化財、建築物跡の史跡、自然環境の名勝や生物の動植物といった天然記念物等まで多種多様である。

当小論の小湊鉄道は、文化財の範疇では明治時代以降の近代化遺産中の鉄道文化財となる。市内においての、近代化遺産としての調査は、平成3年度の千葉県教育委員会から市原市教育委員会の調査依頼がはじまりであるが、それ以前に全くない訳ではない。それが小湊鉄道蒸気機関車の3両であり、昭和55年2月22日付け、千葉県指定文化財歴史資料となっている<sup>(1)</sup>。

また昭和59～60年度当時の市原市教育委員会文化課では、課長補佐を座長に（仮称）市原市立博物館建設構想検討会議を行っていた。その参加構成員は文化課職員、学芸員及び(財)市原市文化財センター調査研究員であり、その中に筆者も参加していた<sup>(2)</sup>。この検討会議の中で博物館の展示する対象候補を選択する段階で、筆者は歴史資料の鉄道記念物である小湊鉄道の調査をはじめることにした。その際の資料調査成果が、今回の基礎となっている。

小湊鉄道本社五井駅構内に保存されている機関車3両の前には、昭和60年当時写真①の解説板が設置されていた。平成14年には写真②の解説板となっている。これは市原市の文化財保存活用の一環により、平成4年に設置されたものであり、当時の担当はふるさと文化課の小出紳夫氏であった<sup>(3)</sup>。これまでの解説と異なり、図を利用して理解を助けている。

これらの教育委員会の仕事は、各担当者が必要緊急度の高い文化財から選択して、事業化するものであり、解説板の内容は担当者の作成となる。その都度担当者がその対象の調査をして、明文化、そして図化をする。事務局には事業執行の会計処理書類は当然残されるが、調査の過程に生じた文献や調査資料は、保管するところもないので片付けられる。つまり、一枚の解説板の内容は引用文献の無いままに、引き継がられていく訳である。専門職として長年それらの事業を執行することによって、調査に関わる資料は、個人的には蓄積されるものの、積極的に保存されないという状況が生じている。在職中であれば、不明な点や詳しいことが知りたければ、担当者に尋ねることもできるが、長期の時間的経過は、それらを過去の闇に隠れさせる。小論の目的の一つはこれを防ぐことである。

近年、小湊鉄道は、「サバカレー」と同様に有名となった、「TVドラマの『コーチ』」以来、テレビの画面に登場することが多くなった。東京近郊にあり撮影ロケに都合が良い点もあろうが、小湊鉄道自体の、今日的魅力が大きいのも一因だと思われる。純粋に技術的な情報もさることながら、このように小湊鉄道が今日まで、どのように観られてきたかということについても、鉄道雑誌のバックナンバー等から、鉄道研究者や愛好者の目を通して概観したいと思う。物質文化の研究方法は、数多くの対象にも共通な事項を有しているのである<sup>(4)</sup>。以下では、概ね年代順に雑誌・記事を引用し、小湊鉄道の調査研究過程を明らかにしたい。

## 2. 小湊鉄道の位置と調査のはじまり

小湊鉄道が所在する千葉県市原市は、東京首都圏の50km範囲圏内にあり、国道16号線が市北部を東西に縦貫する。市内にはJR東日本の内房線の八幡宿・五井・姉ヶ崎の3駅がある。私鉄は小湊鉄道のほかに、京葉コンビナート貨物専門の京葉臨海鉄道、京成電鉄千原線が千原台駅まで建設されている。また、戦前に廃線となったが、茂原市と市原市奥野間に南総鉄道があった<sup>(5)</sup>。

市原市は、首都圏横浜市に次いで面積第2位の広域市であり、5市3町に隣接し、東京湾東岸から房総丘陵にかけて東西約22km、南北約36kmにひろがり市域面積は368.20km<sup>2</sup>となる。市原市の南北を縦断する養老川に沿って小湊鉄道は敷設されており、北部中央の五井駅から南部最奥の朝生原地区の養老溪谷駅までが市原市域となり、終点の上総中野駅は大多喜町である。五井から上総中野駅までの営業キロ数は、39.1kmあり正に市原縦貫鉄道が小湊鉄道である<sup>(6)</sup>。この距離は、ほぼ東海道線のJR東京駅から、横浜市JR戸塚駅間距離に相当する。

小湊鉄道は旧国鉄である現在のJR各社から、区別される私鉄（民鉄）である<sup>(7)</sup>。地方中小私鉄については、その地域の住民以外にはほとんど周知されていない。地方鉄道は地域密着型の地域研究対象であり、調査資料も少ないと考えていた。昭和60年当時、調査のため小湊鉄道本社のある五井駅を訪れたとき、小湊鉄道の魚路さんから頂いたのが、青木栄一氏の「小湊鉄道」であった<sup>(8)</sup>。

この論文は(6)にも参考文献として記載されており、小湊鉄道の車両変遷史として重要である。あとがきには、昭和32年にこの論文の草稿ができており、その後改訂追補を加え調査から10年目の発表となっているので、青木氏の調査は昭和27年（1952）から始まっていたことになる。戦後まもなく始まった調査は、小湊鉄道の魅力が当時からあったと考えられる。青木氏論文の「従来からの報告」では、戦前の凸丸生（吉雄永春）氏の、「東京近郊の蒸気機関車を尋ねて小湊鉄道・南総鉄道」鉄道趣味No.33（昭和11年）が、初めとされている。青木氏の論文の完成度は高く、当時までの小湊鉄道の研究成果はすでにまとめられている。今回の小論では青木氏の調査前後から、それ以後の調査成果を年代順に紹介しながら、鉄道史研究が小湊鉄道とどのような関わりを持ちながら、発展してきた過程を概観し、小湊鉄道の鉄道史における意義を認識したい。

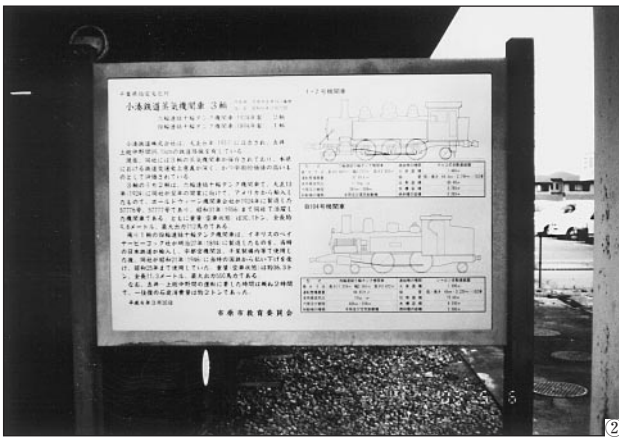
近年、鉄道についての文化財意識の高まりや、20世紀を概観する博物館展示が、散見されるようになった。これらは世紀末という状況や、20世紀から21世紀へという歴史的転換点の認識と相前後する感覚が、回顧的に現れていることも、共通の意識にあると考えられる。平成3年度から4年度の「千葉県近代建造物実態調査」は、千葉県教育委員会が明治期以降に建設された建造物に対して、所在及び保存状況等の詳細調査を実施したものである<sup>(9)</sup>。その中には交通施設も含まれていた。次いで、千葉県現代産業科学館が、「千葉県産業・交通遺跡実態調査」を、平成8年から3カ年実施している<sup>(10)</sup>。それらのおそらく全国的に行なわれた調査成果が、博物館の教育普及事業に反映されている。1999年3月から5月まで埼玉県立博物館において開催された、特別展「さいたまの鉄道」は、埼玉県内を走る鉄道網の発達史を、時代ごとに概観している<sup>(11)</sup>。当時の写真、図面、文書からレールや鉄道に関する用品小物まで展示している。最後に文学史の一面として、「文学にみる埼玉の鉄道」を掲載している。市原市の隣接である袖ヶ浦市郷土博物館では、2000年3月から5月まで「陸運水運20世紀」と題して、東京湾をめぐる交通事情の特別展示を行なっている。交通史からの地域研究であるが、房総の鉄道に小湊鉄道が、「内陸部へ延びる鉄道」として登場している<sup>(12)</sup>。



旧解説板表



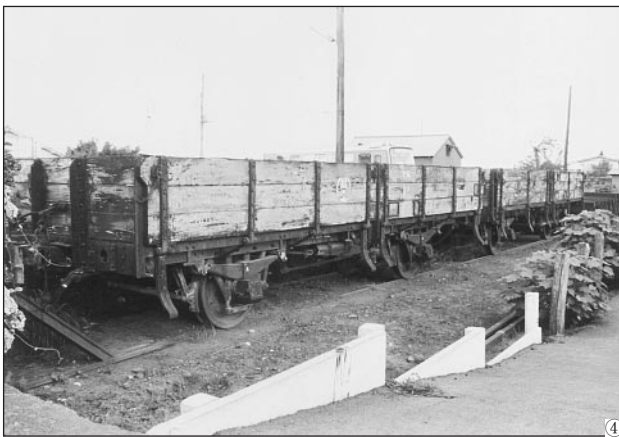
旧解説板裏



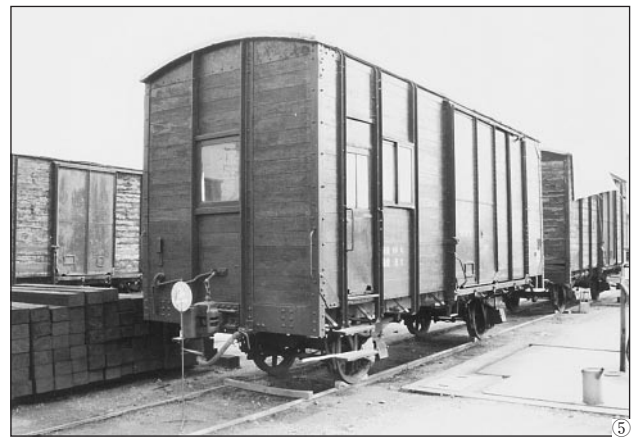
平成4年度設置の解説板



キハ200形とキハ5800形



無蓋貨車トム11・12



援急車ワフ



五井駅



上総鶴舞駅

写真①～⑦



### 3. 鉄道雑誌における研究者の報告

昭和26年7月創刊の鉄道ピクトリアル誌の総目次の、第1巻・第1号通巻No.1の中には、臼井茂信氏の「国鉄の功労機関車5500形式」が掲載されている<sup>(13)</sup>。この5500形式機関車は、小湊鉄道に保存されているB10形式の改造前の姿である。鉄道ピクトリアル誌において臼井茂信氏は、昭和28年の第3巻・第5号通巻No.22から、昭和29年の第4巻・第12号通巻No.41まで「国鉄蒸気機関車小史」のタンク編を連載されている<sup>(13)</sup>。これら連載を後年テンダ機関車編とあわせて、昭和31年に1冊の本としてまとめられている<sup>(14)</sup>。その中でB10形式は、2Bテンダから2B1形タンクに改造したものであること、小湊鉄道に保存したものは、5500形の7号機(5507)を改造して、B10形4号機(B104)写真<sup>⑩</sup>にしたことが記されている(第1図参照)。さらに1936年にB104が陸軍兵器本廠に移管され、千葉庫所属で軍用線に用いられ、終戦後に小湊鉄道に転じたことが記されている<sup>(14)</sup>。5500形からB10形の改造は、1930年度中には終わったことが記されており、1931年には木更津駐泊所に配車されたことが機関車配車表に記載してある<sup>(15)</sup>。

さらに小湊鉄道関連記事としては、C形タンク機関車1800形式の1896年製造No.1811が、1929年度に鉄道統合後の国鉄から小湊鉄道に払い下げられている。そのイギリスKitson製のNo.1811は、小湊鉄道No.5号機として1938年まで車籍があり、その後鶴見臨港鉄道に買い取られている<sup>(16)</sup>。戦後10年経過する頃には、小湊鉄道五井機関区にも大きな変化があり、木造客車の一斉解体の中に蒸気動車も含まれていた。それは明治42年汽車會社大阪製造の工藤式蒸気動車を戦後、駆動輪のロッドを外してホハフ3の客車に改造したものである<sup>(16)</sup>。それらハ1・ハニ1～2・ホハフ3は昭和27年、ハフ1は昭和30年に廃車され解体されて、戦前の小湊鉄道の木造車は、ほとんどこの時期に全滅したことが伝えられている<sup>(17)</sup>(第2図参照)。

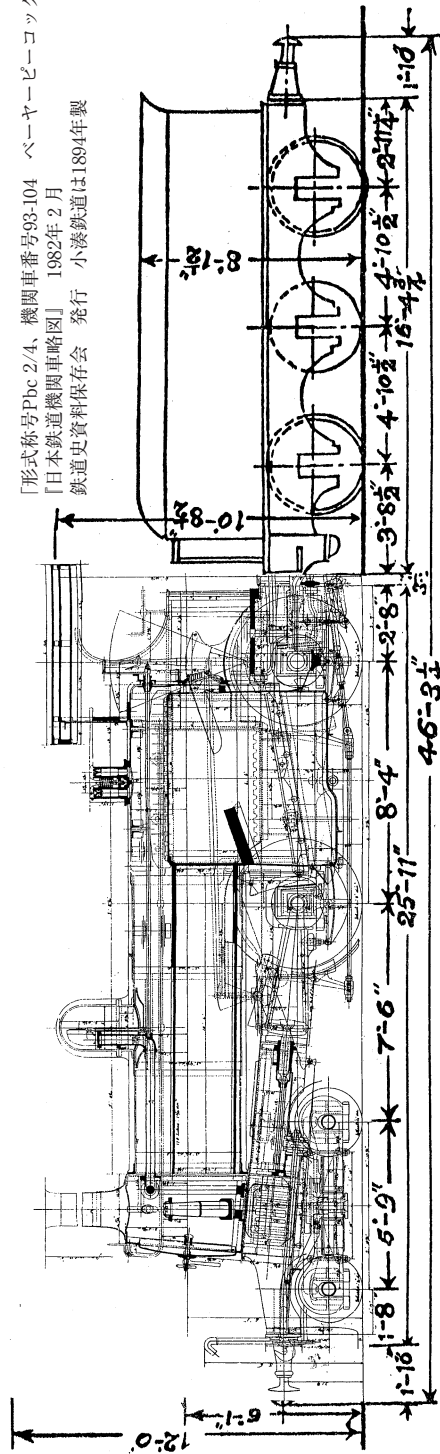
昭和34年(1959)の鉄道ピクトリアル誌は、創刊100号として古典蒸気機関車の特集記事を組んでいる<sup>(18)</sup>。その「大正期の国産私鉄機」では、民間機関車製造所を汽車会社・川崎造船所・雨宮製作所(大日本軌道)・日立製作所・日本車両・三菱造船所・深川造船所・楠鉄工所の8社としている。また各社の設計の基準をドイツ、イギリス系を採用し、アメリカ系がほとんど無いことに著者は注目している。また「東北の古典ロコたち」では、ラサ工業宮古工場の小湊鉄道保存と同形であるB109・B1010の存在を伝えている。

昭和35年(1960)鉄道ピクトリアル誌は、ディーゼル動車の特集号として「ディーゼル動車の今昔」のなかで、DMH17形機関の開発製造と昭和28年液体式総括制御の登場が、日本のディーゼル動車(気動車)の発展を促したことを伝えている<sup>(19)</sup>。また昭和34年12月1日付けの気動車運転線区図において千葉県内のほとんどがディーゼル運転線区であることが看取できる。

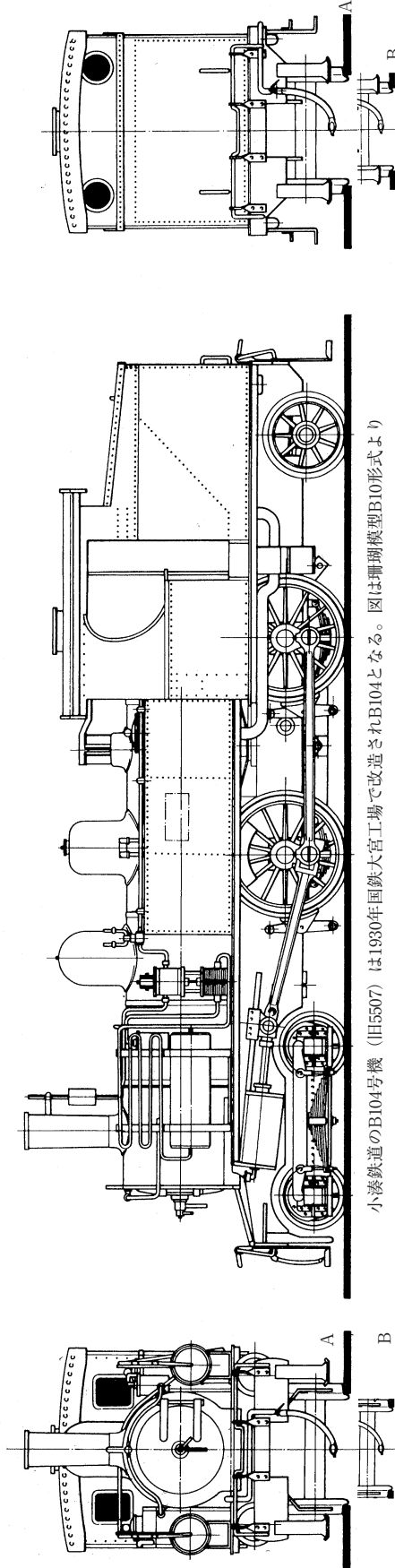
昭和36年(1961)紀行文形式で、私鉄電鉄運行係長の職にある生方良雄氏が、房総縦断の木原線から小湊鉄道乗車記録を伝えている<sup>(20)</sup>。上総中野駅は木原線より小湊線が先に開通しているので、小湊鉄道の駅であり、駅名標が終点駅の形式になっており、同じホームに入線する木原線の次駅名が入っていないことに、不自然さがあることを伝えている。小湊線に乗り換えるとキハ6100に乗車、途中水害復旧工事のためキハ(ジハ)100に乗り換え、さらに養老溪谷ではキハ5800、高滝において41001と交換している。小湊鉄道の当時の車両は蒸気2、内燃動車10、客車2、貨車20となっている。昭和初期は蒸気4、客車11、貨車49と、貨車が半数以下となっていることを指摘し、社会情勢の変化が現れ

小湊鉄道保存車両  
B104号機

「形式称号Pbc 2/A, 機関車番号93-104 ベーヤー・ピーコック会社製」  
「日本鉄道機関車略図」 1982年2月  
鉄道史資料保存会 発行 小湊鉄道は1894年製



小湊鉄道はNo.5507「5500形組立図・Beyer Peacock」[機関車の系譜図1] 白井茂信 1972.9 株式会社 交友社より転載一部加



小湊鉄道のB104号機 (H5507) は1930年国鉄大宮工場で改造されB104となる。図は珊瑚模型B10形式より

名称	標準軌間 縮尺	狭軌間 縮尺	ゲージ 軌間	在来線の 7フィートゲージ (7.1mm)	軌間
N	1/160	1/150	9.0mm	(7.1mm)	9.0mm
HO	1/87	—	16.5mm	(12.3mm)	16.5mm
HOj	—	1/87	12.0mm	(16.7mm)	12.0mm
16番	1/87	1/80	16.5mm	—	16.5mm
Sn3 1/2	—	1/64	16.5mm	—	16.5mm

HO (A) はゲージ16.5mmの1/80スケールモデルとなるが、実際軌道は1067mmの狭軌道の為、(B) のHoj12mmゲージの1/87スケールにふさわしいことになるだろう。

JR在来線は狭軌1,068mm・標準軌1,435mm

第1図

ているとしている。昭和36年12月27日には、小湊鉄道に現在も使用している新車200形（201+202）が新造され、入線した<sup>(21)</sup>。これより小湊鉄道の車両の淘汰と規格化がはじまり、現在に至っている。私鉄の気動車への転換および採用は、蒸気機関車と客車のセットを壊すことを意味する。また前述の通り貨車輸送の需要は減り、機関車と貨車のセットも私鉄では大きく減ることになった。小湊鉄道の客車については、創立当時の新客車（ホハ1・2、ホハ11・12、ホロハ1・2）が、電車型客車に分類され、電車に改造する余地をもっていた変革期の産物であることが明らかになった<sup>(22)</sup>。

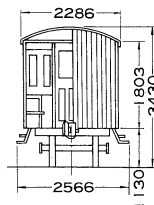
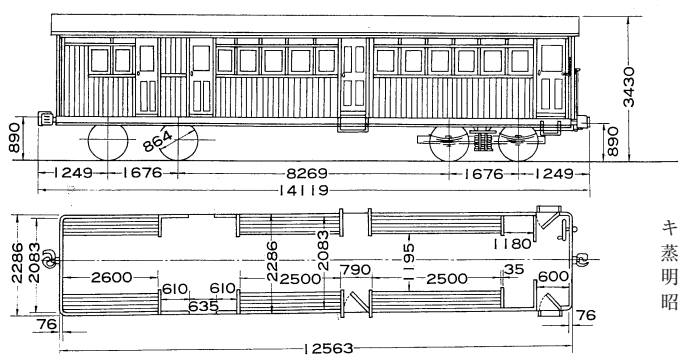
昭和37年（1967）鉄道ピクトリアル誌は、第2次ディーゼル動車特集「ディーゼル動車のしくみ」で、力の伝達系路と液体変速機がどのように、総括制御を可能にしたかを説明している<sup>(23)</sup>。また、「私鉄気動車あ・ら・かると」では多くの私鉄が電化され、私鉄の営業キロの82%に及ぶことを報告している。そして別表（1961年3月現在）の現存私鉄気動車一覧表（軌間1,067mm）では、小湊鉄道に4形式10両の気動車の在籍を記載している。また1961年度中に増備したものとして、キハ200形の201、202を加えている。これら200形が現在の小湊鉄道の唯一の形式車両となる。そしてその気動車は、41年後の現在も走り続けている。「ローカル線DCの種々相」には、当時の国鉄線乗り入れにおいて、小湊鉄道の長浦行（潮干狩）という臨時運転の記事が見られる。「変り種DCを追って」では、電車を改造した気動車として、小湊鉄道のキハ6101が紹介されている。そして「気動車運転線区図」（1963.3）では、大部分または完全気動車化線区に、千葉から東京方面の総武線を除く千葉県下は全てとなっている。同年8月鉄道ピクトリアル誌に、長野電鉄車両紹介の記事中に、電化の為不要になった11形蒸気機関車が、小湊鉄道へ昭和2年2月に譲り渡されたことが、掲載されている<sup>(24)</sup>。

同年12月、ピクトリアル誌には青木氏の論文「小湊鉄道(8)」が登場する。この号には新幹線の試験電車が、10月31日に200キロをマークしたことが今月の話題として掲載され、また静岡鉄道秋葉線の、廃止記事が納められている<sup>(25)</sup>。青木氏の論文は、昭和37年12月（1962）までの研究成果の集大成であり、車両史では小湊鉄道の設立から現在まで網羅している。この時点において纏められたことが、小湊鉄道の車両転換の転機と合致しており、小湊鉄道車両研究には欠かせない論文となっている。以下その資料を紹介し、その後に追加された資料を随時加えて紹介したい。

青木氏の「小湊鉄道」はまず「I. 沿革と概況」が述べられ、小湊鉄道の設立の経緯、戦前・戦中・戦後の燃料事情と車両の変革及び、今後の展望が昭和37年という千葉県内の高度経済成長期前夜の社会状況の中で紹介されている。鉄道収入の中で旅客収入と貨物収入の割合の変化については、昭和6年（1931）では百分率68.0%：29.2%、30年後の昭和36年（1961）では、百分率90.5%：5.5%となっており貨物収入が激減しているのはトラック輸送転換の結果としている。

「II. 施設と運転」においては、里見に砂利採取用支線が1kmあることが記され、上総中野駅が小湊鉄道所有であるとされている。運転では1日19往復中、15往復が五井－上総中野間とされている。平成13年12月改正ダイヤでは、平日五井から下り31本中、上総中野行きは4本、五井行き上り上総中野発は4本である。土日祭日は上下とも22本中、五井－上総中野間は5本となっている。上総中野駅では、始発と終着はいすみ鉄道（旧木原線）と一応連絡はしているようだ。

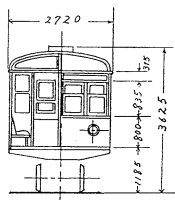
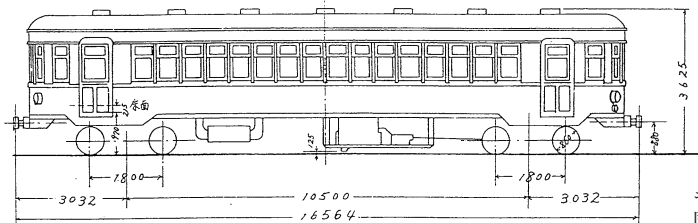
はじめに述べたように小湊鉄道には、3両の千葉県指定文化財の車両がある。その歴史資料としての価値が「III. 車両各論」に述べられている。車両については多くの研究成果があり、個別に述べながら各研究を紹介する。「A. 蒸気機関車」の項では、最初にすべて廃車されて在籍していないこと



小湊鉄道の  
関連車両

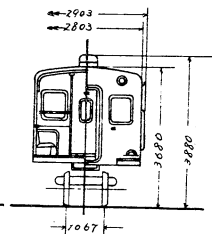
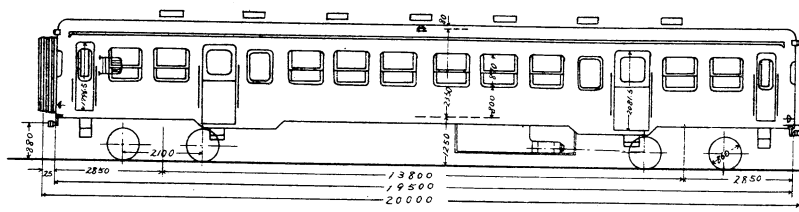
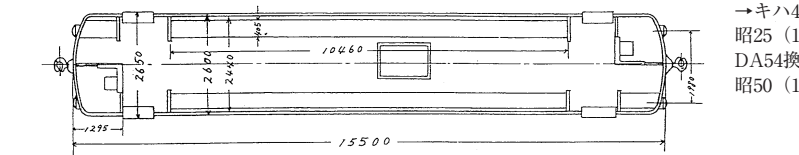
キハ1形式  
蒸気動車  
明43 (1910) 気車会社 (大阪) 製  
昭14 (1939) 小湊鉄道購入

谷口元紀  
『開業50周年を迎えた小湊鉄道』  
『鉄道ファンVol.14 160』1974.8  
株式会社 交友社



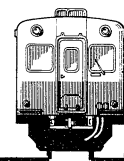
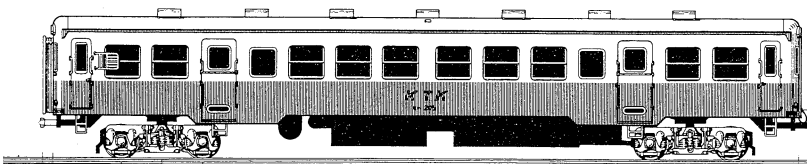
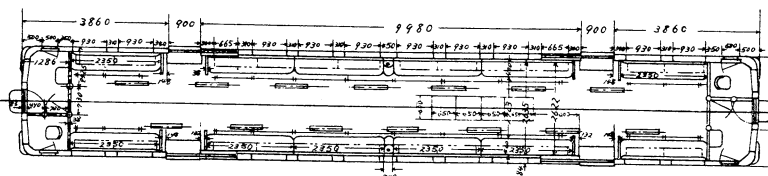
キハ41000形式  
国鉄キハ41076、41048、41049、41006  
→キハ41001~41004  
昭25 (1950) 宇都宮車両にて改造  
DA54換装→昭30 DMF13換装  
昭50 (1975) まで小湊鉄道

岡田誠一  
『小湊鉄道』  
『RM LIBRARY2キハ41600  
とその一族 (下)』  
1999.9 株式会社ネコ・パブ  
リッシング

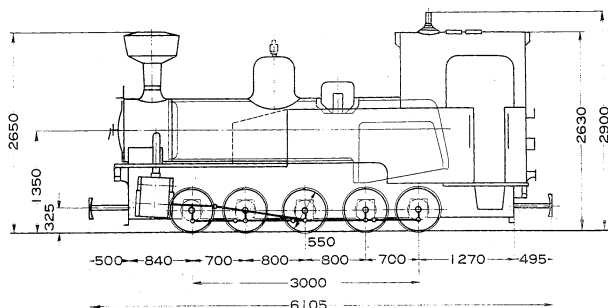


キハ200形式  
キハ201~214  
昭36 (1961) ~昭52 (1977)  
日本車両製  
小湊鉄道現在唯一の車両形式  
である

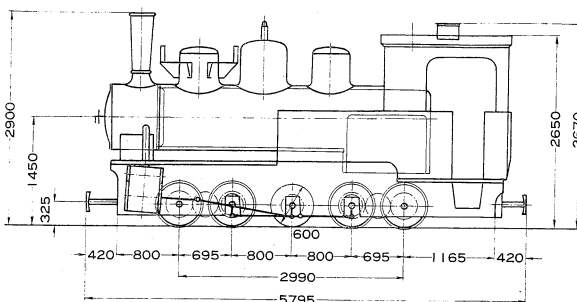
日本民営鉄道車両形式図集 (上編) 1976.1



井上広和・高橋 撰  
『小湊鉄道』  
『日本の私鉄、南関東・  
甲信越』  
1982.10 カラーブックス



鉄道聯隊K形 1944年川崎車換社製



鉄道聯隊E形 1925年Koppel社製

白井茂信『つわものどもの夢の跡』『機関車の系譜図2』1978.4 株式会社交友社

第2図

が記されている。小湊鉄道1号から5号（第3図参照）、11号とB104の7両の系譜が紹介されている。小湊鉄道1・2号機関車は、アメリカ合衆国Baldwin社製で創業時に小湊鉄道が発注輸入した（写真⑧）。創業から現在までワンオーナーであり、県指定文化財という幸せな双子の蒸気機関車である。日本に輸入されたボールドウィン製蒸気機関車は、先学の研究によりすべて把握されている<sup>(26)</sup>。昭和37年（1962）3月21日付廃車の、1・2号機関車の種別呼称番号は、10-24-1/4D-156,157、形式2-6-2T、軌間3'6"、製造番号57776、57777、製造年月1924年4月となっている。1C1形機つまり先輪軸1、動輪軸3、従輪軸1、軸配置蒸気機関車のボールドウィン製の輸入は、日本においてはこれが最後となった。小湊鉄道の1・2号機関車は、自動連結器を採用した機関車第1号という革新的なもので、当時の国鉄より1年早く採用された。その経緯は、臼井氏の論考に詳しく述べられている<sup>(27・29)</sup>。その内容は、当時の小湊鉄道説明板も現在の説明板も同様であり、その先駆性を顕彰している。前述のB104は、1894年製造のイギリスのBeyer Peacock社製であり、日本鉄道が輸入した5500系の5507号が原形になる<sup>(29)</sup>。詳しくは前述したとおり、B10形式として保存されたものでは唯一であり、経歴からも近代明治から昭和の激動時代の証言者であるといえる<sup>(14)</sup>。

小湊鉄道3号機関車は、1920年製造のアメリカのDavenport社製の、小型C形タンク機関車である（第3図参照）。1924年11月入線の創業時に輸入されもので、建設工事貨物等の入換え用の構内使用を目的にしたもので、整備重量が36.68tと軸重が重く淘汰対象になった。1937年廃車となり、同年に鶴見臨港鉄道に譲渡され、その後日本鋼管鶴見造船11号機となって余生を送った<sup>(30)</sup>。

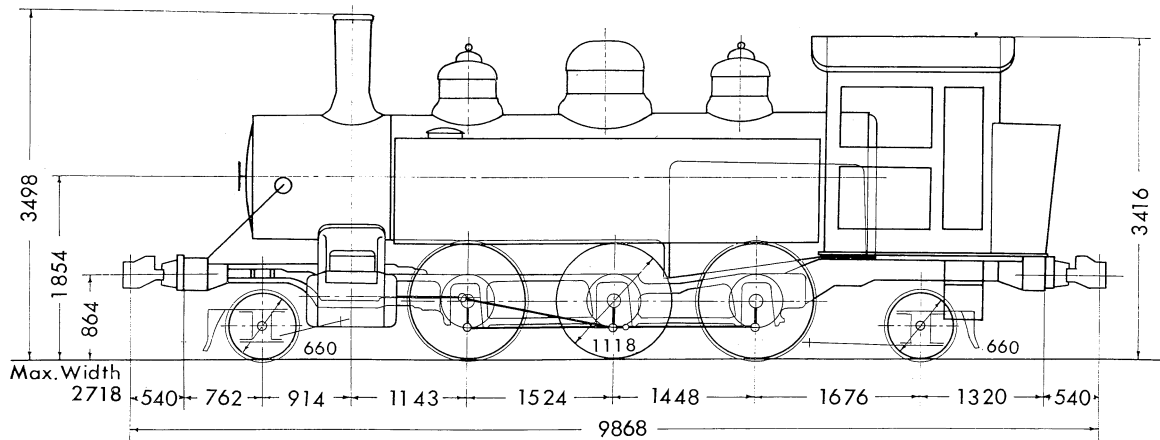
小湊鉄道4号機関車は、1924年製造のドイツKoppel社製の、C2800ミリグループと分類される小型C形タンク機関車で国鉄形式1190・1195形式と同形である<sup>(31)</sup>。1938年一旦廃車されたが、保管中の1942年廃車復活され、1949年の検査まで使用され、1951年解体された。輸入された仲間は14両と少なく、25年余りの一生であるが、小湊鉄道のワンオーナーと云うことになるだろうか。

小湊鉄道5号機関車は、イギリスのKitson社製のC形タンクで、国鉄形式1800の1811号の1896年製造、1929年に小湊鉄道に払い下げられた<sup>(14)</sup>。5号はガソリン化と路線の問題であまり使用されず、1932年の検査が最後となり、1937年廃車後1938年に鶴見臨港鉄道に譲渡された。第3図の写真は、1941年当時の鶴見臨港鉄道501号機で、譲渡後の姿であり、1948年まで車籍があり、長く生きた蒸気機関車である<sup>(32)</sup>。

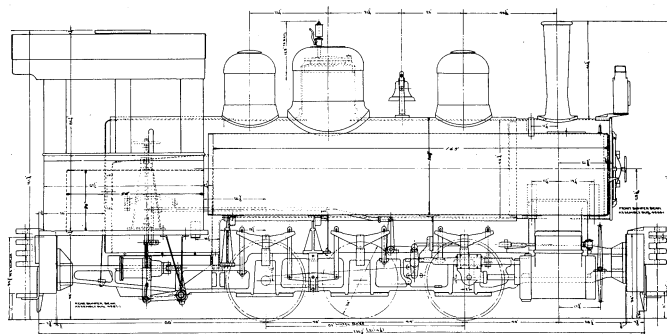
小湊鉄道11号機関車は、1・2号機のコピー機の2920形式、1923年製造の川崎造船所製である。最初の所有者は河東鉄道（現長野電鉄）、電化のため11号機が小湊鉄道、12号機が南武鉄道に譲渡された。しかし使用期間は短く1928年初検査、1932年最終検査後休車、1937年廃車後、日曹炭礦豊富鉱業所に売却された。外観は1・2号機と全く同様である<sup>(33)</sup>。

蒸気機関車は車籍に編入されず使用もされなかったが、鉄道聯隊から戦後入手したK<sub>2</sub>形とE形がある。B10形と同時期に入手したものといわれ、K<sub>2</sub>形は1944年製造川崎車輛製、E形はE102号の1925年製造Koppel社製である（第2図下段参照<sup>(34)</sup>）。K形は軌間600mmを改造し、狭軌在来線の1067mmとされた。K138,139,そのほかは、1950年に解体され、K140は新京成電鉄建設用に貸し渡された。鉄道聯隊の貨車の台車は現在も残されている。製造ドイツKoppel社製のE形は、改造されずそのままであったようである。鉄道聯隊の機関車は、小湊鉄道を経由してさまざまに動いている<sup>(35)</sup>。

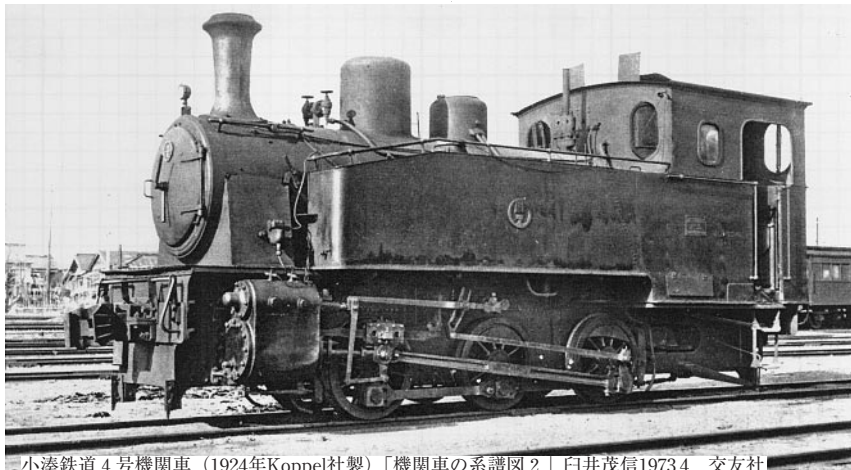
青木氏の論文の蒸気機関車部分が上述した概略であるが、その他、客車・蒸気自動車・内燃動車な



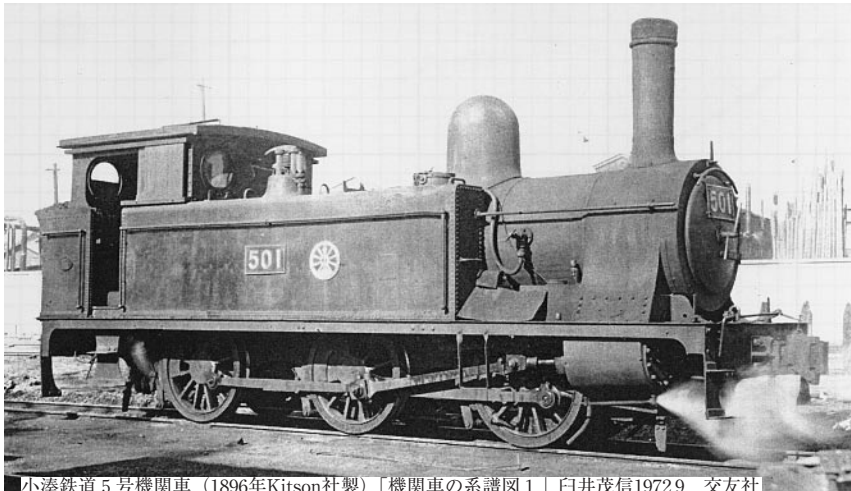
小湊鉄道1・2号機関車形式図  
「小湊鉄道のボールドウィン」白井茂信「SL No.2」1969.1  
株式会社 交友社



小湊鉄道3号機関車 (1924年Davenport社製)「機関車の系譜図2」白井茂信1973.4 交友社



小湊鉄道4号機関車 (1924年Koppel社製)「機関車の系譜図2」白井茂信1973.4 交友社



小湊鉄道5号機関車 (1896年Kitson社製)「機関車の系譜図1」白井茂信1972.9 交友社



1号機関車銘板  
(27)より



2号機関車銘板  
(27)より



小湊鐵道社章  
(4号機関車タンク横にある)  
写真⑨参照

第3図 小湊鉄道 1号～5号機関車

ど、車輛変遷史的内容は完結している。蒸気機関車については県指定文化財として保存されていることで、詳しく紹介した。その他についてはその後の研究史の流れの中において紹介する。

昭和38年（1963）市原市内の私鉄廃線である南総鉄道の記事が掲載されている<sup>(36)</sup>。南総鉄道開通までは、明治42年に県の事業として千葉県営人車鉄道が、茂原から庁南町長岡に敷設された。その当時使用された客車が、昭和37年当時茂原市の民家において、物置として残されていることが報告されている。恐らくそれが現在、茂原市立郷土資料館に展示されている人車鉄道客車であろう。

大正年間に人車鉄道が廃止された後、地元有志が大正14年に茂原－鶴舞間の蒸気鉄道免許を取得し、大正15年に南総鉄道株式会社を設立している。昭和5年に茂原－笠森間を、昭和8年に市原市奥野まで開通させている。建設には千葉鉄道聯隊の出動を要請して、軌道敷設工事を行なっている。これらの建設は、当時の私鉄建設ブームとして捉えられている。南総鉄道の蒸気機関車としては、在籍した1号機関車が貴種のロバート・スチープンソンとして紹介されている<sup>(37)</sup>。

昭和40年（1965）11月鉄道ピクトリアル誌では、機械式気動車の特集がなされ、ガソリン動車機械式ディーゼル気動車、天然ガス動車の紹介がなされている<sup>(38)</sup>。小湊鉄道においても昭和16年、ジハ100・101の天然ガス動車への改造認可を得て、戦時体制下に気動車の運行を続けた歴史を、有している<sup>(39)</sup>。

昭和41年（1966）3月鉄道ピクトリアル誌は、房総の鉄道の特集を組み、千葉県鉄道管理局の概要では、京葉コンビナートの造成等千葉県の発展の可能性と、房総西線千葉－館山間の電化・線増が取り上げられている<sup>(40・41)</sup>。

小湊鉄道に関しては、養老溪谷駅の200形気動車を車窓からの写真が大判で掲載され<sup>(42)</sup>、五井駅のキハ203+204気動車が、5月3日の休日に「やまべ」と書かれた丸形のトレーンマークを前面に付けて、運行していた様子がわかり、同様にキハ5801+5800が「直通しおひ」として、運行していた写真が掲載されている<sup>(43)</sup>。キハ5800形が、2両編成で国鉄長浦駅まで乗り入れていたことになる。

昭和42年（1967）鉄道ピクトリアル誌では、明治100年にあたり東海道線全通を機に生まれ、明治の代表蒸気として活躍したB6形を特集している<sup>(44)</sup>。この頃から蒸気機関車の廃車に関する記事が増加し、国鉄から去って移動した私鉄の蒸気機関車等の追跡研究が始まっている。また、私鉄でもない、一構内線のSLにも注目がされるようになり、千葉市川崎製鉄所の蒸気機関車の総退陣のニュースが報告されている<sup>(45)</sup>。

昭和43年（1968）鉄道ピクトリアル誌は、2Bテンダ形機関車の特集として、小湊鉄道の保存車輛B1004号機形の仲間の系譜、車歴を掲載している<sup>(46)</sup>。その他国鉄本社運転局機関車課長による「蒸気機関車の動態保存」についての計画が述べられ、保存機種として大正以後の国産SLの25形式中の、代表12形式、各1両とし、極力若番号とするとしている。また房総西線の千葉、木更津間電化が7月に迫った4月に、架線の張られた姉ヶ崎付近を走る蒸気機関車が、牽引する下り貨物列車の写真が掲載されている<sup>(47)</sup>。

昭和45年（1970）鉄道ピクトリアル誌は保存蒸気機関車特集として、博物館・公園・遊園地・学校・鉄道工場・鉄道学園の保存機関車、静態・動態保存の記事を掲載している。また海外の事例も紹介している<sup>(48)</sup>。国鉄では、蒸気機関車の廃車計画が進行し、通常運行配車は皆無になる。廃車計画の中でSLブームによる保存運動や、資料写真の収集や保管が始まっている。また小湊鉄道と関連のあった鉄道聯隊のK<sub>2</sub>形121機関車が、国鉄土崎工場に保存されていることが紹介され、改造箇所等が

記されている。これは後年解体されてる。

昭和49年（1974）鉄道ファン誌は、開業50周年を迎えた小湊鉄道の記事を掲載している<sup>(49)</sup>。青木氏の論文より簡潔となっており、当時の車輛を中心に紹介されている。蒸気気動車については細田幸宏氏の調査として、それが昭和14年9月に購入され、昭和20年9月までに133,830.6kmを走行し、機関部の破損により、客車に改造されホハフ3号となった（第2図上段参照）と報告されている。

気動車については、昭和25～26年にかけて国鉄のガソリン動車、キハ41000形（後のキハ04形）の4両譲り受け、昭和31年からディーゼルエンジンに変更し、小湊鉄道最初のディーゼルカーとなった。その後、昭和45年キハ200形の増備により2両が廃車され、当時キハ41001・41002が残っていたが、キハ200形の予備車として、存在していた状況である（第2図中段参照）。

キハ5800形はキハ5800・5801が在籍し、原形は三信鉄道のデ301・302で国鉄買収後、制御車化され、クハ5800・5801となって、昭和35年国鉄から譲渡された。同年日本車輛にて気動車への改造がなされ、エンジンをDMH-17Cとして液体変速機にされたため、小湊鉄道最初の総括制御可能な車輛となった（第4図参照<sup>(50)</sup>）。現在キハ5800は廃車されてはいるが、機関庫の中に残されている（写真③）。

キハ6100形はキハ6100・6101の2両で、青梅電気鉄道のモハ102・104から国鉄に買収されて、買収国電のクハ6100・6101となったのを昭和31年譲渡され、気動車化された。しかし液体変速機は装備されず、蒸気機関車廃車後は貨車の牽引を任務としたが、昭和44年9月30日の貨物営業廃止後、事業用車輛の保線資材運搬担当が多くなり、廃車される予定となっていると報告されている<sup>(50)</sup>（第4図参照）。総括制御が出来ない車輛は、この時点ですべて廃車されたことになる。キハ200形は当時の国鉄新鋭気動車キハ20系を基本に新製された（第2図中段参照<sup>(50, 51)</sup>）。キハ200形は、昭和36年201・202、昭和37年203・204、昭和39年205・206、昭和45年207～210と増備している。私鉄気動車において1形式が10両に及ぶのはこの200形のみで、運用保守点検が合理化された状態が今日に及ぶのである。キハ200形は、主機関をDMH-17C、液体変速機TC-2、動台車をDT22Aとして、運転走行機器を国鉄キハ20形、25形第2次量産車と同様にしている。

青木氏が創業から戦後の状況と、キハ200形投入前までを詳細に報告し、谷口氏がキハ200形投入後から、200形一形式になる直前の小湊鉄道の姿を伝えた報告になっており、小湊鉄道の変遷を知るためには欠かせない2編である。

昭和51年（1976）鉄道ピクトリアル誌は、日本のSL訣別号として特集生まれ、国鉄再建論議の中での日本蒸気機関車の終焉と、新橋横浜間開通103年の鉄道の歴史を掲載している<sup>(52)</sup>。また「戦後の蒸気機関車」として青木氏が蒸気機関車の製造から追放に至る社会史を述べている。

昭和51年2月発行の「写真でみる戦後30年の鉄道車輛」の中に、小湊鉄道の上総中野駅に停車する国鉄レールバスキハ013と、小湊鉄道キハ41001のカラー写真が掲載されている。撮影日は昭和33年12月31日となっている。小湊鉄道車輛関連において、一般書籍においてカラー図版掲載はこれが最初であろう<sup>(53)</sup>。

昭和53年（1978）鉄道ファン誌には「1冊の写真帳から－私の知らない機関車」として、小湊鉄道建設工事に関わる記事が掲載された<sup>(54)</sup>。内容は鹿島建設の前身鹿島組の「小湊鉄道株式会社 第一期線 工事实況写真帳」の中に、土工用に使われた小型蒸気機関車の正体に関するもので、写真帳からその機関車のメーカーを割り出せないか、臼井茂信氏への依頼が始まりである。写真には機関車の



小湊鉄道

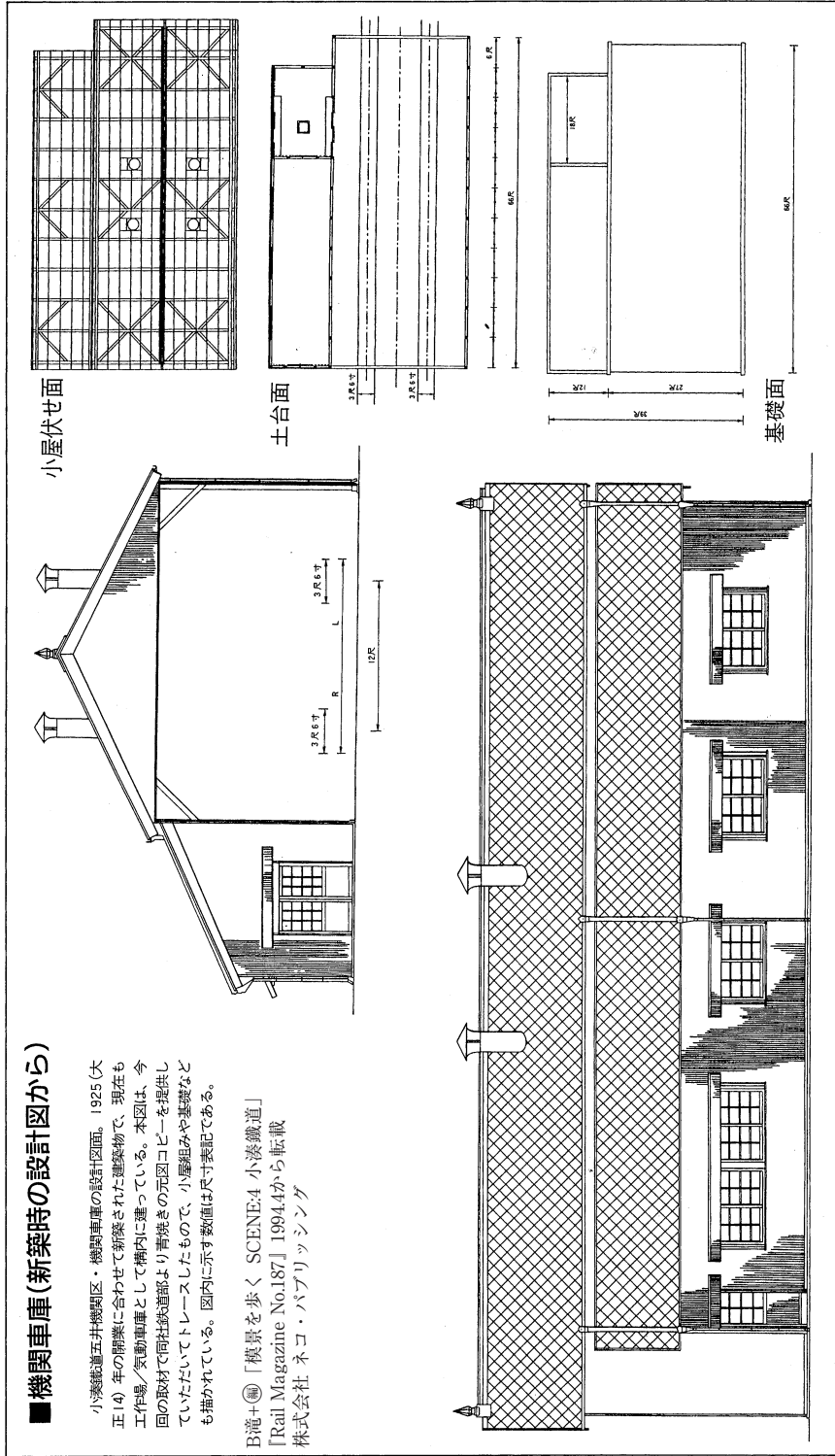
五井駅構内機関庫及び  
所有されていた気動車  
キハ5800形とキハ6100形  
形式図面

(出典は各々に付した。)

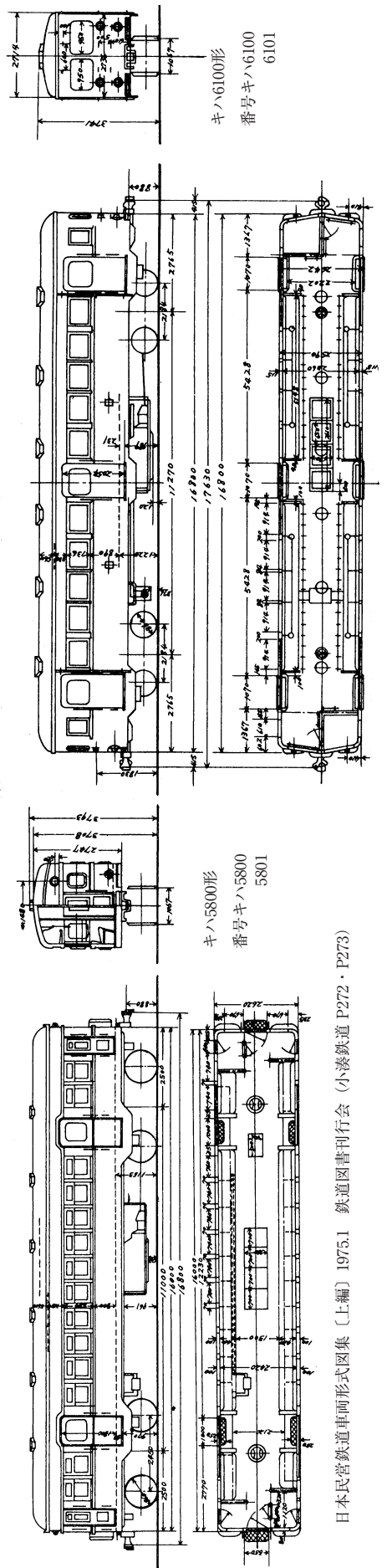
■ 機関車庫 (新築時の設計図から)

小湊鉄道五井機関区・機関車庫の設計図面。1925 (大正14) 年の開業に合わせて新築された建築物で、現在も工作場/気動車庫として構内に建っている。本図は、今回の取材で同社鉄道部より青森市の元図工コビーを提供していただいたトレースしたもので、小屋組みや基礎なども描かれている。図内に示す数値は尺寸表記である。

B滝+Ⓢ 「模景を歩く SCENE:4 小湊鉄道」  
[Rail Magazine No.187] 1994.4から転載  
株式会社 ネコ・パブリッシング



第4図



組み立て、五井停車場付近地築作業等がある。写真帳は16ページほどあると記載されているので、五井から里見間の鹿島組が施行した部分の、工事写真が掲載されていると考えられる。写真はキャビネ判のコロタイプ印刷のため印刷網目が無く、拡大鏡による観察と銘板の判読作業が、機関車特定のカギとなった。結局機関車は伊予鉄道7号機関車と同じ貿易業者が輸入した、クラウド社製と判明した。英国の商社がドイツ製の機械を日本に輸出したことになる。

昭和56年（1981）私鉄研究を継続的されてきた和久田康雄氏は、「日本の私鉄」を新書として纏められており、京成電鉄傘下の小湊鉄道が記載されている<sup>(55)</sup>。

昭和57年（1982）鉄道ピクトリアル誌には、20系気動車の特集として、「キハ20系の構造と形式別特徴」・「20系気動車のあゆみ」・「20系気動車登場の波紋」が本文記事として掲載されている<sup>(56)</sup>。

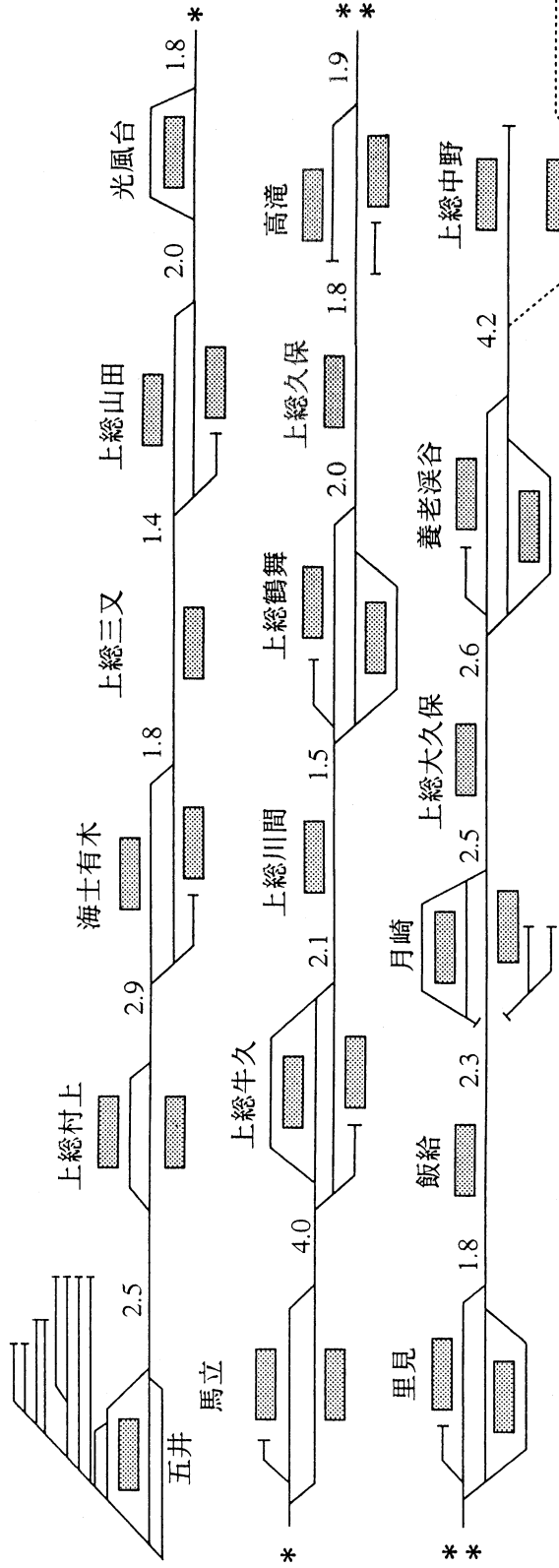
また「私鉄の20系気動車」として、小湊鉄道キハ200形の写真が掲載され、1961～1977年にかけて14両が日本車輛で製作、初期形と後期形では若干の相違があることを指摘している。

昭和58年（1983）鉄道ピクトリアル誌<sup>(57)</sup>は、関東地方のローカル私鉄特集として、「関東地方ローカル私鉄の系譜」の中の、「非電化私鉄の開業とガソリン動力の導入」に小湊鉄道ジハ10、ジハ100の写真が掲載されている。「運輸成績の動向」では、小湊鉄道は低水準停滞で安定した状態であるとしている。「昭和20年代あの日あの時あの車両 関東地方ローカル私鉄紀行」では、小湊鉄道ジハ50の写真が掲載され、片ボギー式のガソリン動車で前身は省キハ5020（←芸備鉄道）であり、昭和27年当時は休車中であった。当時の小湊鉄道は、天然ガスによるガソリンエンジン駆動からディーゼル機関への転換直後であり、国鉄譲渡のキハ41000形が主役であったことを伝えている。「大手私鉄による地方私鉄の系列化のあゆみ」では、京成グループ範疇に小湊鉄道は所属し、戦時中の系列化から、現在に至る各私鉄の経営形態を分類している。「房総の地方私鉄 よもやま話」では、小湊鉄道が大正14年開業当時は、電化の構想があって客車も電車に改造できる設計となっていた。また、鶴舞駅には発電所を設けていたことを報告している。「現況の小湊鉄道」の写真では、昭和50年製のキハ211からは側窓のユニット化など、若干の改良が加えられたことを記している。「小湊鉄道」現況記事には、路線図が掲載されている。路線図は第5図の1996年より開業当時に近く、線路の中途断絶がなく、この時点まで旧状を留めていたことがわかる。キハ200形は、キハ211・212が昭和50年、キハ213・214が昭和52年までに入線したことが報告され、計14両となり現在に至っている。キハ200形の前面は、京成電鉄の電車に似ているといわれている。キハ200形の前面は、京成電鉄のモハ3200系に近い顔をしており、国鉄のキハ20系との合の子としている。これも系列化の反映かも知れない。

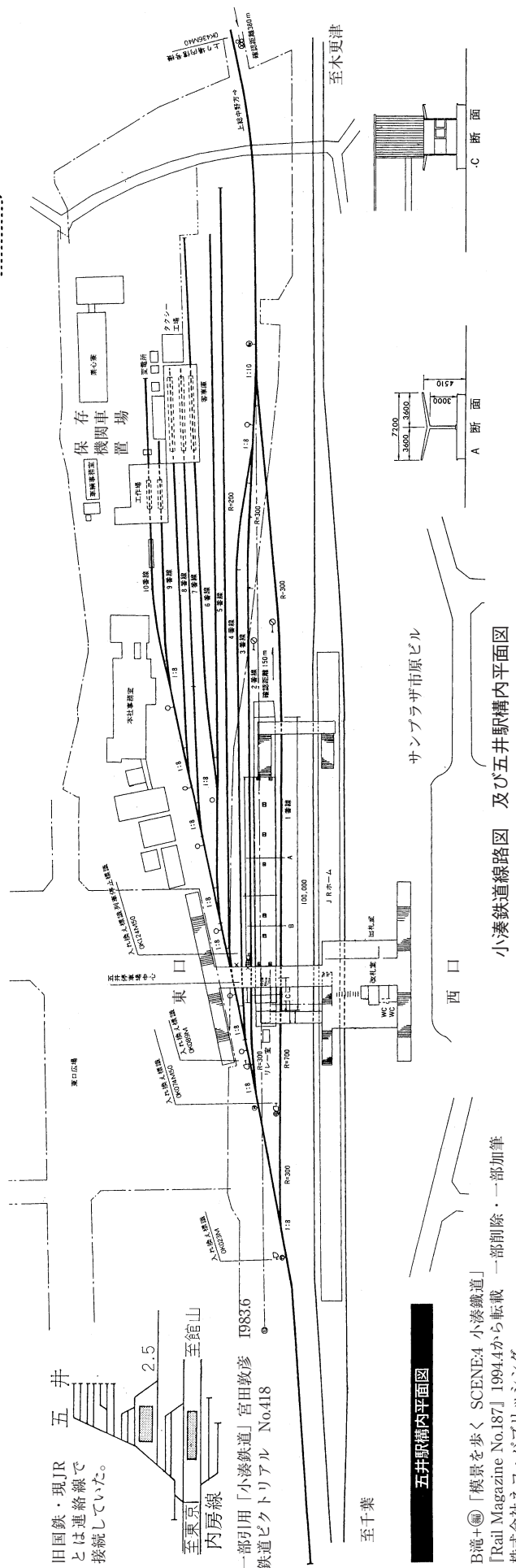
昭和58年鉄道ファン誌では、「昭和30年代の地方私鉄を訪ねて古典ロコ・軽便。田舎電車、そして…」の写真中に、1965年8月22日の小湊鉄道キハ5800とキハ6101の姿があり、キハ5800前照灯がまだ1灯の改造前状態であることがわかる<sup>(58)</sup>（写真①）。

昭和60年（1985）には、財団法人観光資源保護財団発行、日本ナショナルトラスト鉄道文化財を考える会編集の「鉄道文化財調査報告」が刊行された<sup>(59)</sup>。構成内容は、第1章鉄道文化財とその保存の意義、第2章鉄道文化財保存の略史、第3章鉄道文化財保存の現状、第4章鉄道文化財保存の問題点と展望－今後の課題と提言となっており、この時点における鉄道文化財のあり方について総合化している。データとして主な鉄道関係博物館・資料館、付表－1 鉄道記念物一覧、付表－2 準鉄道記念物一覧、付表－3 都道府県別保存鉄道車両一覧、付表－4 都道府県別保存国鉄蒸気機関車一覧がある。

線路図を見ると列車の入換、待ち合い可能な駅がほぼ1駅ごとに確保されていることがわかる。



小湊鉄道線路図 引用 葛西隆也「現有私鉄概説、小湊鉄道」[鉄道ビクトリアル No.620] 1996.4 鉄道図書刊行会



五井駅構内平面図

B滝+④「模様を歩く SCENE:4 小湊鐵道」  
 「Rail Magazine No.187」1994.4から転載 一部削除・一部加筆  
 株式会社ネコ・パブリッシング

第3章の道文化財保存の現状の中に、小湊鉄道の蒸気機関車の紹介記事が載せられている。付表-3、都道府県別保存鉄道車両の千葉県の欄には、千葉県指定文化財の小湊鉄道の3両が掲載されている。

昭和61年（1986）鉄道ファン誌では、4月「続 鉄道聯隊の見える街」の記事において、小湊鉄道に移ったK<sub>2</sub>形機関車は、139号は五井駅の入換に、140号は新京成電鉄の建設に使用され、138号は高崎第一機関区への所属が、「昭和23年12月1日現在の東京鉄道局機関車配置表」に確認された。また小湊鉄道のコッペルE形は、E<sup>102</sup>とE<sup>13</sup>であること、九十九里鉄道に転用する計画をたてたが、構造が複雑のため、改軌が困難として断念してスクラップとなったと述べられている。B104号機については昭和5年に国鉄大宮工場において改造され、敗戦軍解体の際、鉄道資材確保中、足の遅いK<sub>2</sub>機関車よりB104号機関車に目を付け、貸し渡しの形式により入手したことが記されている<sup>(60)</sup>。

同年9月の鉄道ファン誌には「この夏、地方私鉄！」に小湊鉄道が紹介されている。この時期頃から、地方私鉄の関心が徐々に高まってくる<sup>(61)</sup>。

昭和62年（1987）には、「レイルNo20 私鉄紀行からっ風にタイホーンが聴える」、副題「昭和30年代関東のローカル私鉄をたずねて」として写真集（上下）が刊行された<sup>(62)</sup>。キハ41002の写真は、砂散布装置の装着を示している。機関庫内にはジハ100と並ぶ蒸気機関車の後面が写真にあり、奥には給水塔タンクが設置されていることがわかり、1959年9月7日の撮影である。1973年9月11日のキハ6100は、東武鉄道無蓋貨車のトラ81を牽引する五井駅構内の写真がある。ほかの車両の写真として、キハ41002・41003・41004があり、芸備鉄道4→省キハ5021→小湊ジハ50→ハフ50となった特殊な片ボギー車がある。また構内隅に物置きとして残されたハフ2、ジハ11の珍しい写真が掲載されている。前述したが小湊鉄道の種々の車両は、昭和30年代にはほとんど廃車されて、写真集には最後の姿を留めている車両が多いことがわかる。

平成元年（1989）9月原田勝正氏の「鉄道史研究試論」が著わされ、第1章鉄道技術の導入における受容の姿勢、第2章鉄道技術の自立過程における技術官僚の役割、第3章大量輸送の要請と企画化の進行、第4章大量輸送化と駐車場の改良、第5章戦時輸送と改良の挫折、補論鉄道史研究における政策と技術となっている<sup>(63)</sup>。研究参考文献では技術史の基本文献から、史料・統計資料、鉄道史伝記類まで挙げられ、定期行物を含めると249文献になっている。本論に使用している一般出版物の鉄道ピクトリアル（1951～）、鉄道ファン（1961～）等も、掲載されている。

平成元年4月Rail Magazine誌に、「鉄道模型考古学」自由形機関車の項目に天賞堂Cタンクが紹介される<sup>(64)</sup>。この正式名称は0-6-0タンク（ボールドウィンタイプ）とされ、40年以上販売されている秀作である。小湊の1・2号機関車に似ている。

平成3年（1991）、鉄道模型趣味別冊のHOモデリング小型車輛の製作では、「Cタンクの改造」、「私鉄タイプの1C1タンク機 [タンクロコ改造第2例]」、「01/80・13mmの自作機国鉄B10形タンク機関車」の記事が紹介されている<sup>(65)</sup>。これらは、前述のボールドウィンタイプ、市販モデルの改造が2編と、第1図にも紹介したスケールモデルと軌道幅の問題の解消事例である。この問題は鉄道展示の際、縮小模型やジオラマを製作する必ず問題となり、展示担当の学芸員は必ず解決する必要がある事例であると思われる。その事例が小湊鉄道に関係する機関車であることは興味深いことであるし、良い研究材料となった。

平成4年（1992）Rail Magazine誌に、「特集：愛しきDMH17の仲間たち」が掲載された<sup>(66)</sup>。それは

ディーゼルエンジンの型式で、DMはDiesel-Motorの略、Hはシリンダの数を示し8気筒を表している。17は排気量を表しており17ℓの総排気量を示し、その次のアルファベットは設計変更回数を表しCであれば、4回目の設計機種となる。DMH17は昭和26年から昭和52年まで製造された気動車用エンジンである。2000両以上に搭載された量産発動機であったが、DMH17C縦形・DMH17H横形が搭載された営業用車両は急速に淘汰されてきている。小湊鉄道の200形気動車は、昭和36年から昭和52年まで14両製作され、DMH17エンジンの製造終了時期と合致している。

平成5年8月(1993)鉄道ピクトリアル誌は房総の鉄道の特集として、「房総の鉄道 路線網の歴史過程」、「文学の舞台となった房総の駅と鉄道」、「房総夏臨の思い出」等が掲載されている<sup>(67)</sup>。国有鉄道木更津線として、蘇我-姉ヶ崎間の明治45年3月28日の開業、翌年大正元年8月21日木更津まで開通、大正14年7月11日安房鴨川まで延ばし、昭和4年4月15日内房西線となり、昭和47年7月15日の内房線となった。小湊鉄道は、免許が大正2年11月26日、五井から里見間開業が大正14年3月7日となっているため、木更津線開業が発端となっていることは明らかである。内房線複線化は八幡宿-五井間昭和40年7月、電化は蘇我-木更津間昭和43年7月となっており、昭和30年代までは、小湊鉄道と、内房線は設備的には余り変わらないことが分かる。文学作品に登場する内房線の駅は、立野信之「流れ」の八幡宿駅、小湊鉄道では上林暁「鄙の長路」の鶴舞・朝生原駅(現養老溪谷)である。夏の臨時列車については、小湊鉄道では昭和38・39年に五井-千葉間で、朝夕1往復直通乗り入れをおこなった。

平成6(1994)年4月Rail Magazine誌に、「がんばれ!ローカル私鉄」の特集が生まれ、ローカル私鉄にとってのこの十年に、1984年10月16日小湊鉄道手荷物輸送廃止、1996年3月3日小湊鉄道小荷物輸送廃止、1990年7月10日小湊鉄道キハ200形2両冷房化(初冷房)の記事が載せられている<sup>(68)</sup>。同年6月Rail Magazine誌の、ニュースレポートに「K2故郷に帰る」の記事がある<sup>(69)</sup>。鉄道聯隊K<sub>2</sub>134号機が、西武鉄道ユネスコ村から搬出され、鉄道聯隊ゆかりの地である習志野市津田沼駅北口に静態保存となった。習志野市では欠品となっていたエキセントリックロッドを新製し、各部に防錆処理をして恒久的な保存対策をしている。K<sub>2</sub>は小湊鉄道が保有していたものと同じであり、共に600mmの特殊軌間から、1067mmの国鉄標準狭軌に改軌されている。

平成7年(1995)2月鉄道ピクトリアル誌に、「白井茂信さんを偲ぶ」として青木栄一氏の追悼文が掲載されている<sup>(70)</sup>。白井氏の論文を外すと、小湊鉄道研究は成り立たない。鉄道研究に大きな功績があり、白井氏が青木氏に「鉄道ファンはこまかい分類を好む傾向があるが、もっと大事なことは共通点を見出してグルーピングをすることです。体系的な車両史やそれが登場した社会的背景の探究にはこの方法が不可欠なのです。」と、最初の対面に語ったことが述べられている。

同年6月鉄道ピクトリアル誌は、「貨車への興味」を特集として扱っている。貨車については、この後研究論文が飛躍的に増加する。「両国駅の生きる道-千葉の鉄道101年」として、開業当時から東京から房総方面の起点であった両国駅の記事がある<sup>(71)</sup>。

同年10・11月鉄道ピクトリアル誌には、「京福電鉄貨車通観前編・後編」が掲載される<sup>(72)</sup>。貨車による車両変遷史のまとまった論文として注目される。小湊鉄道は既に貨車輸送はなく、車籍に残る貨車は、無蓋車のトム11・12、援急車のワフの3両のみである(写真④・⑤)。

平成8年(1996)1月鉄道ピクトリアル誌は車両メーカーの特集を組み、「日本の鉄道車両メー

カーの系譜」、「楢円銘板研究序説」、「日本の鉄道車両メーカー要覧」が掲載されて、小湊鉄道創業時からの貨車のメーカーは、東洋車輛（株）福岡県小倉市足立1922年設立であることが分かった<sup>(73)</sup>。また「本誌1995年10・11月号『京福電鉄貨車通観』に関する若干の思察点」は、上述の岸氏の論文に対する史料解釈の補足であるが、貨車に対する研究の深化が窺える。小湊鉄道の貨車の研究は進んでいないのが現状であるが、保存された蒸気機関車と共に、創業当時の木造貨車など、調査資料の保存も考える必要があると思われる。

同年4月鉄道ピクトリアル誌では、「関東地方のローカル私鉄」の特集を組み、「ローカル民鉄の現状と近年の動向」では、小湊鉄道は京成電鉄グループに属しながらも、子会社から系列会社となったこと、また車輛の冷房化を図り、旅客の逸走防止に努めているが、車両の取り替えやCTCの導入、あるいは線路の大規模な改修は行なっていないとしている<sup>(74)</sup>。「昭和30年代の関東ローカル私鉄乗りある記」では、五井駅のキハ6101+キハ200、上総中野駅の蒸気機関車1号機がトム9貨車を押している写真が掲載されている。「1950年代小湊鉄道の多彩な車両群」では、キハ6101が無蓋貨車を2両牽引、キハ6100が電車からの改造気動車である説明、ジハ10がガソリン車から天然ガスカーに改造されて、その後ハフ10として付随車として余生を全うしたこと、キハ41001は、元国鉄キハ41076を改造したこと、キハ101は電車形ガソリンカーをディーゼル機関に換装したこと、ホハフ3は工藤式蒸気気動車で、1939年に小湊鉄道に転じてキハ1にその後機関をはずして客車となったこと、ハ1は武蔵野鉄道創業時の四輪客車で8両が小湊鉄道に売却され、一時は天然ガス車の付随車になっていたことなど、写真とともに掲載されている。「関東ローカル私鉄の保存・廃車体散見」では、蒸気機関車のほかに、小湊鉄道の有蓋貨車であるワム1・2が東洋車輛製であること、国鉄のワム3500形ワム7296が、倉庫として五井駅構内に残されていることを写真とともに伝えている。「現有私鉄概説小湊鉄道」にも現有気動車と共に、ワフ1・トム10の写真があり、第5図に紹介した小湊鉄道線路図が掲載されている。なお、同誌の表紙は月崎-上総大久保間の、小湊鉄道キハ200形のカラー写真となっている。同年8月鉄道ピクトリアル誌では、「続・楢円銘板研究序説」として1月号の訂正と補遺を行っており、「改訂版日本の鉄道車両メーカー要覧」では、小湊鉄道貨車車両メーカーの東洋車輛が1917年設立の枝光鉄工所と1923年合併し、1941年解散したことを掲載している<sup>(75)</sup>。

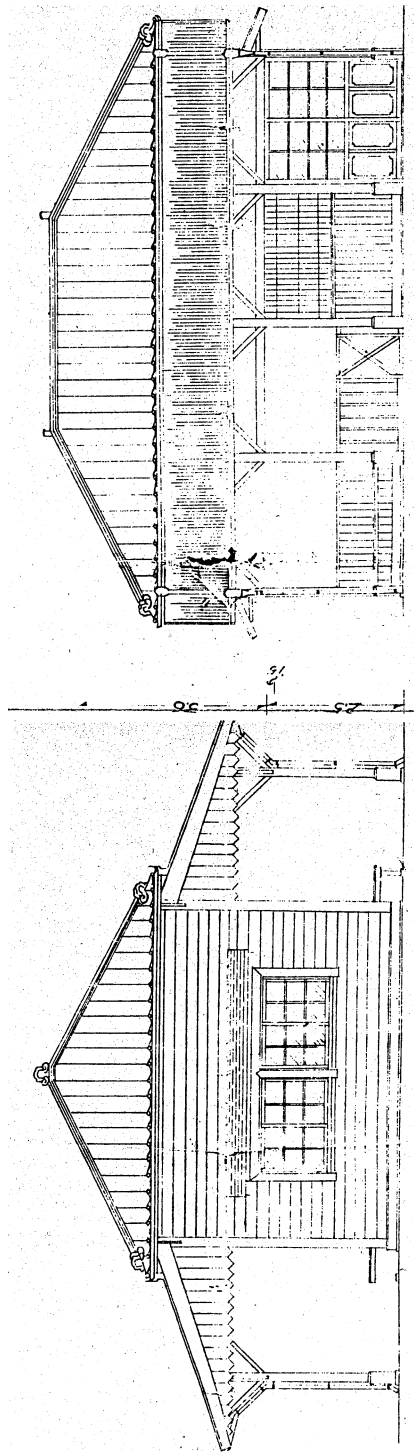
同年10月鉄道ピクトリアル誌は「鉄道の産業遺産」の特集を組み、「鉄道の産業遺産」では産業考古学と産業遺産の定義、保存事例、今後の課題等実例を挙げて具体的な問題を提起している<sup>(76)</sup>。そして産業遺産について、「人間のところに訴える保存を実現しよう」として、「鉄道工場で使われていた工作機械を保存する際に、ただ機械だけ残すのではなく工具、治具、工作台、加工時のメモや切り屑などもそのまま残したり、機械で切削を行なっている様子を映像や音として記録しておく方が有効な保存」であるとしている。また研究方法として、「鉄道産業遺産を調べよう-車両・施設などの多分野にわたる産業遺産調査の基礎知識-」が掲載されており、在野の研究者のあり方を示している。

同年には「鉄道廃線跡を歩く」シリーズの「鉄道廃線跡を歩くⅡ」が刊行され、「南総鉄道」が紹介される<sup>(77)</sup>。ここには昭和11年頃撮影の、南総鉄道1号機関車の写真が掲載されている。世紀末を迎え、各地で20世紀の名残りを探す試みがなされ、一般図書にも紹介されるようになった。

平成9年7月（1997）Rail Magazine誌では、小湊鉄道特集号的な企画「“原風景へ”」、副題「小湊鉄道-正しい日本の田舎の風景」、「小湊鉄道へGO!」、副題「国鉄な!? 雰囲気たっぷり」、のカ

小湊鉄道駅舎及び  
五井駅構内車体台車検修場建屋設計  
図面

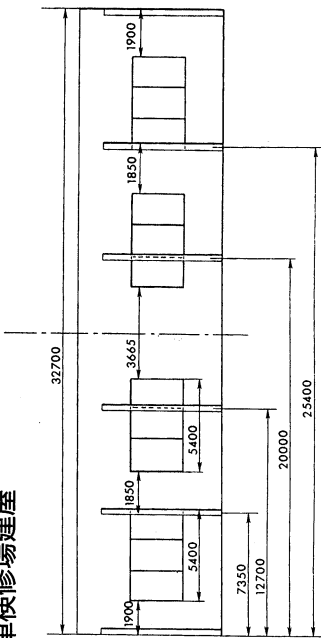
駅舎は「数形式に」統一され、  
現在も使用されている。旧状と  
風情を残す上総鶴舞駅が関東の  
駅100選に入選している。



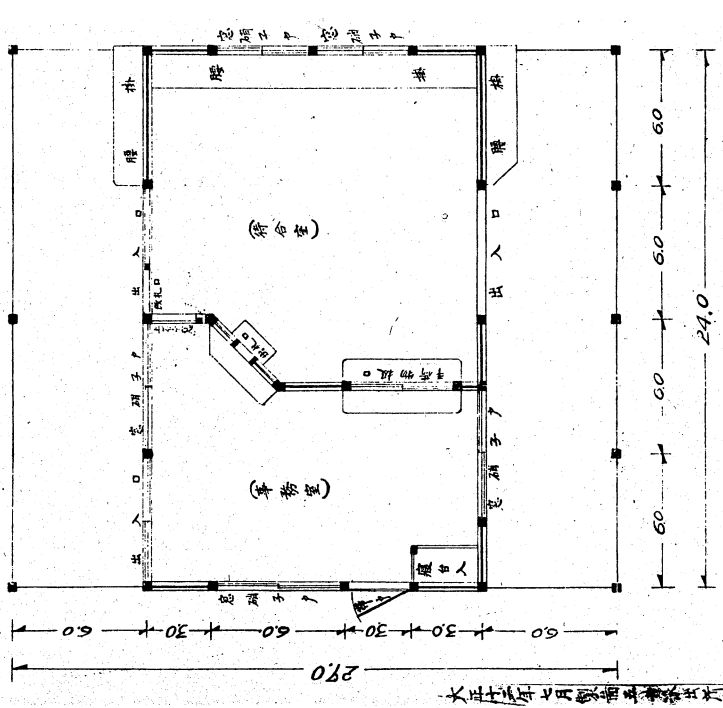
側面

正面

■車体台車検修場建屋



第6図



小湊鐵道株式會社  
停車場新築工事設計圖  
縮尺 細部五拾分之二  
其他詳尺

小湊鐵道上総鶴舞駅関東の駅100選  
入選記念 リーフレットより

B境+● 「模景を歩く SCENE:4 小湊鐵道」  
[Rail Magazine No.187] 1999.4から転載  
株式会社ネコ・パブリッシング

ラーグラフィアを豊富に掲載した紹介がなされる<sup>(79)</sup>。表紙も小湊鉄道の200形気動車を用い、紙面のカメラメーカー広告も新緑の小湊鉄道を被写体としている。副題に表されているように、写真は叙情的であり、「小湊鉄道の情景は、20年前はごくあたりまえの風景だった。・・・」と、述べている。記事の内容は小湊鉄道撮影旅行マニュアルが主になっており、懇切丁寧な指導がなされており、鉄道沿線にもマナーの厳守を呼びかけている。またこの号には、交通博物館に保存展示されている1号機関車が、重要文化財に指定された記事が掲載されている。

平成11年（1999）4月～6月Rail Magazine誌では、小湊鉄道の施設を中心とした記事が連載された。それらは、「模景を歩くSCENE：4小湊鉄道」<sup>(80)</sup>で、五井駅・機関庫・貨車等が掲載され、一部掲載された図面を、第4・5・6図に転載させていただいている（写真⑥）。また機関庫内には、鉄道聯隊の97式軽貨車が置かれ、整備のDMH17エンジンが載せられていたそうだ。写真⑫は、工作室の内部写真であり、ベルトドライブの工作機械は、現在では珍しくなっている。「模景を歩くSCENE：5小湊鉄道」<sup>(81)</sup>では、沿線の飯給・高滝・上総鶴舞駅の停車場平面図、および上総鶴舞停車場駅舎の工事設計図面を掲載している。上総鶴舞駅は旧状を良く残していることから、1998年10月に「関東の駅100選」に認定されており（写真⑦）、小湊鉄道でもそれを記念して、リーフレットと入場券（硬券）をセットにして記念品を販売している。第6図はリーフレットの平面図青図を反転して掲載している。「模景を歩くSCENE：6小湊鉄道」<sup>(82)</sup>では、海士有木・月崎・養老溪谷駅の停車場平面図、月崎・養老溪谷駅の駅舎設計図が掲載されており、駅舎の共通設計も複数種類あったことが解かる。どの記事もカラー写真がとても美しく掲載されている。

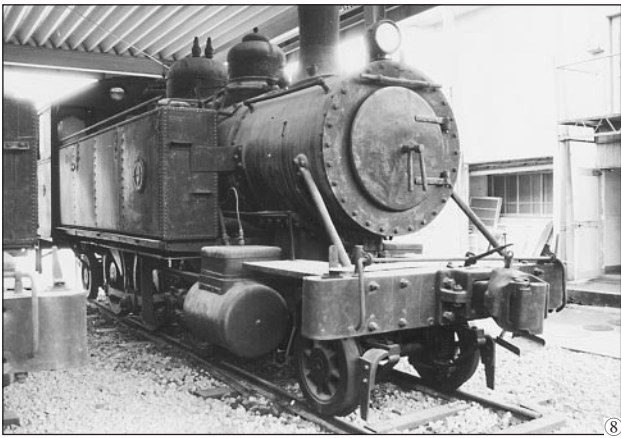
同年8月、「キハ41000とその一族（上）」という鉄道シリーズが刊行された<sup>(83)</sup>。巻頭の「はじめに」は、上総中野駅の木原線と、小湊鉄道のキハ41000の3両が並んで被写体となっている。同じシリーズ「キハ41000とその一族（下）」の、「小湊鉄道」では国鉄から地方鉄道に払い下げられた車両の、概要が掲載されている<sup>(84)</sup>。小湊鉄道の記事には、キハ41000の略歴を掲載している。車歴表には、小湊鉄道41004が昭和24年に追突事故で廃車になったことを伝えている。

平成12年（2000）には鉄道廃線シリーズ「駅舎再発見」の「私鉄駅舎の共通設計」に、小湊鉄道の 上総鶴舞・牛久駅が登場する<sup>(85)</sup>。上述の雑誌の<sup>(81, 82)</sup>が参考になっているものと考えられる。

同年8月日本のローカル私鉄2000が刊行され、「小湊鉄道」が紹介されている<sup>(86)</sup>。キハ200形は平成5年までに全車冷房化されていることを伝えている。また沿革には、昭和44年に貨物営業を廃止し、昭和47年には郵便物輸送も廃止したことが記され、平成7年に五井－上総牛久間において、ATSを設置したことを伝えている。

平成13年（2001）5月Rail Magazine 誌では、「“鉄日和”小湊鉄道」として、小湊鉄道の小撮影旅行の紹介をしている<sup>(87)</sup>。これは、平成11年～13年にかけて小湊鉄道が3年連続して写真コンクールをおこなったことと同調するもので、平成14年5月に109点の入選作品が写真集として小湊鉄道から刊行された。同年7月、鉄道模型趣味誌では、「房総の休日」の記事の中にカラー写真のキハ41001・キハ6101・キハ5801が登場する<sup>(88)</sup>。1950年代のカラー写真は珍しく、当時の車輛塗装色がよくわかる。鉄道模型は縮小するが、かなり丹念な車輛観察を重ねて模型化するので、このような写真は不可欠であろう。そのため一般民間にも、資料的価値の高い写真のお持ちの方は多いと思われる。

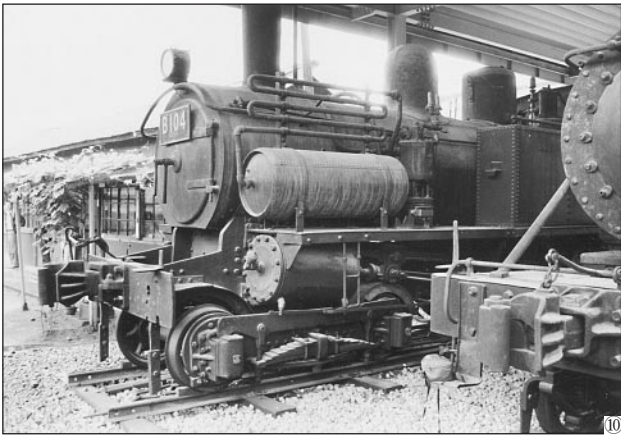




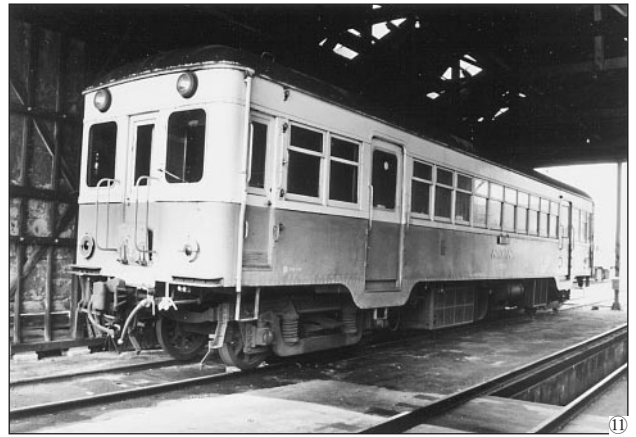
1号機関車



1号機関車小湊鉄道社章



B104機関車



休車中のキハ5800形 (1985年)



小湊鉄道五井機関庫附属工作室 (1985年)

写真⑧～⑫

#### 4. 小湊鉄道の現在

千葉県指定文化財歴史資料「小湊鉄道蒸気機関車3両」を所有する小湊鉄道の研究史概観は、3の鉄道雑誌における研究者の報告においてはほぼ網羅したと考えている。小記事を含むと100近い文献が選択された。明治45年（1912）3月、現内房線蘇我－姉ヶ崎間の開通から始まる、大正2年（1913）11月の小湊鉄道の免許取得、大正14年（1925）3月の、五井・里見間開通から、昭和3年（1928）5月の上総中野までの全線開通がある。養老川水運の河口基地だった五井が、水運から陸運流通転換の鉄道の新しい起点となったことが、新しい市原郡の核となった理由として考えられ、その後の鉄道経済社会発展の恩恵を受けることになる。従来の養老川水運は、養老川に沿って建設された小湊鉄道にその役割を譲り、衰退する。鉄道の貨物運搬業務も、戦後の高度経済成長の中トラック輸送にとって変わられて、小湊鉄道も旅客業務のみとなった。起点の五井が東京首都圏50km付近であるので、五井から更に南下する小湊鉄道は、山間丘陵部の過疎地域に連絡する路線となった。小湊鉄道中間地点上総牛久は旧南総町の中心地、養老川水系の山間部と平野部の接点の谷口集落である。小湊鉄道の旅客の大部分は、ここで折り返すこととなる。また茂原・木更津間の国道409号線、房総縦貫道の中間地点でもある。そのため五井から上総牛久地域までは、部分的に若干の都市化市街化が進み、住環境整備のため市街化調整区域に指定されている。

上総牛久から南の上総川間駅～養老溪谷駅・終点上総中野駅間は、乗客数も極端に少なくなるため、列車本数も少なくなる。関東地方で最後まで楽しめる紅葉エリア、梅ヶ瀬・養老溪谷入り口の養老溪谷駅（旧朝生原）は、終点上総中野駅の直前の市原市内の駅である。これらの駅は、旧国鉄木原線の現いすみ鉄道への連絡よりは、行楽客のアクセスが現在の役割となり、当然児童生徒の通学手段ともなっている。小湊鉄道は戦後のディーゼル機関による気動車の導入、新造車輛による徹底した規格化による車輛整備の合理化を、昭和50年代前半までに達成し、創業当時の施設を維持しながら現在に至っている。それらは良き昭和の財産としてレトロブームの中、南部の上総牛久駅以南の路線風景と共に珍重されることになった。旅客車輛のDMH17発動機のエンジン音までが懐かしい響きとして、取り上げられるようになったのである。

関東地方中小私鉄の経営は、公共交通システムの今日的課題から考えても、非常に難しいとされている。昭和20年代後半から、昭和・平成にわたり新世紀を迎えた小湊鉄道50年の研究史は、1924年開業の小湊鉄道80年近い歴史が、どこへ向かうのかを指し示しているわけではない。しかし、大正末から昭和初期の激動期に生まれた小湊鉄道が、平成の21世紀初頭に新しい価値観や文化環境を与えられたことは間違いないことと思われる。

#### 5. おわりに

小湊鉄道蒸気機関車3両は、県指定文化財として保存された歴史資料としては、最も早い段階の鉄道文化財である。蒸気機関車のSLブーム頃多くの施設においてそれら車輛が残されたが、施設の老朽化と共にそれら多くの車輛が、朽ちて行く状況が報告されている。本論でも取り上げた鉄道聯隊のK形134号機関車は、津田沼1丁目公園で覆い屋根の下に保存されている。しかし同型の121号機は、JR東日本土崎工場内で保存されていたが、解体されたと同記事にある<sup>(89)</sup>。このことは一私企業に文化財の保存管理を任せ、一方的に担当させることの危うさを物語っている。

茨城県の鹿島鉄道では、鹿島鉄道存続を支援するNPO法人「まちづくり市民会議」の主催するイベント列車が、同線石岡－鉾田間で運転されたことが報告されている<sup>(90)</sup>。長崎県島原鉄道では、レイルフアンを主軸とした鉄道利用客増新計画の一環として、国鉄キハ20形のキハ2016を重要部検査の機会に、車体をクリーム色4号+朱色4号に塗り替えを行い、細部まで国鉄時代の再現に努め、「鉄道の日イベント」開催の構想を有していることが、報告されている<sup>(91)</sup>。また青森県大畑線では、キハ85列車の、動態保存会の行っている動態保存運転会に、竹中平蔵経済財政担当大臣が旧下北交通大畑駅構内を視察しており、有志によって資金を出し合い車輛の保存を行う活動が、「寄付税制および寄付社会」という大臣の研究課題に合致したことが、視察理由として上げられている<sup>(92)</sup>。大正時代の木造貨車の、遠州鉄道ト404の保存募金の目標額達成の記事が紹介されている<sup>(93)</sup>。1923年（大正12年）製造の無蓋貨車が使命を終え、解体される予定だったが、現存貨車では最も古い1両として貴重な存在であった為、加悦鉄道保存会が先行取得を行い復元整備後、加悦SL広場に寄贈された。貨車の市民募金による買い上げの例がほとんどなく注目を集めていた。小湊鉄道の貨車もこのト404と同じく古いことは、銘板の製造年号で明確である。以上紹介した記事は、一鉄道雑誌の一冊分のごく一部である。これらは、鉄道文化財の新しい保存活用の在り方を示している。小湊鉄道のSLが、日本で唯一県の文化財指定を受けていた頃からの、地方自治体による保存・活用から、市民参加による保存・活用及び運用の道が開かれようとしている<sup>(94)</sup>。

小論をまとめるに際し、昭和60年当時、小湊鉄道鉄道部車輛・保線・施設課の係長魚路芳夫氏には、小湊鉄道に関連する文献文書等についてご指導を受けた。また平成14年には小湊鉄道鉄道部部长中村満義氏、工務・車輛課長星野敏一氏に文献、その他にお世話になった旨、ここに記して感謝申し上げます。また、蒸気機関車の県指定について、当時千葉県教育庁文化課において実務を担当され、長らく市原市の学校教育に携われた佐野彪先生には、指定当時のお話を伺ったことを記し、感謝申し上げます。

小論は鉄道関係の雑誌・書籍を数多く引用している。引用に際しては、文末に連番号を付し、各文献から内容を要約して文章化している。これらの連番号は小論末の引用参考文献と符合している。原著はそこに記載のとおりであり、要約の内容についてはすべて筆者の責任である。記載内容の不備、誤用などがあればご教授頂きたい。挿図・図版・写真等出典については、図面中にも記載してあり、記載がない写真については著者が撮影している。

今回小論を起こす動機は、同じ職場・同じ仕事であった小出紳夫氏の急逝であり、同僚として彼の仕事の足跡を辿りたい想いであった。小出氏は国分寺台遺跡群調査担当後、約10年間にわたり教育委員会事務局文化財保護の実務を経験され、文化財センターと埋蔵文化財行政の調整を担当しながら、建造物修理・仏像調査等の埋蔵文化財ではない文化財一般の管理実務もなさるなど、広範な知識を有する経験豊富な文化財担当者であった。一ヵ年の短い間であったが、同じ部署で行政の文化財調整事務を担当し、彼から誠実に仕事を遂行することの困難さを学んだ。

ここに、小出紳夫氏の残された仕事の一端を記録し、彼への哀悼の意としたい。

## 註および引用・参考文献

- (1) 千葉県教育委員会1990「小湊鉄道蒸気機関車」『千葉県の文化財』千葉県教育委員会 平成元年（1999.3）には千葉市の旧鉄道聯隊材料廠煉瓦建築が千葉県有形文化財に指定されている。この鉄道聯隊の存在は、小湊鉄道建設時から深い関係があり、逐次後述する。
- (2) (仮称) 市原市立博物館建設構想検討会議は、昭和59年6月に第1回会議が開かれ、基本理念・博物館構想から検討を始めている。
- (3) 小出紳夫氏は平成13年10月15日に急逝された。西川修一2001「会員通信」『考古学研究』第48巻第3号 考古学研究会
- (4) 斎藤 進・小島正裕ほか2000「汐留遺跡Ⅱ - 旧汐留貨物駅跡地内の調査第5分冊」『汐留遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター
- (5) 和久田康雄1995「4510南総鉄道」『私鉄史ハンドブック』（第2刷）(株)電気車研究会
- (6) (5)と同じ「4509小湊鉄道」
- (7) (5)の『私鉄史ハンドブック』は私鉄の定義からはじまり、鉄道統計資料の読み方、私鉄史の参考資料等鉄道資料の調査研究の基本を、ダイジェストにまとめられている。各鉄道ごとに参考図書も紹介されており、系統的調査研究する第一歩となる。また1983年に鉄道史学会が発足したと、鉄道だけでなく交通史研究会、鉄道施設なども研究に取り上げる産業考古学会の存在も伝えている。  
和久田康雄1985「それぞれの鉄道趣味 鉄道書の収集と整理」『鉄道ピクトリアル』通巻441号 鉄道図書刊行会  
上記には鉄道図書の取り扱っている古書店も紹介している。
- (8) 青木栄一1962「小湊鉄道」『鉄道ピクトリアル』通巻139号 鉄道図書刊行会
- (9) 千葉県教育庁生涯学習部文化課編集1993「千葉県近代建造物緊急調査報告書」千葉県教育委員会
- (10) 千葉県立現代産業科学館編集1998「千葉県の産業・交通遺跡」『千葉県産業・交通遺跡実態調査報告書』千葉県教育委員会
- (11) 杉山正司・書上元博ほか1999『さいたまの鉄道』埼玉県立博物館
- (12) 井口 崇・桐村久美子・多田信子2000「鉄道開通」『陸運水運20世紀』袖ヶ浦市郷土博物館
- (13) 鉄道ピクトリアル編集部1999『鉄道ピクトリアル総目次』電気車研究会・鉄道図書刊行会 これら総目次は毎年更新されている。
- (14) 白井茂信1956『国鉄蒸気機関車小史』鉄道図書刊行会  
白井茂信1959「形式5500」『国鉄蒸気機関車形式図集』鉄道図書刊行会  
白井茂信1968「形式B10」『日本蒸気機関車形式図集成』1 誠文堂新光社  
白井茂信1969「形式5500」『日本蒸気機関車形式図集成』2 誠文堂新光社
- (15) 朝日新聞社編1975「国鉄蒸気機関車形式別配置両数一覧表」『世界の鉄道別冊 日本の蒸気機関車』朝日新聞社
- (16) (14)と同じ。国鉄蒸気機関車となっているが、詳細な足取り調査がなされており、のちの研究者の礎となったと思われる。
- (17) 青木栄一1956「最近の小湊鉄道」『Rail Fan』No.28
- (18) 西尾克三郎・白井茂信1959「大正期の国産私鉄機」『鉄道ピクトリアル』通巻100号 鉄道図書刊行会  
瀬古竜雄1959「東北の古典ロコ」『鉄道ピクトリアル』通巻100号 鉄道図書刊行会
- (19) 衣笠敦雄1960「ディーゼル動車の今昔」『鉄道ピクトリアル』通巻105号 鉄道図書刊行会  
中川浩一1960「私鉄気動車に関する12章」同上
- (20) 生方良雄1961「木原線と小湊鉄道に乗って」『鉄道ピクトリアル』通巻122号 鉄道図書刊行会
- (21) 古美山義昭1962「TOPIC PHOTOS 関東だより 小湊鉄道に新車現わる」『鉄道ピクトリアル』通巻129号 鉄道図書刊行会
- (22) 中川浩一1962「日本の客車落穂集3」『鉄道ピクトリアル』通巻129号 鉄道図書刊行会
- (23) 石井幸孝1962「ディーゼル動車のしくみ」『鉄道ピクトリアル』通巻132号 鉄道図書刊行会  
和久田康雄1962「私鉄気動車あ・ら・かると」同上  
中川浩一1962「ローカル線DCの種々相」同上
- (24) 村本哲夫1962「私鉄車両めぐり(49)長野電鉄」『鉄道ピクトリアル』通巻134号 鉄道図書刊行会  
中川浩一・小熊米雄1962「変り種のDCを追って」同上
- (25) (8)と同じ。青木栄一1962「小湊鉄道」『鉄道ピクトリアル』通巻139号 鉄道図書刊行会  
「今月の話題・新幹線電車200キロをマーク」  
萩原二郎「青梅鉄道公園一べつ」……唯一残ったピーコック5500形式（B10改造前形式）が保存されている。  
奥田愛三2001「秋葉線廃線の日」吉川文夫・花上嘉成『RM LIBRARY 静岡鉄道秋葉線 - 石松電車始末記 -』(株)ネコ・パブリッシング
- (26) 白井茂信1969「BALDWINの製造番号について」『S L』No.2 (株)交友社

- (27) 白井茂信1969「小湊鉄道のポールドウイン」『SL』No.2 (株)交友社
- (28) 白井茂信1972「21 BALDWIN」『機関車の系譜図』1 (株)交友社
- (29) 白井茂信1972「10 BEYER PEACOCK」『機関車の系譜図』1 (株)交友社
- (30) 白井茂信1973「30 DAVENPORT」『機関車の系譜図』2 (株)交友社
- (31) 白井茂信1973「38 KOPPL」『機関車の系譜図』2 (株)交友社
- (32) 白井茂信1972「8 Kitson」『機関車の系譜図』1 (株)交友社
- (33) 白井茂信1976「52 川崎車輛 (川崎造船所)」『機関車の系譜図』3 (株)交友社
- (34) 白井茂信1973「45 つわものどもの夢の跡」『機関車の系譜図』2 (株)交友社
- (35) 白土貞男2002「蒸気機関車」『RM LIBRARY37 九十九里鉄道』(株)ネコ・パブリッシング
- (36) 白土貞夫1963「南総鉄道」『鉄道ピクトリアル』通巻141号 鉄道図書刊行会
- (37) 白井茂信1972「6 ROBERT STEPHENSON」『機関車の系譜図』1 (株)交友社  
安部彰夫2000「南総鉄道のロバート・スチブソン」『Rail Magazine』No.200 (株)ネコ・パブリッシング
- (38) 工藤政男1965「ガソリン動車から機械式ディーゼル動車まで」『鉄道ピクトリアル』通巻177号 鉄道図書刊行会
- (39) 白土貞男1965「千葉鉄道管理局における天然ガスカーの盛衰」同上  
青木栄一1965「私鉄における国鉄形機械式気動車」同上
- (40) 市角 明1966「千葉鉄道管理局車両 (機関車) の変遷」『鉄道ピクトリアル』通巻181号 鉄道図書刊行会
- (41) 半谷哲夫1966「房総線・総武線の線増工事」同上
- (42) 高松吉太郎1966「養老溪谷をあとに」同上
- (43) 古美山義昭・久保 敏1966「房総の私鉄拾遺」同上
- (44) 瀬古龍雄1967「私鉄のB6」『鉄道ピクトリアル』通巻195号 鉄道図書刊行会
- (45) 白土貞夫1967「読者短信 川崎製鉄千葉製鉄所の蒸気総退陣」『鉄道ピクトリアル』通巻195号 鉄道図書刊行会
- (46) 成田松次郎1968「2Bテンダ機関車の追憶」『鉄道ピクトリアル』通巻210号 鉄道図書刊行会  
今村 潔1968「2Bテンダ機関車のうちピーコック号の車歴」同上
- (47) 坂本哲朗1968「関東だより<1>3」同上 電化直前の姉ヶ崎駅貨物牽引のC58蒸気機関車 (68.4.2写真)
- (48) 古河寿之・後藤与一1970「蒸気機関車の保存と現状」『鉄道ピクトリアル』通巻237号 鉄道図書刊行会  
中川浩一1970「日本における蒸気機関車保存の沿革」同上  
金沢二郎1970「軽便K2形機関車」同上
- (49) 谷口元紀1974「開業50周年を迎えた小湊鉄道」『鉄道ファン』Vol.14 160 (株)交友社
- (50) 鉄道図書刊行会編1976「P271~P273」『日本民営鉄道車両形式図集』上編 鉄道図書刊行会
- (51) 井上広和・高橋 撰1982「小湊鉄道」『カラーブックス日本の私鉄19 南関東・甲信越』保育社
- (52) 久保田博1976「日本のSLの回想」『鉄道ピクトリアル』通巻316号 鉄道図書刊行会  
青木栄一1976「戦後の蒸気機関車」同上
- (53) 吉川文夫1976「各地の内燃車」『写真でみる戦後30年の鉄道車両』(株)交友社
- (54) 飯島 巖・白井茂信1978「私の知らない機関車」『鉄道ファン』通巻206号 (株)交友社
- (55) 和久田康雄1981「宅地開発・観光開発と私鉄」『日本の私鉄』岩波新書 岩波書店
- (56) 入山迪夫1982「キハ20系の構造と形式別特徴」『鉄道ピクトリアル』通巻401号 鉄道図書刊行会  
千代村資夫1982「20系気動車のあゆみ」同上  
中川浩一1982「20系気動車登場の波紋」同上  
編集部選1982「私鉄のキハ20系気動車」同上
- (57) 青木栄一1983「関東地方ローカル私鉄の系譜」『鉄道ピクトリアル』通巻418号 鉄道図書刊行会  
今城光英1983「運輸成績の動向」同上  
中川浩一1983「昭和20年代あの日あの時あの車両」同上  
小川 功1983「大手私鉄による地方私鉄の系列化のあゆみ」同上  
白土貞夫1983「房総の地方私鉄よもやま話」同上  
宮田敦彦1983「小湊鉄道」同上
- (58) 白井茂信1983「昭和30年代の地方私鉄を訪ねて古典ロコ・軽便。田舎電車、そして…」『鉄道ファン』通巻267号 (株)交友社
- (59) 日本ナショナルトラスト<鉄道文化財を考える会>1985「小湊鉄道の蒸気機関車」『鉄道文化財調査報告』財団法人観光資源保護財団
- (60) 白井茂信1985「鉄道聯隊の見える町」『鉄道ファン』通巻296号 (株)交友社  
白井茂信1986「統鉄道聯隊の見える街」『鉄道ファン』通巻300号 (株)交友社
- (61) 寺田裕一1986「この夏、地方私鉄！」『鉄道ファン』通巻305号 (株)交友社
- (62) 湯口 徹1987「小湊鉄道」『からっ風にタイホーンが聴こえる下』プレスアイゼンバーン

- (63) 原田勝正1989「研究参考文献」『鉄道史研究試論』(株)日本経済評論社
- (64) 岩澤眞治・松本吉之1989「鉄道模型考古学36」『Rail Magazine』No.65 (株)企画室ネコ
- (65) なかおゆたか1991「Cタンクの改造」『小型車輛の製作』(株)機芸出版  
 なかおゆたか1991「私鉄タイプの1C1タンク機」同上  
 津田 進1991「国鉄B10形タンク機関車」同上
- (66) 岡田誠一1992「DMH17の足跡」『Rail Magazine』No.111 (株)ネコ・パブリッシング
- (67) 中川浩一1993「房総の鉄道路線網の歴史的過程」『鉄道ピクトリアル』通巻579号 鉄道図書刊行会  
 白土貞夫1993「文学の舞台となった房総の駅と鉄路」同上  
 根本幸男1993「房総夏臨の思い出」同上
- (68) 寺田裕一1994「ローカル私鉄が歩んだ十年」『Rail Magazine』No.127 (株)ネコ・パブリッシング
- (69) 和田由紀夫1994「K2故郷に帰る」『Rail Magazine』No.129 (株)ネコ・パブリッシング
- (70) 青木栄一1995「白井茂信さんを偲ぶ」『鉄道ピクトリアル』通巻602号 鉄道図書刊行会
- (71) 佐藤雄彦1995「両国駅の生きる道-千葉の鉄道101年」『鉄道ピクトリアル』通巻606号 鉄道図書刊行会
- (72) 岸由一郎1995「京福電鉄貨車通観」[前編]『鉄道ピクトリアル』通巻611号 鉄道図書刊行会  
 岸由一郎1995「京福電鉄貨車通観」[後編]『鉄道ピクトリアル』通巻613号 鉄道図書刊行会
- (73) 青木栄一1996「日本の鉄道車両メーカーの系譜」『鉄道ピクトリアル』通巻616号 鉄道図書刊行会  
 岡田誠一1996「楢岡銘板研究序説」同上  
 藤田吾郎・岡田誠一1996「日本の鉄道車両メーカー要覧」同上  
 澤内一晃1996「本誌1995年10・11月号『京福電鉄貨車通観』に関する若干の思察点」同上
- (74) 佐藤信之1996「ローカル民鉄の現状と近年の動向」『鉄道ピクトリアル』通巻620号 鉄道図書刊行会  
 石本祐吉1996「昭和30年代の関東ローカル私鉄乗りある記」同上  
 青木 栄1996「1950年代小湊鉄道の多彩な車両群」同上  
 藤田吾郎1996「関東ローカル私鉄の保存・廃車体散見」同上  
 葛西隆也1996「現有私鉄概説小湊鉄道」同上
- (75) 岡田誠一1996「続・楢岡銘板研究序説」『鉄道ピクトリアル』通巻625号 鉄道図書刊行会  
 藤田吾郎・岡田誠一1996「改訂版日本の鉄道車両メーカー要覧」同上
- (76) 堤 一郎1996「鉄道の「産業遺産」」『鉄道ピクトリアル』通巻627号 鉄道図書刊行会  
 吉川文夫1996「鉄道産業遺産を調べよう-車両・施設などの多分野にわたる産業遺産調査の基礎知識-」同上
- (77) 浅野明彦1996「南総鉄道」宮脇俊三編『鉄道廃線跡を歩く』II JTB 本文取材を1996年3月～7月としている。
- (79) 高桑和弘1997「"原風景へ"」『Rail Magazine』No.166 (株)ネコ・パブリッシング  
 田中浩之1997「小湊鉄道へGO!」同上
- (80) B 滝+編1999「模景を歩くSCENE: 4 小湊鐵道」『Rail Magazine』No.187 (株)ネコ・パブリッシング
- (81) B 滝+編1999「模景を歩くSCENE: 5 小湊鐵道」『Rail Magazine』No.188 (株)ネコ・パブリッシング
- (82) B 滝+編1999「模景を歩くSCENE: 6 小湊鐵道」『Rail Magazine』No.189 (株)ネコ・パブリッシング
- (83) 岡田誠一1999「はじめに」『キハ41000都その一族』上 (株)ネコ・パブリッシング
- (84) 岡田誠一1999「小湊鐵道・車歴表」『キハ41000都その一族』下 (株)ネコ・パブリッシング
- (85) 杉崎行恭2000「私鉄駅舎の共通設計」『駅舎再発見』JTB
- (86) 寺田裕一2000「小湊鐵道」『日本のローカル私鉄2000』(株)ネコ・パブリッシング
- (87) (和)×K 2001「"鉄日和"小湊鐵道」『Rail Magazine』No.212 (株)ネコ・パブリッシング
- (88) 河村かずふさ2001「房総の休日」『鉄道模型趣味』No.684 (株)機芸出版
- (89) 鈴木 純2002「保存車博物館 千葉県 西武鐵道K<sub>2</sub>形134号」『Rail Magazine』No.229 (株)ネコ・パブリッシング
- (90) 高橋俊彦2002「ニュース・スクランブル 鹿島鐵道で<まちづくり市民号>運転」同上
- (91) 上野弘介2002「ニュース・スクランブル 島原鐵道に"国鉄色"復活」同上
- (92) 上林 宏2002「竹中経済相が大畑線キハ85動態保存会視察」同上
- (93) 笹田昌宏・加悦鐵道保存会2002「ニュース・スクランブル 加悦谷たより2002.~62002.7」同上
- (94) 日本ナショナルトラスト鐵道を考える会1985「活かそう鐵道文化財」『日本ナショナルトラスト報増刊号』第192号 (財)観光資源保護財団

# 遷移と再生産

小橋 健司

## 1. はじめに

本稿の目的は、考古学研究に適した体系性に関するイメージの一例を明示するとともに、そこに物質文化を組み込んだ視点を示すことである。

前半では、通常、議論されにくいレベルにあるシステム観・世界観について検討したうえで、人間・社会と物質文化の関係を考える。これを経た後半では、この議論と接続可能な社会考古学の方法をなぞり、参考にしながら同型のスタイルの有効性を探る。

なお、以下の点を取りわけ強調しながら論を進めたい。

歴史の過程には必然的に「外適応」のかたちが見出され、その解釈・説明には歴史拘束性への注意が要求されること。環境が主体の行為・実践をナビゲートすること。そして、それらの行為・実践自体が環境を維持・改変すること。物質文化が媒介するそれらの過程を権力の視点で見ることの重要性。

## 2. イメージについて

考古学の研究の背景に用いられるイメージにはどのようなものがあるだろうか。

まず、具体的な研究対象である遺物・遺構の表現については、それぞれ平面図上で、ドットによる位置の表示、遺物の系統・由来の線的なイメージ、あるいは地理的な分布のように面的なイメージとして表される場合がある。さらに、これらの図を複数並べて時間の表現とすることもある。より抽象化を経た解釈を表現したものには、点（ノード）と線（紐帯）でネットワークを形成しているもの、グラフと組み合わせて地理的勾配を示すもの、時間の次元をフローチャートの箱の連続で表現することもある。他にも、地図・写真、表とグラフの多数の形式・入れ子状の組織図・有機体的イメージによる機能配置図・文字による象徴的二項対立の羅列など、多数のバリエーションが存在する。

このように、とりあえず通常研究で表示されるイメージを列挙してみたが、まず以下に論じていきたいのは、これら具体的な図表現などではなく、それらを産む解釈自体の基層にあると思われる、まさしくイメージ・心像としか呼べないものについてである。

例えば想像してほしい。果たして存在的・空間的メタファーを抜きになんらかの議論を進められるであろうか（辻2002）。有無・上下左右・先後・高低・内外・包含・大小・離着・連続・不連続と、我々は何かの関係性についての抽象思考をしようと思っても、この生得的・経験的基盤を無視して考えることは不可能であろう。実際、「空間」は我々の認識の世界にひろく遍在（これも空間メタファーだ）している。「空間」はその起源について考える必要がないほど我々の認識の世界にア・プリオリに存在している」（佐々木1987：p.59）のである。これは、我々が実体と遊離したデカルト的な主体ではないことからくる自然な帰結である。後述の通り、これを一例とする人間の生物としての来歴は決して無視できないのである。

このことについては、英語と日本語の用法を事例に、言語・思考の基底に空間のメタファーが普遍的に伴うことを論じる瀬戸賢一や（瀬戸1995a・1995b）、様々な表現の分析を行い、空間・身体感覚などの経験的・生得的基盤が諸々の根源的なメタファーの源泉になっていると主張するジョージ・レイコフとマーク・ジョンソンなど（レイコフ・ジョンソン1986、レイコフ1993、ジョンソン2001）、言語・認知に関連する分野に重要視する立場が存在する。また、ついでながら触れておくと、サピアーウォーフの仮説（キャロル1978・加賀野井1995）は文化相対主義の定点であるが、各文化における色彩語彙の相対性と同時に分類自体の普遍的側面を示してそれを覆したバーリンの認識人類学的研究は、やはり人間の認知にまず普遍的基盤の存在することを示しているのである（松井1991）。

このような、あまりに自明となっていることがらは、よくよく反省的に考えなければ、相対化して考えを及ぼすことが難しい。存在・空間のメタファーについて言えば、「ある事が在る（形而上学的事象が分節される）」とは、「ある物が在る（物質が存在する）」のとは本来まったく違うことであるのに、意識しなければそのまま通用する。つまり、普段の問い自体がそのような背景に基礎を持つために問いを立てにくいのである。

以上の空間的メタファーの例などと位相を大きく異にするものの、同じ言語的営為である考古学的な解釈にも同様の側面があり、論者が意識せずとも、おおづかみな世界観・システム観に基づいていることが予想されよう。つまり、思考の骨になるとも言うべき上記のような根源的なメタファーよりも表層に近いところに位置づけられる、具体的なモデル構築における基礎として、何らかのイメージが用いられていると思われるのである。

例えばダーウィンは、生物種の系統と広がりに対して枝の広がっていく「灌木」のイメージを、また、「存続をめぐる争い（生存競争）」に対して、自然には「ぎっしりと束ねられた幾万もの鋭いくさび」が「たえず内部へと打ちこまれている」というイメージを持っていたという。これらは、人々に対する説明の必要上生まれた表現、つまり結果かもしれないが、進化論というアイデアがこのようなイメージを伴って胚胎・成長したことは確かである（グルーバー1997）。

この希有の成功事例が示すとおり、適切なイメージの効用はアイデアを豊かに触発することである。これを転倒させると、良いアイデアは優れたイメージを伴うとも言える。まず、行いたいのは、まさにこのようなイメージの候補を示すことである。

ただ、このようなイメージは各個の論者で異なるものが採用されており、しかもたいていは明示されることはないと考えられるため、それらと逐一比較することはできないので、一案として提示するという形をとらざるをえない。

### 3. 歴史拘束性

考古学は、歴史の痕跡を発見し、過程を解釈・説明することを目的にしている。

では、このような分野で要求される共通認識はいかなるものだろうか。筆者は、考古学的解釈・説明における重要な要素は、煎じ詰めれば歴史拘束性になると考える。

まず、あることが起きて次にこうなったという出来事の連続、すなわち「年表としての歴史」を前提にはしていないと思われる。それらは結果として現れるべきものだからである。また、変化の方向



性を法則定立的に追求する発展観を共通にしているかといえ、これも一律ではないようである。つまり、研究対象の「歴史」は単なるエピソード集でもなく、変化の定向性も前提とはしない、というところが消極的な共通認識とできそうであり、そのような意味で、骨組みとして残るものが歴史拘束性だと思われるのである。

ここで、この歴史拘束性を表現する純化したイメージとして「遷移」を提示したい。遷移は、価値判断をとりあえず脇に置いて、中立的にシステムの歴史拘束性を表現する言葉であり、イメージである。この語は自然科学的な分野で使われることが多いが、ここでは植物生態学のイメージを借りて利用したい(図)。すなわち、このメタファーで焦点を合わせたいのは、土地に植物が様々な相を経て進出・生育していくなかで、それぞれの相の植物が結果として次の相の植物の準備をするという面である。実際には、土地の性質・生物の組成などによって予めある程度定まった「極相」に向かう方向性を持っていると見る場合に問題が生じるが、ここではそれを無視することとする。取り入れたいのは、「自分の生存のみを目指すある生物の振る舞いの結果が、意図せず別の生物の生息環境になる」というイメージなのである。

これは、個別の生物種の系統で言い換えれば、後述の通り、各器官の「外適応」のイメージになるだ

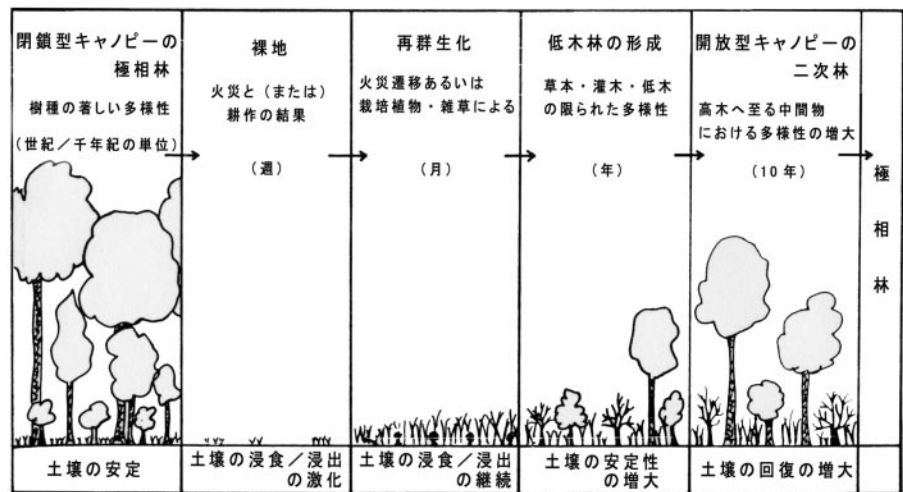


図 植物相の遷移 (Butzer 1982:p.125 一部改変)

ろう。例えば、顎の関節の骨が将来耳の一部になるために用意されたわけでないのは確実である、という意味で、ここでも定向性は排除できている。

まとめると、取り入れたい遷移の抽象化したイメージは次のようになる。

システムは時間に沿って変化する。そのシステム内のある要素が作動しその結果が環境に堆積する。この経過後の環境を新たな条件にして別の要素が作動する。このとき、進み得た選択肢のうちの一つが選ばれたことで以後の過程に歴史拘束性が生じる。

これを関数ではなくてイメージとして考えるのである。

このような記述に変えると一般的にすぎて、考古学とは関係がないように受け取られるかもしれない。しかし、順序は逆転するが、以下に挙げるような、別々の系の記述の前提として、それに注目することが一般的に有効であることを確認すれば、指し示す意義は認められるのではないだろうか。

まず、生物の歴史におけるものとして、スティーヴン・グールドによる例が挙げられる。グールドは進化生物学を歴史科学と正當にもみなす論者である (三中1999)。

グールドによれば、食肉目のジャイアントパンダの親指は、言うなれば、クマの肉食生活向きの手を自然淘汰 (選択) が無理矢理ササを扱いやすくするように改造したものだと言う。ただ、そのとき

利用できた材料は、すでに変更の及びにくくなった「真の親指」ではなく、さらに外側にある橈側種子骨が選ばれており、このため、一見、親指の他に5本の指があるようになっているのである（グールド1996a）。この例は、進化がもともとあった構造を利用することしかできない、場当たりのものであることを象徴的に示している。また、はじめからすっかりやり直せる大変化とマイナーチェンジではどちらが現実の生存にむいているか、という問題に対する答えも示唆されている。すなわち、遺伝子の関わるシステムでは、多くの場合、漸進的な小変化を積み重ねることになるのである。そこでは、その都度、設計図を根本的に引き直すことはリスクの大きすぎる博打なのである（佐倉1995）。

グールドはまた、哺乳類の耳の由来についても述べている。耳の内部構造である内耳にはいくつか骨が関わっているが、鼓膜で集めた音を伝えるためのその部分は、元をたどれば、魚類のエラを支える骨だったというのである（グールド1996b）。これも、自然淘汰を受けた種がそのとき備わっていた「部品」の利用されることで適応してきた歴史によるものである。顎から耳になる途中にそれが果たした機能については直観的な疑問が生じるが（「ちょっとだけ」の翼では飛べないだろうという意味で）、グールドはそれまでに別の機能を果たしていた器官が兼用・転用されたと考えている。そして、このような事態、あるいは環境自体の激変によって一括して有用になることに対して、それらを「外適応」と呼んでいる<sup>10</sup>。パンダの「親指」も人間の耳も、たまたま過去に生じた環境への適応過程の産物が、後の世代が異なった環境に適応するときの材料に使われたことを示す好例なのである<sup>11</sup>。

さて、まず、生物の例を引いたが、ここで強調したいのはやはり歴史拘束性についてであり、加えて、何も材料がないところから始まるシステムはないということでもある。特に社会科学で扱うなかには、時間経過を無視できるものなどない。歴史は否応なく、その時々のある合わせの材料で作られ続けられているのである。レヴィ＝ストロースは、文化のシステムがそのローカルな材料を用いて組み立てられることを指してブリコラージュ（器用仕事）という概念を用いたが（レヴィ＝ストロース1976：第一章）、これも自然史同様に外適応のプロセスとして読みとることが可能だろう。

人文－社会科学において歴史的堆積物の拘束性に注目する姿勢が見られるのは当然として、自然科学により近いフランシス・クリックとマレイ・ゲルマンも、同じことをフローズン・アクシデント（凍結された偶発的事象）として言及している（デネット2001：p.250、ゲルマン1997：p.175）。時間性を無視できるように思われる自然科学的分野でも究極的には歴史拘束性・偶有性を考慮せねばならず、歴史科学に近づくというのは興味深いことである。

このように見出そうとすればどこにでもあるような、根底的な要素である歴史拘束性を伴った遷移する系というイメージ自体は、無理なく納得できるものと思われる。反対に、ここまで述べてきたイメージの内容について、それは当然のことで、改めて取り出すほどのことではない、と思う向きもあるかと思う。だが、それは、同じイメージが共有できていたからこそ遠回りに感じることであって、改めて指し示し注意を促す必要がないこととは別である。

このようなイメージを当然のものと感じるとするならば、我々が同型のものを幸いにも持っていることに関係しているのかもしれない。つまり、職業的に「遺跡モデル」として前代の遺構が次期の展開を規定するというイメージ図式を持つことが容易になっていると考えられるのである。おそらく同型のイメージが発掘調査の現場で涵養されているのだろう<sup>12</sup>。このことは注意に値することがらであ

り、考古学の社会学とでもいう別のアプローチで検討する意義があるものと思われる（酒井1990）。

以上、前提的作業として、さまざまな歴史過程に見られる、歴史拘束性という非常に一般的な概念的要素に注目し、遷移というイメージについて述べてきた。また、同時にダーウィン主義の視点から進化に少しだけ触れたが、これも欠かせない前提である。以下では、これらの視点から具象に照準し、生き物としての人間と物質文化との関わりに触れてみたい。

#### 4. ナビゲートする環境

引き続きここでもまた遠くの地点からアプローチしていくことにする。まず、生物一般における物質文化の意義について触れ、その上で人間の場合とその示唆するところを「ナビゲーション」という視点から考えよう。まず、いかなる意味で人間の物質文化が特異な性質をもつのだろうか。

ほかの動物でも、アリ・クモ・ハチの巣、規模の大きなものではビーバーのダム作りなど、生物体の外の物を利用することはよく知られている。だが、それらはどう考えればよいのだろうか。

これに対しては、遺伝子からの直接の表現型効果としての生物体の他に、生存価を高めるために用いられる体外の物質をも「延長された表現型」として捉える、「利己的な遺伝子」図式から派生したリチャード・ドーキンスの見方がある（ドーキンス1990・1987）。これによれば、例えば、ビーバーのダムはビーバーの設計図である遺伝子の「延長された表現型」と見なすことができ、また、寄生物は宿主を延長された表現型効果として利用しているということになる。つまり、自己複製子である遺伝子は、複製される機会を増大させる手段として、生物体を乗り物とし、さらにそれが作り出す外部環境での構築物をも表現型効果として操作・利用するというのである<sup>(4)</sup>。このとき、これらの一般的な延長された表現型に含まれる「物質文化」は、生存をナビゲーションするものと言い換えることができるだろう<sup>(5)</sup>。

当然ながら、この見方だけでは人間の物質文化の意義は説明できない。そのままでは、すべて遺伝子の複製機会増大に、つまり生物としての適応に引きつけて説明することになるからである。だが、これは、はじめは他の生物と同じ延長された表現型効果にすぎなかったものが、以後にそれ以上のものになったという過程を浮かび上がらせる最初のステップとして必要な見方であると言えよう。

この後の遷移過程はスーザン・ブラックモアの仮説（ブラックモア2001）が引き継いでくれる。

当初、ある行動とその結果としての物質文化などの表現型効果が、生存価を高めるためだけの、まさしく他の生物における延長された表現型と同じでしかなかったものが、道具製作などの模倣という一般的戦略によって生存価が高まるというねじれが起こり、模倣に長けた個体が自然淘汰・性淘汰（雌による配偶者選択）をくぐり抜けて残っていく、というプロセスに転轍したという見方である。さらに、遺伝子と相乗的な過程を経て進化した模倣の能力が、外部環境に徐々に情報（表象）として蓄積・定在するようになった物質文化を媒介に、「ミーム」の伝達される環境として人間の大型の脳を用意したという仮説も導いている<sup>(6)</sup>。ドーキンスの「利己的な遺伝子」説と同様、世界をミーム中心に転回させる思考によれば、人間がミームの住処にすぎなくなってしまうが、現実世界におけるこれまでのコミュニケーションメディアの爆発的拡大を考えるとあながち無理な視点ではないだろう。

大事な点は、遺伝子のシステムでは、自然淘汰という我々の尺度で言えばゆっくりとしたプロセスに情報の伝達を頼らざるを得ないのに対して、ミームが世代を自在に超えて情報を伝達するという点である。このことの生物にとっての適応的意義は疑問の余地がないだろう<sup>(7)</sup>。

以上の視点を踏まえると、文化現象には遺伝子とミームの協同の興味深い側面を認めることができるようになる。見渡せば、性淘汰によって遺伝的に由来するかもしれない対称的な形態への愛着、性的なメタファー（二元的分類に雌雄をもってする）、あるいは、上述の空間的なメタファー・擬人法（社会関係がソースで事物がターゲットのメタファー）・トーテミズム・トーテム地誌（博物的知識がソースのメタファー）など（レヴィ＝ストロース1976：p.198）、そのように理解できるものが多数見られるのである<sup>(8)</sup>。ブラックモアの言うミーム学からすれば、模倣される機会が多いミームが生き残るのだから、単純に言って普遍的に人気を持つものももっとも「適応」と予測される。それはすなわち、普遍的な基盤をもつ遺伝子由来の嗜好がもっとも有力な誘因になるということで、ミームの爆発的増加（スティーヴン・ミズンの言う「文化のビッグバン」（ミズン1998））以前の適応過程で培われた嗜好とマッチするものが選好されることを意味するだろう。つまり、そのようなものが、異なる民族・文化において類似した応用例となることは、それまでの生物学的な歴史過程で水路づけられているということである。はたして、身体図式を様々な物質文化や現象などへ適用すること（容器等の開口部を「口」、机等の支持構造を「脚」とすることなど）（Tilley1999：Part I-2）をはじめから伝播で説明すべき理由は存在するだろうか。

要するに、ブラックモアが示すミーム学の視野においては、物質文化は生物としての人間とミームが相互作用するときに媒体とされるという意味で意義を持つと言えよう。

さらに、これと近い立場としてはアンドレ・ルロワ＝ゲーランの議論を参照できる。彼の壮大な見取り図によれば、人類はその存在の内部に持っていたものを外部環境に解放するという一貫した歴史を歩んできたという。はじめは器官を（道具）、ついで表象を（記録）、さらに動力（機械）を身体の外に定在させていったのである（ルロワ＝ゲーラン1985）。これらルロワ＝ゲーランの言うところの「外化exterioriser」の過程は、「延長された表現型」からミームの爆発的増大へというプロセスを理解するのに転用可能である。また、外適応の連鎖の歴史を祖先種の体の対称構造から説き起こし、陸棲脊椎動物の頭部の形態による脳容積の増大に対する物理的制約の存在、二足歩行によるその解放、同時に起こった手の利用と脳の複雑化の相乗と、以後の外化の過程をたどり、人間と身体外の存在との関係を通史的に記述するこのモデルは示唆するところが多い<sup>(9)</sup>。

さて、このルロワ＝ゲーランの視点では、外化の傾向の原動力に何を指定しているかが明確でないので、現象面の説明にすぎないことになるが、以上のミーム学の想定するプロセスを加えて考えると、物質文化の意義をより深く理解できる。つまり、出現当初の製作物より後代の物の方が、多義的になっていると考えられるのである。多義的とは、生存価だけでは済まないことで、人間と合わせ鏡に相互作用する表象を帯びた環境へと変質したことを意味する<sup>(10)</sup>。

以上の見取り図を借りて、人間の歴史を外化の堆積過程として見ると、物質文化のとらえ方もそれ

に応じて変わらざるを得ない。すなわち、物質文化が人間－社会の運動を媒介するということが大きな意味を持ち始めるのである。唯物論的な手の延長としての存在から、我が身を共に構成する、そして分かち持つとでも言えるような社会的存在に変質したと言えよう。

これらの過程を信じるならば、他の生物の「延長された表現型」を人間の物質文化が逸脱するのは、ミームに関する側面に起因すると言えるだろう。ビーバーにとってその製作したダムは意義は生存価値にしかないが、人間は、ミズンの述べる言語的領野による認知的統合の進んだある時点から、その製作物から象徴的・社会的情報を得るなど、物質文化を「転用」するのである。例えば、道具・食物などを分配・贈与することは、物質文化の生存面での働きを社会関係に超領域的に用いるメタフォリックな行動であると言える。

さらに、このような行いの規模が大きくなった例には、居住地の空間構造と世界観という表象との相関が挙げられよう。この場合は、意味の領域が生存のそれに重ねられていると言え、事物に対する象徴的把握の座標軸（解釈図式）が現実の空間構造から読み込まれ、かつ書き込まれる事態が生じていると言える。つまり、他の生物における物質文化は生存をナビゲートするものだが、人間はそれにとどまらず、表象のやりとりを伴うふるまいもナビゲートされることができよう。したがって、表象を伴う物質文化の堆積・定在化が進めば、それ自体に人間のふるまいがナビゲートされる出来事の増えることが考えられるのである。

社会を都市空間との関係で考察する若林幹夫は、住居のナビゲーション的側面を、行動科学・生態学的側面だけが注目されるべきでないとして、「社会的アフォーダンス」という概念を示したうえで、行為や関係のあり方の可能性の集合とみなす議論を行っている。若林によれば、「住居とは、人間が自らの起居する場所を、文化的・社会的にデザインされた場所として作り出し、生物学的な「棲むこと」を、文化的・社会的な「住むこと」へと変換する仕掛け、媒体＝メディアなのである」（若林1996）。これも、生存の側面を背景にした上記の議論を同様に拡張するものである。

若林の言う社会的アフォーダンスは、より大規模に空間的に定在化するにしたがって、その効果は著しいものになる。レヴィ＝ストロースが考察した、南米ボロロ族の集落の空間構造とその住人たちによる意味づけの例が著名であるが（レヴィ＝ストロース1985）<sup>(11)</sup>、そのように、住居や集落・都市、一時的な場の空間構造に解釈図式を重ね、そのこと自体が他の意味づけの媒介として用いられるような過程は、程度・内容の差はあれ普遍的に認められることである（村武1984・阿部1995・2000・佐藤1998）。筆者は以前、弥生末～古墳前期につくられた手焙形土製品（土器）を、「送り」とでも言うべき外部化の儀礼活動に伴う道具立ての一つであると指摘し、その際に前提として、集落の空間構造に基づく内－外分節の経験が儀礼の過程において活動主体の解釈図式にメタフォリックに用いられていたことを想定したが（小橋1998）、これも同様の視点によるものである。

さて、このように、環境として堆積した物質文化に各認知的領野の統合された情報が書き込まれることは、ブラックモア、ミズン、ルロワ＝グーランの想定するような過程から導かれる、根本的な前提である。これらの過程は、物質文化は遺伝子とミームの協働の果てに外部記憶装置となり、そしてまた世界観などを表象し、それを身体化する装置ともなった、と言い換えることができるだろう。

ここまで、生物に関わる地点まで下がってからアプローチを始めたが、それはこの帰結に触れた

かったためである。ミズンはその検討の中で、認知的領野が統合される以前には各情報が複合した様相で遺構・遺物が見出せるわけでないことを示して、こう述べている。「現代人のあらゆる道具に社会的情報が刻印されているのと違って、彼ら（ホモ・ハビリス：筆者註）の道具には何の社会的情報も残されていない。同様に、空間の社会的な使い方を反映していてもよさそうな考古学的遺跡にも、空間的構造について知ることのできる例はまったく見られない」（ミズン1998：p.152）。反省するならば、我々が遺跡の空間構造に技術－生態的意義以外のことを読みとることは、本来、彼我に同じ認知的基盤を想定しなければ不可能なことであって、ほとんどの場合にこれが暗黙の前提となっていることは明らかである。以下では、確認した前提をふまえて論を進めることとする。

さて、人間と物質文化の相互作用ということで、行為や関係のナビゲーションという、物から人への側面に注目することから始めたが、反対方向の行為・実践の側面についてはどうだろうか<sup>(12)</sup>。

例えば、イメージしやすいものに道具作りがある。道具作りにおいては、ある規範に従った作り手の意図が確率的に（全面的にはなく）反映されると考えられるが、そこには、当事者の言明として取り出すことのできない実践的な知識あるいは身ぶりによる痕跡も、必然的に存在すると考えられる。だとすると、物質文化の多くは、本来的に製作の意図を伴う行為の痕跡であり、またこのように、同時に意図せざる結果でもあるので、広い意味でも行為の痕跡と見ることができよう。そして、それらの材料は自然・人為環境から得られるのであり、それ自体の歴史的脈絡も受け継がれているということができる。

この道具作りを代表とする「行為の痕跡としての物質文化」という見方は、ある行為を誘導あるいは抑制する人為的環境を構成する「社会的堆積物としての物質文化」という先に見た視点を相補項とする。つまり、主体が物質文化の伴う環境を媒介に新たな行為・実践を産出するという契機をはさみ、行為－環境のサイクルが閉じると見なせるのである。その際には、まず、ある主体が自身の脈絡に応じて行為・実践し、その意図的と同時に非意図的な結果が、あるものは表象として他者の心の中に、また他のものは物質文化として、社会的に堆積する。そして、他者起源の物を含めたそれらが環境の構成物となり、同じ、または別の行為主体の行為を導き、時に制限する要因として歴史拘束性を発揮し作用するというプロセスが絶え間なく続くと考えられるのである。すなわち、物質文化は行為・実践の結果そのもの、そして痕跡であり、かつ、続く行為を生み出す環境の一部なのである。これまでの議論をまとめると、人間と物質文化の関係はこのようにとらえることが可能である。

この一連の過程への注目点は、社会学における構造化論者のモデルを援用した社会考古学が詳細に展開しているので、以下にその接近法をたどってみたい。

## 5. 再生産と権力

遷移のイメージと歴史拘束性・外適応に続いて、人間と物質文化を生物の視点からネガティブに見た意義を検討してきた。そこで明確になったのは、他の生物にとって環境を利用して作り出す物質文化はその生存をナビゲートするという側面しか持たないが、人間の場合はそれと同時にさまざまな表象の媒介となって、行為がナビゲートされるということである。以下では、上述の視点と親和的な議論を行っている社会考古学の議論にそれらを重ね合わせて、その有効性を探りたい。

日本考古学への社会考古学の体系的な導入は溝口孝司によって行われた。社会考古学は、機能主義的説明論理・論理実証主義的形式論理を特徴とするプロセス考古学への批判として成立した、ポストプロセス考古学の方法である。このアプローチは、一般理論として、社会学のアンソニー・ギデンズによる構造化理論を参照し、個人（行為）対社会（構造）という仮構された二項対立を過程分析（「戦略的行為分析」）のスタイルによって解体する研究上の実践的な面と、研究者の研究活動自体を反省的に考察する認識論的な面に革新性を持っている（溝口1991）。

このギデンズの構造化理論は構造の二重性を最大の特徴とする。そこでは、「社会システムの構造特性は社会システムを構成する実践の媒体であるとともに帰結」であり、「したがって構造化の理論が定式化されれば、共時態と通時態、静学と動学の区別は廃棄される。つまり、構造は、可能にするとともに拘束するものである」（ギデンズ1989：p.86）とされ、「行為と構造は対極の関係にある二元論としてではなく、互いを前提とした相補的な関係にある二重性としてとらえられる」（田辺1995）のである。この議論において物質文化が占める位置は、ここで「構造」と呼ばれる、行為者が依拠する媒介物である「規則と資源」という概念にある<sup>(13)</sup>。すなわち、行為する際に依拠される資源のうちの一つとして物理的・象徴的に動員されるもの、とされるのである。

また、もう一つの特徴として、行為者の意識が階層的に想定され、言説的意識・実践的意識が無意識に重なりとされることが挙げられる<sup>(14)</sup>。このため、行為も、意図的で行為者により言葉で説明可能な側面と、日常的な何気ない身ぶりのような説明できない側面があると考えられており、後者はとくに実践と呼ばれる。また、実践的意識と、一部にすぎないとされるが言説的意識とによって、行為者が反省的に行為の条件・結果をモニターし、以後のふるまいを方向付けていることも想定されている。このような行為の背景にある階層的な意識のために、意図的な行為と実践には必然的に意図せざる結果が伴い、その積み重ねがときに変動を起こすと考えられている。これらの行為の遂行によって、行為を可能にする構造が再帰的に配置しなおされることを「再生産reproduction」と呼ぶが、当然、これはまったく同じ環境が維持されることを意味するのではない<sup>(15)</sup>。

これをふまえた社会考古学の実践は、溝口による一連の北部九州弥生中期の二列埋葬墓地の解釈が代表例である。そこでは、まず、墓地空間の形成過程を各葬送行為のレベルで詳細に復元し、遺構の空間構造から葬送儀礼参加者の可能な身ぶり・視線、また、行列という群構造の生成への方向付けを想定することで、その墓地の列形成を帰結した反復的な過程が、行為の結果の集積としての記憶・建造環境を含んだ資源を利用して社会構造を再生産していたとする、明晰な議論が行われている（溝口1995a・b・1997a・b）。これを二分法的に強調すれば、遺構論の復権とでも言えるだろうか。

さて、これまでの議論をふまえてこのような立場から何を引き出せるかといえば、まず、物質文化が表象を伴い、それが行為をナビゲートするという過程の分析を洗練させることを挙げられよう。いかにして主体の行為が実現していたのか、という問いを立て、考古学的に復元される過程ごとに主体の言説的意識を除いた面の推定を重ねるそのスタイルは、規範の内面化や漠然とした個人的意図に直接結びつける議論への偏向を中和することを可能にする。さらに、構造主義・機能主義による静的な解釈も手段として内包するため、システミックコンテキストにおける象徴的な解釈図式の内容についても民族誌を支援情報として言及しうるのである。

このように、上で述べてきた物質文化観は、物質文化を構造化理論の用語で言う「資源」としてみ

ることで、社会考古学に包摂されうる同型の議論と見なせるだろう。では、反対にその可能性を拡大する触媒になることはないかという点、おそらく二点において可能であると思われる。

まず、主体の反省性を相対化することが挙げられるだろう。そして、解釈における主体性の復権と一見対立するようだが、生物が示差的再生産と選択で適応することをふまえて、社会システムにおける再生産を積極的に捉え直す議論へと筋道のつけられることが挙げられる。

社会考古学は上に引いたとおり、行為が構造に拘束されながら遂行され、その結果が主体にモニタリングされつつ意図せざる結果を伴って構造を再生産するというプロセスを仮定するが、ここで主体の反省性と表象を帯びた環境を前提とすることは、このアプローチを支える別の仮定を明らかにしていると言えるだろう。すなわち、それは研究者と対象における認知的基盤の共有である。これによって、社会考古学においては、社会学が近現代社会を対象とすることで背景に退けていた諸前提の再確認というステップが避けられないことが明らかである。つまり、同じ人間だからきつと同じことを考え行うはずであるという無自覚な直観主義とは截然と区別される立場ではあるものの、行為主体である人間の認知的基盤が生物的な由来を持ち過去において常に同じものではない事実から、それを補足する足場が備わらなければならないのである。すなわち、それは進化心理学であり、それをふまえた認知考古学であると思われる。仮に極から極に至るグラデーションとして見るならば、進化心理学的な認知考古学の領域は初期人類側に重心を持ち、反対の極である現代人側に社会考古学の領域の重心があるような相補的な関係を描くことができるだろう。生物まで視野を広げることで示唆されるのは、社会考古学と認知考古学の漸移的な棲み分けであり相補性なのである。

もう一方の再生産と言うプロセスについては、さらに二つの局面において興味深く展開できるものと思われる。まず、権力との関わりについてである。

はじめの歴史的体系における遷移のイメージを勘案すると、いま見た物質文化と人間の行動の関係は、歴史拘束性という視点からまた異なった面に注目できよう。それは、過去のある時点における物質文化の堆積をもたらした行為・実践が、以後の行為・実践を水路づけるということであり、これは選択肢を絞るように導かれるという点で、ある種の権力とでも言える現象である。権力概念を社会考古学の立場で溝口が整理しているものを参考にすると、「B-X権力」とされた広義の権力、特定の階級間のものではない作用、遍在する権力とでも言えるようなものである（溝口1999）。

これを認めることにより、「伝統」という現象の権力性というテーマを掘り下げることが出来るようになる。あらゆるゲームにおいて成功者の行動を模倣せよというのは、能力が伴えば有効な指針である。そして、ブラックモアが言うところでは、人に関してはまさにそれが起きたということであり、その帰結として、伝統という成功の実例が通文化的な「マニュアル」になるのは不思議なことではないだろう。構造化論者としてギデンズに近い理論的立場のピエール・ブルデューがジャン＝クロード・パスロンと共に行った文化的再生産の実態の研究も、いかに文化資本（資源）の示差的配分が自然化されて反復するのか、というものであり（宮島1994）、伝統と権力の関わりは普遍的な事象であると考えられるのである。

また、このような権力性に注目する再生産論に関係して意義深いのが、ダン・スペルベルの伝達の



不完全性に注目した見方である。これは、「なぜ変化するのか」を問う立場があるように、「なぜ変化しないのか」と問うこともできるということを示す議論である。二値的で完全な伝達のイメージは、ときに解釈に密輸され文化とコミュニケーションに対する視点を束縛しているが、本来、完全な情報伝達が基礎にあるのではなく、常に不完全な「半命題」的な交換が中心にあり、まれにゆらぎの小さい伝達が発生すると考えるべきだということのである。つまり、極限事例としてのみ完全な情報伝達が想定されるのである<sup>(16)</sup>。ここで、以上に見た、人間の各種活動が物質文化を媒体とし、環境を改変して、以後の行為の準拠枠が生産され続けられるというイメージと議論を接続することができよう。すなわち、権力の性質と伝統文化の関わりを物質文化の物質性自体と相互的に結びつけられるのである。そもそも不完全な伝達で構成されている文化が、ほぼ同様に繰り返されること自体に注目すべきであるし、それを促進する事象を別出するのは重要である。こう考えれば、したがって、「伝統文化」一般の権力性も指し示すことができよう。伝統の再生産に寄与するのは自然主義的誤謬（「結果として長生きしたのだから良い戦略・知識を持っているはず／べきである」）を犯す「保守的」な性向であり、もしかすると、成功した者を模倣せよ、という遺伝子由来の行動かもしれない。通文化的に見られる長老というイメージしやすい存在は、そのような位相に関係する権力的な現象だと考えられるだろう。

同じように、記憶手段の外化・公共的表象の定在化という現象の到達点である書字文化・リテラシーの寡占と、狭義の権力の発達との正の相関は、社会システムの再生産の側面に着目すれば、当然の帰結であると言える。長期にわたり記憶を正確に保持することは、伝統の再生産を促進するはずだからである。いま見た意味での再生産すること＝「伝統」は共同体という社会システムが成員に対して及ぼす権力作用でもあるのだ。レヴィ＝ストロースの提示した「熱い／冷たい社会」という区別における冷たい社会も、そのネガティブフィードバックの面がある種の権力のかたちを示したものと見ることができる。他方、反省性を発揮することで諸資源を動員して変化に向かうのが熱い社会だと言えるだろう（レヴィ＝ストロース1970）。この、社会の反省性（科学を含む）が諸資源を用いて変化を促すという過程は、いわば社会自体がグレゴリー型生物のように、適当なかたちを探索するデザイン空間上の近道をしているようなものだと考えられる（社会ダーウィニズム的な意味ではなく）。

再生産という概念に関して拓けるもうひとつの局面は主体性を移動した視点による説明が可能になることである。生物学におけるドーキンスのようにネッカーキューブ（立方体を表した錯視図形）を反転させ、同じものを異なる視角から考えるのである（ドーキンス1987）。

せっかく回復した主体性を無視するかに見えるが、このメタファーには視点の移動に伴う興味深い帰結がある。生物のデザインが漸進的な小変化の積み重ねで、環境に適応していくことはすでに述べたが、生態系を「遺伝子瞰図」で見ることで行動の進化がより良く理解できたのと同様に、社会システムを「ミーム瞰図」あるいは「表象の疫学」で見ることに有用な場合があると思われるのである。

このときに予測される状況は、ダーウィン主義的アルゴリズムの帰結と近似するものである。変異群の中から一部が選択され、それが以後の系統に対し歴史拘束性を発揮するという単純なプロセスである。物質文化で言えば型式的な変異であり、行為で言えば社会環境によるサンクション（無視など弱い意味のものを含む制裁）と主体自身による予期によって刈り取られる、ある時点で採り得たふるまいの選択肢を想像すればよい。これは変異の発現と選択という同じアルゴリズムの帰結ということ

で、プロセスの一般性が保証されることにより、予測あるいは発見モデル的な使い方が出来よう。例えば、遺物に限らず、出現期には多数の変異があり、後から見れば現在の主流へとつながるような系統の祖先がそこに含まれているというような過程が一般的に予測できるのであり、また、系統が歴史拘束性を発揮し、ときに外適応が生じることに対する、発見的な構えとして装備できるのである。

例えば、物質文化に見られる「写し」という現象は、技術体系の遷移過程と見てみると、それまでの環境で得られる材質と近い分野で用いられていた技法の転用が起きたものとする事ができる。事実、出現期の自動車（コンピューターのキーボード）のデザインは、馬車（タイプライター）のそれに明らかに系統的つながりを持ち、プロポーション（キー配置「QWERTY」）などに相同が見て取れ、歴史拘束性が発揮されていることが分かる（川添1968、ノーマン1990：pp.236-44）。これはもちろん「人為選択（淘汰）」の結果であるが、技術体系の方に主体性を移して表現すれば、その適応に際しそれまでの「器官」の外適応が生じたと言えるのである。さらに、出現期の多様性も、この転用の際の試み、それまでの技術の延長上でどこを生かしながら新奇さを発揮するか、という多様な選択肢の存在によると考えられよう。このような過程が進んでいくと、時々選択によって徐々に系統が絞られていき、後の時点から顧みれば、多様なバリエーションの一つに過ぎなかったものからそれが選抜されたように見える現象が結果として起こるはずである。つまり、ダーウィン主義的プロセスを意識することは、系統をなす事物に対する発見的な視点を確保するのである（三中1997）。

上述の筆者による事例研究においても、手焙形土製品が関係した儀礼活動は、当初「外部化」として括られるもの全般にわたり、その結果出土遺構も多様であったのが、時期が下るにつれ葬送と堅穴建物の廃絶に内容が収斂していくという過程を経たと見る事が可能である（小橋1998）。つまり、このような遺物から示唆される活動における遷移過程も、同じように、出現期の多様性そして以後の選好（選択）という、結果としての現象が認められるのである。このエティックな見方は、それぞれの儀礼活動を行った人々がどのような資源を用いたのかというイーミックな視点と両立するのである<sup>(17)</sup>。さらにこの事例について言えば、歴史拘束性に注目すると、その出現期の形状は近江地域の土器が流用（外適応）された可能性の高いことが分かり、やはり「新奇」な器物ではないことが分かるのだが、そこで、覆いを持たない甕・鉢であったときに、あるいは他の器物を道具立てとして、同様の儀礼活動が行われていなかったと言えるのだろうか、という疑問が浮かぶのである。つまり、ある行為と考古学的遺物の消長が一致しているというのも普通におかれる前提であるが、それに対しても方法論的な反省が必要と思われるのである。

ここまで具体物を例にして述べたが、この視点はまた、象徴的分類などの遷移過程にも適用可能かもしれない。新奇な事物の出現に際し、それが在来のカテゴリーの構造同値として分類されながら、次第に独立したカテゴリーが作られる現象など、例えば、マーシャル・サーリンズが『歴史の島々』で明らかにした、ハワイ社会とクック達との一連の出来事に関連する在地の解釈図式の変容過程などがそのように考えられるだろう（サーリンズ1993：第四章）。

また、このような視点からは、社会考古学の依拠する構造化論の再生産概念も、意図せざる帰結という変動を組み込むがゆえに生物の遺伝的浮動による示差的再生産に比定できると考えられる。そして、それが想定するところの反省性は、行為の体系の「適応」を助けるものと言えよう。記述的には、

ダーウィン主義的プロセスのように示差的再生産を繰り返し、ある行動が否定や拒否などのサンクションを受けて淘汰されるようにみなせるのである。実践的意識がモニターしていること自体も、競合する仮説が代わりに死ぬという過程がメタレベルで起きていると見なすこともできる。

そして、そのような出来事が続いて歴史的に方向付けを伴って堆積し、あるとき外適応が起きるといふ過程が予想される。上述の通り、歴史は材料の限られた仕事であり、その場にあるものしか利用できないからである。また、外部的な出来事に呼応するかたちで社会システムの側において、ある方向にたまたま利用できる枝が伸びていることはよくあるはずで、違うことを目指していたふるまいやその結果が後世に転用されるような過程があらゆる場面で生じていると思われるのである。

これらから、一見大きな変化に見えることも、外的なインパクトだけでなく内的な意図せざる「準備」が補って起こっていると考えられ、ここに、いかなる社会的ふるまいが続く社会を結果として準備したのかという視点が要請されるのである<sup>(18)</sup>。

## 6. まとめ

まず始めに漠然とした遷移のイメージを導入し、ついで歴史拘束性に注目した。そして、生物学の分野でダーウィン主義に生じた世界観の転回に触れながら、生物の持つ物質文化は遺伝子の「延長された表現型」と呼べるものにほぼ限定されることを述べ、その上で人間の物質文化の意義を見た。それは生存価値と同時にミーム・表象に関するものであって、相互作用的に人間に関わることを示し、物質文化と人間との関係を、生物的と同時に社会的な相互作用をするものと捉えた。そして、これらの前提を展開するのに親和的であるアプローチとして社会考古学の枠組みを取り上げ、研究主体と対象における認知的基盤の共有という前提を確かめたうえで、社会考古学の有効性は上記のイメージに基づいた視点を加えることでより増すと考えられた。それは二つの転回する構えである。一つは再生産における浮動と環境の歴史拘束性を意識した上での「変化しないこと」の意義の強調であり、それにより、権力の遍在性と、反省的にそれを利用する局所的な権力についての考古学的な議論が拓ける可能性が考えられた。つまり、集落・都市の景観が再生産される過程を遍在する権力の側面から解釈する一方で、社会の一極限において綿密にデザインされた一望監視施設（フーコー1977）などを局所的な権力関係が物質性を利用している例と見るような、物質文化と権力の関わり方をも考察できるのではないかと、いうことである。もう一方の転回は、主体性の仮設的な移動であり、そうすることで系統をなす事物の分析という広い視野のうちに物質文化研究があるのを捉えられることを確認した。

以上の検討において、体系性のイメージである遷移、ダーウィン主義からパラフレーズして注目した外適応、ダーウィン主義・構造化論の（示差的）再生産という各概念が、それぞれ歴史の過程を説明するのに有効な一般的概念であることを確認できたと思われる。

また、操作的対象として物質文化（遺物・遺構・遺跡）を扱う態度は意識せずとも自然に備わるから良いとして、さらに踏み込んで、下手な擬人法ではなくミーム学・表象の疫学のようにそれを戦略的にもう一つの主体とみなす視点をとることの方法論的な重要性も明らかになったと思われる。というのは、生物学と生態学の関係、あるいは病理学と疫学の関係に対応させて、意味・意図を意識した考古学と物質文化の系統を意識した考古学の間をとりえることが可能だからである。いずれも、前者は対象とするシステムの内的な連関を重視し、後者は環境における配置・系譜を重視すると言える

が、この両面からの記述・解釈によって考古学的な解釈の可能性はより上げられると思われるのである。つまり、構造化理論が過程分析／制度分析という方法論的な分断を明示したのと同様に、考古学においても主体性の仮設的な移譲を意識することによって発見的機能の拡大が見込まれるのである。

本稿は1999年2月に行われた奈良大学研究交流会での発表の内容を元に行っている（小橋1999）。当時の形式は跡形もないが、うまく伝えられなかったと感じた事例研究以外の部分にその後の検討を加えて論じたものである。

## 註

- (1) 「前適応（先適応）preadaptation」という語の用いられることが多いが、グールドとエリザベス・ヴルバは、予めその器官なり機能が準備されていたというニュアンスを含むため避ける方が望ましいとして、「外適応exaptation」を提唱している（グールド1995・デネット2001）。
- (2) ここまで生物の例を挙げたのは他にもなく、アルゴリズムとしての進化理論（ダーウィン主義）が生物以外の複雑なシステムの表現・記述にも適用できると考えるからである。ダーウィン主義の考え方は、変異を伴う多数の個体が無方向的に生み出され（示差的再生産）、そのうちの少数が環境による淘汰（選択）に耐えて複製に成功し、以後の過程に歴史拘束性を及ぼす、というものである。この見方を採用すれば、遺伝子という成功した自己複製子に続いて出現した強力な自己複製子「ミーム」（註(6)参照）も同様に扱えるため、文化現象に対しても同じ視点で解釈することが可能であるという（デネット2001・佐倉1997・2001・2002）。ただ、この立場は、すべてを生物的基盤によって解釈するようなものではなくて、複雑な産物をもたらすデザインワーク（生物進化・知性の出現など）に神秘的・飛躍的なステップを想定する必要はないとすることへの支持を意味するにすぎない。
- (3) また、例えば、古墳の墳丘が後世の景観において象徴的資源として用いられたと解釈する事例など、隔たった時代における象徴的「借景」というモデルも明示されないながら持っている。
- (4) この擬人法は便宜的なもので、そのような遺伝子が淘汰に耐えて複製され続ける可能性を持つだろうという意味である。「利己的な遺伝子」の視点が文字面だけで批判される時に見られる誤解はこの点に集まるようである。
- (5) 「延長された表現型」一般と人間の物質文化の違いは、ユクスキュルを参照した丸山圭三郎による世界の分節に対する区分、「身分け」／「言分け」に通じるものがある（丸山1984）。
- (6) 「ミームmeme」とは、ドーキンスが『利己的な遺伝子』（ドーキンス1990）の中で導入した概念で、遺伝子geneと対比された、文化に関わる自己複製子のことである。そこではミームの例として、「楽曲や、思想、標語、衣服の様式、壺の作り方、あるいはアーチの建造法」が挙げられている（同：p.306）。「利己的な遺伝子」説の視点が、遺伝子の競合を生物体・血縁集団・種の代わりに進化の過程の主役に据えることで、生物の利他的行動や不妊のワーカーを持つ社会性の進化の説明を容易にしたように、ミーム概念も文化現象を進化理論で説明する際に重要な役割を果たすと考えられている（ブラックモア2001・佐倉2002）。
- (7) ダニエル・デネットが示した「生成評価の塔」の位置づけによると分かりやすい。ここでは、不定方向の変異の中からふさわしい表現型が環境に選択されることで増殖する「ダーウィン型生物」、盲目的に一手を試し、幸運にも成功した手を強化する条件付け可能な可塑性を持つ「スキナー型生物」、外的環境の情報を進化の過程に歴史的に拘束された偏りを持って取り入れ、内的環境で事前に見込みのある行動を選択する「ボパー型生物」、外的（文化的）環境からデザインされた道具を取り入れ生成と評価を向上させる「グレゴリー型生物」の四つをモデルとして挙げている（デネット2001：pp.490-507）。人間はグレゴリー型生物で、先行する世代の「文化的」情報に多くを負っていること（「祖父母の時代には〈天才でさえ〉思い及ばなかったような概念が、今日の私たちには誰にも〈容易に〉理解できるようになっていること」（同：p.500））に注意を喚起し、遺伝的進化と文化的進化の時間尺度の違いを改めて強調している。
- (8) 人間の心の歴史を探ったスティーヴン・ミズンは、社会的知能起源の汎用言語により加速させられた認知的流動性の発達、初期人類の持つ認知的なモジュールの併存する心を統合した、とする説を「聖堂のような心」というモデルで提示しているが、そこには現代人の文化現象に見られる超領域的な思考の起源がうまく示されている。また、人工遺物が示唆する「文化のビッグバン」は、6～3万年前の間、「中部／上部旧石器時代の移行」期に、その統合過程が完成したことによるとする（ミズン1998）。
- (9) 遺伝子と文化の共進化という見方自体は、19世紀のうちからエンゲルスの考えなどにも見られるので、あえてクローズアップすることでもない（エンゲルス1876）。以下で関心があるのは人間と相互作用する環境における物質文化という事象についてである。
- (10) 以下で表象とはスベルベルの言う「文化的表象」を指す。これは、人間の内にある、信念・意図・選好などの

「心的表象」と、信号・発言・テキスト・絵など物質的な側面を持つ「公共的表象」の総称である（スベルベル2001：p.43）。スベルベルはこれらの伝達・転換・変容などを含む因果連鎖についての研究として「表象の疫学」を規定する（同：pp.104-5）。この表象の疫学はミーム概念による文化観とは若干異なるが、どちらもダーウィン主義的という面で一致している。

- (11) 「男たちの家を中心とした小屋の環状配置が、社会生活と精神生活との面でいかに重要なものであるかは、リオ・ダス・ガルサス地方の伝道師たちがボロロ族を改宗させるには彼らの村を捨てさせて平行状に並んだ家のある他の村に移住させるのが最も確実な方法であることを知ったのでもわかる」（レヴィ＝ストロース1985：p.47）。
- (12) 社会学における構造化論者の区分を踏襲し、人のふるまいの総称を「行為」、そのうち、あえて意図しなくとも遂行可能な、日常的・反復的な慣習的行動を「実践」としておく（田辺1995）。
- (13) 「社会システムを戦略的行為によって構成されたものとして検討することは、行為者が社会関係において構造的要素－規則と資源－に依拠する様式を研究することに他ならない。戦略的行為においては「構造」は行為者が社会的出会いにおいて言説的意識と実践的意識を動員することとして現れる。これにたいして制度分析は、戦略的行為については判断を停止して、規則と資源を社会システムにおける持続的な特徴としてとりあげるものである。もっとも重要なのは、この区分を方法論的な括弧入れにすぎないものとして認めることである」（ギデンズ1989：p.86）。構造主義・機能主義で言う構造は、ここでの「規則と資源」であり、制度分析というかたちで静的に取り出されるものとされる（同：pp.68-9）。
- (14) 考古学においては、前述のルロワ＝ゲーランが「自動的・機械的・意識的」動作行動を心理学の「無意識・潜在意識・意識」という区別に対応させ、種の記憶（遺伝情報）・民族の記憶（文化）・個体の記憶という堆積的なイメージをもって、同様の議論を行っている（ルロワ＝ゲーラン1973：第七章）。
- (15) 「たとえば私がふだんの会話で文法にのっとなって英語の文章を話すときには、私は英語全体の再生産に貢献しているのである。これは私が文章を話すことの意図せざる結果であるが、構造の二重性の再帰性に直接結びついている」（ギデンズ1989：p.83）。英語や日本語が意思疎通の可能な範囲で年々変化していることは言うまでもないだろう。
- (16) 半命題表象は、スベルベルがコミュニケーションについて理論的検討を行った際に強調した概念で、厳密な命題的内容として伝達できない場合、つまり命題の内容が「こぼれてしまう」ときにそれを拒否するのではなく、全体を括弧にくくすることで対応する救済装置的なものであるとされる。例えば「 $E=mc^2$ 」という公式が理解できなくとも、間接的に正しいものとして述べるとき、それはその人にとって半命題表象である。なお、スベルベルはこれに積極的な意義を認めている。「命題表象の体をなすのに失敗した情報を拒む代わりに、人間は半命題表象という婉曲策によってそれを再び採り上げようとする。半命題表象はたんに完全な命題への暫定的段階として役立つのみならず、また創造的思考へ生命を吹き込むことにも利用される」（スベルベル1984：II-3）。
- (17) 「この地では、音声学phoneticに対してはこの音素論phonemicが置かれるわけであり、そこから、サビアの弟子のケネス・バイクは、両者の語末を独立させることで、外面的・資料的・分類的な見方を「エティック」、内面的・機能的・構造的な見方を「イーミック」とする二分法を考案し、言語学にとどまらず、広く文化事象の全体に使用できる概念を作り出すことになった」（加賀野井1995：pp.108-9）。
- (18) 渡辺仁が、列島の農耕導入期において縄文時代社会が持っていた構造特性の果たした働きを「先適応」として明示している。「この先適応性の中核というべきものが、安定的な縄文社会で培われた、退役狩猟者を中心とする強固な長老政治の伝統であって、この流れを汲む各地の首長とその一族が、農耕システムのソフトウェアと交易の実権を握り、日本における農耕化と農耕社会の発展に主導的役割を演じたものとみられる」（渡辺1988：p.14）。

## 引用・参考文献

- 阿部 一1995『日本空間の誕生－コスモロジー・風景・他界観』せりか書房  
 2000『空間の比較文化誌』せりか書房  
 フリードリヒ・エンゲルス1965（原著1876）『猿が人間になるについての労働の役割』国民文庫37 大月書店  
 加賀野井秀一1995『20世紀言語学入門 現代思想の原点』講談社現代新書1248 講談社  
 川添 登1968『移動空間論』SD選書29 鹿島出版会  
 アンソニー・ギデンズ／友枝俊雄他訳1989（原著1979）『社会理論の最前線』ハーベスト社  
 ジョン・B・キャロル編／有馬道子訳1978（原著1956）『[完訳] 言語・思考・実在 ベンジャミン・リー・ウォーフ 論文選集』南雲堂  
 ハワード・E・グルーバー／金子努他訳1997（原著1979）「ダーウィンの「自然の樹」－大きな広がりをもったイメージについて」ジュディス・ヴェクスラー編『科学にとって美とは何か 形・モデル・構造』白揚社  
 スティーヴン・J・グールド／櫻町翠軒訳1996a（原著1980）「パンダの親指」『パンダの親指－進化論再考－』上  
 ハヤカワ文庫 早川書房

- スティーヴン・J・グールド／廣野喜幸他訳1995（原著1991）『翼とは限らない』『がんばれカミナリ竜 進化生物学と  
去りゆく生きものたち』上 早川書房
- スティーヴン・J・グールド／渡辺政隆訳1996b（原著1993）『顎にまつわる耳寄りな話』『八匹の子豚 種の絶滅と進化  
をめぐる省察』上 早川書房
- マレイ・ゲルマン／野本陽代訳1997（原著1994）『クォークとジャガー』草思社
- 小橋健司1998「手焙形土製品の研究」『史館』第30号  
1999「手焙形土製品」『第18回 研究交流会総会資料』奈良大学文学部考古学研究室
- 酒井龍一1990『考古学者の考古学』財団法人大阪文化財センター
- 佐倉 統1995『生命の見方』法蔵館  
1997『進化論の挑戦』角川選書288 角川書店  
2001『遺伝子vsミーム 教育・環境・民族対立』廣濟堂ライブラリー006 廣濟堂出版  
2002『進化論という考えかた』講談社現代新書1598 講談社
- 佐々木正人1987『からだ：認識の原点』認知科学選書15 東京大学出版会
- 佐藤浩司編1998『住まいをつむぐ』シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1 学芸出版社
- マーシャル・サーリンズ／山本真鳥訳1993（原著1985）『歴史の島々』叢書ユニベルシタス413 法政大学出版局
- マーク・ジョンソン／菅野盾樹他訳2001（原著1987）『心のなかの身体 - 想像力へのパラダイム転換』紀伊國屋書店
- ダン・スベルベル／菅野盾樹訳1984（原著1979・1982）『人類学とはなにか』紀伊國屋書店  
／菅野盾樹訳2001（原著1996）『表象は感染する 文化への自然主義的アプローチ』新曜社
- 瀬戸賢一1995a『空間のレトリック』海鳴社  
1995b『メタファー思考』講談社現代新書1247 講談社
- 田辺 浩1995『行為理論の革新 - 構造化、行為、反省性-』宮島喬編『文化の社会学 - 実践と再生産のメカニズム』  
有信堂
- 辻 幸夫2002「メタファーの基本用語」『月刊言語』第31巻第8号 大修館書店
- ダニエル・C・デネット／山口泰司他訳2001（原著1995）『ダーウィンの危険な思想』青土社
- Tilley, Christopher. 1999, *Metaphor and material culture*. Blackwell.
- リチャード・ドーキンス／日高敏隆他訳1987（原著1982）『延長された表現型』紀伊國屋書店
- リチャード・ドーキンス／日高敏隆他訳1990（原著第2版1989）『利己的な遺伝子』科学選書9 紀伊國屋書店
- ドナルド・A・ノーマン／野島久雄訳1990（原著1988）『誰のためのデザイン？ 認知科学者のデザイン原論』新曜社
- 長谷川真理子・三中信宏・矢原徹一1999『現代によみがえるダーウィン』ダーウィン著作集別巻1 文一総合出版
- Butzer, Karl. W. 1982, *Archaeology as human ecology*. Cambridge University Press.
- スーザン・ブラックモア／垂水雄二訳2000（原著1999）『ミーム・マシーンとしての私』上・下 草思社
- ミシェル・フーコー／田村俣訳1977（原著1975）『監獄の誕生 - 監視と処罰-』新潮社
- 松井 健1991『認識人類学論攷』昭和堂
- 丸山圭三郎1984『文化のフェティシズム』勁草書房
- スティーヴン・ミズン／松浦俊輔他訳1998（原著1996）『心の先史時代』青土社
- 溝口孝司1991「社会考古学の射程 - 社会システムの変容における外部／内部の問題にふれつつ-」『地方史研究』  
第232号  
1993「「記憶」と「時間」- その葬送儀礼と社会構造の再生産において果たす役割（ポスト=プロセス考古学  
的墓制研究の一つの試みとして）」『九州文化史研究所紀要』第38号  
1995a「福岡県筑紫野市永岡遺跡の研究：いわゆる二列埋葬墓地の一例の社会考古学的再検討」『古文化談叢』  
第34集  
1995b「福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域の研究 - 北部九州弥生時代中期後半墓地の一例の社会考古学的検討』  
『日本考古学』第2号  
1997a「二列埋葬墓地の終焉：弥生時代中期（弥生Ⅲ期）北部九州における墓地空間構成原理の変容の社会考  
古学的研究」『古文化談叢』第38集  
1997b「福岡県甘木市栗山遺跡D群墓域第6号甕棺墓：社会考古学的観点からの若干の検討」『比較社会文化』  
第3巻  
1999「権力」・「社会考古学」・「ポストプロセス考古学」安斎正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論』I  
同成社  
2000「構造化理論」安斎正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論』III 同成社
- 三中信宏1997『生物系統学』東京大学出版会
- 宮島 喬1994『文化的再生産の社会学 - ブルデュー理論からの展開』藤原書店
- 村武精一1984『祭祀空間の構造 - 社会人類学ノート-』東京大学出版会

アンドレ・ルロワ＝グーラン／荒木亨訳1973（原著1964）『身ぶりと言葉』新潮社  
ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソン1986／渡部昇一他訳（原著1980）『レトリックと人生』大修館書店  
ジョージ・レイコフ／池上嘉彦他訳1993（原著1987）『認知意味論』紀伊國屋書店  
クロード・レヴィ＝ストロース／中沢紀雄訳1970（原著1960）「人類学の課題」『今日のトーテミズム』みすず書房  
クロード・レヴィ＝ストロース／大橋保夫訳1976（原著1962）『野生の思考』みすず書房  
クロード・レヴィ＝ストロース／室淳介訳1985（原著1969）『悲しき南回帰線』下 講談社学術文庫712 講談社  
若林幹夫1992『熱い都市 冷たい都市』弘文堂  
1996「住居 社会的媒体としての」『10+1』No.5 INAX出版  
渡辺 仁1988「農耕化過程に関する土俗考古学的進化的モデルーハードウェアとソフトウェアの可分性を中心とするー」『古代文化』第40巻第5号

## 市原市文化財センター研究紀要Ⅳ

印 刷 平成15年 3 月 8 日

発 行 平成15年 3 月19日

---

発 行 財団法人 市原市文化財センター

〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地

TEL 0436 (41) 7300

印 刷 株式会社 正文社

〒260-0001 千葉県千葉市中央区都町1-10-6

TEL 043 (233) 2235

---